

平成二四年度・変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業

阿仁地方の万灯火

ま

と

び

【表 - 1】市町村合併経過表

平成24年 (2012)現在	平成17～18年 (2006～07)	昭和42年(1962)・ 昭和47年(1972)	昭和30～31年 (1955～56)	昭和30年以前
鹿角市	鹿角市	鹿角市新設：昭和47年(1972) 編入 花輪町 十和田町 尾去沢町 八幡平村	(鹿角郡)花輪町新設	(鹿角郡)花輪町
			編入 柴平村	(鹿角郡)柴平村
			(鹿角郡)十和田町新設	(鹿角郡)十和田町
			編入 大湯町	(鹿角郡)大湯町
				(鹿角郡)尾去沢町
大館市	大館市新設(平成17年) 編入 比内町 田代町	大館市 編入 花矢町	大館市新設	大館市(昭和26年)
			編入 下川沿村	(北秋田郡)下川沿村
			上川沿村	(北秋田郡)上川沿村
			長木村	(北秋田郡)長木村
			二井田村	(北秋田郡)二井田村
			真中村	(北秋田郡)真中村
			十二所町	(北秋田郡)十二所町
北秋田市	北秋田市新設(平成17年) 編入 合川町 鷹巣町 森吉町 阿仁町	(北秋田郡)合川町新設	(北秋田郡)合川町新設 編入 上大野村 下大野村 落合村 下小阿仁村	
				(北秋田郡)上大野村
				(北秋田郡)下大野村
				(北秋田郡)落合村
		(北秋田郡)鷹巣町新設	(北秋田郡)鷹巣町新設 編入 栄村 坊沢村 七座村 沢口村 七日市村 綴子村	(北秋田郡)鷹巣町
				(北秋田郡)栄村
				(北秋田郡)坊沢村
				(北秋田郡)七座村
				(北秋田郡)沢口村
				(北秋田郡)七日市村
				(北秋田郡)綴子村
		(北秋田郡)森吉町	(北秋田郡)森吉町新設 編入 米内沢町 前田村	
				(北秋田郡)米内沢町
		(北秋田郡)阿仁町	(北秋田郡)阿仁町新設 編入 阿仁合町 大阿仁村	(北秋田郡)前田村
				(北秋田郡)阿仁合町
能代市	能代市新設(平成18年) 編入 ニツ井町	能代市	能代市新設 編入 檜山町 鶴形村 浅内村 常盤村 境界変更 峰浜村の一部	能代市(昭和15年)
				(山本郡)檜山町
				(山本郡)鶴形村
				(山本郡)浅内村
				(山本郡)常磐村
				(山本郡)峰浜村の一部
		(山本郡)ニツ井町	(山本郡)ニツ井町新設 編入 種梅村 荷上場村 富根村 響村 境界変更 鷹巣町の一部	(山本郡)ニツ井村
				(山本郡)種梅村
				(山本郡)荷上場村
				(山本郡)富根村
				(山本郡)響村
				(北秋田郡)鷹巣町の一部
上小阿仁村				上小阿仁村(明治22年)



高積み上げ型のマトビに点火（新田目）



車マトビと花火（小沢田）



縦型の車マトビ（三木田）



文字マトビ（小沢田）

上小阿仁村のマトビ・1

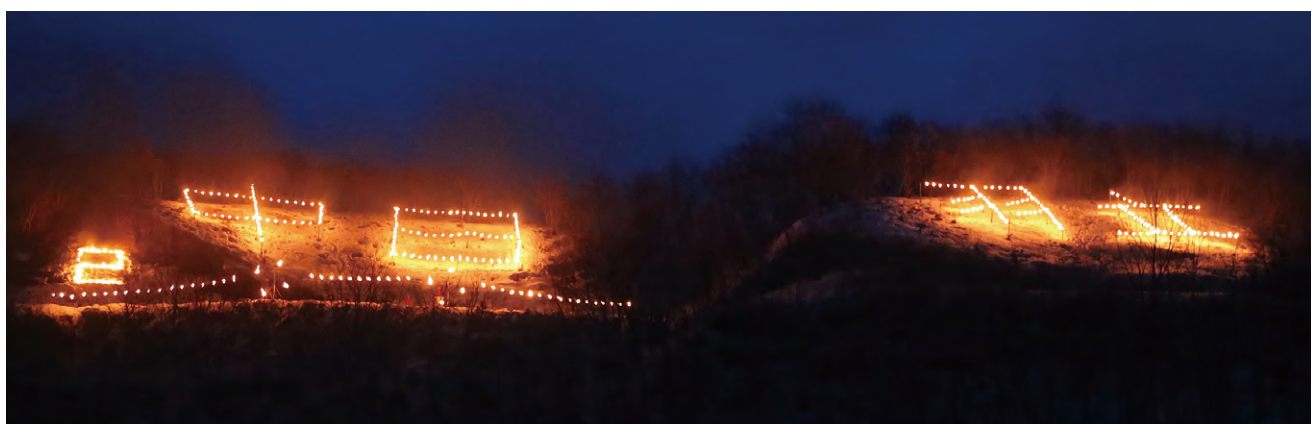
長信田



大阿瀬



羽立



花ダンゴ作り

花ダンゴ作り (福館)



花ダンゴ作り (福館)



墓地に立てられた花ダンゴ飾り





堂川



杉花



下仏社



下仏社のダンポ作り

ダンポ作り

上小阿仁村のマトビ・2

上仏社



小沢田



福館



墓参り

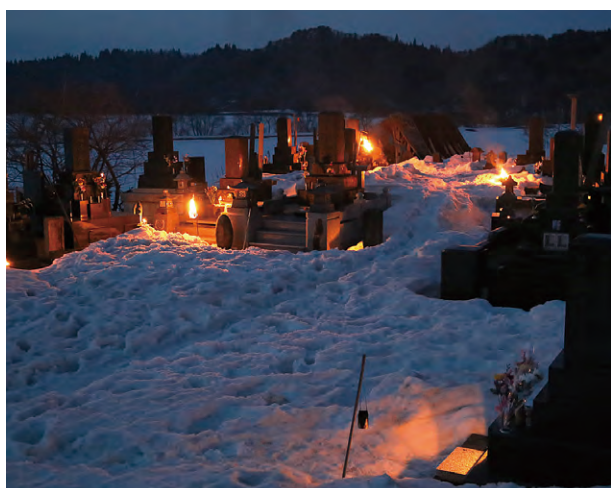
ダンボに火を点けて墓参り（魔当）



供物の準備（餡をまぶしてあるのがダンシ）



全戸の墓前で火が焚かれる夕方の墓地（魔当）





ダンホを文字枠に取付ける（三木田）



文字マトビを立てる（三木田）

マトビ作り（準備）



集落が見渡せる高台でマトビ作り（根子）

上小阿仁村のマトビ・3

中五反沢



上五反沢



大林



マトビの準備と点火

藁束を積上げて「モリ」作り（かつてのマトビ作りの再現・新田町）



ダンボを吊した門型のマトビ（新田町）



標高約六〇〇メートルで点火する（小豆沢）





旧合川町のマトビ・1

念仏

三月二日に行われた五味堀の念仏



旧合川町のマトビ・2

三木田



鎌沢



新田目



旧森吉町、旧阿仁町のマトビ

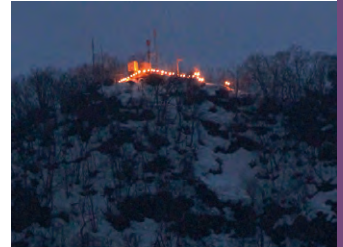
五味堀



巻淵（墓地裏、あたご様…大久保山山頂）



点火を知らせる太鼓（巻淵）



根子のマトビ（写真撮影・船橋陽馬氏）



凡例

- 一 阿仁地方とは、合川町、鷹巣町、森吉町、阿仁町と上小阿仁村を含む地域である。合川町、鷹巣町、森吉町、阿仁町は、平成一七年(二〇〇五)に合併し、北秋田市となった。本報告書では、北秋田市の合併以前の町については、旧合川町、旧鷹巣町、旧森吉町、旧阿仁町として表記する。(表―1参照)
- 二 昭和三〇年に、上大野村、下大野村、落合村、下小阿仁村が合併して合川町となった。合併前に関しては、旧上大野村、旧下大野村、旧落合村、旧下小阿仁村と表記する。(表―1参照)
- 三 平成一八年に、ニッ井町と能代市が合併した。それ以前は、旧能代市、旧ニッ井町と表記する。(表―1参照)
- 四 平成一七年に、大館市と田代町、比内町が合併した。それ以前は、旧大館市、旧田代町、旧比内町と表記する。(表―1参照)
- 五 万灯火は、伝承に諸説あり、やり方も様々である。また、「万灯火」という表記については不明の点が多い。本報告書では、「マトビ」という表記で統一する。

口絵

3

【第二章】米代川水系のマトビ

15

一 マトビの内容 16

(一)春彼岸に火を焚く行事 16

各家が墓前で焚く火と集落単位で焚くマトビ 様々に表記されるマトビ 小正月・盆の火祭り行事

二 マトビの分布 20

(一)米代川水系のマトビの分布 21

幹川と支川の分布 呼名の違いとその分布 マトビを焚く場所

(二)阿仁地方のマトビの分布 24

阿仁地方の概要 マトビのやり方の違い

三 マトビをめぐる言説 26

(一)菅江真澄の見たマトビ 26

十二所のマトビ

(二)マトビの発祥諸説 28

万灯火と万灯会 山岳信仰とマトビ 山に宿る先祖の霊 房住山伝説とマトビ 無縁仏とマトビ

【第二章】マトビの現状

33

一 伝承の体制 34

(一)行事の担い手 34

担い手の変化 カマクラの役目

(二)運営費の変化 36

マトビの形態 36

(一)様々な仕掛け 36

藁からダンボや缶へ マトビを焚く場所

(二)焚く物の作り方 40

ダンボの作り方 缶を使うマトビの作り方

(三)マトビ装置と現状 42

文字マトビ 棒マトビと水平マトビ 車マトビ

タタキと様々な松明

三 墓参りと供物 46

(一)墓参りと供物準備 46

春彼岸の墓参り 多種になった供物

(二)供物の作り方 49

ダンシ作りと供え場所 福館の花タンゴの作り方 三木田の花タンゴの作り方

四 片付けと反省会 52

(一)片付け 52

(二)遊山から反省会に 52

●マトビを行っていた集落名

※分布は一八〇一九頁参照

〔上小阿仁村〕

大阿瀬（おおあぜ）

長信田（ながしだ）

羽立（はたち）

堂川（どうがわ）

下仏社（しもぶつしゃ）

上仏社（かみぶつしゃ）

杉花（すぎはな）

小沢田（こさわだ）

福館（ふくたて）

下五反沢（しもごたんざわ）

中五反沢（なかごたんざわ）

上五反沢（かみごたんざわ）

大海（たいかい）

沖田面（おきたおもて）

大林（おおばやし）

小田瀬（おだせ）

南沢（みなみざわ）

中茂（なかも）

不動羅（ふどうら）

八木沢（やぎざわ）

〔北秋田市〕旧合川町

東根田（ひがしこんだ）

西根田（にしこんだ）

芹沢（せりざわ）

大内沢（おおないざわ）

三里（みつさと）

摩当（まどう）

三木田（みつきた）

鎌沢（かまのさわ）

雪田（ゆきた）

杉山田（すぎやまだ）

新田目（にいため）

羽根山（はねやま）

李岱（すももだい）

木戸石（きどいし）

増沢（ますざわ）

八幡岱（はちまんたい）

上杉（かみすぎ）

道城（どうじょう）

〔北秋田市〕旧鷹巣町

今泉（いまいずみ）

新町（しんまち）

前山（まえやま）

伊勢堂（いせどう）

坊沢（ぼうざわ）

羽立（はたち）

田中（たなか）

新田中（しんたなか）

前野（まえの）

大堤（おおつつみ）

綴子（つづれこ）

上町（かみまち）

下町（しもまち）

昭和（しょうわ）

糠沢（ぬかさわ）

向黒沢（むかいくろさわ）

【第三章】上小阿仁村のマトビ

53

一 上小阿仁村の概要 54

(一) 生業と歴史 54

二 各集落のマトビの詳細 57

(一) マトビを続ける集落 57

- | | | | |
|------------------|----|------------|----|
| ① 大阿瀬のマトビ | 57 | ② 長信田のマトビ | 58 |
| ④ 堂川のマトビ | 62 | ⑤ 杉花のマトビ | 65 |
| ⑦ 下仏社のマトビ | 67 | ⑧ 小沢田のマトビ | 71 |
| ⑩ 沖田面のマトビ | 75 | ⑪ 大海のマトビ | 78 |
| ⑬ 中五反沢のマトビ | 81 | ⑭ 下五反沢のマトビ | 82 |
| ⑯ 小田瀬のマトビ | 86 | ⑮ 大林のマトビ | 84 |
| (二) マトビをやめた集落 88 | | | |
| ⑯ 南沢のマトビ | 88 | ⑰ 不動羅のカスビ | 89 |
| ⑲ 中茂のマトビ | 90 | ⑳ 八木沢のマトビ | 91 |

【第四章】(北秋田市)旧合川町のマトビ

93

一 旧合川町の概要 94

(一) 生業と歴史 94

二 阿仁川と小阿仁川沿いのマトビの違い 95

三 各集落のマトビの詳細 96

(一) 小阿仁川下流の集落のマトビ 96

- | | | | |
|-------------------|-----|-----------|-----|
| ① 東根田のマトビ | 96 | ② 西根田のマトビ | 98 |
| ④ 大内沢のマトビ | 102 | ⑤ 三里のマトビ | 103 |
| ⑦ 三木田のマトビ | 108 | ⑧ 鎌沢のマトビ | 112 |
| ⑩ 杉山田のマトビ | 117 | ⑨ 雪田のマトビ | 116 |
| (二) 阿仁川沿いのマトビ 119 | | | |
| ⑪ 八幡岱のマトビ | 119 | ⑫ 道城のマトビ | 120 |
| ⑬ 新田目のマトビ | 122 | | |

【第五章】(北秋田市)旧鷹巣町・旧森吉町・旧阿仁町のマトビ

125

一 旧鷹巣町マトビ 126

(一) 生業と歴史 126

(二) 檀那寺で行うマトビ 127

寺ごとに集まりマトビをした

(三) 高野尻のマトビ 128

二 旧森吉町のマトビ 128

(一) 生業と歴史 128

(二) 小又川沿いのマトビ 130

下糠沢(しもぬかさわ)
高野尻(たかのじり)
太田(おおた)
摩当(まと)
南鷹巣(みなみたかのす)
堂ヶ岱(どうがたい)
小摩当(こまとう)
藤株(ふじかぶ)
上野(うえの)
小森(こもり)
脇神(わきがみ)
蟹沢(かにさわ)
大野尻(おおのじり)
大向(おおむかい)
小ヶ田(おがた)
川口(かわぐち)
七日市(なぬかいち)
妹尾館(せおだて)
岩脇(いわわき)
品類(しなるい)

【(北秋田市) 旧森吉町】

(阿仁川水系)
本城(ほんじょう)
向本城(むかいほんじょう)
米内沢(よないざわ)
根古屋(ねこや)
寄延(よりのぶ)
白坂(しらさか)
大淵(おおぶち)
浦田(うらた)
桂瀬(かつらせ)
惣内(そうない)
下野(しももの)
下前田(しもまえだ)
冷水(ひやみず)
阿仁前田(あにまえだ)
桂坂(かつらざか)
五味堀(ごみほり)
神成(かんなり)
大岱(おおだい)

(小又川水系)

新屋布(あらやしき)
平里(ひらさと)
羽根川(はねがわ)
巻淵(まきぶち)
堺田(さかいだ)
根森田(ねもりた)
桐内沢(きりない)
様田(さまだ)
小角(おつの)
向様田(むかいさまだ)
惣瀬(そうせ)
天津場(あまつば)
森吉(もりよし)
鷺ノ瀬(わしのせ)
深渡(ふかわたり)
小滝(こたき)

マトビの様子と焚いた場所
墓参りと百万遍念仏

(三)マトビが現存する集落 131

①本城のマトビ 131

④寄延のマトビ 135

⑦巻洲のマトビ 139

三 旧阿仁町のマトビ 144

(一)生業と歴史 144

(二)阿仁町と荒瀬以南のマトビ 145

(三)マトビが現存する集落 146

①根子のマトビ 146

②向本城のマトビ 133

⑤浦田のマトビ 137

⑧五味堀のマトビ 142

③白坂のマトビ 134

⑥惣内のマトビ 139

第六章 阿仁地方のマトビの存続

一 観光になった上小阿仁村のマトビ 150

(一)集落から村全体のマトビへ 150

(二)今後のマトビの存続 151

お盆に行く旧合川町のマトビ 152

(一)継続される春彼岸のマトビ 153

(二)郷土愛を培う盆のマトビ 153

第七章 他地域のマトビ系行事の現状

一 (能代市) 旧二ツ井町 156

(一)旧二ツ井町の昔のマトビ 156

(二)現存するマトビ 157

麻生の春彼岸行事

二 能代市のマトビ 158

(一)旧山本郡鶴形村の「地藏(じんじょ)焼き」 158

三 鹿角市のオジナオバナ 159

(一)小豆沢のオジナオバナ 159

(二)宮野平のオジナオバナ 162

(三)その他のオジナオバナ 164

四 新潟県魚沼地方のマトビ系行事 164

(一)十日町市のホッケタチ 164

(二)(南魚沼市) 旧南魚沼郡六日町のヒャクワット 165

マトビに関わる集落とそのやり方一覧表 166

参考文献 170

〔北秋田市〕旧阿仁町

小様(こさま)

塚の岱(つかのたい)

土倉(つちくら)

土山(つちやま)

向林(むかいばやし)

吉田(よしだ)

小淵(こぶち)

湯口内(ゆくちない)

水無(みずなし)

阿仁銀山(あにぎんざん)

荒瀬(あらせ)

根子(ねっこ)

伏影(ふしかげ)

萱草(かやくさ)

笑内(おかしな)

比立内(ひたちない)

打当(うつとう)

〔他地域の集落〕

◎能代市

(旧山本郡) 鶴形(つるがた)

(旧二ツ井町) 麻生(あそ)

(旧二ツ井町) 田代(たしろ)

(旧二ツ井町) 七村(ななむら)

(旧二ツ井町) 八兵衛(はちべえ)

鎌谷(かまや)

◎山本郡藤里町

粕毛(かすげ)

藤琴(ふじこと)

根城(ねじょう)

◎大館市

長走(ながはしり)

花岡町(はなおかまち)

大森(おおもり)

樫崎(ひつざき)

川原町(かわはらちよう)

田町(たまち)

十二所(じゅうにしよ)

(旧比内町) 扇田(おうぎだ)

比内(ひない)

大葛(おおくそ)

◎鹿角市

八幡平・小豆沢(あずきさわ)

八幡平・谷内(たにない)

八幡平・永田(ながた)

十和田大湯・宮野平(みやのたい)

花輪・下川原(したかわら)

花輪・狐平(きつねたい)

【第一章】

米代川水系のマトビ

一 マトビの内容

(一) 春彼岸に火を焚く行事

各家が墓前で焚く火と

集落単位で火を焚くマトビ

彼岸は、遙か彼方の極楽浄土に、思いをはせ、死者の霊を供養する年中行事である。彼岸は春と秋にあり、春分(秋分)の日(中日)を挟んで前後三日間ずつの七日間である。

マトビは、秋田県北部で春彼岸に行われてきた伝統行事である。彼岸のイリまたはハツ(初日)、中日またはナカ(四日目)、シマイまたはオクリ(七日目)に、各家が、墓参りをし、祖霊が迷わず戻るための道しるべとして墓の前で火を焚き、祖霊を迎えて供養し送るのである。

各家の墓参りと同時に集落単位で大掛かりに行うマトビがある。集落単位で行うマトビは、集落の人々が協力して仕掛けを作る。それを墓の見える山の尾根伝いや、田の畦、川岸、あるいは、墓地や寺の広場などで焚く。以前の仕掛けは、藁や柴木などを山の上に運び上げ藁束を積み上げたものや、棒に吊した藁束や、丸めた木の皮などを、雪山に多数差し並べて燃やした。また、地域によつては、集落の人々が藁束を墓地の広場に持ち寄つて、二、三段に積上げて燃やした。これらの仕掛けは、祖霊を迎えて供養し送るだけでなく、集落全体の五穀豊穡や無病息災の願いも込められていた。

行事日は地域により彼岸のイリ、中日、シマイの三回行ったり、イリとシマイの二回であったり、中日かシマ

イのいずれか一日だけに行ったりと様々である(末尾資料表12参照)。

盆に火を焚き、祖霊を迎え、供養して送る行事は全国各地に見られるが、「春彼岸に火を焚き、祖霊を迎え、供養して送る」行事は、秋田県北部の米代川水系のマトビや、県外では、新潟県十日町市や旧南魚沼郡六日町に見られた。十日町市四日町の「ホッケタチ」は、春彼岸のイリと中日とオクリに火を焚いた。これは平成五年(一九九三)頃まで行われていた。また、旧南魚沼郡六日町には、イリと中日と明け(シマイ)に庭先の雪上で「わら火」を焚く「ノビ」や中日に集落単位で山に多数の火を焚く「ビヤクワット」と呼ばれる行事があったようであるが、戦後に行われなくなっており、最も多く現存しているのは米代川水系である(第七章四・図12参照)。

阿仁^{あに}地方では、秋の彼岸は墓参りをしない家もあり、あまり丁寧に行わないという。秋の彼岸の時期は、収穫期で忙しいというのも理由の一つであるようだ。

様々に表記される マトビは、万灯供養(万灯会)というマトビ

仏教行事と関連していると説明する先行研究も多く、マトビが最も多く現存している旧合川町や上小阿仁村では、「万灯火」という漢字をあてている。しかし、マトビの語源については様々な伝承や解釈があり表記も様々である。

菅江真澄『秀酒企の温瀧(すすきのいでゆ)』(享和三年(一八〇三))では、塚原に藁を積み上げ燃やしている様子を「纏火」と表記している。大里武八郎『鹿角方言考⁴』(昭和二年(一九五三))では「まどびー(中略)遠方ヨリ望

(1) 秋田県北部では、彼岸の初日を「イリ」、「ハツ」、「ハジメ」、「三日目」を「中日」、「ナカ」、「七日目」を「シマイ」、「シメ」、「シメイ」、「オクリ」などと言ひ、集落により様々である。本文では各集落の言い方で記した。

(2) 宇都宮貞子「たんたん滝水」 創文社 昭和五年(一九七八)

(3) 凡例の一を参照。図1・5参照。

(4) 大里武八郎『鹿角方言考』鹿角方言考刊行会 昭和二年(一九五三)六月

まどびー(中略)遠方ヨリ望見スレバ窓ノ火ノ如クナルヨリ窓火ト呼ベルカ、或ハ間遠ニ見ユル火故まどびノ約力。(略)

(5) 的^{てき}火

荒木はじめ「総代な照明のドラマ」(「わらび」NO.284 わらび座 昭和五一年一九七六) 三三頁

(6) 米代川流域は、北部の秋田県及び青森県境にまたがる白神山地、南北に横断する奥羽山脈、三部の出羽山地、及び、太平山地に囲まれている。その源は奥羽山脈の中岳に発し、幹川流路延長一三六キロメートル、流域面積四一〇〇キロ平方メートル。白神山地は世界最大級の規模のブナ林の原生林が分布している。上流から花輪盆地、大館盆地、鷹巣盆地、能代平野が形成され、米代川はこのほぼ中央を貫流している。この水系の水田耕作面積は、二二、六八二ヘクタール、畑耕作面積は、六、二二二ヘクタール、国有林面積は、一一、九一八〇ヘクタールで、秋田県の国有林のほぼ半分を占めている。

(7) 柳田国男編『歳時習俗語彙』国書刊行会 昭和五〇年(一九七五)

見スレバ窓ノ火ノ如クナルヨリ窓火ト呼ベルカ、或ハ間遠ニ見ユル火故まどびノ約力。(略)」とあり、「窓火」や「間遠に見ゆる火」であると表記している。荒木はじめ「壮大な照明のドラマ」〔昭和五二年(一九七六)〕では、ある集落でマトビの話を聞いた時の例をあげて「彼岸の中日には、仏様が家に帰ってくるので、自分の家を間違えないように、火を焚いて目印にする」と聞き、「的火」だと思ったと記している。また、それぞれの解釈で「摩当火」〔満燈火〕〔魔闘火〕などをあてることもある。

小正月・盆の火祭り行事

秋田の他地域の火を焚く祭りをみると、年の暮れから年初

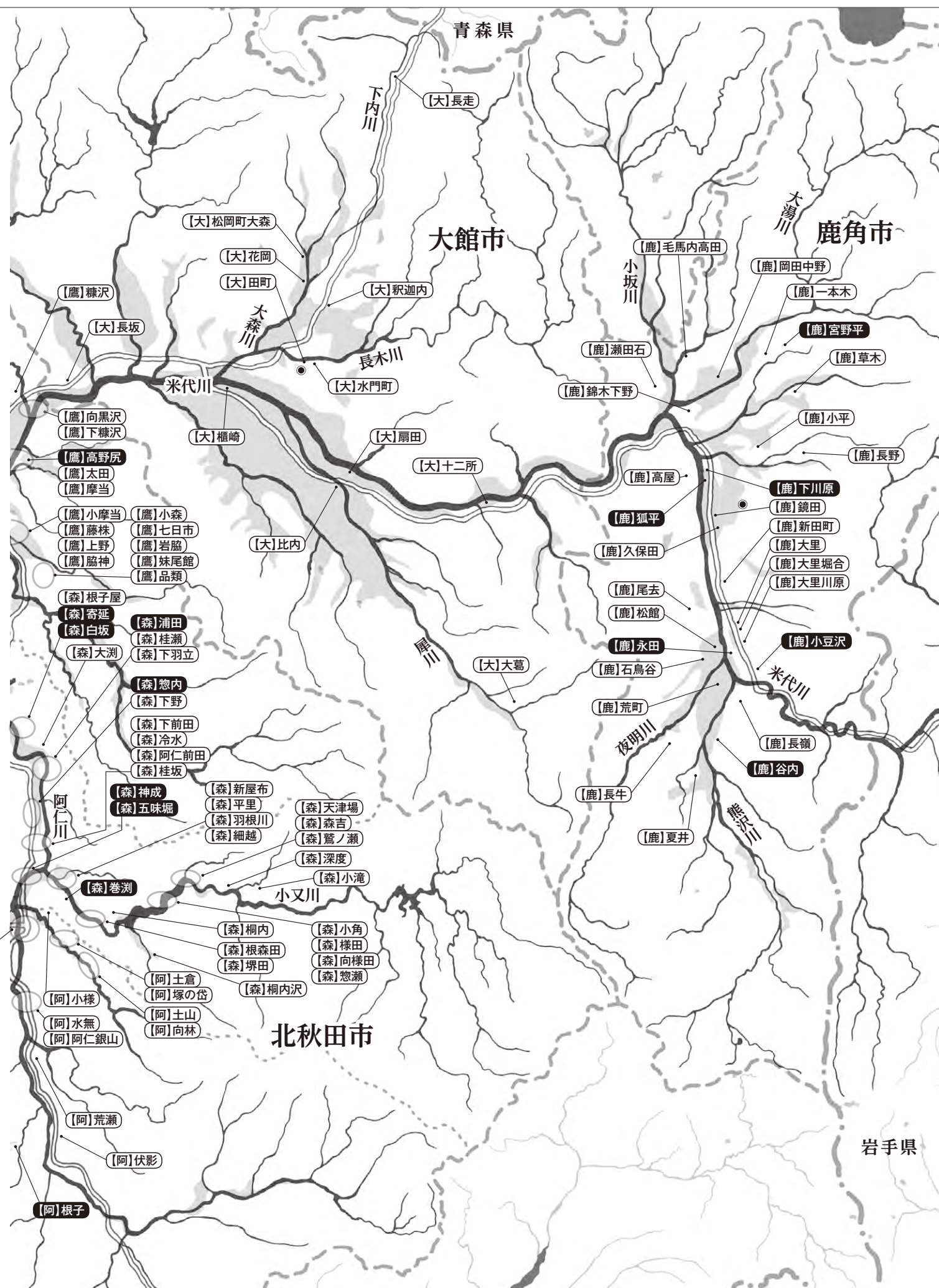
めにかけてが多い。火の明りと熱が邪気を払う力を持っていると考えられているからである。小正月には、メ飾りや、門松、お札、書き初めなどを燃やすドンド焼きが秋田県の各地で行われている。また、二月半ば頃には、秋田県の東南部の仙北郡六郷町、横手市、角館町(現仙北市)、秋田市の檜山などでも、火祭りが行われている。

横手市では「たいまつ焼き」や「カマクラ」と呼ばれる火祭りが伝承されており、角館では「火振りカマクラ」なども行われている。また、秋田市の仁井田地区の「火振りカマクラ」は平成三年(一九九二)に復活している。

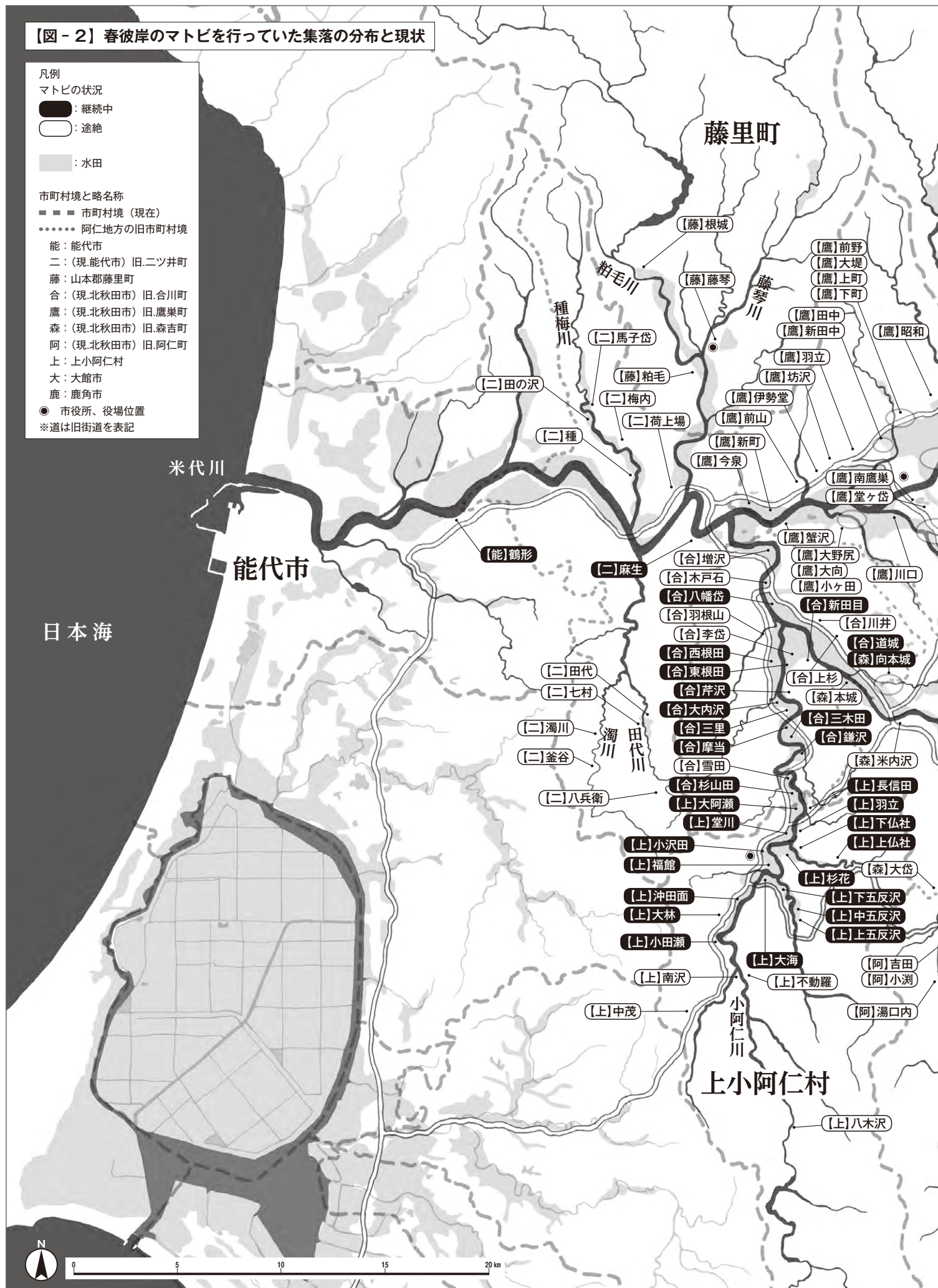
大館市十二所では、小正月行事として伝統的に行われていた「火振りカマクラ」が、平成三年(二〇一一)に復活した。この行事が、享和三年(一八〇三)に菅江真澄が大滝温泉での正月について記した『秀酒企の温瀧(すすきのいでゆ)』にも「かまくらやくの祝い」として登場している。いずれも火をつけた俵を振り回したり、藁で

〔図-1〕秋田県北部・米代川水系の河川と山岳 (内は、本調査対象地の阿仁地方)





【図-2】春彼岸のマトビを行っていた集落の分布と現状



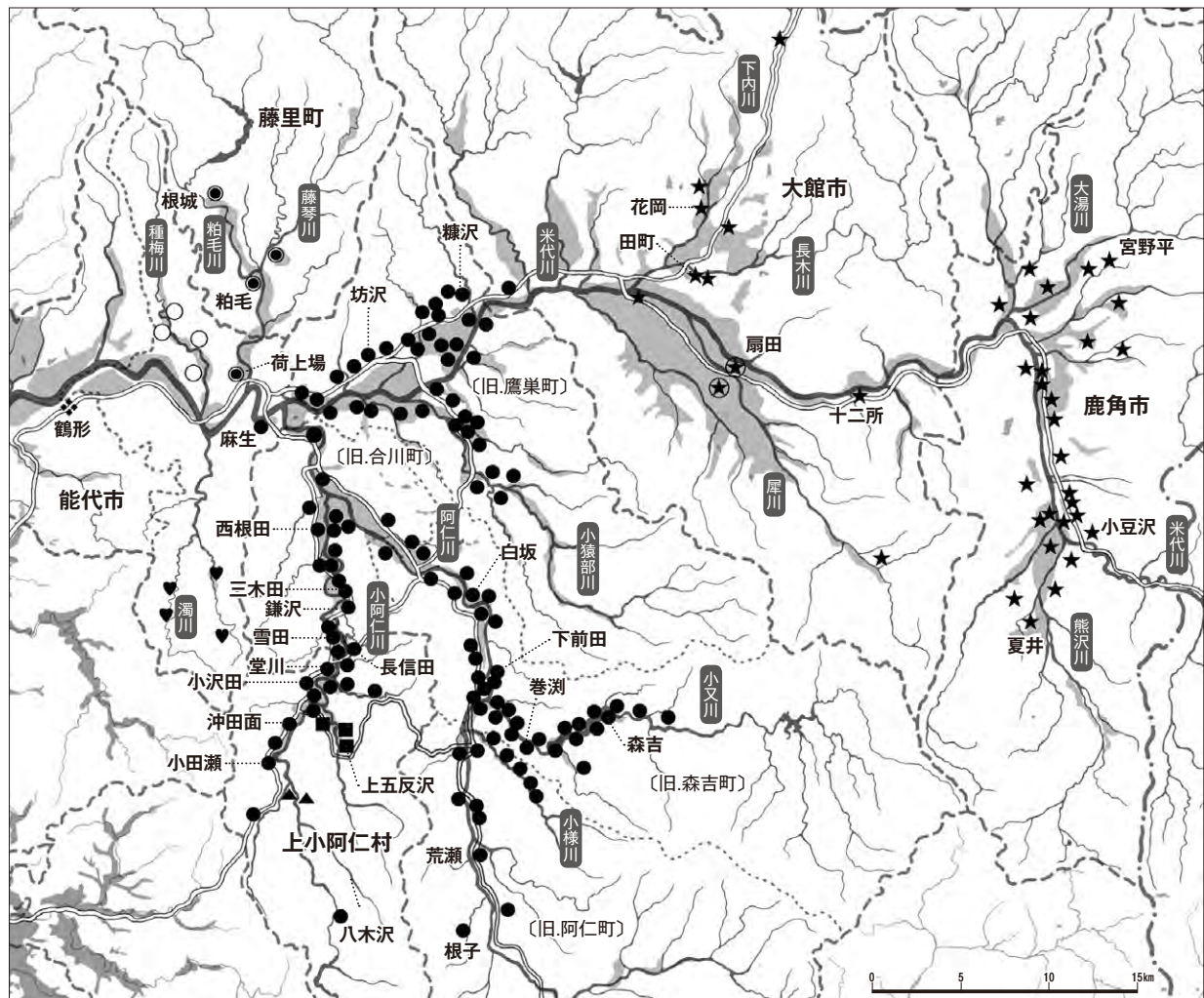
作った松明を燃やしたりする。仙北郡美郷町六郷では「竹打ちカマクラ」と呼ばれているが、祭りの最後は、松の枝や葉で作った二オに火をつけて、五色の布に願い事を書いた天筆や門松などを燃やす。

カマクラの形は、雪のみでドーム型にしたり、雪壁や木材で小屋を作り、茅や藁で屋根などを覆うものなど様々である。横手市の現在のカマクラには「水神」を祀っているが、明治三〇年（一八九七）前後までは雪囲いの中で、門松や炭俵を積んで燃やし火を振り回した。また、『秋田風俗問状答』によると、文化二二（一三三）年（一八五〇）頃、久保田（現秋田市）のカマクラは雪壁で竈の形に作られ、「鎌倉大明神」などと書いた幟やまゆだま、米俵などが飾られた。夕刻には米俵を焼いて振り回した。これらは無病息災、五穀豊穡を祈願する予祝行事であり、中には年占や鳥追いの意味を持つものも見られる。

一方、盆に祖霊を迎え、供養して送る行事は県内各地で行われている。秋田市の竿燈、能代市の「ねぶ流し」や湯沢市の「絵燈籠」なども祖霊を導くという意味合いを持ったものである。

こうして見てくると、秋田県内には、年初めや盆の火祭りは多いが、春彼岸に祖霊を迎え、供養して送るために、死者への目印として火を焚くマトビという行事は、火祭りの中で米代川水系に集中的にみられる、注目すべき行事であるといえる。

二 マトビの分布



- 名称の凡例
- マトビ、マトビ
 - ♥ マトビ、マンドビ
 - ▲ カスビ
 - マトビ・ノビ
 - ノビ
 - ホトケサンノアカリヲツケル
 - ★ オジナオバナ・ノビ
 - ★ オジナオバナ・マトビ・マンドビ
 - ❖ 地蔵焼き

〔図-3〕マトビの呼び名の違い

(一) 米代川水系のマトビの分布

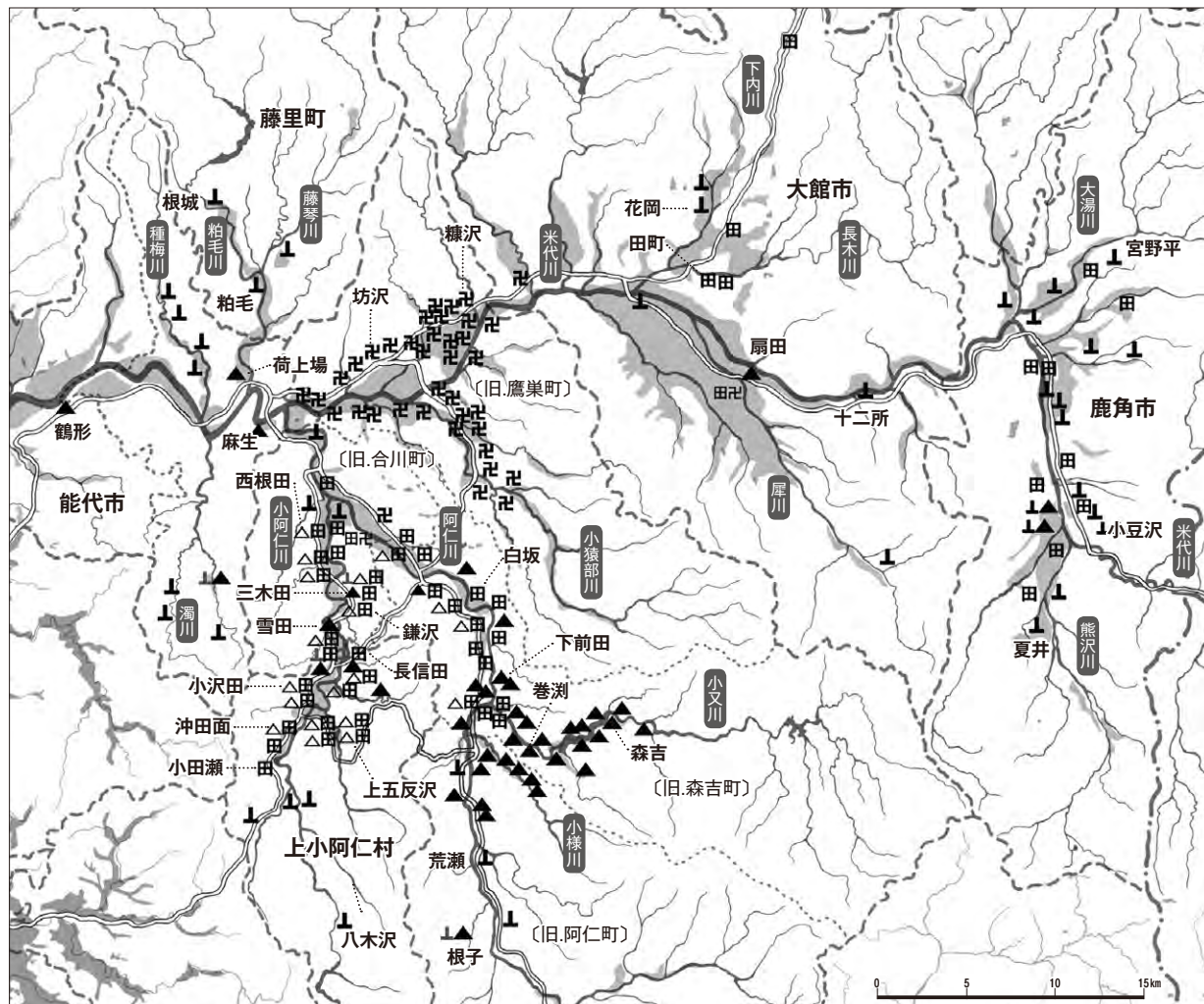
幹川と支川の分布

米代川水系は、幹川から三一の支川、さらに、三五の小支川に分かれ、八四もの河川が秋田県北部に広がっている。春彼岸のマトビは、この水系に分布している。言い換えると旧能代市、旧二ツ井町、山本郡藤里町、上小阿仁村、旧合川町、旧鷹巣町、旧森吉町、旧阿仁町、旧田代町、旧大館市、旧比内町、鹿角市という秋田県北部の十二市町村に広がっているが、川沿いに分布する町村の行事であるというほうがわかり易い。図一に印したように、本調査対象地である阿仁地方は、この水系に位置しており、米代川支流の阿仁川、小猿部川や小支流の小阿仁川、小又川、小椋川などの流域である。

図一は、米代川水系に分布し、春彼岸のマトビを現在行っている四六集落と、かつて行っていた集落をプロットしたものである。

米代川流域では、分布図の中で最も下流域の能代市鶴形(旧山本郡鶴形)が、現在もオクリ彼岸の日に「地蔵焼き」を行っていることを確認している。『二ツ井町史』によると、旧二ツ井町では、種梅川沿いの村々にもオクリ彼岸に子供達が集まって、集落単位で火を焚く「野火」という行事が大正末期頃まであったという。また、田代川、濁川沿いの集落では各家の墓前で藁を焚くマトビがあった。藤琴川、粕毛川沿いの山本郡藤里町では、集落単位で、四〇五メートルの松の木に藁を積上げて焚いた。根城では、墓地の広場に杉葉を積上げたジジガミや四方

〔図一〕集落単位でのマトビの場所の違い



場所の凡例 ▲ 山と台地 田 田と畦 ⌋ 墓地 卍 寺の広場
 ※併設事例の場合は併記…▲田 (山と水田の両者でマトビを行う)
 ※昔と現在で場所が移動した事例…△田 (かつては山で、今は水田で行う)
 ▲⌋ (かつては墓地で、今は山・丘で行う)

八方に枝が出た木に藁を引っ掛けたババガミを燃やすマトビがあった(図-72)。

マトビが現存している集落が最も多いのが阿仁地方で、支川の阿仁川と小支川の小阿仁川や、小々支川の仏社川、五反沢川沿いの集落にも多数現存している。かつては、阿仁川沿いから小支川の小又川や小様川沿い、小々支川の桐内沢川沿いの集落でも行われ、最もマトビの盛んな地域であったが、小又川沿いは森吉山ダム工事に伴う集落移転のため、平成八年(一九九五)に伝承が途絶えた集落が多い。米代川中流域では旧鷹巣町の小猿部川沿いと羽州街道沿いの集落では墓地の広場で行われていた。

上流の大館市に入ると右岸の花岡川、下内川や長木川沿いの集落に分布し、左岸では犀川沿いなどの集落に分布している。さらに上流の鹿角市では、支川の大湯川、小支川の小板川、支川の夜明島川、熊沢川にも数多く分布している(図-2)。鹿角市は、江戸時代まで南部藩領であったが、春彼岸にマトビを行う集落は、藩境を越えて、河川や街道沿いの集落に広範囲に広がっていることがわかる。

呼名の違いとその分布

図-3は呼名の分布図である。

春彼岸のマトビは、地域によって呼名が違う。鹿角市の米代川上流域の集落や支川である大湯川、夜明島川、熊沢川沿いの集落では、「オジナオバナ」と呼ばれている。春彼岸のマトビが現存する鹿角市小豆沢や宮野平では、仕掛けも火を焚く場所も違いますが、ともに「オジナオバナ」と呼ばれている。大館市でも米代川右岸の長木川、花岡川、下内川などの沿岸地域

の多くの集落、米代川左岸の支川である犀川沿いの地域も「オジナオバナ」という。これらは火を焚いている時に唱える言葉と関係している。しかし、内田武志「年中行事 秋田県鹿角郡宮川村地方」⁽⁸⁾「昭和五年(一九三〇)」では、「マンドビ」と記され、大里武八郎「鹿角方言考」⁽⁹⁾「昭和二八年(一九五三)」には「マドビ」とも呼ぶと記されている。「マドビ」は「窓火」であり遠くから見ると窓の火のようだという意味があるという。また「間遠に見ユル火」という解釈もあるようだ。

米代川沿いの十二所を訪れた菅江真澄は『秀酒企の温瀟(すすきのいでゆ)』の中で、「春彼岸に子供達が墓の前で藁を焚く様子」を記し、それを「纏火」と書いたが、現在は「オジナオバナ」という。十二所から少し下流の扇田、比内では、「オジナオバナ」または「ノビ」と呼ばれる。

米代川中流域の旧鷹巣町、阿仁川沿いと旧森吉町の小又川、旧阿仁町の小様川沿いや阿仁川沿いでは、「マドビ」あるいは「マドビ」と呼ぶ。小阿仁川下流域の旧合川町でも「マトビ」と呼ぶ。小阿仁川上流の上小阿仁村は、今回の調査では、どの集落でも、「マトビ」であったが、東洋大学民俗研究会「上小阿仁村の民俗」⁽¹²⁾「昭和五四年(一九七九)」では南沢、不動羅は「カスビ」、上、中、下五反沢は、「ホトケノアカリヲツケル」と言ったと報告されている。

山本郡藤里町の藤琴川・粕毛川流域、米代川沿いの荷上場でも、「マトビ」と呼ばれる。「二ツ井町史」⁽¹¹⁾によると旧二ツ井町の種梅川流域では「ノビ」と呼ばれている

(8) 東北、中部地方で刈った稲を円錐形に高く積み上げたもの(二〇頁参照)

(9) 文化庁文化財保護部「正月の行事4―岩手県・秋田県・埼玉県・新潟県」無形の民俗資料記録 第一四集 昭和四六年(一九七二)三月七〇〜七六頁(二〇頁参照)

(10) 内田武志「年中行事 秋田県鹿角郡宮川村地方」復刻版民学 第二巻上 岩崎美術社 昭和五年(一九三〇) 二〇四頁

(11) 今井晋・明石貞吉「米代川中流扇田町付近の土俗」復刻版民俗学 第四巻上 岩崎美術社 昭和六一年(一九八六) 二四頁

(12) 東洋大学民俗研究会「上小阿仁の民俗」秋田県北秋田郡上小阿仁村 昭和五四年(一九七九) 二七二頁

五ノ宮嶽から花輪盆地を眺める



【図-5】マトビが伝承される地域の行政区分



が、左岸の田代川、濁川^{じり}沿い、右岸の種梅村地区ともに「マトビ」、方言では「マンドビ」と呼ばれる。「ノビ」は「野火」であり「野火の火もついたかよ」という唱え言葉もある(第七章一参照)。

米代川下流の鶴形は現在もオクリ彼岸に集落単位で火を焚いており、「地藏(ジンジヨ)焼き」と呼んでいる。

マトビを焚く場所 図-4は、集落単位のマトビを焚く場所についての分布図である。鹿角市、大館市の「オジナオバナ」では山の尾根で焚く集落は少なかった。ほとんどが墓地か墓地の見える田などで行われた。山で焚くのは、鹿角市の三集落と大館市扇田の一集落のみであった。

阿仁地方の旧鷹巣町は、それぞれの集落が、檀那寺の墓地に集まってマトビを焚いた。旧合川町では、かつて山で焚いていたのが八集落、墓地の見える田の畔や土手で焚くのが五集落で、墓地で焚くのは三集落あった。墓地の位置や地形にもよるが、山で焚く集落が多かったことが分かる。しかし、阿仁川流域には、寺院内の墓地や集落の墓地近くの田で行う集落単位のマトビが見られる。

旧森吉町では、現在平地でマトビを行っているが、かつては山で焚いていたところが四集落あった。さらに上流に行く程、山で行った集落が多いことがわかる。旧森吉町の小叉川、旧阿仁町の小様川沿い、阿仁川流域の集落は、ほとんどが小高い山でマトビを行っていた。

上小阿仁村では、かつて山や台地で焚いていた集落が一三集落、墓地や墓地に近い田で焚いた集落が七集落あった。旧森吉町に次いで山で焚くマトビが多かった。し



旧合川町を流れる小阿仁川

(13) ニッ井町史編纂委員会「ニッ井町史」秋田県山本郡ニッ井町 昭和五二年(一九七七)五二七頁

かし、現在、山から田や川沿いの土手に下りてきた集落が十一集落ある。これは、各集落のマトビの担い手が高齢化したことやマトビを見て回るバスを走らせたことで見易い場所に移動したことが理由としてあげられる。

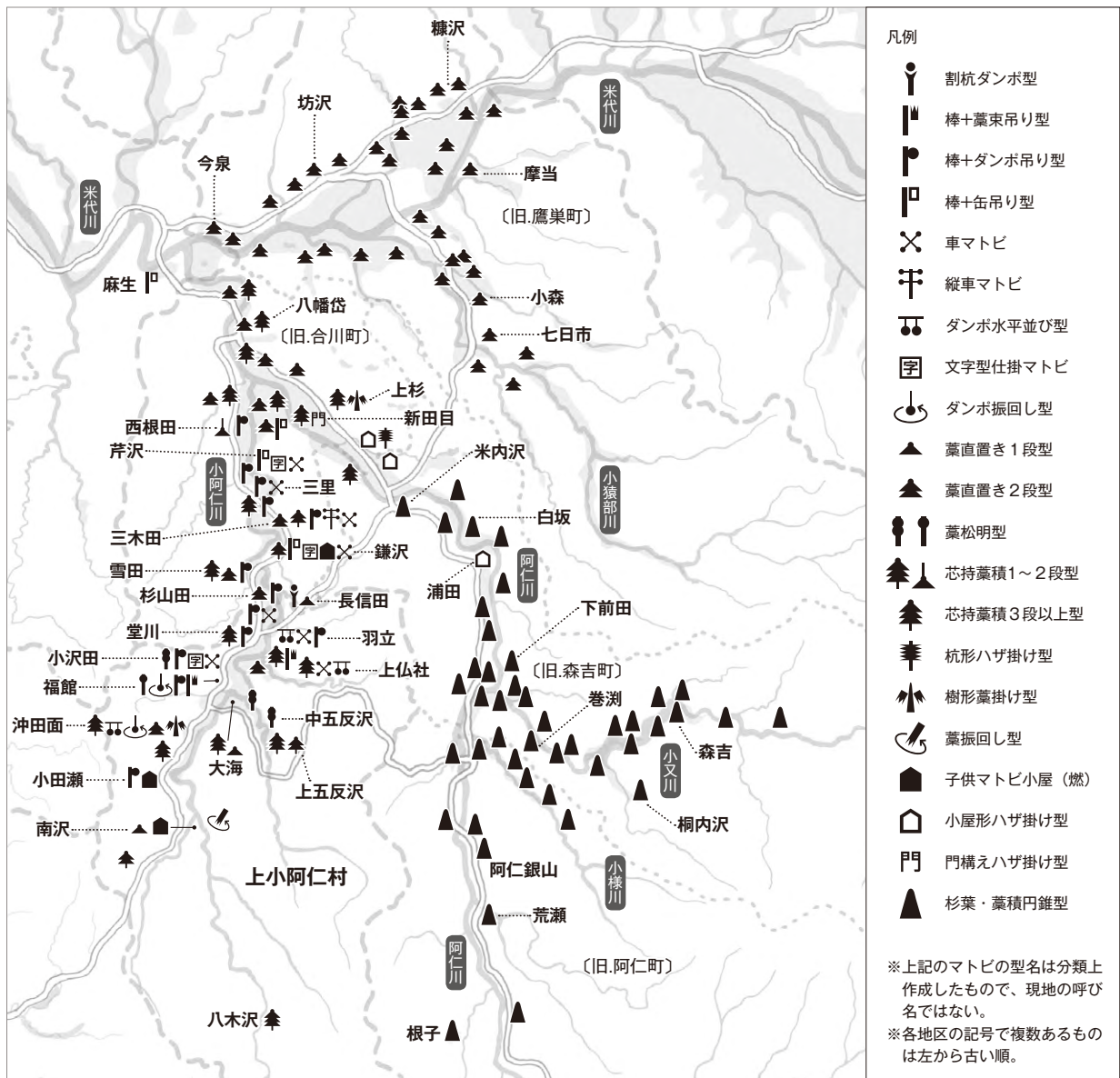
旧能代市や旧二ツ井町では、鶴形、荷上場などが、かつては山でマトビを行っていた(第七章一・二参照)。麻生は、復活してから山で行っているが、山本郡藤里町や旧二ツ井町には、墓地で行っていた集落が多い。

(二) 阿仁地方のマトビの分布

阿仁地方の概要

本調査の対象地域である阿仁地方とは旧合川町、旧鷹巣町、旧森吉町、旧阿仁町、上小阿仁村の範囲であり、現在は、北秋田市と上小阿仁村になっている(図一5)。また、米代川水系に位置することは前述した(図一1)。

文禄元年(一五九二)には秋田氏の家臣、加成三七が小沢田の七倉山に城を築くなど、加成一族が、阿仁川、小阿仁川流域を支配していた。慶長七年(一六〇二)に、佐竹義宣が移封により常陸からやってくると、阿仁地方に残留していた旧勢力が土豪一揆を起こし衝突がおきた。指導者達は処刑された者も多かったが、帰農して村に残り阿仁、小阿仁地方を支えていった者も多かったという。義宣は、殖産政策に力を注ぎ、米作、林業、鉱山業の三者について成果を上げた。厳しい検地の実施、森林の保護と活用、さらに、銅山の開発に力をいれた。また、阿仁地方には、米代川を幹川とした水系が広がり、水量豊富な河川を利用して堰が作られ、新田開発も進められ



〔図一6〕大正末から昭和三〇年代・阿仁地方のマトビのタイプ比較(マトビの形は、第二章三七頁参照)

ていった。鷹巣平野には、豊かな水田があり、旧合川町、上小阿仁村、旧森吉町には秋田杉の豊かな森林が広がっていた。中世からの金山は衰退していたが、阿仁町の六銅山⁽¹⁴⁾は、江戸時代には全国でも有数の銅山となり、明治、大正期と盛況が続いた。また、旧阿仁町の南部には、狩猟で生計を立てる「マタギ」の集落もあった。

この地域は、能代港や阿仁地方の街道、河川整備により木材などの物資の流通も盛んで、生野銀山からの技術者、上方の商人など、様々な人々や宗教などの文化の出入りも活発であった。これらの様々な要素が、阿仁地方の個々の集落にも影響を与えていた。

マトビのやり方の違い マトビの現況は、上小阿仁村で一六集落、旧合川町で一二集落、

旧鷹巣町では一集落、旧森吉町では八集落、旧阿仁町では、一集落確認できた。図1-6を見ると地域によってマトビの仕掛けが違っていることがわかる。

現状のマトビは、布で玉を作るダンポや缶にボロや藁縄、灯油を入れた物を利用している。どの集落でも同様に作った材料を、仕掛けを変えて燃やしているが、昭和初期から昭和三〇年代（一九五五）前半頃の仕掛けをみると、町村ごとに特徴があった。

小阿仁川上流の上小阿仁村は、阿仁地方の中でも最も多くマトビが現存している地域である。この地域の昭和初期のマトビは、藁束を心棒の回りにダンポ状に巻いたり、藁束を何段にも積上げて作った松明を雪山に立てて燃やした。芯になる雑木の使い方、藁の積み方、縛り方などに集落ごとの違いがあり興味深い（第二章参照）。し

かし、大正一四年（一九二六）に営林署の機関庫が沖田^{おもと}面にできると、昭和一〇年代（一九三五）には、廃油と野良着や下着のボロを利用したダンポ（直径一〇センチほどの布玉）が作られた。

戦中戦後は物が無い時代であり、集落ごとに雑木と藁束を主体に松脂などを利用して、マトビを続けてきた。

昭和二〇年代（一九四五）後半から昭和三〇年代前半は、藁束とダンポを併用する集落もあった。上、中、下五反沢や大海、下仏社などは藁束を三、四段と高く積み上げ、山で行うやり方を続けていたが、三〇年代後半には田に移動しダンポに変わった。小田瀬と南沢は、子供達の作業小屋であった「マトビ小屋（カマクラ）」を燃やした。

旧合川町のマトビは、小阿仁川下流の旧下小阿仁村（表^{にしこんだ}1）に多く現存している。親郷として歴史がある西根田^{みづさと}、三三^{みつさん}、三木田^{みつぎた}、鎌沢^{かまのさわ}は高い山の上で、大内沢^{おおないざわ}、摩当^{まどう}、雪田^{ゆきた}、杉山田^{すぎやまた}なども山あるいは台地で焚いていて、高台でマトビを焚く集落が多かった。三木田と西根田の昭和初期のマトビの焚き方は、いずれも藁を低く積んで、ある間隔を置き、山に多数並べて焚いた。これらのやり方は、大正時代から変わらないという。

旧合川町でもボロ布と松脂、灯油などを利用したダンポは、昭和一〇年前後から使われていた。昭和二〇年代後半から三〇年代後半になると、ほとんどがダンポか、または缶に灯油とボロ布を詰込み、それらを又木の棒に吊して燃やす形に変わった。山の尾根沿いに一定の間隔をおき、棒を多数差して火を焚く方法は続いた。

新田目^{にいだめ}では、彼岸と此岸の境の門⁽¹⁶⁾を、新田目橋上に木

(14) 『阿仁町史』阿仁町 平成四年（一九九二）一〇二頁

一七世紀半ば頃に、大阪の豪商の手代、八右衛門により銅山が発見された。以後、延享元年（一七四四）までの間に、小沢・真木沢・三枚、一ノ又、二ノ又、萱草が発見された。これらは六銅山と呼ばれ、藩の経済を支えるだけでなく天下の大銅山となっていた。

(15) ダンポ（タンポ）とは、球体、又は楕円体（第二章三七頁中段左参照）の形にすること。

(16) 彼岸（死後の世界）と此岸（私達の暮らす世界）の境目の門。

平成二三年（二〇一一）に復活した十二所の火振りカマクラ



材と藁束で作り、土手上に芯棒の周りに藁束を三〇五段積上げた「モリ」を戸数分だけ並べて、両方とも燃やした。阿仁川右岸の道城や向本城では小屋形ハザ掛け型、杭形ハザ掛け型など豊富な稲藁を使い様々な形を作って焚いていた(第二章図11参照)。

このように上小阿仁村、旧合川町地域は戦前戦後は、雑木と藁を活用していた集落が多いが、ダンポに切り替わるのも早く、車マトビや、文字マトビ、小屋形マトビの仕掛けなど他地域の様々なやり方が導入され、形を頻繁に変えながら継続してきたことがわかる。

旧鷹巣町は、各集落とも、高い山で燃やしたりはせず、檀那寺の境内に集まって藁束を焚き、集落単位のマトビをしたが戦後の早い時期にやめてしまった所が多い。

旧森吉町は、阿仁川中流域の平地では稲藁も豊富で、浦田が小屋形ハザ掛け型を七棟作り燃やした。また、地形により違いがあるが寄延や桂瀬、神成は、高い山で藁束を円錐形に積上げたものを燃やしていた。

旧森吉町でも小又川沿いや、旧阿仁町の小様川沿いに分布する集落になると、藁や豆ガラ、杉葉などで高さ四メートルもある大きな円錐形を作り、高い山の尾根に一本、または、三〇四本並べて燃やしていた。旧阿仁町でも鉾山町といわれる集落は、集落単位でマトビをやっていた。しかし、伏影を除く荒瀬以南の集落では、集落単位で行うマトビはない。春彼岸に墓参りをし、各家の墓前で藁を燃やすが、「マトビ」とは言わないという。マタギ集落である根子が昭和五年(一九八〇)に藁、豆ガラ、杉の枝葉を円錐形に積上げる方法を復活させ継続し

ている。

こうしてみると藁が豊富な集落では、藁束を中心に使い、何段にも積上げたり、小屋形ハザ掛け型などもあった。阿仁川、小又川、小様川沿いは、藁束だけ積上げる集落もあるが杉の枝葉の混合もあるなど、仕掛けの材料や行い方に地域的特徴があることがわかる。

三 マトビをめぐる言説

(一) 菅江真澄の見たマトビ

十二所のマトビ 菅江真澄は、享和三年(一八〇三)の正月を秋田県大館市の大滝温泉で迎え、

その時の様子を『秀酒企の温瀟(すすきのいでゆ)』に記している。この中に、大館市十二所のマトビのことが書かれている。日程は、旧暦一月になっているがその内容を記してみる。

一月廿五日 けふより、かのきしべ(彼岸)にいたらん。菩提のみちの山口とて、老たる刀自の仏にずゝすり、鉦、つゝみをうちて、「往生不定のその時は、念仏は一返出申さない、唯今まをす念仏を、うけとりたまへや釈迦、地藏、さいさいまをすもうるさくら、一度に千返なむあみだ、なまいだ」と、声をからしてぞとなふる。こは、科野の国などの「のいだ(南無阿弥陀仏の訛語)のいだ」と唱へて、仏にむかふのふりにたぐえて、ことに聞えたり。暮近う、つかはらに童ど



大林、念仏の最後に数珠が投げられる



五味堀の念仏

もの群れて、わらをつかねて、れいの繹火を焚き手向して、「おほちな、おほばな、明りイに来とらふらひ、来とらふらひ」とよばふ。うべも、たまよばひをせり。

一月廿八日 ひがねぶち(彼岸念仏)の廻ども、あまた酔ひしれてうちむれ、声も鼻鳴りしてさはぎたち、かなつゝみにはやし、獅子頭をいたゞき、戯て踊り、うたふも、舞も、のりのみちのべに、たふれたるもありき。

一月二五日は、彼岸のイリであり、老婆達が数珠をすり、鉦や鼓を打つなどして、念仏を唱えながら極楽往生を祈っている様や夕暮れになり、子供達が集まって藁を積み上げて焚き、「おちな おばな 明りに来とらうらい」と唱えている。これを真澄は「繹火」と記している。

『大館市史(第四卷)⁽¹⁹⁾』には「オジナオバナ」という行事名称で記されている。市史により大森川沿いの大森のマトビの行い方をみると、「春彼岸に墓地に藁を持って集まり、火を焚き、初めの彼岸には、オジナ オバナ チ ヨウチンもよぐらし、あかしもよぐらし、早くダンゴをそい(背負い)に来とらうらい 来とらうらい と歌う。しまい彼岸の日も同じで、いとらうらい いとらうらい と歌う。子供が主で、男女を問わず、大人も入ることがある。」このように、唱え言葉は多少異なるが、江戸時代後期と行い方がほぼ同じであることが分かる。

一月二八日は中日である。廻達が酒を飲み彼岸念仏を唱えながら、鉦を鳴らし、戯れ踊り、道に倒れ込む様子が記されている。これは、百万遍念仏だと思われるが、

酒に酔った状態で集落中を練り歩いていたようである。

『大館市史(第四卷)』によると長木川上流の黒沢では、「彼岸のうちの都合のよい日、一日、おばあさん達が集まり、鉦、太鼓をたたき、百万遍の数珠を持ち、念仏をとえながら村を回る。悪病よけだという。その時に、各家々に、南蛮やシャカチ(サイカチ)の実を付けたシメナワをくばる」とあるが、近年は百万遍念仏を、シマイ彼岸だけにやる集落も多い。終わったら皆で会食し酒を飲むが、屋外を巡らず公民館などで行うようになった。

二月二日 けふは、はつるひがんとて、家々に濁れる酒を、さすなべの大きやかなるにあたゝめて、酒菜は、すみ(酢のあえ物)のやまをなして酔ひ、あるは十二処の寺に入りて飲み唄ひ、夕附行ころ塚はらに飯、餅などを手酬て、かねうち鳴らし繹火を焚たて、「おほちな、おほばな、あかりイに往とらい 往とらい」と、わら火ふりもて、童の呼ぶ声声聞えたり。

真澄によると、二月二日のシマイ彼岸には、夕方に墓に行つて、飯や餅を墓に供えている。そして、鉦を打ち鳴らし「繹火」を焚き、「送る」言葉を唱えながら、子供達は、藁束に付いた火を振り持っている様子がわかる。端々に現在に通じる行い方が見て取れる。マトビと百万遍念仏は一つの流れとして行われていたこともわかる。

この文献(秀酒企の温瀟)から、マトビは、すくなくとも江戸後期から行われていたことを確認することができる。菅江真澄以外にも、文久三年(一八六三)に記された石

(17) ハザ掛け(稲架掛け)型

稲を乾燥させるために稲架木(丸太を組んで、藁束を掛ける。

(18) 享和三年(一八〇三)は、旧暦の閏年であり、この年の春彼岸は、一月二五日から二月二日となる。これは現在の春彼岸の期間とほぼ一致し、真澄が見たのは、春彼岸のマトビと解釈してよい。

(19) 大館市史編纂委員会『大館市史 第四卷』大館市 昭和五十六年(一九八一)

(20) 石井忠行「伊頭園茶話」『新秋田叢書』一期七巻 歴史図書社 昭和四十六年(一九七二) 六四頁

井忠行『伊藤園茶話』⁽²⁰⁾には、荷上場(現能代市)のマトビの様子が書かれている(第七章一参照)。

(二) マトビの発祥諸説

春彼岸に火を焚く行事は、いつ頃から、なぜ、この地域で行われるようになり、そして、「マトビ」と呼ばれるようになったのかについて、先行研究の中で語られている様々な発祥諸説を記してみたい。

万灯火と万灯会 「万灯火」という名称と「万灯会」については、『秋田民俗語彙事典』⁽²¹⁾を引用しているものが多い。

アイカワマトビの項には、左記のように書かれている。

「アイカワマトビ」——合川万灯火。マトビは百八炬火のとで東日本一帯では新盆の家や村共同で焚く松明のことをいう。万灯会(万灯供養)という仏事すなわち懺悔や滅罪のために仏・菩薩に万灯(多くの火)を供養する法会に由来する。日本では古く白雉二年(六五二)から始められた。

「マトビは百八炬火のことで東日本一帯では新盆の家や村共同で焚く松明のこと」と、マトビが「盆の行事」と混同され記されている。マトビは秋田県北部では「春彼岸の行事」であり、盆に行われることはなかった。⁽²²⁾

「百八炬火」は、西角井正慶編『年中行事辞典』⁽²³⁾によると「新盆に精霊を迎える火」には違いのないのだが、東日本だけではなく、中部地方の長野や静岡や関西の大阪な

どにも見られる盆行事であり様々な形で行われていることが記されている。しかし、これらが「マトビ」と呼ばれることはない。このように正確ではない説明が一人歩きしてしまっている。

一方、『総合日本民俗語彙』⁽²⁴⁾に、盆行事の「マンドロビ(萬燈火)」が載っている。近畿地方とその周辺の集落で行われ「盆に群衆が松明を灯して、山から降りてくる」というものであるが、こういう盆行事の名称との混同が生じ、『秋田民俗語彙事典』のような正確ではない表現に繋がったのではないかと考えられる。このような混同した表現が『秋田「祭り」考』⁽²⁵⁾などにも影響を与えている。

また、万灯会(万灯供養)の「万灯」が春彼岸のマトビ(万灯火)の「由来である」とする文章も多く、中世以降に庶民にも広がった「貧者の一灯」の教えなどとも関係づける文書もあるが確証があるものとはいえない。

山岳信仰とマトビ 次は「房住山修験僧の布教する信仰の形が、このようなまどび」を作

り上げてきた(福岡龍太郎「春彼岸のまどび」二〇〇七)⁽²⁶⁾という説についてである。

阿仁地方近隣の信仰の山というと、太平山や森吉山、七座山などが上げられるが、上小阿仁村境の西側に位置する房住山もそうである。太平山、森吉山、房住山は、修験者が多く集まる山として知られていた。修験者は、森羅万象に命や心霊が宿るとして、山に籠って修行を行った。この山岳信仰と天台や真言密教が習合し修験道となったとされるが、修験者達は、近世になると里に降り檀那場を持った。『合川町郷土のあゆみ』⁽²⁷⁾によると木戸石、

(21) 稲雄次編著『秋田民俗語彙事典』無明舎出版 平成二年(一九九〇)

(22) 旧合川町では、昭和四十七年(一九七二)から、盆に火を焚く行事を町長である畠山義郎氏の発案で始めた。異例であるがこれもマトビという行事名としている。

(23) 西角井正慶編『年中行事辞典』東京堂 昭和三年(一九五八)五月三〇日

(24) 柳田国男監修『総合日本民俗語彙』第一巻 第四巻 平凡社 昭和五二年(一九七七)

(25) 飯塚喜市『秋田「祭り」考』無明舎出版 平成二〇年(二〇〇八)

(26) 福岡龍太郎「春彼岸のまどび」『史友』第三〇号記念号 合川地方史研究会 平成一九年(二〇〇七)十一月

(27) 合川町役場『合川町史 郷土のあゆみ』秋田県北秋田郡合川町 昭和四一年(一九六六)三月 一六六―一八頁 二二〇―二二二頁

下杉、上杉、道城、羽根山、李岱、芹沢、根田、三里、鎌沢などの一〇集落の検地帳、郡邑記、村要用記、家系図などに修験者が確認できる。確認できた年代は、芹沢、三里、鎌沢では、一七世紀末に、他村は一八世紀末から一九世紀半ばである。

『上小阿仁村史 通史編』⁽²⁸⁾によると上小阿仁村の修験者は、江戸期に四院が確認できる。沖田面の友倉山大教院(高倉氏)、杉花の七倉山宝蔵院、小沢田の愛宕山源竜院(佐伯氏)、福館の八幡山明応院(矢旗氏)⁽²⁹⁾である。この内、明応院(矢旗家)の由緒によると、元禄年間(一六八八～一七〇三)まで、板碑の残る下五丹沢の八幡神社に隣接する屋敷に居住し、その後、福館に居を移している。このように修験者の活動が庶民生活の身近な所にあったことがわかつている。

近世初期に佐竹氏が入封すると修験者は藩の宗教政策の影響で、曹洞宗に転宗したものも多いという。現在では曹洞宗だが、元々は、天台・真言密教や修験寺院だった例を上げると次のようになる。

旧鷹巣町坊沢 永安寺⁽³⁰⁾

開創は慶長十年(一六〇五) 草創期は真言宗系の修

験寺院。後に曹洞宗に改宗

旧合川町上杉 大平寺

中世、金沢村の寒相寺(真言宗)であったが、寛永二

〇年(一六四三)に曹洞宗に改宗以後大平寺と改名

旧下小阿仁村鎌沢 正法院

山本郡田代村白津山の麓にあった修験寺院。三里村地蔵岱に移転しその後鎌沢に寺堂を移し曹洞宗とな

る。

これら修験の宗教的行事の中にあった「火を焚く行事」が、春彼岸に山や墓地で「ホラガイ」の合図で火を焚き、祖霊を招き、慰め、送る行事に繋がってきたのではないかと推測されている。

山に宿る先祖の霊

上杉にある太平寺の前住職、亀谷健樹氏は「秋田県北部は豪雪地帯であり、冬の間、何もできず、来る日も来る日も雪掻きをして過ごすしかないが、春彼岸がきて、雪に埋もれた墓を掘り起こしたとき、顔を出した地面に、新芽が芽吹いていると単純に嬉しいんです。マトビが終わると農作業も本格的に始動するし、こういう自然と向き合う気持ち、春彼岸に火を焚く行事に繋がっているのではないだろうか」と話された。

阿仁地方を含む米代川水系の信仰の山をあげると図1のようになる。この地域は、農業や林業、鉱業などの盛んな地域でありその源が山であった。山は稲作に必要な水の源であるほか、生活の糧を与えてくれるので古くから崇拜され、そこに住む人の信仰の対象になった。

冬、水(雪)を溜め込んだ山から「山の神」が、春になると里に降りてきて、「田の神」となり、豊作をもたらしてくれると信じられた。地域ごとに「神の山」があり、肉体を離れた霊魂は祖霊となって山に登り住むという觀念がある。死んだ人は一端山に行ってから、一定の年月が過ぎると浄化され、祖霊となって高山に昇ると考えられた。図1にあるような太平山や森吉山などの秀麗な山が信仰の対象となったが、各集落にある低い山(二〇

(28)

上小阿仁村史編纂委員会『上小阿仁村史 通史編』上小阿仁村 平成六年(一九九四)十一月三〇日 一五〇～一五二頁

(29)

矢旗家の末裔は現在、神主として福館に住まっている。

(30)

佐藤喜美男「お寺巡り 坊沢 桐沢山 永安寺」『鷹巣地方史研究』鷹巣地方史研究会 平成三年(二〇一一)

(31)

太平山は、阿仁地方の南部に位置し、標高一、二七メートルある。古くから薬師の峰、修験の山として信仰を集めてきた。太平山三吉神社には、大己貴大神・少彦名大神・三吉霊神が奉られている。

太平山周辺には、秋田杉やブナ林の樹海が広がり、旭川・太平川・岩見川・九舞川・小阿仁川などの源流でもあることから、里に暮らす人々に自然の恵みをもたらす山として信仰された。

○メートル以下)でも自分たちが住んでいる集落が見渡せる山であれば十分信仰の対象であった。

人々は、信仰の山に向って祈り、無病息災や五穀豊穡を祈願しそれをよりどころに暮らしてきた。旧合川町や上小阿仁村では、マトビが焚かれる集落近くの山に太平山神社や祠を祀り、「太平山」と呼ぶ集落も多く、旧森吉町の小又川沿いでも同様である。太平山は古くから薬師の峰、また修験道の聖地として信仰を集め、江戸末期から明治にかけて流布していった。太平山三吉神社に祀られている三吉霊神は郷土の神として親しまれる。

また、太陽に対する信仰としても春彼岸は重要である。彼岸には太陽が真東から登り真西に沈む。太陽の沈む西には、極楽浄土があると信じられ先祖供養と結び付いてきたと言われる。吹雪の季節が終わり雪を溶かしてくれる温かな季節がやってくる春彼岸は、秋彼岸より特別であった。それが、春彼岸に火を焚く行事を伝承させてきたというのが地元の人々の素直な気持ちであろう。

次に文政七年(一八六〇)に書かれた菅江真澄の『房住山昔物語』の中にある「梵字宇山興立の記」の一説に「小阿仁マトビの起源」があるのではないかと記している報告が多いので、その説について報告する(福岡龍太郎「春彼岸のま

とび」二〇〇七)。

「然るに其大供養の場所は、本山より沢を隔て東南の山中、東下りの野原あり。阿仁沢の施主等が其願ひには、当山の開基の時も、高倉長者は大檀那の数なりといえども、末世其証も見えず。然れば此度の施主、我々

の中にも長者が末大方一門の類ひなる間、其地藏尊を阿仁沢の方へ向テ御建立下されたとしと申故、実と思自召其人々の願ひに任せ、かの処へ御建立ありしとぞ…」

この一説によると、將軍坂上田村麻呂の軍勢により征伐された蝦夷首領長面三兄弟とその一派の大供養の場は、「本山より沢を隔て東南の山中、東下りの野原あり」とあるが、「この処」を房住山からみると、上小阿仁村大林の奥、「上大内沢上流域」と推測している。房住山にあった多数の坊の大施主であった高倉長者の裔を含めた人々が、崇りを怖れ「其地藏尊を阿仁沢の方へ向テ御建立下さい」と願ひ出ると、大供養の場に御建立下された」としている。実際にそういう場所が確認されている訳では無く、先祖供養とも無関係であり、松明を焚いたという記述もないのだが、この建立された「地藏尊」に向って、人々は供養の松明を点したのが始まりではないかと推測されている説である。

これは伝説であり、マトビとの繋がりも希薄であるが「阿仁地方にマトビが残った訳」に拘ると気になる伝説である。

無縁仏とマトビ

沖田面の山田慎八郎氏(当時八〇歳)が、「マトビは、天明、天保の飢饉で亡くなった多くの無縁仏を慰めるものであったというのが周知の事実である」と語っている新聞記事(秋田さきがけ新報二二〇〇八・三・二〇)がある。秋田県北部では、天明、天保の飢饉によって多くの人が亡くなった文献が多く残されている。天保の飢饉で死人が多く出たのは、旧鷹巣町坊沢で、『坊沢郷土誌』によると、餓死、病死



〔図-8〕天保八年・「天保凶飢見聞録」



〔図-7〕天保八年・「天保凶飢見聞録」

を含めて、八八二人、当時の人口は千二百人であり、実に七三%の減少であった。原因は集落で流行した疫病のせいであった。坊沢村の永安寺には飢饉で亡くなった人々の慰霊塔が立っている。また、七日市村の龍泉寺の過去帳調べによると天保五年（一八三四）一年間で、二九三人がなくなっている。これは、村人口の二六%に当たる。天保八年（一八三七）に長谷川伊右衛門によって記された『天保凶飢見聞録』⁽³⁴⁾では天保の飢饉の様子が描かれているが、倒れた馬の上にかぶりついて生肉を食い、行き倒れとなった死体を狼や鳥が食いちぎっている。

『上小阿仁村史 資料編』によると「福昌寺過去帳」の天保四年（一八三三）の凶作記録に、沖田面村では、福昌寺の檀家が半分も死んでしまった。寺に届け出のない人達も入れると大変な数になると記し「実ニ未曾有之事ニ御座候」とした文書記録が残っている。常光寺と福昌寺の過去長からは、天明四年（一七八四）には小沢田村の四五戸中二七戸が、さらに天保五年には同村の四五戸中三〇戸から葬式が出ていることが分かっている。

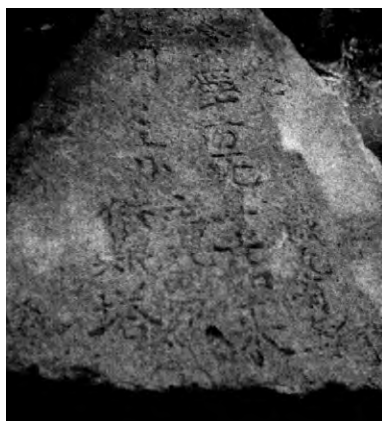
東洋大学民俗研究会『上小阿仁村の民俗』昭和五四年（一九七九）の春彼岸の項では、南沢、中茂、八木沢^{なかも やぎさわ}は無縁墓に先に供え物をする^{なかも}とあり、どの集落も無縁墓には必ず参るといふ。また、旧二ツ井町では、「小さい時に寺に行き、春彼岸の墓参りをすると、戊辰戦争で遠く佐賀からきて戦死した兵士や無縁の墓にまづ参るように言われた」という話を聞いた。旧鷹巣町の綴子や坊沢は戦場となり、集落を焼失するなど被害も大きかった。⁽³⁶⁾

また、阿仁六銅山があった旧阿仁町の山々には、無縁

墓がたくさんある。戸島チエ『鉱山と生活』⁽³⁷⁾「平成七年（一九九五）」の中に、昭和五二年（一九七七）秋に小沢鉱山七十枚墓地に調査に入った時の文章がある。「小沢墓地は、選鉱場建設に伴い用地とされ、鉱山墓から掘り出した遺骨を七十枚山上に移し変えた墓地であった。墓地は杉林の中で雑木に埋もれた石盛り墓であった。これらの墓は全て無縁仏の墓であった。山上には、供養塔（小澤墓地改葬供養塔と刻字されていた）が立っていた。裏には「大正二年六月四日改葬供養」とあった。また、阿仁小沢鉱山と三枚鉱山の分岐点に「天明の大飢饉の供養塔」が立っていた。石碑には、「歸命尽十方無量光如来 餓死病死 有無 両縁供養」と記してあった」といふ。

山の上には、鉱山で亡くなった人ばかりではなく、天明の飢饉などでなくなった多くの人々の墓があるという。『鷹巣町史 第一巻』によると、飢饉で食べ物に困った人々の中には、鉱山に労働者として職を求めて移動した人々も多数いたと記している。しかし、この年、阿仁銅山では、稼人が四散し、出銅は皆無だったという。

図10の「阿仁銅山六ヶ山——社地、墓地、火葬場」⁽³⁸⁾は江戸初期から盛況であった、小沢鉱山、萱草^{かぐさ}鉱山、真木沢鉱山、三枚鉱山、一之又鉱山、二之又鉱山の山の中にある社地、墓地、火葬場の分布図である。銅山は標高五〇六〇メートルの山の上にあり、それぞれの山には、お台所（役所）、床屋（製錬所）、間歩住宅、坑夫長屋などが立ち並び賑わっていた。ここには、多くの渡り坑夫も住み、仕事柄、病死、落盤、火災などの事故も多く短命のものも多かったという。鉱山は江戸初期に大坂の商人



小沢と三枚鉱山の分岐点に立つ天明の大飢饉の供養塔

(32)

内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集 第十一巻』（株）未来社 昭和五五年（一九八〇）

(33)

鷹巣町史編纂委員会『鷹巣町史 第一巻』鷹巣町 昭和六三年（一九八八）三月 三五〇～三五八頁

(34)

上小阿仁村史編纂委員会『上小阿仁村史 通史編』上小阿仁村 平成六年（一九九四）十一月三〇日 二五八～二六五頁

(35)

上小阿仁村史編纂委員会『上小阿仁村史 資料編』上小阿仁村 平成五年（一九九三）一月三〇日 二五四～二五五頁 資料 No.131

(36)

鷹巣町史編纂委員会『鷹巣町史 第一巻』鷹巣町 昭和六三年（一九八八）三月 三七二～三七五頁 戊辰戦争

(37)

戸島チエ『鉱山と生活』平成七年（一九九五）十一月二頁・一五～一六頁

(38)

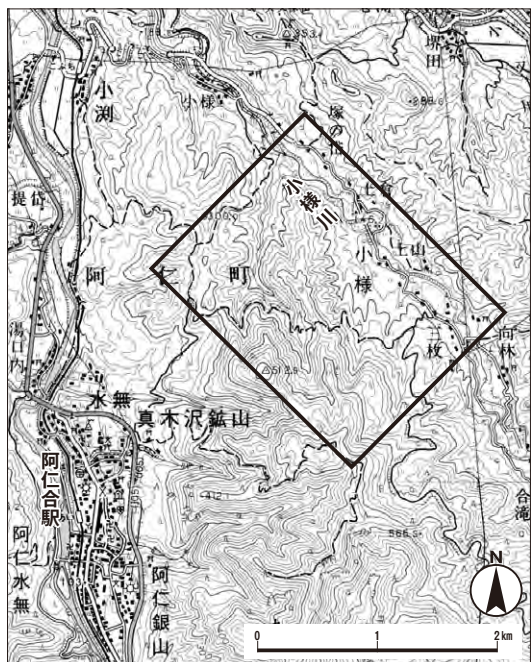
阿仁町史編纂委員会『阿仁町史』阿仁町 平成四年（一九九二）一〇二～一〇五頁

達の請負山から始まり、藩の直営の時代を経て稼動し続けてきた。山の暮しの一面が見える。

図10は昭和五七年（一九八二）に吉田栄一氏（故人）が古図を元に書写したものであるが、内容は江戸末期の様子だという。前述したように、山には、山の神、地藏様、二三夜様、庚申様、愛宕神社、太平山などの信仰されていた神社や祠が多くあり、火葬場や墓も数多くある。坑夫同士が立てた友子の墓や隠れキリシタンの墓なども確認できないくらい多いという。

このように様々な歴史の中の無縁仏もまた、その時代、時代のマトビで慰める対象であったとも考えられる。集落単位で山の上で火を焚くと言うマトビの意味は、各家の先祖の霊を迎え、慰め、送るだけでなく、古くは、もっと広い意味があったのかもしれない。

〔図9〕図10、「阿仁銅山六ヶ山」（部分）のガイド図（枠部分）



〔図10〕「阿仁銅山六ヶ山」（部分） 昭和五七年六月 書写・吉田英一（原本所有者 加賀谷広） 阿仁伝承館所蔵



【第二章】 マトビの現状

一 伝承の体制

(一) 行事の担い手

担い手の変化

マトビの担い手は、元々、一五、六歳から四二歳で組織された若勢団^{わかぜ}であったという集落もある。一〇〇〜二〇〇メートル以上の山でマトビを焚いていた旧森吉町の巻淵^{まきぶち}や鹿角市の小豆沢、上小阿仁村の小沢田^{こさわだ}、旧合川町の三木田では、若勢団や青年会などの大人が中心だったという。高さ三メートルほどもある仕掛けを作る阿仁町の根子^{ねこ}、上小阿仁村の大^{おお}林^{ばやし}では、墓前や田で焚いたが、昔は子供がするような事はなかったという。旧合川町のマトビ資料^{わかぜ}にも、元々は若勢団が関わる行事であったが、戦争で若勢団がいなくなり、また、昭和三〇年代(一九五〇)から四〇年代(一九六五)に、若勢団が解散した集落もあって、子供達ができるようになったと書かれている。

今回の調査では、聞き取りなどから、大正末期または昭和初期からの状況が主になった。昭和一〇年代(一九三五)から戦後すぐは、小学三、四年生から高等科の男子で行なったという集落が多かった(末尾資料表一2参照)。かつては女子が行うと穢れると言われ、マトビは男子だけで行うものだった。

昭和三〇年代になると、戦後のベビーブームも手伝い子供の数も多かったため、小さな集落では、小学校の中・高学年から中学三年生までの男子が、そして大きな集落や山の上でマトビをする集落では、人数が多いため、中

学生の男子だけが雪山に入り、材料の雑木や松脂を調達し、集落を回って藁や米、協力金を調達した。さらにカマクラ(マトビ小屋)という作業小屋を作って、様々に工夫しながら仕掛けを作りマトビを行い、そういうことが子供達を成長させた。

巻淵や三木田のように、高い山で行なう場合は、子供にはさせず、現在も大人が行っている集落もあり、そういう集落では、子供のマトビは、平地や台地で別に仕掛けを作って行われてきた時期もある。同じく高い山の上で焚いた下五丹沢は、昭和一〇年代から若勢団が手伝いに入り、下仏社のように昭和二〇年代(一九四五)から昭和四〇年まで、若勢団が子供の手伝いに入っていたところもある。昭和四〇年代後半になると、ほとんどの集落で子供の数が減り始め、親が手伝いに入るところも出てきた。旧合川町の鎌沢では昭和六一年(一九八六)まで、中学生だけで行っていたが、その後各集落とも若勢団や、青年会、自治会役員などが担い手になっていった。現在は、組織名は、若勢団、青年会だが、五〇〜六〇歳代前半が中心になっており、集落によっては、この青年会や若勢団OBや有志が組織名を変えて活動している。上小阿仁村堂川^{どうかわ}の「愛宕会」、小沢田の「壮和会」、旧合川町新田目の「親和会」などがそれに当たる。また、さらに高齢者は、老人クラブ、寿クラブの名称で、ダンポ作りと取り付け準備の役目を担っている。ダンポは、集落の全戸に個数を決めて協力してもらうことも多く、全集落を上げて行っているところも多い。

三木田では「万灯火保存会」を作り、この会の中に、

(39) 上小阿仁村史編纂委員会「上小阿仁村史通史編」平成六年(一九九四) 八四八〜八四九頁

明治二年(一八八九)に、ほとんどの部落で青壮年層の人々が若勢団を形成した。若勢(ワカゼ)とは、若者、青年を指す言葉であり、住み込みの奉公人を指す労働関係用語でもあった。当初の年齢範囲は一五〜四二歳で、奉公人も入っていた。集落の都合により年齢範囲は様々であった。

主たる活動は、集落境の警備、マトビ行事、相撲大会、盆踊、獅子踊、ネブリナガシ、山の管理、災害防備、消防、風紀取締り、奉仕作業、植林や畑作の労働であった。地主制の解体、青年層の流出、サラリーマン現象などにより、若勢団は昭和三〇年前後に消滅した。

青年会と年齢範囲

明治二八年(一九九五)には小沢田に青年会、また、大正五年(一九一六)には小沢田、沖田面、仏社に、三学区を支部とする青年団ができ若勢団と並列的な関係が続いてきた。戦後は青年会や青年団の名称で他集落にも増加した。年齢範囲は中学卒業(二五歳や二〇〜三〇歳など集落状況により様々であった。若勢団と並列して存続していた集落もあったが昭和三〇年代後半から四〇年代までに消滅した。若勢団と青年会の復活

昭和四〇年代後半から五〇年代にかけて、若勢団や若勢会、青年会、青年団など集落ごとに様々な名称で復活し、伝統行事の保存、リクレーションなどの役目をもった。

復活した若勢団(会)の年齢範囲は一八〜四二歳が最も多いが、若者が少なく、沖田面は二〇〜四五歳まで、長信田、大阿瀬、福館は一八〜四九歳や五〇歳代までとなる。青年会も同様に過疎化と高齢化により、年齢制限が四〇歳代までとなった集落もある。

(40) 「合川まど火」体験学習参考資料「平成十九年(二〇〇七)」



寿クラブがダンボの準備をする（西根田）



摩当では現在子供は二人だけである（魔当）

親子会（小学生と親）、体育協会（高校生から六〇歳以上⁽⁴¹⁾）、少年団（中学生）とその親達が入り、総力で伝承している。三里、摩当なども「万灯火保存会」があり、様々な年齢の人で構成されているが、五〇〜六〇歳代が多くなっているのが現状である。

小田瀬、大海のような小さな集落では、若勢団も少なくなり、郷役といって、各家から必ず一人が作業に参加しないと人員を確保できなくなっている。

カマクラの役目 一〇〜一四、五歳の子供が担い手であった昭和一〇年代や戦後、さらに昭和

三〇年代頃に掛けて、子供達は、マトビを焚く山や台地に、風除けや準備作業を行うための小屋を作った。上小阿仁村の下五丹沢などでは雪で厚み六〇センチ、高さ一・八メートル程の壁を円形や楕円形、四角などに作り、広さは、十数人が入れるものから、五、六人のものまで様々であった（図一58）。屋根を付けないもの、雑木や苔で覆うもの、雪壁を低くし、木材で合掌組の屋根を作り藁や杉葉で覆うものもある（図一65）。これらは集落によりカマクラ、カマ、カマド、ホド、火床、雪城などと呼ばれたが、昭和三〇年代になるとマトビ小屋、小屋などと呼ばれるようになる。カマクラの中央には炉が作られ、子供達が集まって作業や食事などをした。ここで、工具の使い方、苔の編み方、仕掛けの作り方や段取りなどを年上のものから学びながら、マトビは伝承されてきた。カマクラは、旧合川町や上小阿仁村の集落で多く作られていたが、現在は作られることはない。



親和会と役員の反省会（新田目）



準備中の休息（福館）

⁽⁴¹⁾ 旧合川町では、体育協会が昭和五〇年代（一九七五）前半にできた。昭和四〇年代に青年会、若勢団などが消滅していったが、同様の役目を持つ組織であった。しかし、集落によっては、青年会、若勢団の呼名で復活したところもあり様々である。

(二) 運営費の変化

子供達が担い手であった頃は、マトビを焚く前日に糠を引いて集落中を回り、冬囲いに使っていた藁束や米、金銭などを各家から寄付して貰い、藁束は畳屋に、米は魚屋や田畑のない家を買ってもらい、現金に変えてマトビの運営費にした。また、子供達のための菓子や飲み物などや学用品なども買った。集落によっては、鯀を一人一匹ずつ買いマトビ小屋で焼いて食べたところもあった。元々マトビの仕掛けや材料は、雑木やハザ木、藁、松脂で、金銭が必要ではなかったが、マトビが終わった後、トウマエ(宿)で行われる遊山(慰労会)の経費や食材として、米や金銭が使われた。寄延のように、マトビを焚いた翌日、子供達が集落中を回り寄付金を集めて、遊山の経費にした集落もある。

このやり方は、大正、昭和初期から昭和四〇年頃も変わらず、子供が主体で行っている時には、集落の各戸が協力した。旧森吉町の浦田では、現在も小学三年生から中学三年生で運営しており、集落を回り、五〇〇円の協力費を集めている。

マトビの仕掛けが、ダンポや缶に変わってからは、灯油代や、針金代などに経費が掛かるようになった。

現在は、旧合川町の六集落は、各戸から千円ほどの協力費を集めているが、三木田、摩当、三里、大内沢などでは、それ以外に集落が補助費を出している。東根田、杉山田、新田目、旧森吉町の巻淵などでは、集落の補助費だけで賄っている。八幡岱では、任意で各戸に二千元

ほどの協力費を募り、それを運営費としている。

上小阿仁村の一六集落については、昭和五六年(一九八一)から村が各集落に補助金と灯油を支給するようになった。平成二五年は、補助金一万八千円と灯油一七〇リットルが現物支給された。小沢田については、最後のイベント会場でもあり、仕掛けが大きく協力者数も多いことから、七万円の補助金と灯油が現物支給されている。村からの補助金だけで賄っている集落もあるが、集落内の各戸に金額を決めて協力金をお願いしているところも多い。金額は、五百円から千円ほどである。

これらの運営費は、ダンポ作りや仕掛けに使う針金代、灯油代、ナイロンの袋、単管の補充、子供用の菓子、反省会の料理や飲み物代などになる。

二 マトビの形態

(一) 様々な仕掛け

藁からダンポや缶へ 現在、マトビが現存している集落の多い小阿仁川上流の上小阿仁村、

下流の旧合川町についての仕掛けの変容を見ている。大正期から昭和初期にかけては、材料は山から伐ってきた小径木と藁であり、当初は、さほど高く藁を積上げたりはしなかったようである。一〇〇三把ほどの藁束を縛り、尾根に多数並べて焚いたり、それを二段に積重ねたり、それらが風で飛ばされないように、一・五〜一・八メートル程の芯棒の周りに藁を縛ったりする程度だった。

【芯持藁積三段以上型の作り方(新田目)】
藁をしぼり「ツナギ」を作る



藁束三把の末を折り、ツナギで縛りまとめる



一段目からツナギで芯棒(鉄棒)にくくり付ける

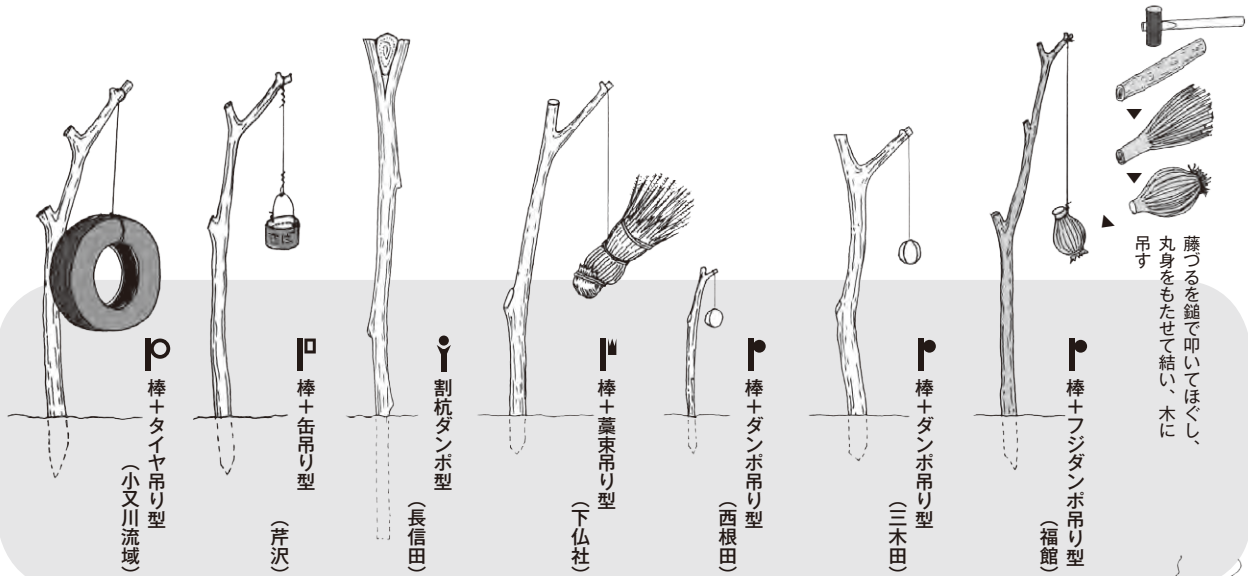


三段目を芯棒(鉄棒)にくくり付ける

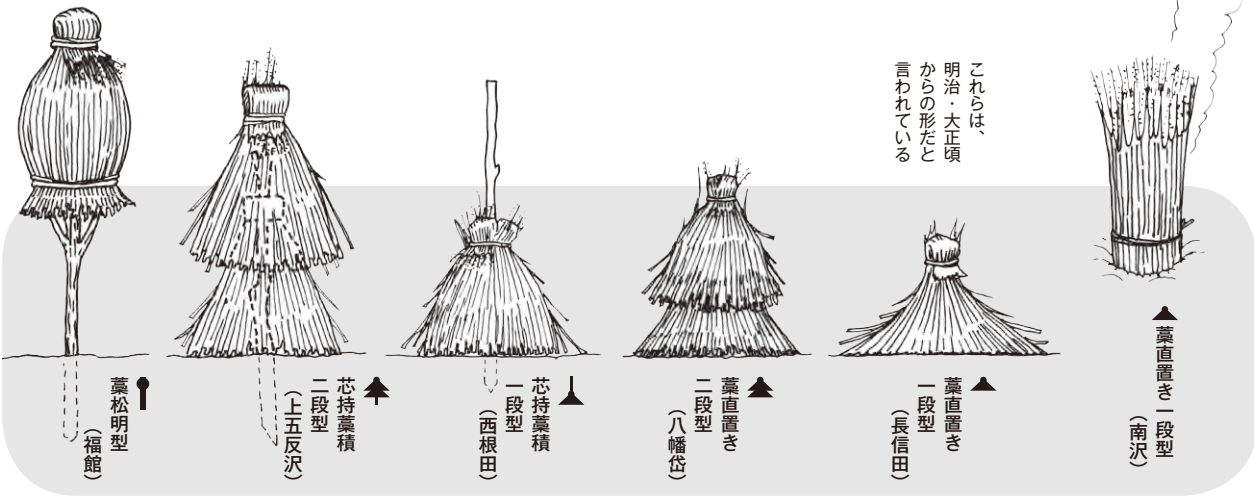


〔図-11〕戦前戦後のマトビの仕掛け一覧

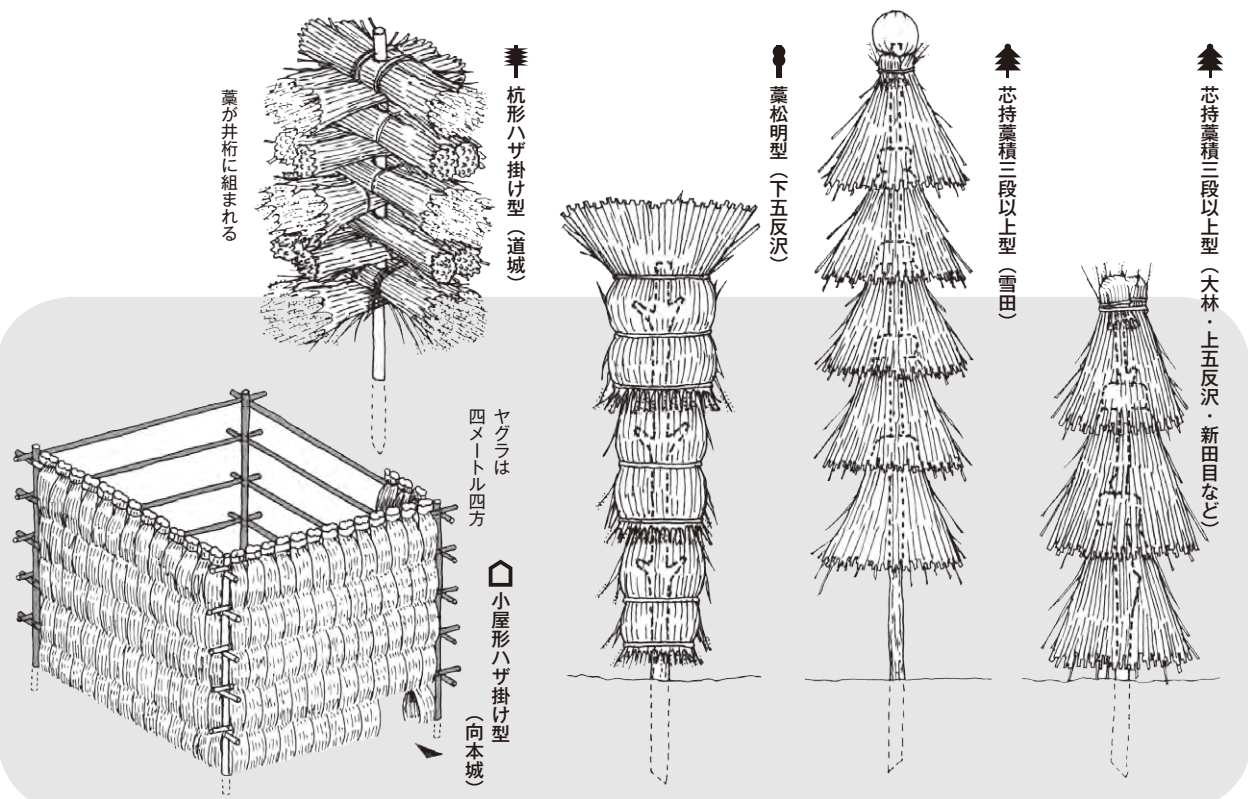
〔棒マトビ（吊）〕



〔藁積上型マトビ（古いやり方・試しマトビでも使用）〕



〔藁積上型マトビ（戦中から昭和三〇年代）〕



〔図-12〕 ダンポ作り

〔布巻き型〕

断裁した布を巻き固めていく

〔軍手利用型〕

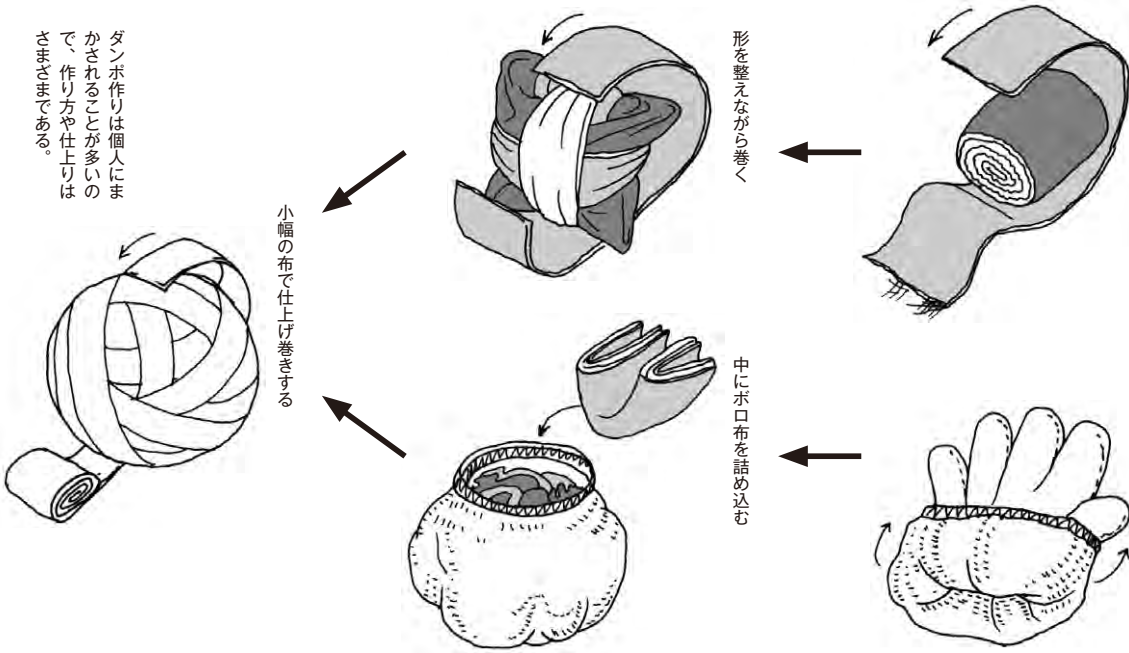
軍手を裏返す

形を整えながら巻く

中にボロ布を詰め込む

小幅の布で仕上げ巻きする

ダンポ作りは個人にまかされることが多いので、作り方や仕上りはさまざまである。



その後、昭和一〇年代（一九三五）になると、上小阿仁村では、「ケン（剣）」とよばれる上部が又になった雑木に、布を玉にし針金で縛った「ダンポ」を吊して雪上に差した。布玉には松脂を包んだり、廃油で湿らせたりした。これは、大正一四年（一九二六）にできた沖田面の営林署の機関庫から貰った布と廃油を利用して作り出した物で、他集落にも伝わっていったという。当初は灯油が入手困難だったため松脂を使ったり、藁束を積上げたものと併用して燃やした集落が多かった。

戦中戦後は、灯油をはじめ、物がなかったから、藁束を利用する形に戻り、各集落とも雑木と藁で様々な工夫をして燃やした。長信田のように直径六〇センチの丸太を四割りし、松脂を混ぜて作った布玉を挟んだ物も使われた。ケンには、藁束や藤の木の皮を乾燥させて束にしたものなどを吊して燃やした。

これ以後、昭和二〇年代（一九四五）後半から三〇年代（一九五五）にかけて上小阿仁村と旧下小阿仁村（旧合川町）では、仕掛けの形は多少違ってくる。上小阿仁村の方は、芯棒を二メートル以上まで高くして藁束を何段にも積上げる形が多くなり、旧下小阿仁村の方は、雪田のように藁を高く積上げる形の集落もあったが、上部が又になった棒に、ダンポか缶を吊した物を、尾根沿いや高台に多数並べて差して燃やした。

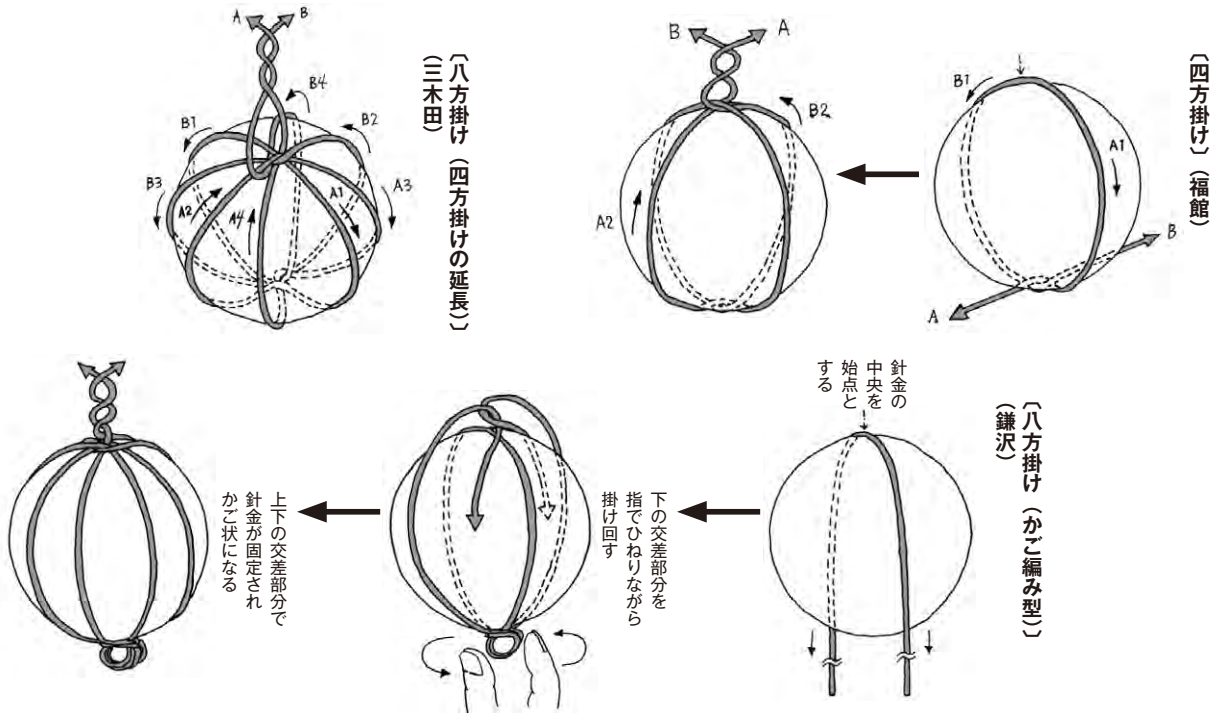
昭和三〇年代には果物の缶詰なども集り易くなった。缶の中に叩いて柔らかくした布と松脂を混ぜた物を入れ、灯油を少し入れた物を吊して燃やす集落も出てきた。

また、阿仁川沿いの道城、旧森吉町の向本城や浦田な



ダンポの中味

〔図-13〕ダンポ作りの針金掛け



どでは、小屋形ハザ掛け型の仕掛けを作り燃やした（図-11）。小阿仁川沿いの鎌沢、小田瀬では、子供達の作業小屋だったカマクラ（マトビ小屋）を、シマイ彼岸に、南沢では中日に燃やした。

昭和四〇年代（一九六五）半ばに入ってきたコンバインによって稲藁は細かく裁断されて使えなくなったことで、一気に仕掛けは変化した。灯油も容易に手に入るようになり、主流はダンポになった。しかし、新田目のように平成一五年（二〇〇三）まで藁を使っていた集落もある。ダンポの使用が定着してくると、「中日」や集落名などの文字マトビや、車マトビも増加していった。

旧森吉町の阿仁川沿いや小又川沿いの集落、阿仁町などでは、高さ三メートル以上に藁、豆ガラや杉の枝葉を円錐形に積上げ、山に多数立てて燃やしていた。この地域でも藁がなくなった昭和四〇年代（一九六五）後半から五〇年代（一九七五）にはやめてしまった集落もあるが、小又川沿いの桐内沢^{きりないざわ}、森吉などでは、昭和五五年頃（一九八〇）以後も杉の枝葉を積上げたものや又木にタイヤなどを吊して燃やした。

最近では、各集落とも高齢化が進み、ダンポから手間のからない缶を利用する方法に変更する所もでている。

マトビを焚く場所

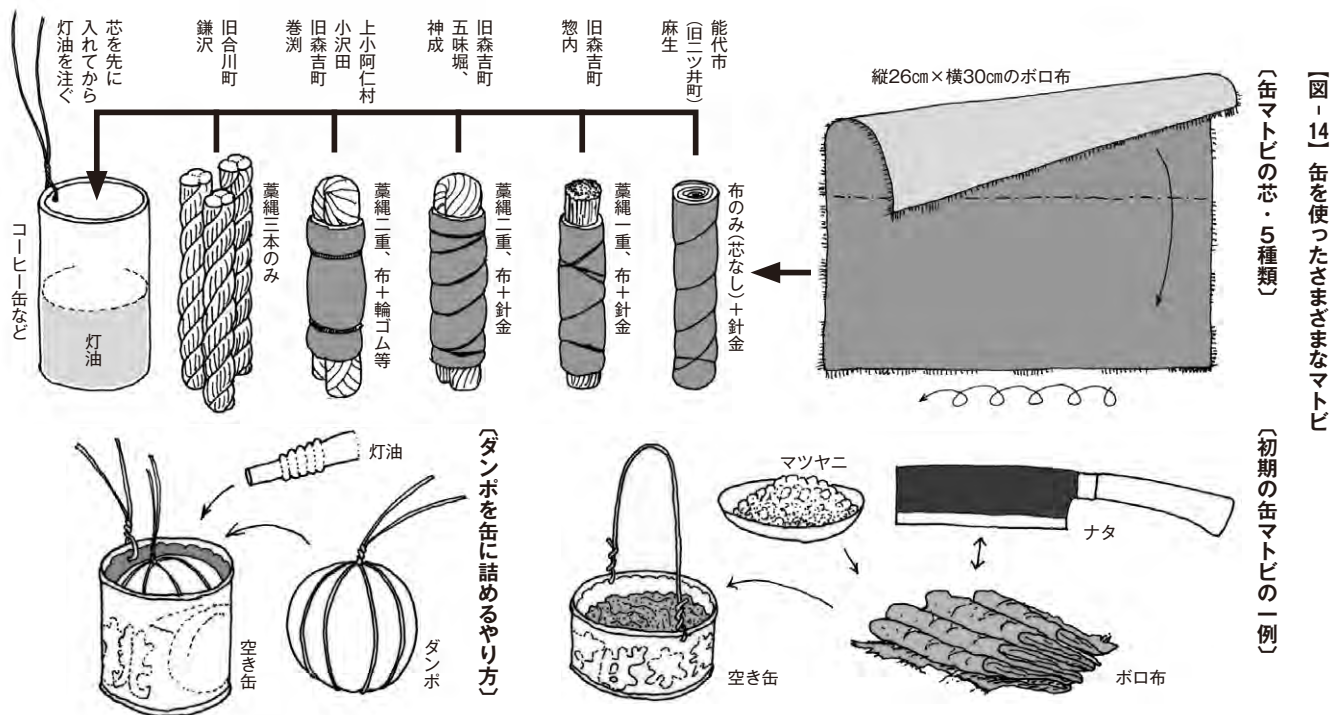
仕掛けが変わるだけでなく、マトビを焚く場所も変化した。図-14を見ると旧合川町と上小阿仁村、旧森吉町の阿仁川沿い、そして小又川、小様川沿いの集落は、それぞれに信仰の山があり、その山でマトビを焚いていたことがわかる。例を上げると、三木田、西根田、羽立、堂川、中五反沢、



灯油をしみ込ませたダンポにビニール袋をかけ、雨をさける。袋ごと点火する（向本城）



布を巻き固めてダンポ作り（下仏社）



下仏社などのように集落近くに太平山を祀っていたり、小又川沿いでは、巻淵のあたご様、森吉には太平山と呼ばれる形の良い山がある。その山から田や川原、土手にマトビの場所を変えた集落が多い。

どの集落も、現在は多数の子供達や若者達がいた時代と違い、五〇〜六〇歳代が中心となっており、高い雪山に材料を上げ、仕掛けを作るのが大変になり場所を変えつつある。また、防火についても昔より厳しくなっている。上小阿仁村では、昭和五十六年(一九八二)から観光用のマトビがスタートし、マトビの見学バスを運行し始めたことから、バスの走る道から良く見える場所に変更した(第三章各集落図参照)。

(二) 焚く物の作り方

ダンポの作り方

ダンポは藁よりも長く燃え、燃え方も「火の玉」のようで、祖霊を迎え、供養し、送るのに適していると感じる人も多く、使われるようになった。

木綿で玉を作ると最も良く燃えるが、最近は化繊や不燃などの布も多く、玉を作っても燃え上がらず、解けてしまう物もある。図12の下部のように、木綿の軍手を裏返し、その中に化繊や木綿の端切れをギュウギュウに詰め込んで直径一〇センチほどの布玉を作る。丁寧なところは、さらに木綿のシャツなどを裂いたもので固く巻いて針金を掛けていく。また図12の上部のように端切れを少しずつ巻いていき、布玉を作り上げる場合もある。端切れは縫製工場などから融通してもらおう集落が多いが、

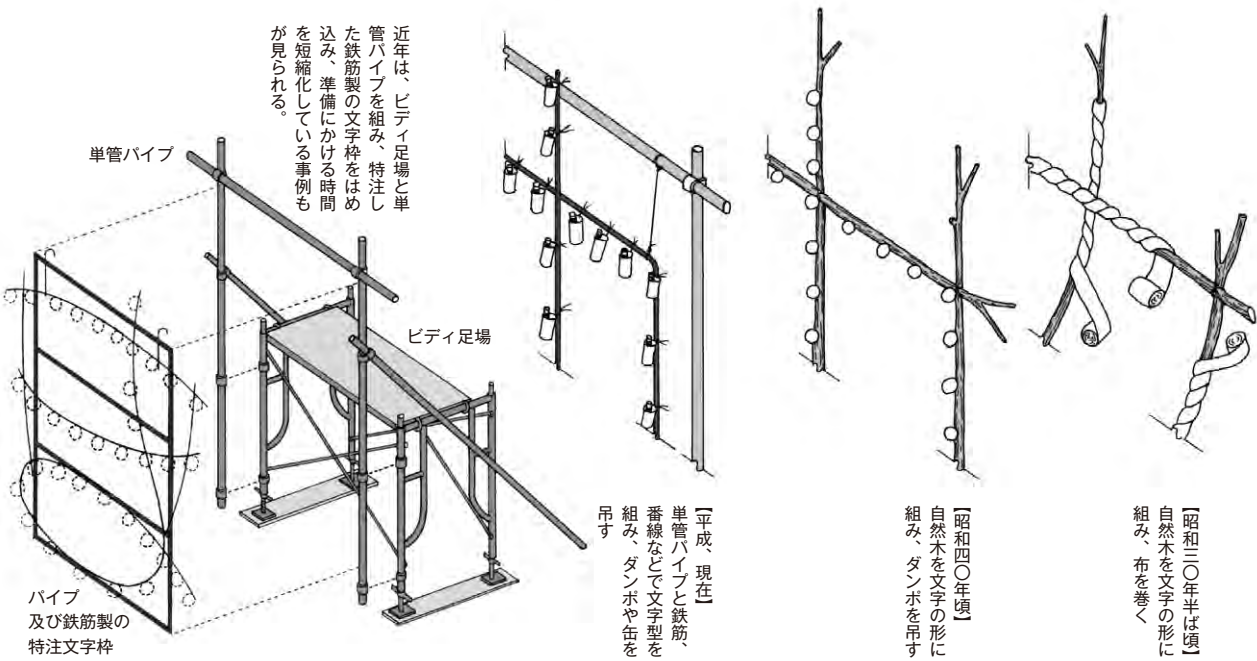


勢い良く燃える缶マトビ(巻淵)



タイヤを吊したマトビ(ダム移転以前の森吉)
ダムに沈む「その」モリトピア遺構、建設省東北地方建設局より

【図15】さまざまな文字マトビ



古い軍手を集めておき、足りない分は買い足している。

針金は一メートルほどの長さに切って十字にかけ、上部で締め、五〇〜六〇センチの吊り手部分を作る(図13参照)。しかしこの方法は針金の締め具合が緩かったり締め過ぎたりすると、中の玉が燃え尽きる前に落ちてしまう。そこで針金の長さを二メートルほどに切り、図13の上部左の図のように一回目の十字掛けをし、さらに四五度ずらして、二回目の十字掛けをする形で八方に針金を掛けたものもある。図13の下部は鎌沢の作り方で、八方掛けだが、上方も下方も針金の交差部分を締めて籠のような形にする。この方が針金が切れることがなく、玉が燃え尽きる前に落ちるのを、より防ぐことができる。

缶を使うマトビの作り方

戦後は果実や魚介の缶詰なども出回り、空缶が手に入り易かった。当初は、ボロ布を鉋で叩いて柔らかくし、熱を加えて溶かした松脂を布に混ぜて缶に詰め込み燃やした。灯油を少々加えた時もある。缶の縁に穴を開けて針金を通し、吊り手を付け吊して使った。

今回の調査で見た缶マトビは、ビール缶やジュース・コーヒー缶が多かった。縁に穴を開け、針金で吊り手を付けるやり方は同じであるが、缶の中に入れるものと作り方が集落により様々であった。旧二ツ井町の麻生では、横三〇センチ、縦二六センチの布を折り畳み、まるで針金で縛り、灯油を入れた缶の中に入れて燃やす。旧森吉町の惣内、五味堀、神成、上小阿仁村小沢田など多くの集落が、一三〜一五センチの長さの藁縄の周りに布を巻いて縛った物を、灯油の中に入れる方法である。

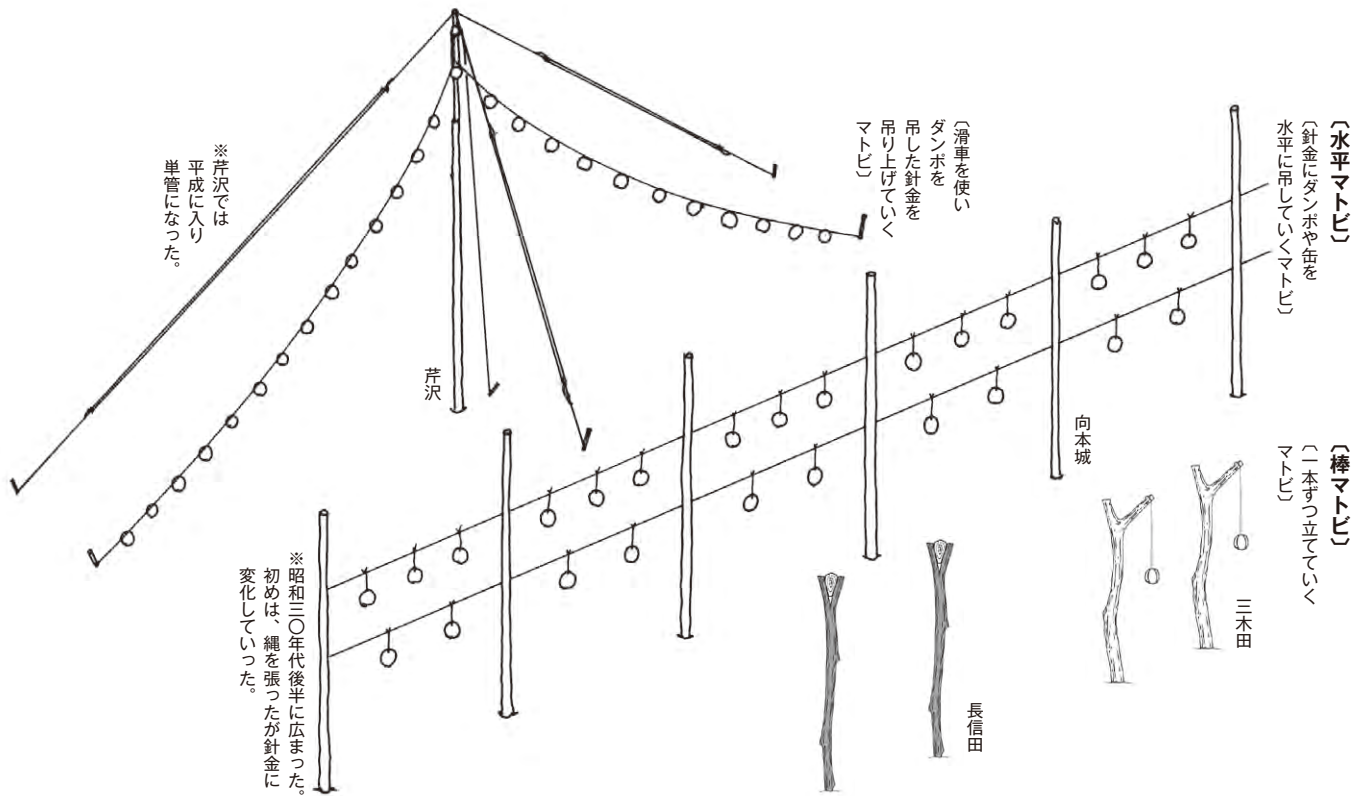


集落に向かって文字マトビを立てる(上仏社)



ダンボを取付けたパイプを立ち上げる(三木田)

【図-16】拡大していくマトビの仕掛け



藁縄を二つ折りにし、布も二重、三重に巻き、針金や輪ゴムで縛るなど様々である。旧合川町鎌沢では藁縄を三本そのまま灯油を入れるだけである。

いずれもダンボより簡単に作れ、燃える時間も四〇分以上と長いことから使い易いが、缶の三分の一半分ほどのところまで灯油を入れることから、灯油もたくさん使い、雨が降ると使い勝手が悪い。また車マトビのように振り回すものには適さない。八幡岱では雨対策として缶にナイロンの袋を被せていた。しかし仕掛け作りの手間としては、ダンボより楽なので、今後さらに工夫をして活用されていくのではないかと考えられる。

(三) マトビ装置と現状

文字マトビ 昭和三〇年代(一九五五)半ば頃から、山から伐ってきた雑木を利用して、集落名を

カタカナで作り、そこにボロ切れを巻いて、灯油を含ませ燃やすようになってくる。芹沢では、吊り手付きの缶に鉋で叩いて柔らかくしたボロと松脂を詰め込んで、雑木で作った文字に等間隔で吊し、文字形を浮き上がらせた。鎌沢や下五反沢、沖田面などでも、この頃から雑木を組みダンボを吊して文字形を作っていた。

上小阿仁村では、昭和四〇年代(一九六五)初めになると、雑木やハザ木を組み合わせて「中目」や集落名などを作り、ダンボを吊して燃やす集落が急増する。その後、昭和四〇年代後半から五〇年代(一九七五)にかけて、文字の仕掛けは、太い針金や単管で形作るようになっていった。この時期には、マトビの場所も山から下りて田

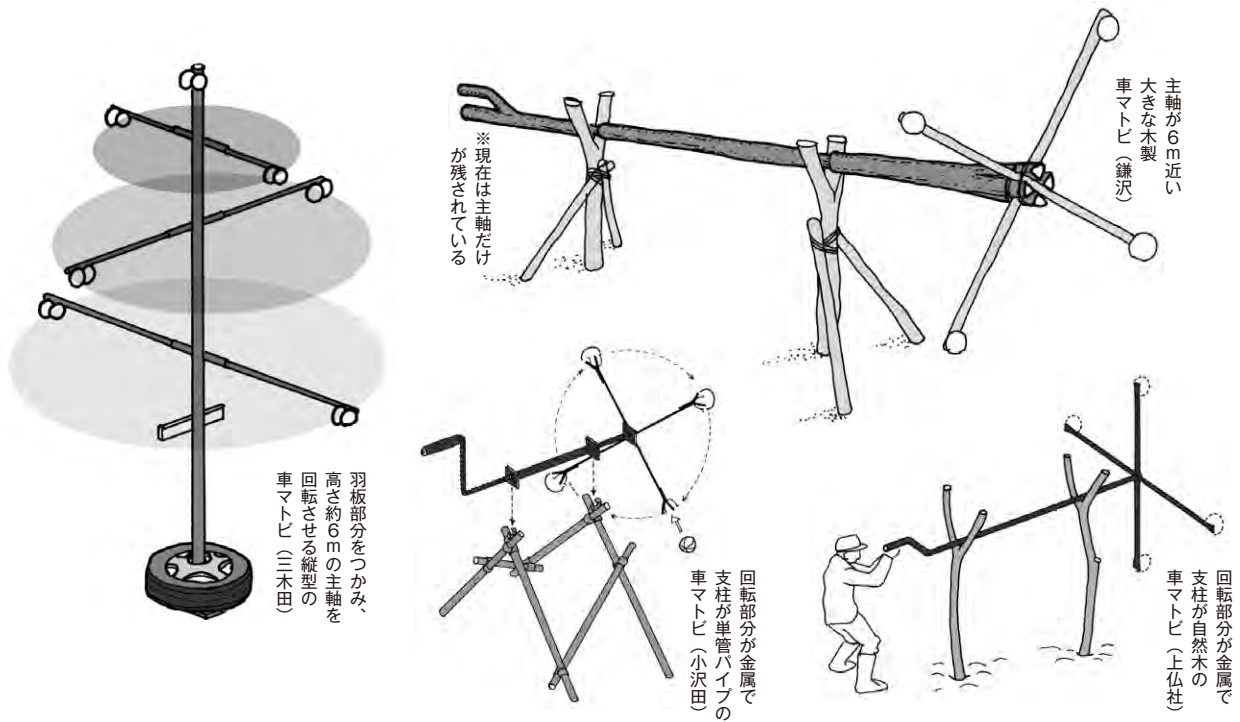


番線を二段に張った水平マトビ(向本城)



番線に缶を吊した基本的な水平マトビ(惣内)

【図-17】さまざまな車マトビ



になったところが増え、文字マトビの仕掛けも大きく派手になっていった。

旧下小阿仁村では、昭和五〇年代から文字を作る集落が増えた。杉山田が昭和六〇年（一九八五）頃から単管を使い始めるが、平成になってから使った集落も多い。

平成に入ると、単管を使う集落は益々増え文字数も増えた。長さ三・五〜六メートルほどの単管を組み、ダンポを取り付けてから、数人で協力して立てる方法のもの、足場付きで単管の枠を組んでしまい、足場を利用して、文字の形にダンポを付けていくものなど様々である。単管の直径は四・八センチのものを利用する集落が多かったが、重量があるため扱いには人数と力が必要である。鎌沢では、鉄筋で文字型の枠を特注で作っており、作業の短縮を計っていた。

また、堂川、東根田のように、傾斜地に太めの針金を低く張って文字形を作り、ダンポを付けていくものや雪の上にダンポを直置きして文字を作る方法もできた。

棒マトビと水平マトビ 昔から尾根沿いや土手沿いなどに、直径三〜四センチ、長さ一・

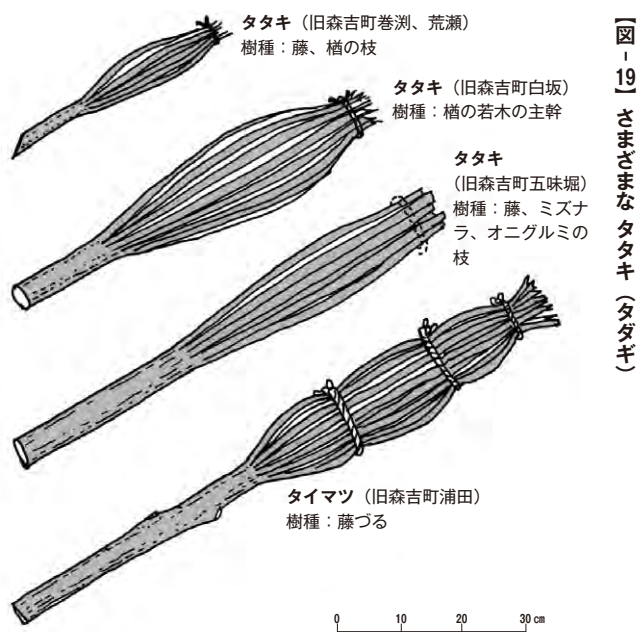
五メートルの雑木を雪上に差し、ダンポや缶、藤の木を乾燥させ叩いて柔らかくし、ダンポ状に縛ったものなどを吊して燃やした。二メートル以上の間隔を空けて多数並べて燃やす。このような形を旧合川町では棒マトビという（図-16下）。この棒を、上小阿仁村では、「ケン（剣）」と言う。これは、高い山で多数のマトビを焚くのに適している。棒も現場で調達でき、どんな地形でも雪の中に差せば燃やせた。また、三木田のように二回点火する集



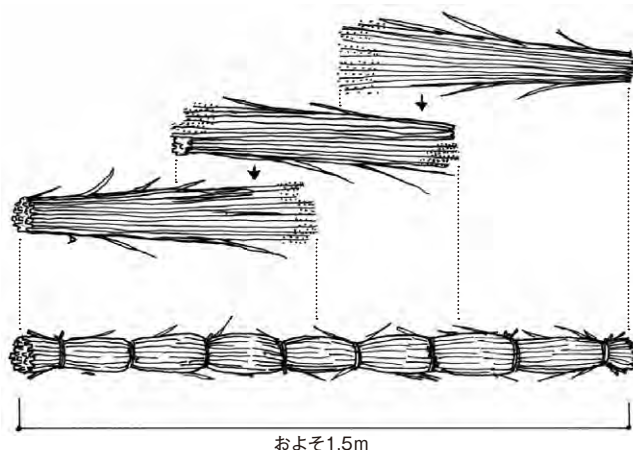
金属製の車マトビ（小沢田）



木製の車マトビ（上仏社）



【図19】さまざまなタタキ (タダギ)



【図18】藁の松明・カスビ (長信田)

落では、同じ場所に五〇センチほどの間隔を置いて二本立てて置き、一本目が終わったら抜いて倒し、二本目を燃やす。この方法は、同じような長さの雑木を多数調達しなければならなかったが、現在は、鉄筋棒に変化している。長さも二メートルほどで上部が、ダンポや缶の吊り手が掛かるように曲げるなどの加工が施されている。一度購入すれば、毎年調達する手間が省けるため、山の稜線や田の畔や川原の土手沿いなど広範囲に多数焚かれている。

水平マトビは、ハザ木などを二、三メートルほどの間隔で立て、そこに太めの針金を張り、ダンポや缶などを吊す方法である(図16中)。初めは縄を張ってダンポを吊したが、針金に変化していった。針金は二段に張られるものもあり、何百メートルにも渡るものもあるなど、仕掛けも大きくなっていった。平地に適した方法であり、ハザ木を利用できたので容易であった。この方法は、水平だけでなく、山の天辺から麓に張った針金を利用して、ダンポを滑り落とす電車マトビや、山形にしてダンポを吊してから滑車を利用して上げたりする仕掛けにも応用された。

車マトビ 上仏社、大内沢では、戦後の落ち着いた時期から、ダンポを利用し、山の木々を集めて工夫して作っていた。芹沢では、昭和三〇年代には使っていたという。昭和五〇年代になると、車マトビを作る集落が多くなった。

直径六、八センチ、長さ一・五メートルほどの真直ぐな丸太を用意し太い方を鉋で四ッ割にする。直径二、三



先を割ってダンポを挟んだ鎌沢の松明



ダンポを数個挟んだ三木田の松明 (北秋田市合川公民館提供)



タタキ（タダギ）を持つ女の子（昭和五五年（一九八〇）・桐内沢）
（土佐恵美子氏撮影）



棒に布を巻きつけた新田目の松明

センチ、長さ一メートルほどの丈夫な木を十字に挟み針金で縛る。上部が又木になっている棒を、雪上に二カ所差して補強し丸太を乗せる台を作る。十字の先には、ダンボを縛り付け、丸太に付けた握り手を持ち、グルグルと回すと円形に火が回る。十字にする棒が長いほど見栄えがするため、図17の右上のように全長六メートルもある大きな丸太を使ったものまで作られた。

山の上では、現場で適当な大きさの木を伐って製作するため、小径木に枝を十字に針金で縛り付けたような物も多かった。現在は、金属棒で使い易く加工したものが多く、以前より安全になった。

三木田には、縦型の車マトビがある。縦・横の棒は、以前は、丸太や、堅木を利用していたが、現在は、単管を利用して特注で製作した。縦の単管は、全長六メートルほどあり、下部は、ジャッキベースに差して立て、古タイヤを利用して支え、雪を詰めて重しにし固定している。下に立った人が、握り手を持って縦棒をグルグル回すと、三段に取付けられた、長さが異なる横棒が回り、ダンボの火が輪になって回る（図17参照）。回している人に火の粉が降り掛かるため、笠と箕で凌いだ時期もあったが、現在は、ヘルメットと防火服で凌いでいる。

タタキと様々な松明
マトビに点火したり、夜道を照らすためのものを松明という。上小

阿仁村の上仏社、沖田面、大海などの集落では、直径三、四センチ、長さ七〇〜八〇センチ程の藤や檜の木の片方を鉋で叩き、バサバサにして、それを縛って乾燥させたものを使ったという（図19）。



五味堀の点火用松明（鉄棒）



又木にダンボを括り付けた三木田の松明



三木田の三浦家の仏壇と花ダンゴ（左）（三月一七日）



缶ジュース、果物、菓子、ダンシが並んだ墓地（三里）（三月二〇日）

（一）墓参りと供物準備

三 墓参りと供物

旧森吉町南側の阿仁川沿いや小又川沿いの集落、阿仁町の北側の集落では、彼岸の墓参りには、松明を持っていったというが、これをこの地域では、「タタキ（タダギ）」という。墓参りには、タタキを振り回しながらもって行き、墓前で藁束を焚いて、タタキを墓前に差ししてきた。巻渚では、マトビを焚いている間、これを振り回しながら唱え言葉をいったという。五味堀では、藤だけでなく、ミズナラ、オニグルミなどの木を使っていた。長さは六〇センチほどで、少し火で焙ってから叩いて乾燥させた。このタタキは荒瀬辺りの集落まで作っていて、彼岸の墓参りには欠かせなかったようだ。荒瀬では現在でも、タタキを墓前の雪に差して焚いている人がいるが、荒瀬より南の集落になるとタタキなどを作ったり、使ったりしたことはないという集落が多い（表12参照）。

上小阿仁村や旧合川町の長信田や新田目などの集落では、図18のように藁束を長く繋ぎ、縛って松明にして、付けた火が消えないように振り回しながら墓まで持って行き、墓前で藁束に火を点けたり、燃やしたりした。これを「カスビ」という。また、現在のマトビには様々な松明が使われている。又木にダンポを括り付けたもの、布を巻いて針金で縛り灯油をしみ込ませたもの、丸太の上部を割りダンポを挟んだ物など様々である。



墓参りはまず墓掘り（根子）



墓参りに缶で火を焚く（摩当）



昼にダンポを焚く墓参りの様子（西根田）

鎌沢のダンシ作り、(三月一七日)

①もち米粉に湯を注す



②こねて適当な大きさに丸める



③湯がく



④アンをからめてできあがり



春彼岸の墓参り

墓参りは、彼岸の入り、中日、シマイの三回行った。昔は、昼間に一度、供

物のダンシや花ダンゴ、酒、水、線香やろうそくを持って墓参りし、夕方暗くなった頃、再度家族で墓へ行き、火を焚いて帰ってきた。墓前では藁を立てたり積んだりして燃やした。旧合川町摩当では、現在でも昼間に供物や生花、線香を持って墓参りし、夕暮時になると再度家族で墓に行き、入りと中日とシマイの三回とも火を焚いている。木クズや灯油などの入った少し大きめの缶を雪中に置いたり、灯油とボロなどを入れた缶やダンゴを吊して燃やしている。夕闇の墓地で、此処彼処に火が焚かれているのは、この集落だけである。他の集落では、昼間に墓参りした時に火を焚いたり、火を焚くのは中日だけであったり、焚かなくなってしまったりと変化したところも多い。

上小阿仁村、旧合川方、旧鷹巣町、旧森吉町では、今も春彼岸に三回墓参りする人々が多いが、雪の多い旧阿仁町、特に荒瀬から南側の集落では、墓の場所が傾斜地であり、雪深いと高齢者が一人で近づけないという。墓参りの回数も三回から中日だけに変化し、春彼岸には行かないという人も増えている。

多種になった供物 春彼岸の墓参りの供物といえば「ダンシ」である。モチ米粉またはモチ

米粉と少々ウル米粉(ウルチ米粉の地元の言い方)を混ぜ、直径三〜四センチほどに丸め、中央をへこましたものを作り、小豆餡やキナコ、ゴマなどをまぶしたものである。旧阿仁町の根子などでは、小豆餡を中に入れた大

ネコヤナギを供えた墓(五味堀)



仏壇に供えられたダンシ(鎌沢)



福館の花ダンゴ作り（三月一六日）

①モチ米粉に湯を注ぎ練る



②赤・黄・緑の食紅を練り込む



③鳥・鼓・大根・星などの形を作る



④さまざまなダンゴができあがる



きめのものを作る。中に餡を入れると「ダンゴ」という。また、小又川沿いなどでは、ダンゴとジンダ汁（大根、ワラビ、油豆腐、人参、つぶした青豆を具にしたもの）または、けの汁（青豆の入らないもの）などを持って行って、墓の前の地面に直にまいたという。

最近では、墓に持って行く供物は、発泡スチロールのトレイや簡易弁当用プラスチック容器のようなものに盛りつける家が多い。内容は果物、菓子、煮物、酢の物などが入っているものや茹でた栗やトウモロコシなどを必ず入れる家もある。墓前に置いてくると、カラスなどが食い荒らすことが多く、最近は長く置くことを禁止する寺や集落の墓地も多い。墓に供える花は、花がない時期なので、阿仁地方では様々なものを供えていた。小阿仁川流域の集落では、捏ねたモチ米粉で様々な形の団子を作り、赤や青、黄、緑で色を付け、ミズキの枝に刺して「花ダンゴ」にして雪の上に差した。旧森吉町の小又川沿いや旧阿仁町では、ネコヤナギや菊などを乾燥したものを持って行った。最近では生花も豊富になり、生花を持っていく人が多い。また、ドロノキ（ヤナギ科）の木肌の白い部分を薄く削り花びらを作り、カラフルな色を付けて、彼岸花の形にしたものが出回っている。大館市の高齢者でつくる「生産活動寿会」が、昭和五八年（一九八三）ごろから製作し売り出している。旧森吉町や旧合川町では、そのような造花を飾っている墓も多かった。雪が降ると生花はすぐだめになるので、雪中では、木を削って作ったカラフルな色の彼岸花や花ダンゴが鮮やかで美しさ際立っていた。

神棚に供えられたダンシ（西根田）



ハジメの彼岸の墓参りに花ダンゴを持ってくる（福館）





①モチ米粉とウル米粉に湯を加える



②粉を耳たぶの柔らかさまで練る



⑤浮いてくるまで湯がく



⑥ミスキの小枝に取り付けて完成

三木田・花ダンゴ作り（三月一七日）

（二）供物の作り方

ダンシ作りと供え場所

ダンシはモチ米粉を三合ほどボールに入れ、お湯を少しずつ加えながら捏ねていく。よく捏ねたら適当な大きさにちぎり丸めていく。真ん中を少しつぶして直径三〜四センチほどのダンシを作る。鍋で沸騰させた湯で、これを湯がいて浮き上がってきたらできあがる。別の鍋に作っていた小豆餡をからめ、小皿に二つずつ、または三つずつなど盛りつけて供える。

ダンシができるとまず家の中に供える。家により違いがあるが、鎌沢では仏壇と神棚（おひさん）、床の間に供える。西根田では、神棚（天照皇太神宮）、床の間の月山神社・出羽神社・湯殿山神社と合川神明社、仏壇など四カ所に供えていた。

昔のダンシは重箱に大量に作った。墓参りに行くと、親戚の墓、祖先の墓、無縁仏、六地藏など、自分の墓以外にも供えたからである。

福館の花ダンゴの作り方

昔は、春彼岸の時期に生花はないので、花の代りに花ダンゴを作ったという。ミズキ（カンコシバ）は国道際や山に採りに行く。三回分採ってきて、雪の中に差しておく。

花ダンゴは、以前はウル米粉で作っていたが、現在はモチ米粉で作る。昔は一回に一升、三回で三升作った。昭和三〇年代（一九五五）はモチ米粉が高かったので、安いウル米粉を主にして、モチ米粉を少し使った時もある。現在は三回で一升使う。一回に三合ほどを作る。羽立は花



鎌沢の花ダンゴ



下仏社の花ダンゴ



⑤湯がいてから食紅に浸ける



③適当な大きさに丸める



⑥ミズキに飾り付けてできあがり



④ダンゴの中央は凹んでいる

ダンゴをよく作る集落で、子供の頃は母親が祖母といっしょに作った。羽立の花ダンゴはダンゴ一つ一つが大きかったが、福館のダンゴは小さくて、集落ごとに作り方が様々である。

ホウの木で作ったコネバチに三合のモチ米粉を入れ、お湯を入れながら少しずつ捏ねていく。捏ねながら固さの具合を確かめお湯を入れる。水では固くなってしまいう耳たぶの柔らかさぐらいになったら、材料を四等分し、モチ米粉の色を残すものと、食紅で赤、緑、黄の色を混ぜるものに分ける。捏ねながら、各瓶から食紅を直接垂らし、順番にまんべんなく色が混じるよう練り込んでいく。四色の塊ができあがる。適当な大きさにちぎりながら、様々な形を作っていく。太鼓、大根、花、星、ニワトリ、ニンジン、モミジなど身近なものを作るといふ。

薄いと枝に刺した時に落ちてしまうので厚みが必要である。形ができあがったら湯がく。鍋に湯を沸かし、沸騰したお湯に入れる。浮いてきたら水に晒してできあがる。

ミズキに、色や形の配分を考えながら刺していく。粉に色を練り込んであるので、刺す作業は手も汚れず楽である。ミズキは先まで刺しても折れずにしなるので作りやすい。できあがると重くなるので、水を入れた一升瓶に差しておく。仏壇には小さい枝、墓には大きな枝を持つていき、雪の中に差す。イリと中目とシマイに一本ずつ持って行き、シマイ彼岸に三本を家に持って帰る。

菓子がふんだんにならない時期には、子供達は花ダンゴを焼いて食べていた。それが御馳走だった。仏壇に供えたものは、炒ったり、揚げたりして食べた。



ダンボを燃やし、花ダンゴを供えて参る
(三木田) (三浦欽一氏撮影)



白と赤の二色で作った花ダンゴ (鎌沢)

昭和五年の遊山の様子、カレーとコーラがご馳走だった（桐内沢）
（土佐恵美子氏撮影）



三木田の花ダンゴの作り方

トチノキのコネバチを用意し、モチ米粉だけにすると

すぐ固くなるので、三合のモチ米粉とちよつとだけウル米粉を混ぜた。加減を見て、柔さが足りないようだとウル米粉を足せば良い。お湯を少しずつ入れながら捏ねる。耳たぶの柔らかさくらいに捏ねる。二等分し、半分はダンシモチに使う。みんなが食べたので昔は一回に一升ほどは作り、固くなれば焼いて食べた。最近では若い人達が食べなくなったので作る量も少なくなった。

花ダンゴにする方は、直径一・五センチほどに丸める。形は三角でも丸でも良い。すべて丸めたら、鍋にお湯を沸かす。丸めたものは沸騰したお湯に入れて湯がく。浮いてきたら器に取る。容器に赤、黄、緑の食紅を入れて用意しておく。湯がいたダンゴを各色の入った容器に配分して入れ、色を付ける。

ミズキは水を入れた一升瓶に差して準備しておき、色合いを考えてダンゴを枝に刺していく。食紅が乾かぬうちに枝に刺すので指に色が付き手を汚す。最近では汚れ防止のためビニール手袋をする。この作り方だとダンゴに食紅の鮮やかな色が付き、雪の上に差してもきれいである。ミズキは庭に植えている人もいるが、集落内では見かけなくなった。若木ほうが枝がしなる。

墓参りに行く前は仏壇のところに飾っておき、墓参りに行くときに持って行く。イリと中日とシマイ彼岸の三回、その日の朝に作る。三回とも花ダンゴを持って行くので、シマイ彼岸には、墓に三本の花ダンゴが飾られる。鎌沢や三木田は現在でも花ダンゴを作る家がある。

片付けは、ダンボの針金を外すのが大変だ（福館）



単管パイプなどは杉林の中に囲っておく（鎌沢）



四 片付けと反省会

(一) 片付け

子供達が中心でマトビをやっていた戦後から昭和三〇年代（一九五五）は、マトビの準備だけでなく片付けも大事な要素であった。旧下小阿仁村の鎌沢や三木田では片付けはマトビ翌日の早朝であり、小学校六年生の役目であった。早朝の片付けに参加した者だけが、翌年のマトビの参加資格を持つことになった。翌朝五時に起きて、二メートル近くも積雪のある山に入り、片付けをするのは、六年生には試練であり、目立たない作業を真面目にできるということが、マトビの仲間として受け入れられるための条件になった。子供の頃、昭和三〇年代のマトビを経験してきた六〇〜七〇歳代の人達は、マトビは「社会勉強の場」だったと振り返る人が多い。

現在も、マトビの装置は、翌日の早朝、勤めに出る前に片付けてしまうという集落が多い。昔は火の跡始末だけをすれば、自然と土に還る素材ばかりであったが、針金や灯油、鉄のパイプなどを使うようになりゴミの収集も必要になった。

今回の調査では、天気の良い悪しにかかわらず、翌日片付けた集落は少なかった。今は全員の都合の付く次の休日まで待つ集落も多い。早朝に子供達に参加することなどもなくなっている。

(二) 遊山から反省会に

昭和初期、戦中戦後から昭和三〇年代まで、子供達が中心でマトビを行っていた頃は、マトビに点火すると、急いで山から降りて、まず、油や煤で汚れた体を洗うために風呂に入ったという。着替えを済ませると、年長者の家か、その年のトウマエ（宿）に決まっている家に集まり、馳走を食べた。昭和初期にはダマコ鍋やダンシ餅、戦中戦後には、御飯と味噌汁だけだった集落もある。昭和三〇年代の子供達の楽しみはカレーライスとサイダーやコカコーラだった。これらの料理は同年代の女子や母親達が用意してくれた。また、それぞれの家から、料理の入った重箱を持ち寄って、それを開いて食べたところもある。これを「遊山」と言った。いずれにしても、食べる時は男女がいっしょになって、夜遅くまで話したり遊んだりした。これがなによりの楽しみだったという。

昭和四〇年（一九六五）〜五〇（一九七五）年代になって、子供達が減り若勢団や青年会がやるようになってくると、「慰労会」や「反省会」と呼ばれた。この頃には宿ではなく公民館などに集まり、婦人会などの女性達が料理を作り労をねぎらってくれた。最近は女性達が出て、料理を作ることはなくなった集落が多い。コンビニや料理屋などに手軽に注文できるようになったからである。鰯、ダマコ鍋、オードブルなどがすべて外注というところも多い。子供達が点火などに協力した集落では子供達だけで、お菓子やジュースを囲んで楽しんでいた。巻渕では、婦人達が煮込みうどんを作り、マトビを済ませてきた男達をねぎらい、根子では、有志の家族達が鍋を囲み来年に向けての士気を高めていた。



反省会が終わったところ（福館）



子供会の反省会（小沢田）

【第三章】

上小阿仁村のマトビ

一 上小阿仁村の概要

(一) 生業と歴史

上小阿仁村は三方を山に囲まれている。東は、九百メートル級の山々がおよそ八峰あり、西は、五、六百メートル級の山々が並び、南は、白子森山地で、そこに千メートル超の標高を持つ太平山を中心に急峻な山々が連なっている。

森林は、総面積の九四%以上を占めており、水面、河川、道路や宅地を除くと農用地は約二%程といえる。村を南北に縦走している小阿仁川は、南部の太平山の沢々に源を発し、萩形沢、旭又沢、大蓋沢、樽沢の四沢からの豊かな水量が小阿仁川を支えている。上小阿仁村は、十一月下旬～三月まで雪に見舞われる。最大降雪月は二月で連日のように雪掻きに追われる。最終降雪は春彼岸の頃になる。

上小阿仁村には、佐竹氏の居城のあった久保田や大館、鯨山を結ぶ街道があり重要な地域であった。宿場が置かれた沖田面は元和元年(一六一五)に、沖田表(面)村、友倉村、長根沢村、鳴沢村の四カ村を合併し、小蒲野という所に村を移し、宿、馬、人足の便宜を計るために作られた。

正保四年(一六四七)の『出羽一國御絵図』によると、上小阿仁川流域では一五カ村が村として認定されていることがわかる。⁽⁴²⁾ 北から根田新田、芹沢村、三里村、摩当村、三木田村、鎌沢村、堂川村、仏社村、杉ヶ花新田村、

小沢田新田村、飛塚新田村(後福館)、五反沢新田村、沖田表(面)村、黒土村(後大林)、塚新田村(後南沢)となっている。現在の上小阿仁村に存在する集落で「新田」が付いているのは五つあり、一七世紀半ば頃までに、新田開発が盛んに行われ集落が増えてきたことがわかる。また、この頃、小阿仁川流域の一五カ村は、藩の御留山を保護する木材役を賦課され、伝馬、夫役や河川、道路普請も負担していた。

享保八年(一七二三)の「秋田郡村・本村・支村御高共調帳」によると、この頃の藩の支配は小沢田と沖田面を本郷とし、小沢田の支配郷として、杉花、福館、堂川、仏社、五反沢を、沖田面の支配郷として、大林、南沢を置いた。

本郷の二集落に肝煎を置き、上意下達の便利を計るのが藩の支配の仕方であった。さらに支配郷の下に支郷がある。支郷とは、農家の二・三男の自立と更なる新田開発によってできた集落であり、一七世紀末から一八世紀初めに本村から独立していった集落が多い。

堂川の支郷は大阿瀬。仏社村の支郷は上仏社、羽立^{はだち}、長信田、冷水沢。五反沢の支郷は上五反沢、屋鋪。大林の支郷は小田瀬。沖田面の支郷は大海。南沢の支郷は不動羅、上南沢(中茂)などの名がある。八木沢は一九世紀初めの開村である。現在の上小阿仁村は、明治二年(一八八九)、二つの本郷と七つの支配郷が合併してできた。

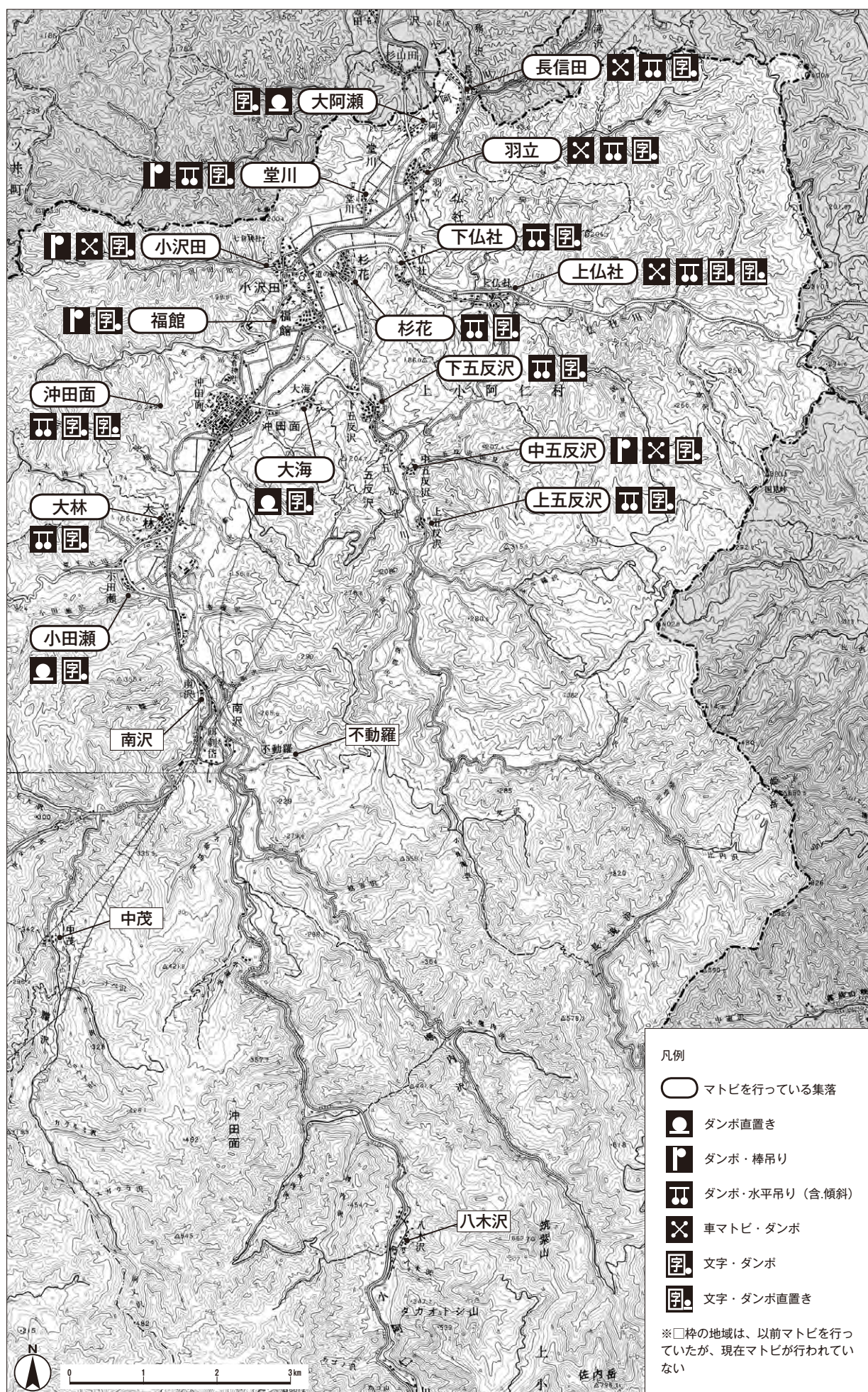
上小阿仁村の歴史の中で、阿仁銅山との関係は密接であった。五城目街道を山越えし、宿場町である沖田面を抜け、五反沢村を通る御物成道をいくのが、阿仁銅山に

上小阿仁村大林の西側、上大内沢自然観察教育林の杉林



⁽⁴²⁾ 上小阿仁村史編纂委員会「上小阿仁村史通史編」上小阿仁村 平成六年(一九九四)一八七～一九〇頁 二〇三～二一〇頁

〔図-20〕 上小阿仁村のマトビの仕掛け・現状



行く近道だったため、物資供給路として頻繁に利用され、役人や商人の通行も多かった。上小阿仁村には、鉱山関係に使用する木材を出す「銅山掛山」が多く、盗伐を取り締まる役目を持つと同時に、使用木材の伐採、流木による運搬、炭焼き、木炭の運搬、その他鉱山に携わる人々も多かった。元和三年（一六一七）から二年間に渡る『梅津政影日記』によると上小阿仁村から阿仁鉱山に度々米が送られており、資材や食糧の基地であったこともわかる。

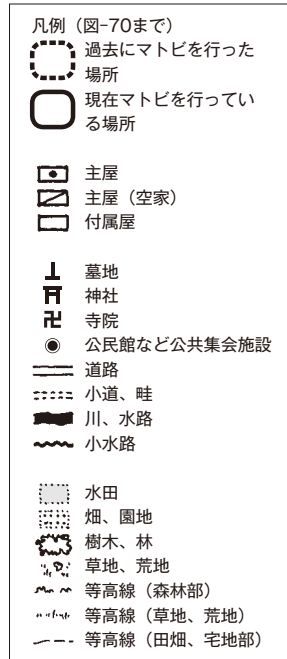
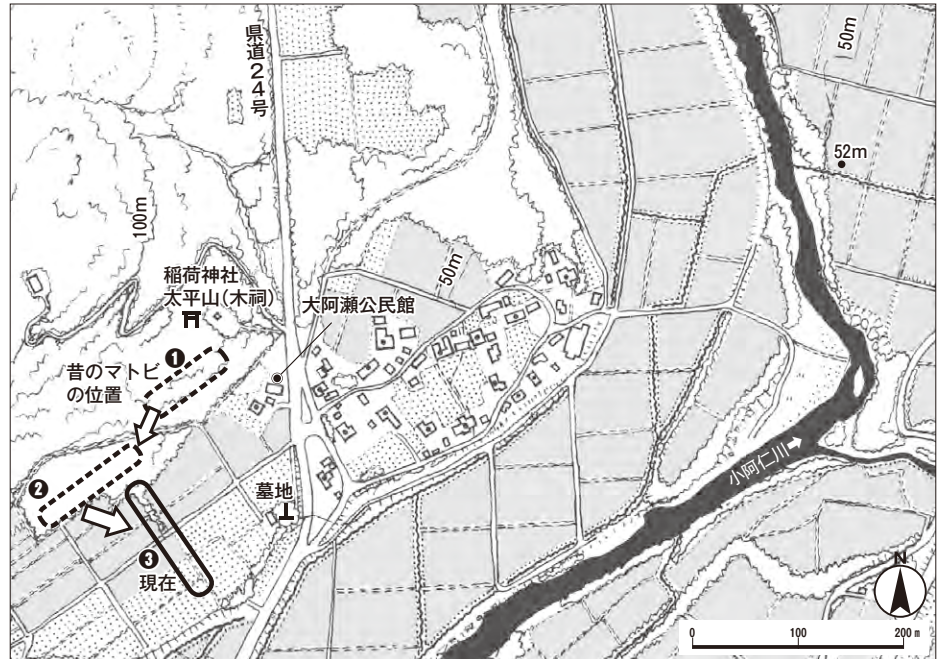
水田は湿田で、農耕も困難であったが、明治に入り、乾田馬耕、耕地整理、堆肥舎作り、正条植えなどの農業技術も進歩していった。乾田化は明治四五年（一九一二）のことである。畑作は、自給自足程度の村が多かったが、最も盛んだったのは、八木沢のような山間部の村であった。原野は、各集落の採草地で、牧草地でもあり、屋根材である茅の採取地でもあった。杉花のように空地に、漆、桑、椿など数万本を植えていた集落もある。

阿仁地方は、昔から馬の産地であり、「阿仁馬」の育成を奨励した。昭和初期では、総戸数の四二%が馬の飼養農家であり、畜産と養蚕も重要な産業であった。

また、小阿仁川の舟運は大正末期まで盛んで、川船は、堂川・二ツ井・能代と通っていた。大正一四年（一九二五）に森林軌道が、沖田面から根田まで開通すると川船の利用もなくなっていた。

昭和三〇年代（一九五五）に入ると村民の七割が農業、二割が林業に従事した。林業関係者の多くは営林署か山林と関係する製材所勤務だった。その後の減反政策など

〔図-21〕大阿瀬の新旧マトビの位置図



大阿瀬のマトビ（三月二〇日）

で兼業農家が増え始め、昭和五〇年代（一九七五～）は、農閑期に出稼ぎに出る人が多かった。現在では、過疎、少子化、高齢化の問題に直面している。

二 各集落のマトビの詳細

（一）マトビを続ける集落

①大阿瀬のマトビ

現在の戸数 一七戸

話し手 萩野雅徳氏（昭和二六年生）

【大正期のマトビ】

大正時代は若勢団がマトビを行っていた。集落により違いがあるが、若勢団は、明治半ばから大正末頃までに組織され、一五歳～四二歳の男達であった。集落内や山林の警備や防災の夜警、護岸工事、風紀の取り締まり、行事の主催や手伝いなどを行っていたが、これも集落によって違いがある。

【昭和三六年（一九六一）～四一年（一九六六）頃】

昭和三六年ころは、小学校四年から中学生が行っていた。皆で工夫してダンポを作り、両脇にハザ棒を立てて針金を張って吊っていた。昭和三九年頃の中学生のときは、車マトビなども作っていた。

子供が各家を回り、米や金銭を貰って歩いた。金額は二〇〇～三〇〇円くらいであった。集めた米を売って現金にし、灯油や針金などの材料を買った。それで十分足りた時代だった。その頃の慰労会は、各家から重箱などに料理を入れて持ち寄っていた。

【現在のマトビ】

大阿瀬では、昭和五〇年代（一九七五～）頃から、若勢団は一八から五〇歳までで構成されているが、若い人がいないので五〇～六〇歳代の人が一〇人ほど協力している。子供は保育園児と小学生が三～四人しかいない。彼岸の中日に他地域から遊びにきた子供も入れて五～六人に点火の役目をしてもらう。ダンポは、婦人会が公民館に集まって作っている。三月の初めまでに二〇〇～二五〇個は作ってもらう。

近年は、「中日」や「大阿瀬」という文字の仕掛けを中心に、両脇に単管を立てて針金を水平に張り、ダンポを吊して燃やしていたが、平成二五年は、「中日」という文字マトビを作り、両脇に単管を立てて針金を張るのをやめ、ダンポを雪の上に直置きにして並べて燃やした。直置きの方が作業が楽であり、燃えると雪に映えて美しい。慰労会は、公民館で行うが最近では出しを頼むようになった。片付けは翌日に一〇人ほどで行う。

運営費は各戸、千円ずつ集める。若勢団員からは、会費二千元を集めて反省会代に使う。集落からの補助金が一万円、上小阿仁村からは補助金一万八千円と灯油一七〇リットルが支給される。これで遣り繰りしている。

【墓参り】

かつては墓参りは三回行っていた。藁束は各自が持つて行って自由に燃したが、最近では墓参りには三回行くが、墓の前で火を焚くこともなくなった。



長信田のマトビ（三月二〇日）



長信田の武石家全景

②長信田のマトビ

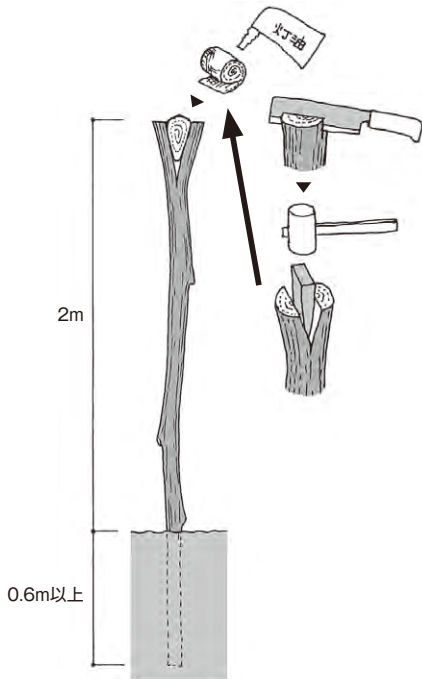
現在の戸数 二〇戸

【昭和一五年（一九四〇）～二〇年（一九四五）頃】

話し手 武石敬逸氏（昭和五年生）

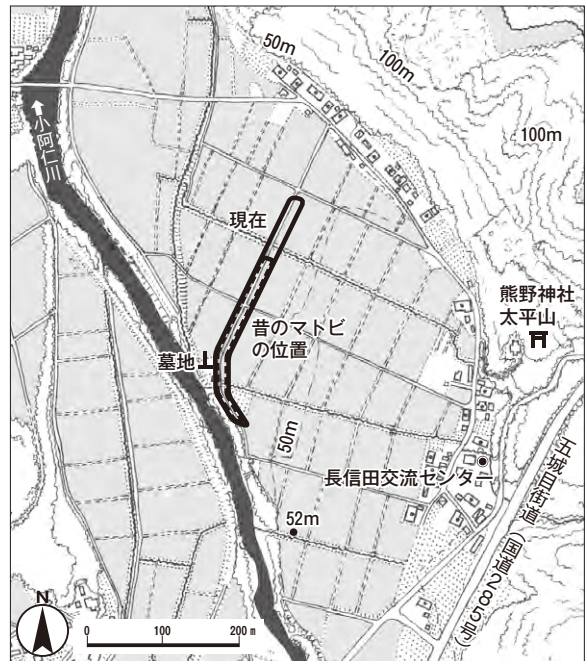
当時は子供達が多いので、小学校三年生から高等科二年生（戦後は中学三年生）までの子供だけで行った。マトビの準備には、雪を丸く積んで、立って動ける位の壁にして風よけにし、ハザ木（ナガラ）を渡して屋根を掛け菰で覆った。その中で火を焚いて準備作業をした。菰は神社の雪囲いに使っていたものを貰ってきた。

マトビの前には、各家から藁束を集めて歩き、櫓に積んで羽立の畳屋に売りにいった。売った金銭で油や資材を調達した。初めは灯油が買えたが、昭和一六年（一九四一）になると灯油が足りず買えなくなった。そこで米屋に行き精米機に使った廃油を分けてもらった。山に登り、太さ六〇七センチ、長さ三メートル位の櫓の木を伐ってきた。木は元の太い方を上に、細い方を下にして使った。元の方を鉋で二つに割って、くさびを打って広げておく、そこに、廃油を湿らしたボロ布を丸めて挟む。木は太すぎると子供では割れないし火も見えにくい。布玉が落ちないように注意して、雪の中に六〇センチほど差した。生木は簡単には燃えないので廃油が役立った。それを五〇本ほど雪の中に並べた。立てる位置は先輩が印してくれたが、三〇四メートルくらい離して立てた。これらの木は、ホンドッコ（本番）として焚く物だが、その前に、ヤクドッコといって、マトビ開始の予告で焚く物を別に作った。マトビの予告で使う物は、藁束を立てた物である。二把くらいの藁束を束ねて、元を下に末

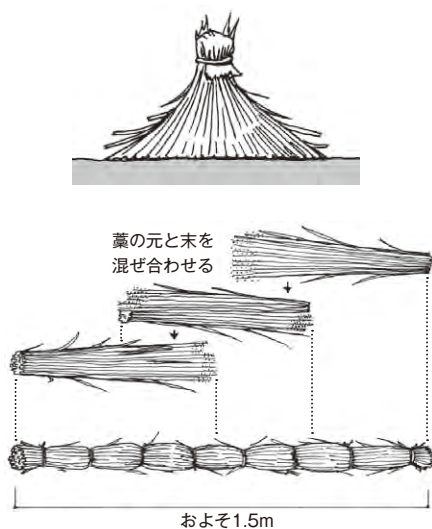


ホンドッコ（本番）に焚く

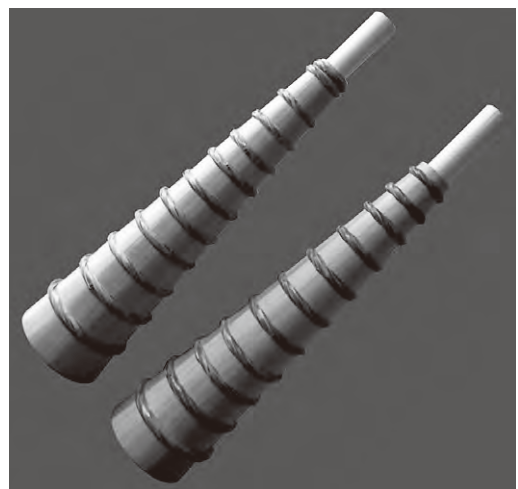
昔【図・23】長信田の割杭タンポ型のマトビ



【図・22】長信田の新旧マトビの位置図



昔【図・24】長信田、藁束直置きヤクドッコ（試しマトビ・上）と松明・カスビ（下）



ホラガイ（木貝）・全長およそ六〇センチ

を上にして立てた。これを二〇個ほど立てて火を点けた。ヤクドッコを焚くと、各家々から人々が出てくる。本番に入る時は、杉の木で桶のように作ったラツパ形のホラガイ(木貝)を吹く。これは子供では吹けなかったため、若勢団の人に吹いてもらった。

昭和一七年になると戦争は激化し、灯油はなかったが、どうしてもマトビをしたかったので、父親に頼んで、山から藤蔓の一メートルくらいのものを多数採ってきてもらった。その木の先を六〇センチ位の所まで鉋で割いて、炭火の上で乾かした。これに廃油を付けて燃やした。これを四〇本も作った。

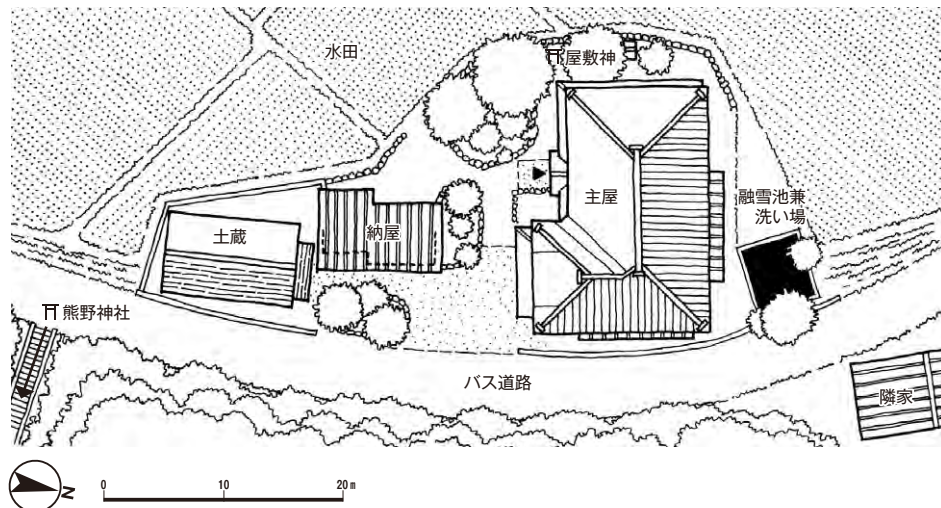
マトビが終わると顔が真っ黒になるので一旦風呂に入り、トシガシラ(年頭)と呼ばれる年長の者の指図で再び集まって食事をした。食事をする家は当番制で決まっていた。戦中はご飯とみそ汁だけの時もあった。翌日の早朝から片付けをする。片付けも全て子供が行った。

【昭和三五年(一九六〇)～四〇年(一九六五)頃】

話し手 武石辰久氏(昭和二五生)

昭和三〇年代後半のマトビは、小・中学校生合わせて、男子が一〇人以上いて自分たちで作ったマトビ小屋の中にボロ布を集め、一カ月も二カ月も前から小屋に集まってダンボを作っていた。材料は木綿が最良で、鉋で細かく切って丸めて針金で縛った。小屋の中では火を焚いて、墓から供物のダンシを集めてきて焼いて食べた。運営費集めは、昭和初期と同じく、子供達が各家から集めた藁束を畳屋に売っていた。この時代の仕掛け作りや組み立ては、若勢団も入り、若勢団が中心になって行っていた。

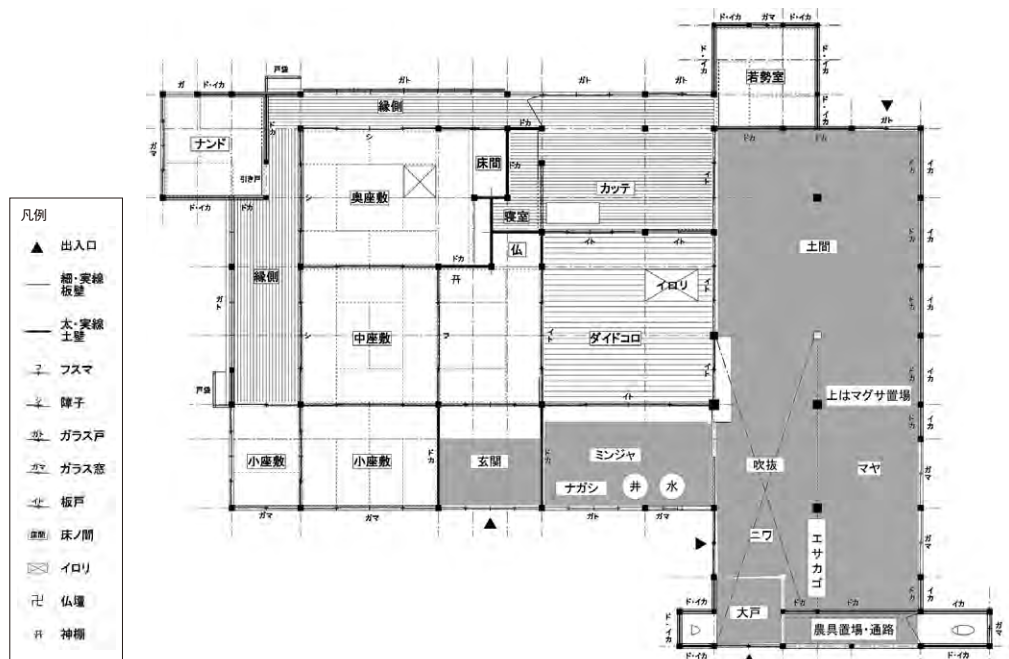
今【図-25】長信田・武石家配置図



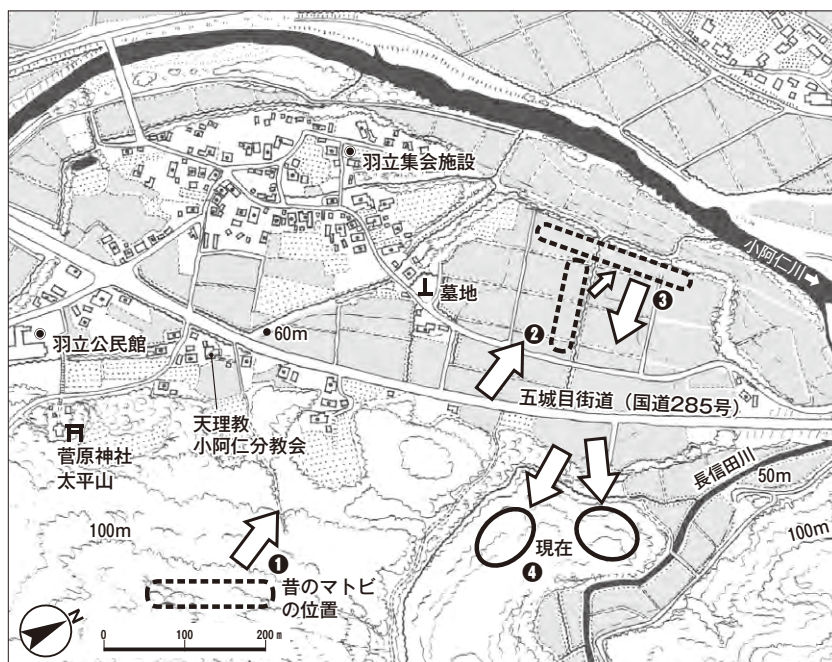
若勢部屋のある武石家の間取り

昭和二八年頃の間取りである。土間の奥には、若勢(ワカセ)部屋が見られる。若勢とは、若者、青年を指す言葉であり、住み込みの奉公人も指した。大正期はこの若勢がマトビの担い手であった。マヤでは二頭の馬を飼い、煮炊きは全てダイコロのイロリでやった。マトビが終わると農作業が始まる。

【図-26】長信田・武石家復原平面図 昭和二八年(一九五三)頃



【図-27】羽立の新旧マトビの位置図



羽立
木羽職人、畳屋、左官、大工などが多い。
山と川が近く、クルミなどの木の実の貯蔵や
川漁が盛んであった。

張った針金にダンポを吊すだけでなく、ハザ棒を利用して「中日」という文字も作っていた。昭和四〇年代後半には、ハザ棒から単管に変わった。単管になってから「ナガシダ」というようなカタカナも作ようになった。規模も今より大きく、四〇〇メートルの長さに作った時もある。

【現在のマトビ】

青年会が戦後できた頃は二〇〜三〇歳の若者の集団だったが、現在は五〇歳位までになっている。その青年会が四人、青年会OBと集落の役員が三、四人、小学生一人、中学生一人と親で行っているが、彼岸の中日に墓参りに帰ってきた人達が二、三人手伝いに入ってくれる。

ダンポは婦人会が中心になって全世帯に依頼し、それぞれ一五個ずつ作ってもらう。完成したものは長信田交流センターに届けてもらい、集まった三〇〇個のダンポに青年会が針金を巻く。当日は午前中に仕掛けを組み立てる。「中日」「ナガシダ」の文字を作り。両脇に棒を立て、針金を張った。午後は、ダムを灯油に浸してナイロンの袋に入れて吊す。現在は二〇〇メートルほどの距離である。車マトビは三基作った。

運営費は、上小阿仁村から灯油と補助金がでる。一集落あたり、一万八千円と灯油一七〇リットルである。集落からは青年会に補助金を出しているが、マトビの当日、青年会が各家を回って寄付を集める。

長信田交流センターで慰労会を行うが、青年会の奥さん達が料理を作る。一〇人から一五人で行っている。青年会といっても五〇歳代の人も入っている。



羽立の準備作業 (三月二〇日)

マトビの片付けは、翌日早朝、六時から一時間ぐらいで行う。次の日曜日に行う時もある。

【墓参り】

墓参りは彼岸のイリ、中日、シマイの三回夕方に行った。蠟燭、花、ダンシ、水と藁束三把を縦に重ねながら縛り、五尺程の長さにして、火をつけ、回しながら墓まで持っていくって燃やした。ここは神道の家が多い集落である。

昭和三〇年代になると、イリ、中日、シマイの三回行く人もいたが、中日だけに行く人が増えた。藁束を二、三把もっていき、墓前で中日だけ火を焚いた。

③羽立^{はだち}のマトビ

現在の戸数 七〇戸

【昭和一四年（一九三九）～一八年（一九四三）頃】

話し手 武石節治氏（昭和四年生）

昭和一四～一五年頃の仕掛けは、車マトビ三～五基と一・五メートル程の又木にダンポを吊したものを雪山に差していった。又木は檜など何でも利用して使った。ダンポを作るための古布や運営費は、集落を回って貰い集めて必要な物を購入した。灯油は一升瓶で買った。

小学校三年から手伝っていたが、高学年にならないと主な作業をさせてもらえなかった。昭和一〇年代の子供の数は七〇人くらいであり、子供だけで行っていた。点火の合図はラッパだった。

【昭和三年（一九五七）～四二年（一九六七）頃】

話し手 武石新太郎氏（昭和二年生）

昭和三二～三五年頃は小学校五年生から中学三年生ま

での三五～三六人で行った。場所は菅原神社の上の山で、平坦でやり易かった。山の途中に、杉の枯れ木を採ってきて躯体を作り、藁束で囲んでマトビ小屋にした。一〇人以上入れる大きな小屋だった。薪ストーブを入れて、ダンポ作りなどの準備をした。

子供達は、各家を歩いて回り、藁束や米を集めた。米は茶碗に一杯ずつ集めた。集めた藁束で小屋を作った藁束は畳屋に売り、米は水田を持たない家を買ってもらって現金にし、針金や灯油、飲み物などを買った。

羽立には昔から木羽や屋根職人や畳屋などが多く、他の集落の子供達もマトビの経費を作るため、藁束を売りに来ていた。

この時代は文字は作らず、車マトビを五基、山の木を伐ってきて工夫して作った。その周辺には、ハザ棒を立て、針金を張り、そこにダンポを吊す簡単な仕掛けだった。

昭和四二年（一九六七）以降になると、運営は草野球チームの二〇人と小学校高学年と中学生で行った。マトビの場所は、山から下りて、墓地の北側の水田の畦になった。しかし、灯油を焚くので、水田にあまり良い影響を与えないこと、電線がそばにあり、電報電話局から苦情がきたなどの理由で移動を繰り返した。

この時期は、ハザ棒がパイプに変わって、単管を三段～四段と、五メートル以上になるように高く積んで、「中日」や「マトビ」などの文字を作り、色々と工夫をこらした。高過ぎて風で煽られたこともあった。

【現在のマトビ】

若衆会（この集落では一六～四二歳まで）と子供でやっ



羽立のマトビ（三月二〇日）

ているが男子はいない。マトビの場所は何度も変わっており、現在の場所になったのは平成一四年頃からである。雑木林だったが、集落で経費を出して伐採し、傾斜地を利用して行っている。焚く日は彼岸の中日である。観光バスが走るようになってから、バスからよく見えることが優先され、集落の人々には見え難い場所となっている。ダンポは、各家で一〇個ずつ作ってもらう。現在、七〇戸あるが高齢者も多くなり、五〇戸が協力してくれる。三〇〇〜五〇〇個ほどが集まる。針金まで付けてくる家と布玉を作るだけの家がある。

平成二五年は「中日」「羽立」「巳」などの文字を斜面に作った。ダンポを針金に吊したり、車マトビもあった。運営費は一戸当り五〇〇円を全戸から集め、集落からも五千円の補助金が出る。村は各集落に対し、一律に一万八千円と灯油一七〇リットルを出す。それらは材料代、反省会代などにあてている。

【墓参り】

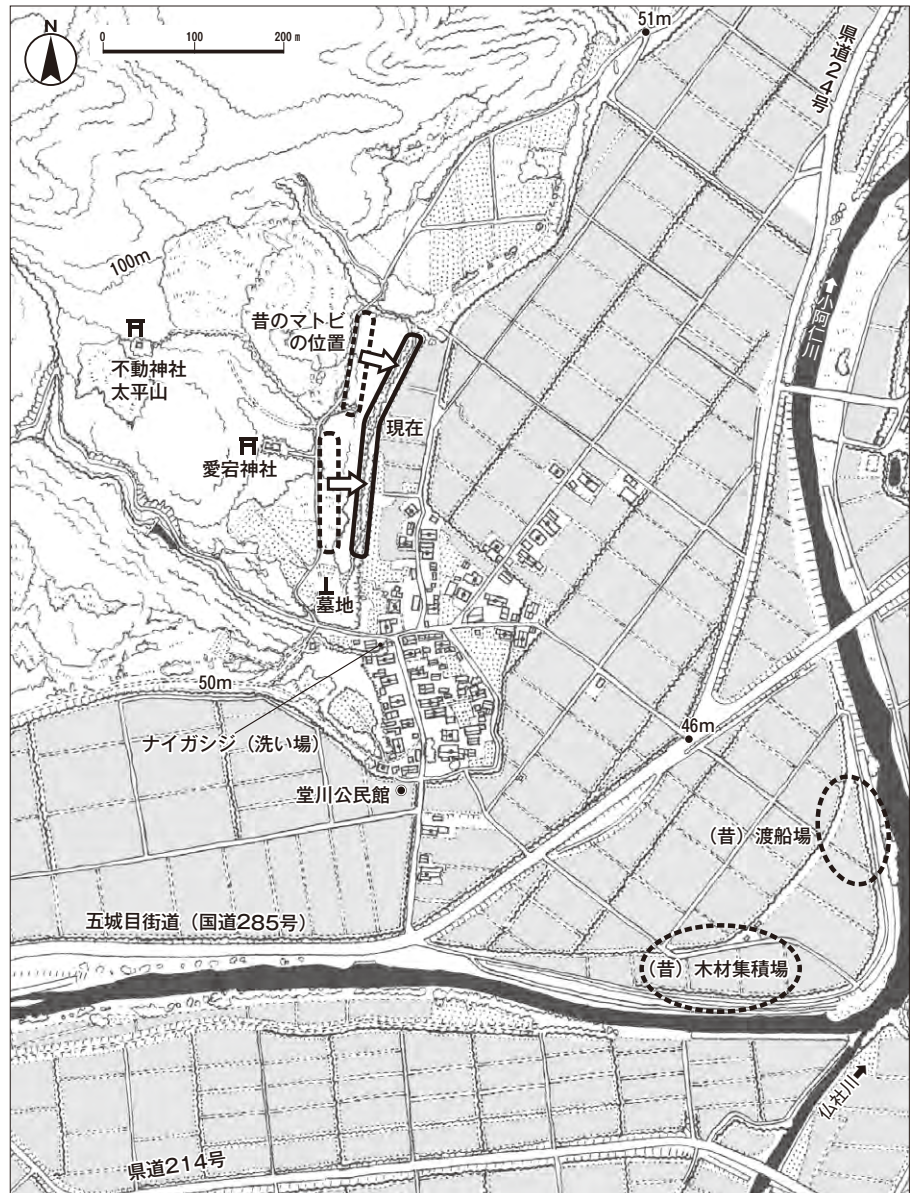
彼岸のイリ、中日、シマイの三回行う。昔は、夕方に冬囲いでつかった藁束を一株持っていて立て、下から火をつけて燃やした。杉の葉を燃やしたときもある。供物は、鮎付きダンシ、花ダンゴだが、羽立では、花ダンゴを彼岸の入りに三本作って置いて、家の前の雪の中に差しておき、墓参りの時に持っていた家もあるという。この集落は昔から比較的花ダンゴを作る家が多い。

④ 堂川のマトビ

現在の戸数 三五戸

【昭和五年（一九三〇）〜一〇年（一九三五）頃】

【図一28】堂川の新旧マトビの位置図



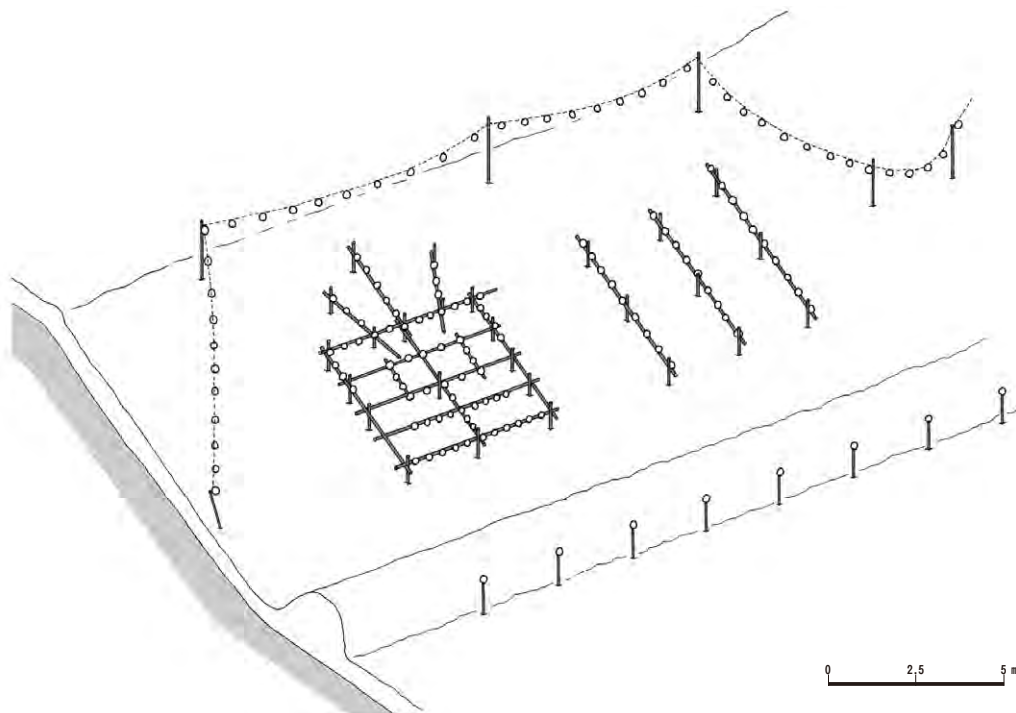
話し手 萩野邦助氏（大正一〇生）

この時代は、小学校三年生〜高等科までの子供だけで行っていた。冬休みから仲間に入り、上級生から色々教えてもらいながら大人に成長していった。男子だけで総数二五、六人はいて、高台にカマクラを作った。カマクラは、雪で円形に風よけ壁を作り、中央で火を焚いて作

堂川

集落の中央には、小川を塞ぎ止めたサイガシジと呼ばれる野菜などの洗い場がある。大正一四年に森林軌道が開通する以前は、堂川には渡船場があり、木材の集積場もあった。渡船場は多くの筏で賑わい、二ツ井から能代に筏で木材を流送していた。

【図-29】堂川のマトビの仕組み



業をした。屋根は燃えるので付けなかった。人数が多いのでカマクラは三ヶ所作った。子供達は集落を回って藁束を集めて各家から米を買った。集落の長や葬式を出したばかりの家は、マトビは仏の供養になるといって、一升ほどの米をくれた。羽立にあった魚屋に米を売り練を買ってカマクラで焼いて食べた。あめや菓子も買って皆で食べた。

マトビの場所は墓地のある高台であった。一・五メートル程の棒を立て、そこに藁束を三段ぐらいに括り付けていった。ツナギ(藁を結んで長くしたもの)で、バサバサしないように括り付けた。これをタイマツといっていた。タイマツは二間ほどの間隔で一〇本以上並べた。

終わると、その年の決まっている宿に集まり、自分達で買ったものなどを持ち込み、皆で馳走を食べながら遅くまで話した。それが何よりの楽しみだった。

【昭和三九年(一九六四)～四三年(一九六八)頃】

話し手 萩野謙一(昭和二八生)

小学校高学年から中学生までの二〇人位の子供だけで行っていた。当時はまだ単管がなかったから、山から伐ってきた雑木で「中日」と文字を作った。三月に入ると、すぐに台地に二畳程のマトビ小屋を作って、苦編みにしたものを周りと屋根に巻いた。中に炬を作って皆で作業をした。台地の斜面には文字の仕掛けを作り、台地上まで段々を利用して、長さ一・五メートルほどの雑木にダンボを付けて雪に差して並べた。一段目には五〇本、二、三段目には三〇本を二メートル間隔で並べた。

【現在のマトビ】



堂川のマトビ(三月二〇日)

【図-30】杉花の新旧マトビの位置図



杉花
江戸中期には山林が豊富で、薪炭の産地であった。江戸末期には、空地に漆、桑、楮など数万本を植えて、馬産にも力を尽した。

現在の青年団は一八、四二歳までの男性だが二人になった。青年団を抜けた人は「愛宕会」の方に移る。「愛宕会」は有志の集まりで、年齢制限がないため、五〇歳代、六五、六六歳が一〇人いて青年団と協力して二人で行っている。

ダンポは、布を直径一〇センチほどに丸めて針金で縛ったもので、全戸に二〇個ずつ作って貰っている。ダンポは五〇〇個ほど使う。マトビ当日の朝、寄付金を集めに歩くときにダンポも集める。

マトビを焚くのは彼岸の中日である。マトビの場所はある台地の傾斜を利用して「堂川中日」という文字の仕掛けは、据え付けたままになっている。準備は、雪の下から文字の仕掛けを掘り起こし、傷んでいる所は修理しておく。当日集めたダンポは、灯油に浸して、絞ってからナイロン袋に入れる。文字部分にダンポを縛り付けていく。文字の周辺の山形のところは、鉄パイプを雪の中に差していく、そこに針金を張ってダンポを吊していく。土手下の田には、鉄パイプにダンポを吊し、等間隔に差していった。ビール瓶の底を抜いて作ったホラガイの合図で点火する。

運営費は供養のための寄付金を各家から集める。千、五千円ほどであるが、各家から任意で出してもらう。村からは補助金一万八千円と灯油一七〇リットルが出るが、集落でも灯油三〇リットルくらいを追加で購入する。補助金は、針金、ナイロンの袋などの材料費、反省会などの経費として使う。



杉花のマトビ（三月二〇日）

⑤ 杉花のマトビ

現在の戸数 三〇戸

【昭和二四年（一九四九）～二九年（一九五四）頃】

話し手 斉藤昭作氏（昭和一四年生）

集落の東側にある高い山で行っていた。現在のように杉林ではなく、原野になっていて茅山でもあった。野焼きして高台の端から端まで仕掛けを作った。藁束を直径三〇～四〇センチほどに束ねて、藁束の元を下に、末を上にして山に並べた。五メートル間隔で点々と幾つも置いて燃やした。小学生から中学生までの子供達だけで行っていた。

子供達が集まる場所として「雪城」を作った。雪を利用して丸く壁を作り、風よけにして天井は作らなかった。屋根のないカマクラのような形であり、中に杉の葉などを敷いて中央で火を焚いた。子供が中心で行っていた頃は集落を回って寄付を集めた。

【現在のマトビ】

現在は若勢団が中心であり、四五、四六歳の人が四、五人で行っている。子供は、小学生が二人、中学生が一人でダンポ作りを手伝う。また、ダンポは各家にお願いして五個ずつ作ってもらうが、針金は若勢団で用意する。三〇戸の集落なので一五〇個はできる。現在は墓地のある台地上で行っている。昭和四〇年以降、山から降りて、墓地のところにマトビの場所を変えた。

近年は規模を小さくしたが、かつては「中日 杉花」の文字を入れ、車マトビをしたときもある。

運営費として村からの補助金一万八千円と灯油の支給がある。反省会の代金などは、参加者が負担するときも

ある。担い手が少ない状態だが、総会では伝統行事は何としても護ろうという話になり、集落から点火などに若勢団以外の人員を出してもらっている。

【墓参り】

以前は春彼岸には、ハジメとナカ（中日）とシマイの三回行き、藁束も三回焚いた。藁束是一把か二把である。ダンシと花ダンゴは三回とも持っていた。現在、春彼岸の墓参りはナカに一回だけ行っている。火を焚くのは、ナカの時だけであり、ダンポを持っていくようになった。花ダンゴを作る家も一軒くらいになった。

⑥ 上仏社のマトビ

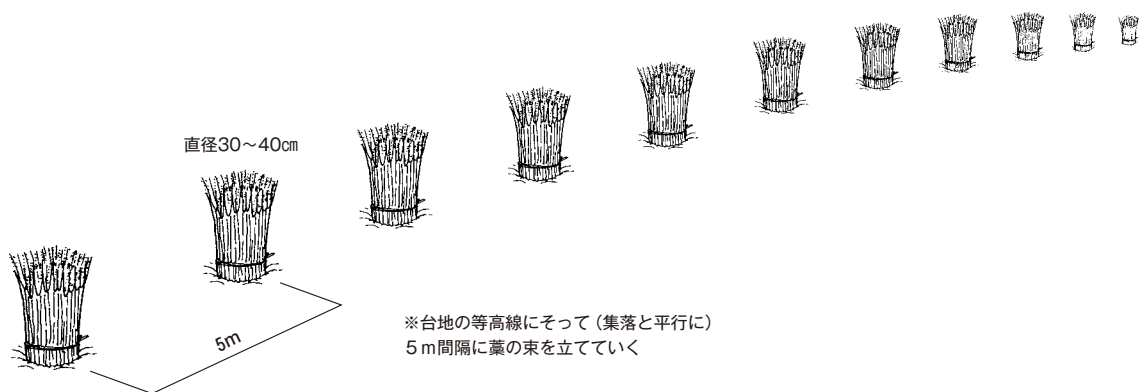
現在の戸数 三〇戸

【昭和二〇年（一九四五）～二六年（一九五二）頃】

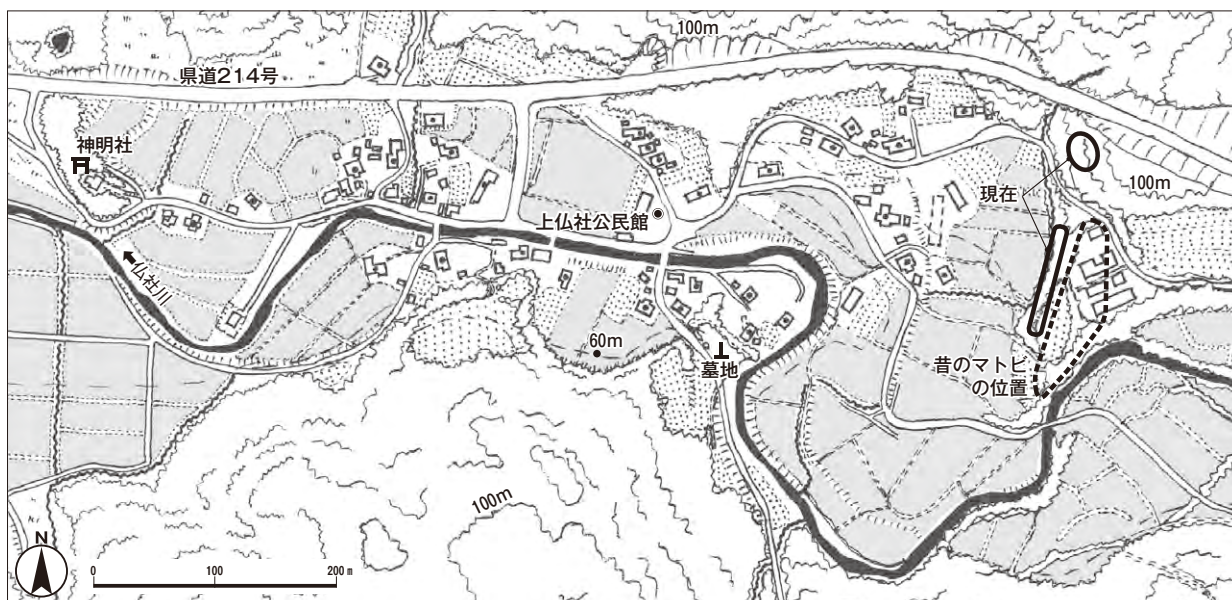
話し手 大沢栄作氏（昭和一〇生）

小学校三年生から中学三年生まで行っていた。終戦直後は、物がなかったから藁束を燃やした。三・六メートルほどの棒を立て、藁束を何段にも積上げて縛った。これを二〇本ほど立てて燃やした。藁束は一〇分くらいで燃え尽きてしまう。世の中が落ちてきて、ダンポを作り、灯油が使えるようになってから、藁束を積上げたマトビを立てた場所の下段に車マトビを四基ほど作って並べた。マトビの場所は墓地の真向かいの高台で、墓地からよく見える場所である。点火する時に使う物は藤の木で、先を地面に叩き付けると細かく裂けて、それを乾燥すると火がつき易くなる。これを松明として使った。マトビは彼岸の中日に行い、百万遍念仏はシマイ彼岸に行う。

昔【図・31】 杉花のマトビ



【図-32】上仏社の新旧マトビの位置図



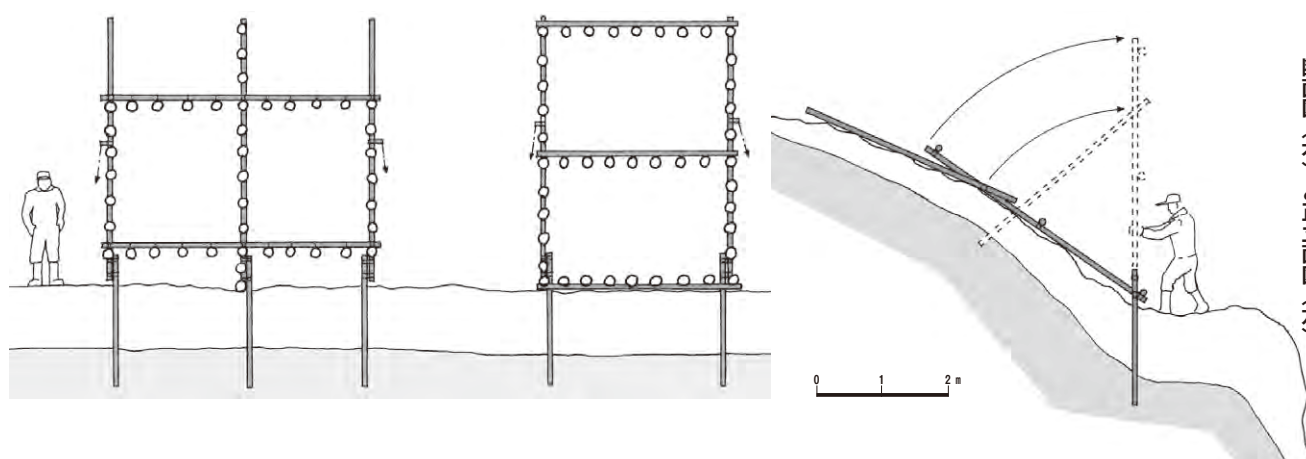
【昭和三十六年（一九六二）～四一年（一九六六）頃】

話し手 齊藤進氏（昭和二六生）

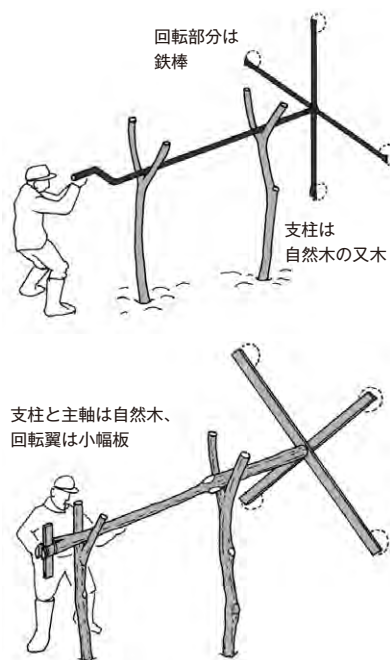
戦後はベビーブームで子供達がたくさんいたので、小学三年生～中学三年生までが、二〇人ほどで行っていた。だんだん子供が少なくなり、昭和四〇年代後半には、中学生と高校生で行った。一ヶ月前からマトビ小屋を作って作業をした。六畳ほどの大きさの小屋を作った。壁は雪を積んで作り、雑木を渡して藁で屋根を覆った。雪だけの壁では寒いので、内側に藁壁を作った。達磨ストーブを焚いて寒さをしのいだ。小屋では集落から集めたボロ布でダンポを五〇〇～六〇〇個作った。場所は、昔からマトビを焚いている高台で、「中日」「上仏社」等の文字を山から伐ってきた木々で作り、周りには一〇メートルに渡って、針金を山形に張ってダンポを吊した。中日のマトビ当日は、文字を作る人、買物に行く人と手分けした。買物は櫓を引いて小沢田まで行き、針金や灯油を買い付けた。往復で二時間ほどかった。当時は木材を運ぶ馬車がいつも走っていて櫓道が踏みならされていた。マトビが終わると宿に集まり、皆で馳走を食べた。運営費は子供達が集落を回って集めた。藁束は二〇把以上を束ねて貰ってきた。四〇〇～五四〇把ほど集まった。協力金は各家から一〇〇～二〇〇円ほどを集めた。米は、全部で二～三斗ほど集まったので、それらを米屋に売って現金に替え、カレーの材料や、ジュース、菓子を買った。村から補助金が出るようになるまで、集落の予算でやり繰りした。

【現在のマトビ】

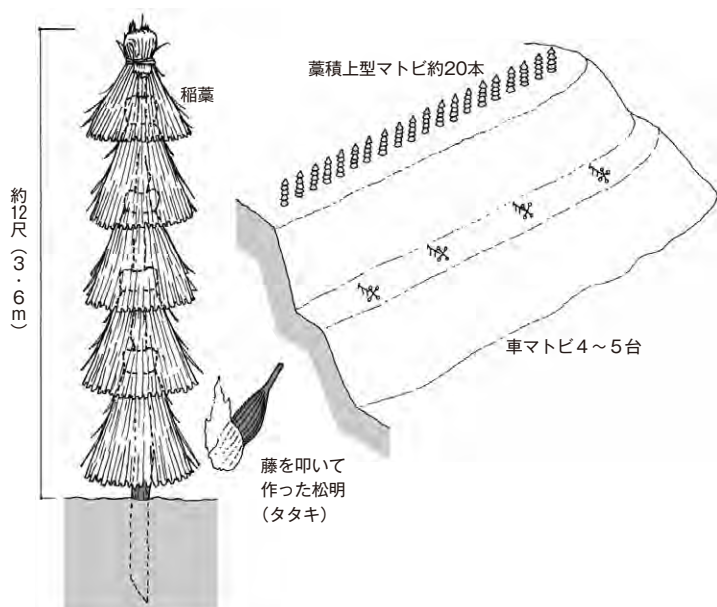
【図-33】上仏社、文字マトビの断面図（右）と正立面図（左）



【図-34】上仏社の車マトビ



【図-35】かつてのマトビの様子



若勢団(この集落では一八〇四五歳まで)が五、六人で

やっている。若勢団は平成四年頃(一九九二)から担い手となった。人数が少ないので三月の初めから準備を開始する。仕掛けの組み立ては、彼岸前の土、日から始め、金属の単管で枠を作り文字の仕掛けを作る。そこに布玉を針金で縛った物を下げる。ダンポは二〇〇〜三〇〇個を作る。「仏」の文字はダンポを雪上に直置きし、車マトビを四基置いた。昭和五六年(一九八二)から、子供の数も減り、伝統行事を存続するため、村が補助金と灯油を支給するようになった。

【墓参り】

墓参りは、彼岸のイリ、中日、シマイの三回、大人も子供も一緒に行った。供物は、ダンシ、線香、蠟燭、水、酒、花ダンゴなどである。ダンシは、自分の墓だけでなく親戚や近隣の墓にも供えるので多めに持っていく。夕方は、藁束を二、三把持って行き墓の前で燃やした。藁束の元を下に末の方を上にして立てて、下から火をつけると燃えやすかった。現在も墓参りは三回行く。この集落では秋の彼岸は墓参りにいかないという。

⑦下仏社のマトビ

現在の戸数 二二戸

【昭和一九年(一九四四)〜四〇年(一九六五)頃】

話し手 大沢喜三郎氏(昭和九年生) 小学校三年生から六年生までの子供が一〇〜一三人くらいで行った。皆で手分けして山の斜面に藁や桜の皮を背負って上がった。

戦中戦後は物資が何も無いので、山から木を伐って来

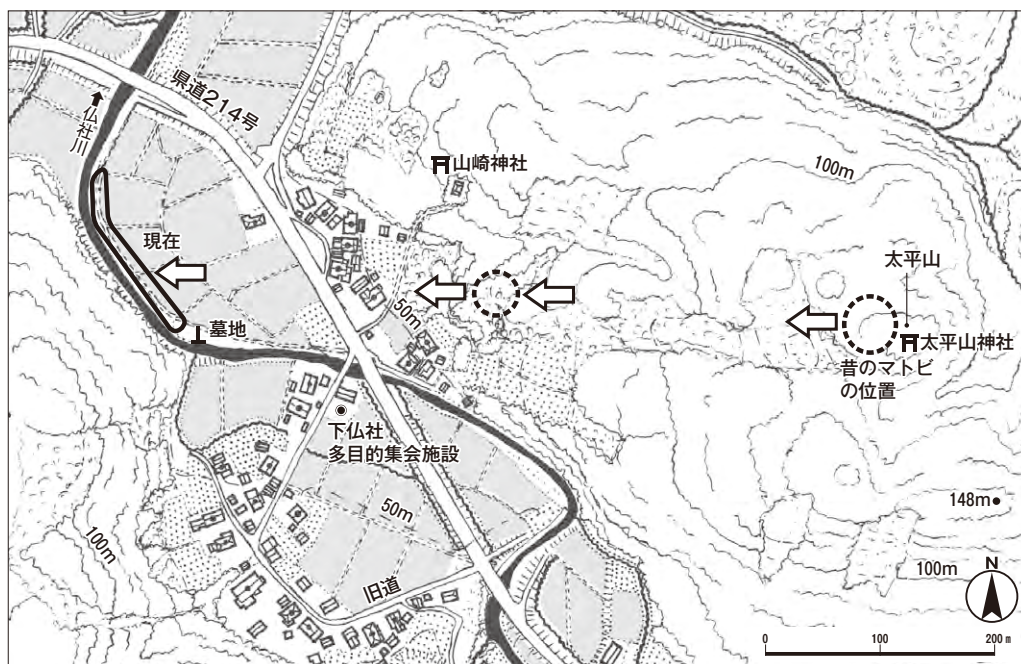
上仏社の準備風景



木製の車マトビ



【図-36】下仏社の新旧マトビの位置図



下仏社
集落を二分する仏社川では木流が盛んで、伐り出された木材は女性が川に腰まで浸かって流した。集落を通る旧道は、上小阿仁村と阿仁町を結ぶ最短の道であった。

て、長さ一・八メートルほどの杉の木を三〇本くらい山の上に立てた。村で一番高い山を太平山というが、太平山神社辺りに立てた。立てた木には藁束を三〇〇四〇把ほど縛って吊した。藁束はすぐ燃えてしまうから、次は桜の皮や藤の皮を用意して束にして吊した。また、藤の木のを叩いてバラバラにして乾燥させたものも吊して次々に二〜三回燃やした。点火の合図は瓶の底を抜いて作ったホラガイを吹いた。本物の法螺貝のような音がした。

当時の戸数は二四戸だった。山の上には雪を積んでカマクラを二つ作り、中で暖をとった。

昭和二年(一九四六)頃からは、小学生も中学生もたくさんいたが、若勢団が手伝って作っていた。マトビの場所は、太平山神社から少し下りて、山崎神社のすぐ下辺りの茅場で行うようになった。その後、高さ二メートルほどの棒を立て、その周りに藁束を縛り付けながら三〜四段に積んでいく方法に変わった。これを茅場に二〇本くらい立てて燃やした。この方法は昭和三二年(一九五七)頃まで続いた。

昭和三三年以後になると、ダンポと灯油になった。場所も山から墓地に変わった。この集落は営林署に勤める人と農家の村であり、沖田面にあった営林署から廃油を貰って使った時もあった。

昭和四〇年代(一九六五)までは子供達と若勢団が一緒にに行っていたが、次第に子供が少なくなつて、若勢団だけで行うようになっていった。

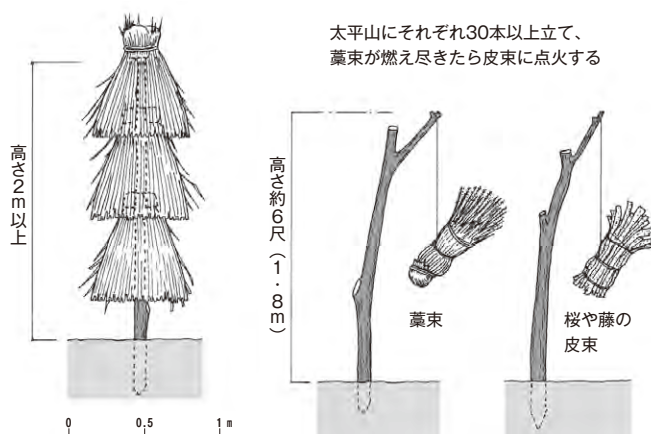
【現在のマトビ】

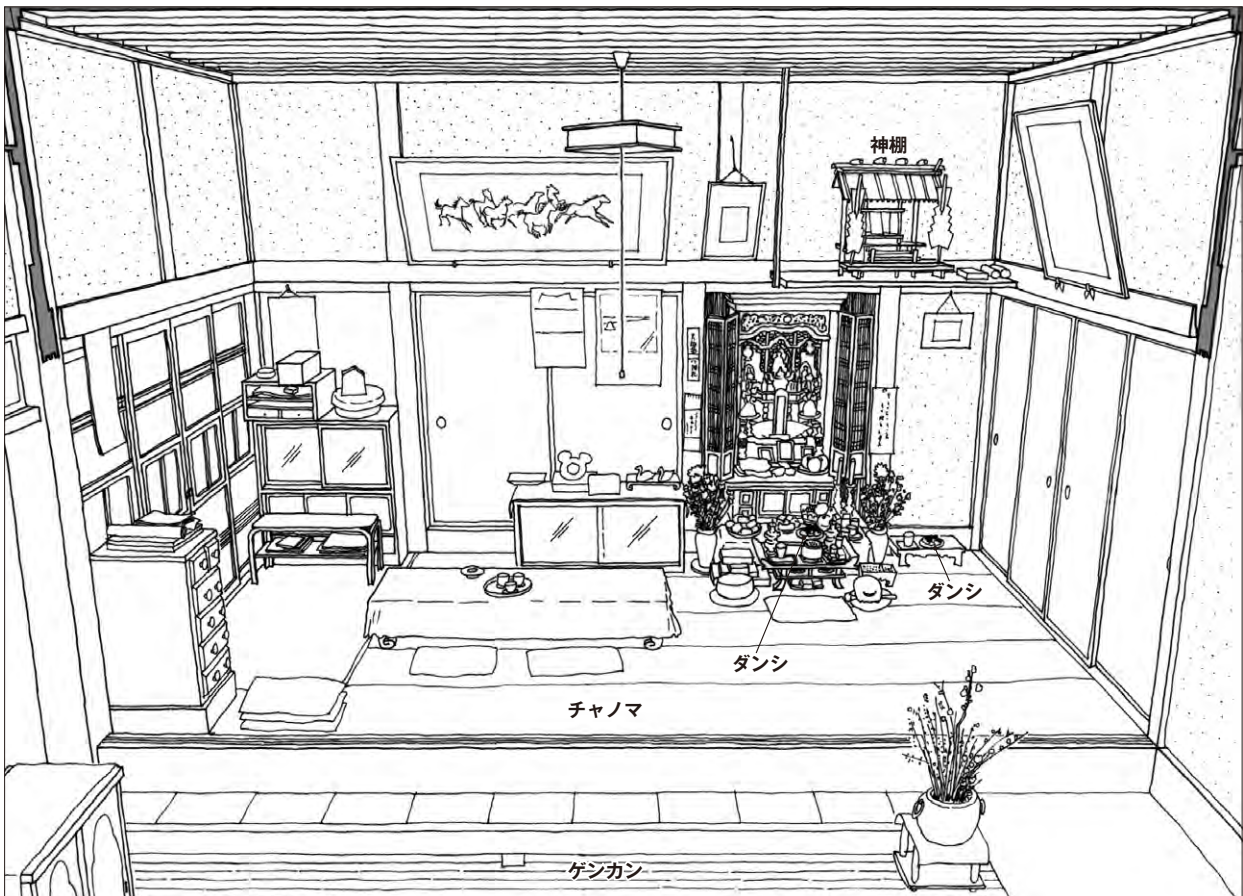
下仏社のマトビ(三月二〇日)



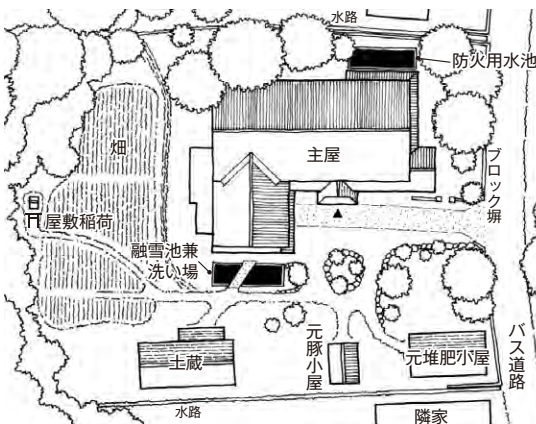
昔【図-37】下仏社のかつてのマトビ

太平山にそれぞれ30本以上立て、藁束が燃え尽きたら皮束に点火する





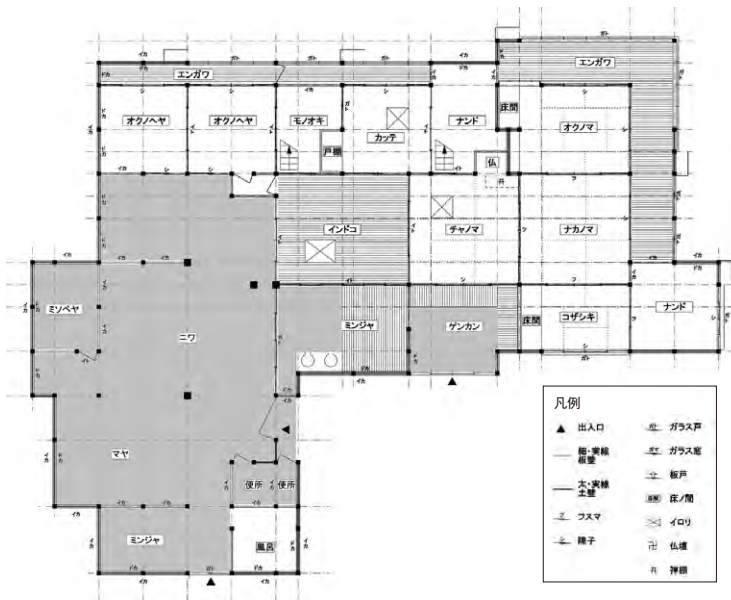
【図-38】下仏社・大沢家住宅チャノマ俯瞰図、仏壇飾りと供え物



【図-39】下仏社・大沢家住宅復原屋根伏図



大沢家、主屋の外観



【図-40】下仏社・大沢家住宅復原平面図 (昭和五四年頃)

明治三〇年代（一九五五）に建てられた住居である。山を背にして居を構え、両脇の屋敷境には、山から引いた水が流れ、除雪池もある。

主屋の玄関を入ると天井が高いチャノマがあり、明治期の仏壇と神棚の古い形が残っている。春彼岸には、両方にダンシが供えられる。現在は生花が飾られるが、墓参前には花ダンゴが飾られた。

建築当初は、ニワの奥にザシキはなく、ほとんどが馬屋として使われており、多いときで七頭の馬が飼養されていた。ニワの上は、ハリと呼ばれた屋根裏部屋で、道具置場や奉公人の寝室だった。インドコでは、奉公人もアガリハナで食事をした。

話し手 大沢祐昭氏(昭和二〇年生)

平成二五年は、彼岸の中日の前の土曜日に、若勢団をやめた五〇〜六〇歳代の人達九人と二〇代が一人、一〇人ほどの有志が公民館に集まってダンポ作りをし、一〇人で二時間ほど掛けて二五〇個ほどを作った。縫製工場から布切れを貰い、それを丸めながら直径一〇センチほどの玉にしていき、それを一メートルの針金で四字に縛って完成させる。組み立てにはもう少し手伝いが集まるが子供はほとんどいない。

運営費は集落からの補助金一万円、村からの補助金一万八千円と一七〇リットルの灯油でまかなっている。針金やナイロン袋代などの材料と慰労会などに使う。

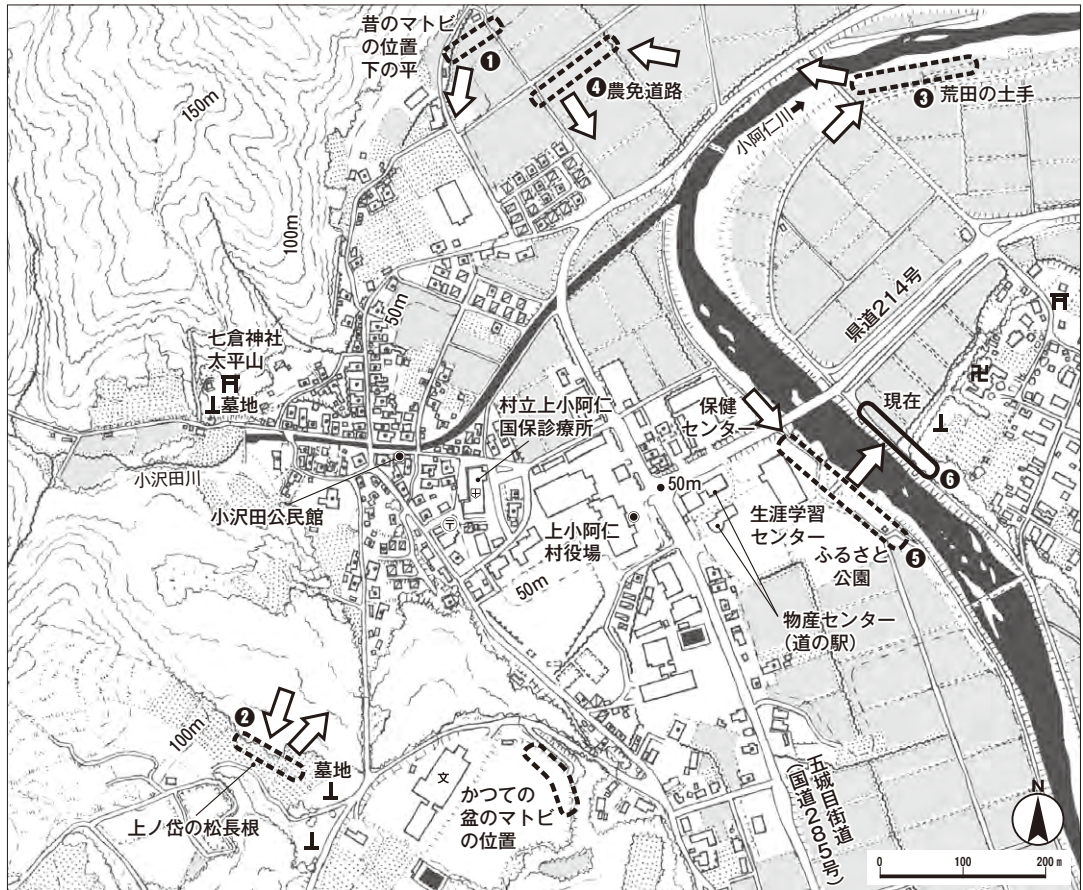
文字は「中目」だけで、その両脇に針金を張ってダンポを吊している。組立もダンポを吊すのも当日一日で終らせてしまう。マトビをやる場所は墓地の側の川沿いである。

【墓参り】

以前は春彼岸にはイリも中日もシマイにも墓前で藁を燃やした。藁束は二〇把くらいは持って行った。それを何回にも分けて燃やした。彼岸の間に一度目〜三度目と藁束の燃えかすが積み重なり墓は真っ黒になった。

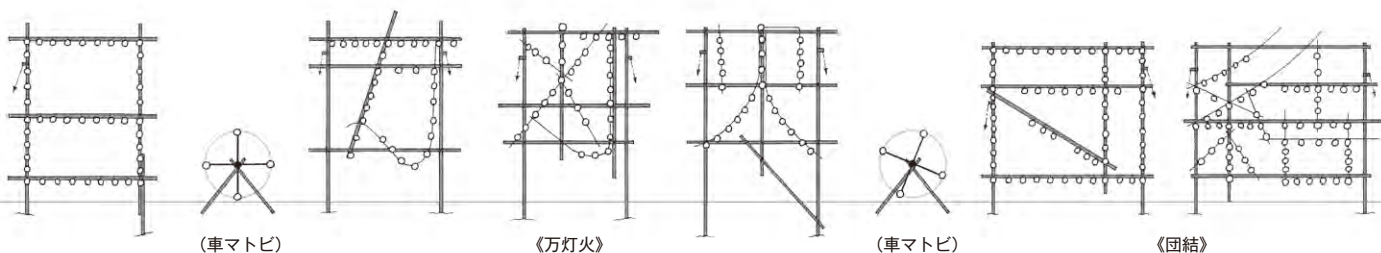
シマイ彼岸には藁束が燃えているうちに川へ流したが現在はやらなくなった。供物はダンシと花ダンゴなどを持って行った。花ダンゴはイリと中目とシマイ彼岸に持って行くものを一度に三本作り、一本ずつ墓参りの時、持参するが、持って行かないものは仏壇に飾っておいた。

【図一41】小沢田の新旧マトビの位置図



小沢田
東方に水田が広がっている。オヤキ(地主)がおり集落の土地の八割を所有していた時期もあった。人口の増加とともにマトビの場所も変化した。

今【図一42】小沢田のマトビ



⑧小沢田のマトビ

現在の戸数 一〇一戸

【大正一〇年頃（一九二一）～昭和一〇年代（一九三五）】

秋田県文化課の祭・行事調査実施に伴ない村の調査委員が作成した報告書『感想文と思ひ出・またび』『平成八年（一九九六）』の中に、田中常男氏が執筆した「万灯火に思う」という文章があり、「明治末期～大正初期生まれの方々には尋ねたら、幼少頃はすでにマトビは行われていて、藁を束ねて作った松明のようなものを燃やした」と大正期の様子を伝えている。

田中氏によると、昭和一〇年代は小学校高学年から高等科の子供が平地に一カ所、若勢団などの大人が上の台の尾根筋に一カ所マトビを立てた。マトビを焚くのは彼岸の中日の夕方だけだった。

子供達は各家を回り、協力金や布切れを貰い歩く班と、山に柴木を伐りに行く班に分かれた。人員の差配をするのは高等科二年のリーダーだった。マトビを立てる場所の近くには、雪で作ったカマクラや簡単な小屋を作った。当日の雨や雪に備えるのと、子供達とその小屋に集まって作業するためであった。

柴木は集落の持山に雪をかき分けて入って、ケン（剣：ダンポを吊す又木の棒）を伐ってくる。子供には大仕事だった。放課後は小屋に集まって、布玉を針金で縛りダンポ作りをした。購入する灯油量を少なくするため、自転車屋や鉄工所から廃油を貰ってきて、灯油を染み込ませたダンポをケンに吊した。ダンポというのを使い始めた頃は、藁束を棒に差して積上げた松明も三本ほど作り、ダンポと併用していた。



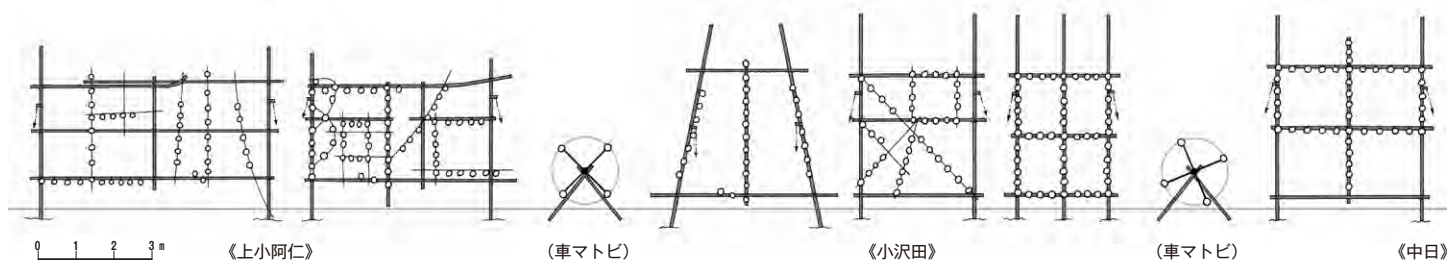
車マトビ



小沢田のマトビ、点火用の松明



点火を開始した小沢田のマトビ（三月一〇日）



《上小阿仁》

（車マトビ）

《小沢田》

（車マトビ）

《中目》

藁束を芯棒に差した松明は、ダンボを焚く前のヤクドッコ(試しマトビ)として燃やした。ヤクドッコを見て、皆が家から出てきたところでホントコ(本番)を燃やした。藁束で松明を作っていた頃は、焚く寸前まで雨に濡れないようにするのが大変だった。点火の時にはビール瓶の底を抜いて作ったホラガイを吹き鳴らし、本番の始まりを予告した。一人で何本か受け持ち、次々に点火した。燃え方が弱くなったら、ケン倒してから引き上げた。その後、女性達が用意しておいてくれたダマコ餅を食べ、遊んでは飲み食いし大賑わいだった。後始末は翌日の早朝で、水田に棒切れや針金が残らぬよう気を付けた。子供達はマトビだけでなく、正月の神社への道付け、火の用心、集落内の道掃除などの役目があり、それらの作業を通して、仲間作りがなされていた。

【昭和二十六年(一九五二)〜昭和三十一年(一九五六)頃】

話し手 田中良一氏(昭和一六生)

小学生と中学生で三〇人くらいはいた。若勢団は高校から入り、四五歳までだったが、若勢団が中心になって山に入り、子供達はその後をついて行って、ケンを伐ってきた。終業式が終ると小屋を作った。雪を利用して壁を造り、四角い小屋を作った。そこにハザ木で屋根を組み、藁束を載せた。中央に作った炉では、墓地からダンシを貰ってきて焼いて食べた。子供達で各家を回り、一軒から二〇〇〜三〇〇円を貰った。灯油代や針金などを買うのに使った。

高さ一・五メートルのケンにダンボを吊し、一間おきに並べていった。車マトビは早くからあったが、文字を

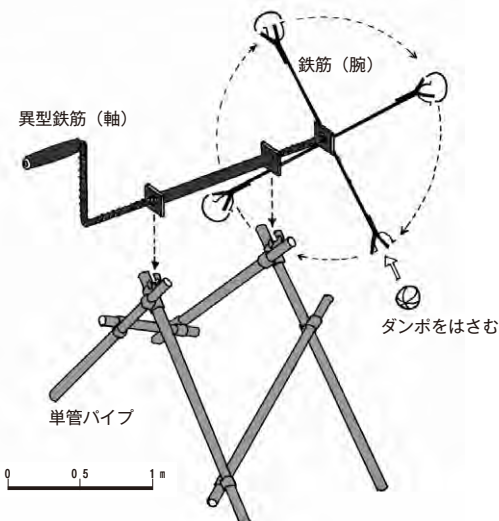
作るようになったのは昭和三〇年代に入った頃からである。点火用に使った松明も細い棒にダンボを付けたものであった。その後ケンは鉄筋棒に変化した。

マトビの場所は、住居も増えていったので、その時々により、集落の北方、元森林軌道の上側(下の平)の傾斜地や荒田の土手、堂川に通ずる農免道路などに変化した。

【現在のマトビ】

男子は小学生が三〜四人、中学生が一〜二人で合計五〜六人いるが、若勢団が三〇人ほどと五〇歳代の人達の「壮和会」や六〇歳代の人達の老人クラブなど皆が協力している。三月に入ると土、日を利用し、子供と若勢団などでダンボを作っている。ダンボは五〇〇〜六〇〇個作る。仕掛は「上小阿仁」「小沢田」「万灯火」「中日」「団結」などの文字と、車マトビが四基、ケン(鉄筋棒)に吊したダンボが並ぶ。文字はその年々で工夫する。マトビの場所は生涯学習センター側の川沿いで行ったこともあったが、現在は川向いの土手で行っている。運営費は小沢田がイベント会場であり、仕掛が大きくて協力者数も多く、最後に点火して会場を盛り上げることなどから、村から七万円の補助金と灯油が支給される。これらは単管の買い替えや材料代、子供達への菓子代、反省会等の経費にあてる。

仕掛が大きいので、中日の前の週末から組み立て作業を開始し、当日夕方までに完了させる。点火は子供と若勢団が総出でやる。瓶笛を吹いて合図すると、点火を開始する。毎年、点火順は最後なので、七時三〇分になる。その後花火があるので、終了するのは八時頃になるが、



今
【図-43】小沢田の車マトビ構成図



大人の反省会(小沢田)

公民館で子供も大人も集まって反省会をする。

片付けは翌日の九時から昼までで、参加できる人のみで行う。子供も少なくなり、若勢団だけでは行事の継続は難しく、荘和会や老人クラブが協力している。

【墓参り】

昭和四〇年代には、彼岸のイリ、中日、オクリ(注①参照)の三回墓参りに行き、朝昼関係なく墓を焚いていた。供物には、餛を絡めたダンシがかかせなかったが、東洋大学民俗研究会『上小阿仁の民俗』(昭和五四年(一九七九))によると、墓前でダンシを器から取り出す時に使った箸は、持ち帰っては行けないと言われ、墓の端に差して帰った。以前はダンシを供えて二三日後に集めに行き、イロリで焼いて食べた。子供達も墓にダンシを集めに来てマトビ小屋で焼いて食べたという。

⑨ 福館のマトビ

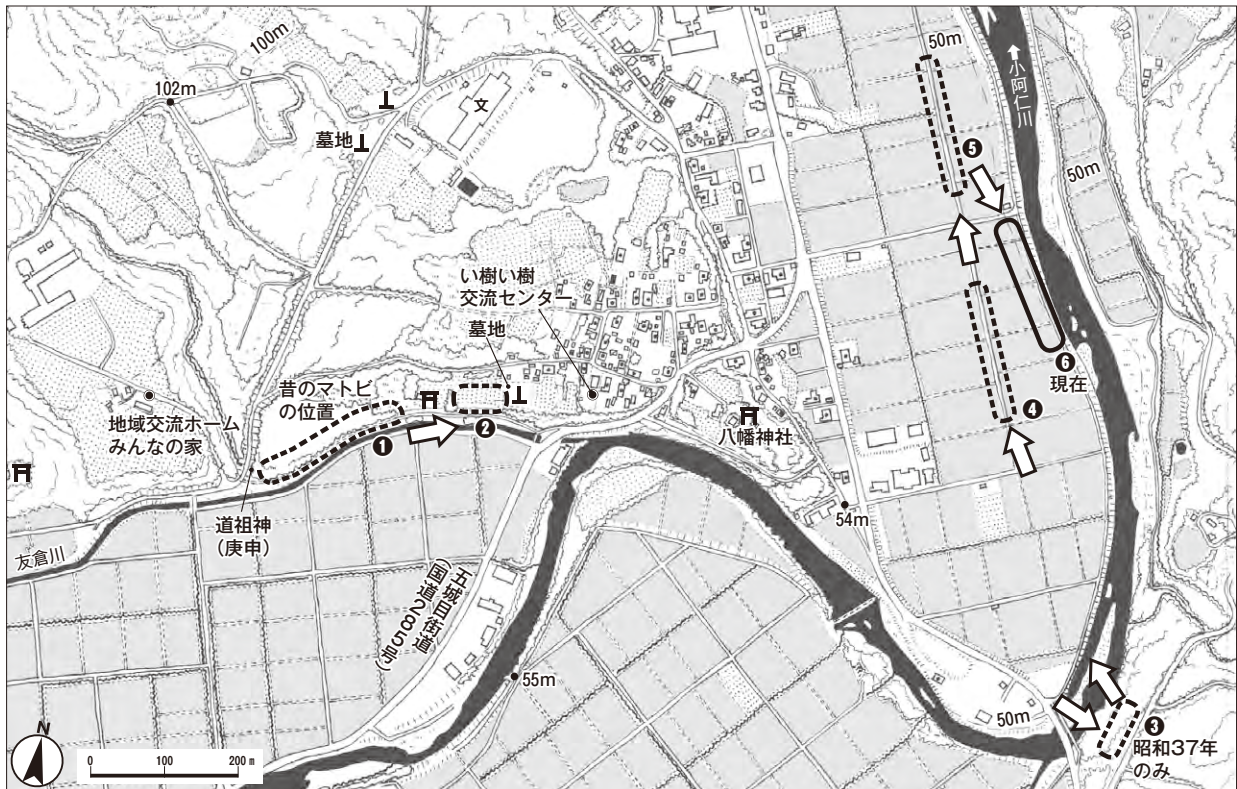
現在の戸数 五二戸

【昭和四年(一九二九)～昭和十三年(一九三八)頃】

祭・行事調査実施に伴い村が作成した報告書「感想文」と思ひ出・まどび『平成八年(一九九六)』の中に北林為吉氏が執筆した「万灯火について」によると、昭和初期のマトビの様子を次のように伝えている。

その当時は、小学校三年生から高等科二年までの子供だけで行った。鉈や鋸を持ち、枝の付いた松の木を何本も山から伐ってきた。松は地力がないところに育つので、この辺の山には多かった。枝振りの良い松を探して遠くの山に入った。どこの山から伐ってきてても、子供のしたことなので誰も文句は言わなかった。

【図-44】 福館の新旧マトビの位置図

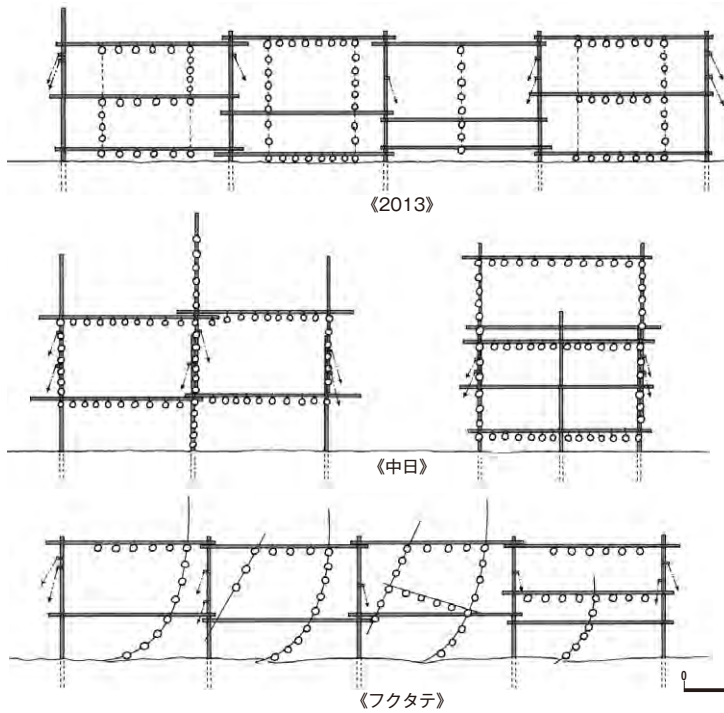


福館のマトビ (三月二〇日)

ダンポを灯油に浸してからしぼる



今
【図-45】福館の文字マトビ・正立面図



上級生が火床(釜)を四、五ヶ所決めて、班を作り、「釜」を作った。雪の深さは、一メートルほどの堅雪で、そこを丸く掘って壁を造り、真ん中に炉を作る。屋根はないが、雪で段を作り、板や杉の葉を敷いて椅子の様にして座った。小学生には、雪もスコップも重くて容易でない仕事だった。

マトビ当日は、集落を回り、各家から米一升、米を作っていない家からは一〇銭、一五銭を貰う班と各家から藁束を貰い、マトビの場所まで運搬する班に分かれた。昭和初期の不況を考えると一〇銭は貴重であった。

マトビ作りは全員で行った。枝が四、五段付いた高さ一・五メートルほどの松の木に、藁束を束ねて巻き付け、藁の中には松脂を入れてダンポ状に縛る(図-47)。枝が付いていた松の方が藁束を括り付け易かった。これを庚申塔から墓地まで二〇メートル程の間に立てた。松脂が入れていると長く燃えた。五メートル間隔で立てたとして四〇本ぐらいになる。点火は、日没を待って、各金に応答し合いながら一斉に点火した。

【昭和三六年(一九六一)〜三八年(一九六三)頃】

話し手 齊藤貢氏(昭和二六生)

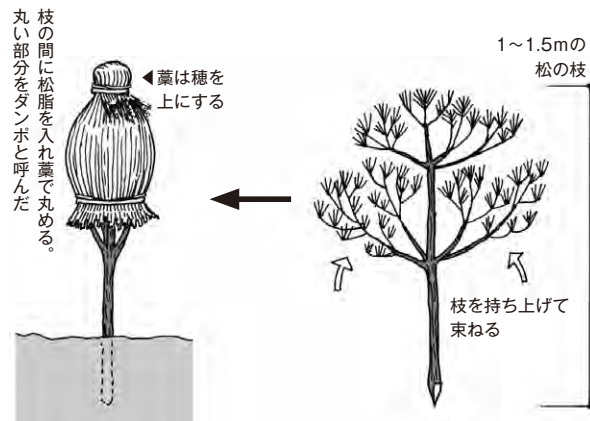
ベビーブームで子供達が多い時代だったので、小学校四、六年生で行った。高学年だけで一五人以上いた。小学生がなくなると中学生が加わった。子供が集落中を歩いて寄附金を集めた。一軒から五〇円集めた。それで針金や灯油などの材料を買い、ノートなども買って子供達に配った。

マトビの仕掛けは、すでに布のダンポの形が登場して

昔
【図-46】福館の旧マトビ(左図)の配置



昔
【図-47】福館のかつてのマトビ



いたが、福館では、一・五メートルほどのケン（剣…又木の棒）に、藤の木を叩いてバサバサにしたものを乾燥し、それをダンポ状（楕円体）に縛ったものを灯油で湿らせて吊した。また、布のダンポを吊して文字の仕掛けを作り、藤の木をダンポ状にしてケンに吊したものと併用した。縄やパイプにダンポを付けて振り回しをした。

またこの頃、雪でブロックを作り、それを積んで壁にして一・五坪ほどの長方形を作り、屋根には山から伐ってきた雑木を渡し、その上に、藁束をのせて雪を凌ぐ小屋をつくった。中央は炉にして、周りに座るように作った。雪が多い時は雪だけでカマクラのようなものを二棟作った。遊びの一貫として小屋作りや枝伐りを覚え、子供同士の仲も良かった。

点火は一升瓶の底をぬいて笛にしたものを「ホラガイ」というが、これを年長者が吹いて合図をした。

マトビ終了後には、公民館に集まってカレーを食べた。その頃のカレーは馳走だった。

【現在のマトビ】

若勢団は、二三〜五〇歳代までいる。子供は小学生と中学生の男子が合わせて三人だが、女子も手伝いに来てくれる。ダンポは全戸に一〇〜一五個を作って貰う。四〇軒が協力してくれると四〇〇個は集まる。ダンポは、三月の初めには公民館の玄関に届いているが、針金掛けと追加のダンポの製作は若勢団でやる。平成二五年は、文字の仕掛けとダンポをケン（鉄筋棒）に吊すマトビを立てた。

運営費については、村からの補助金である一万八千円

を若勢団に渡す。また、集落一戸から五〇〇円を集める。材料代、反省会代もそれで賄う。

【墓参り】

かつては彼岸のハジメとナカ（中旦）とシマイの三回あった。朝に供物を持っていき、夕方は藁を焚いた。藁は五把ぐらい持っていて、束ねて末を上、元を下にして立てて燃やした。その時、唱える言葉は、ハジメには「ジンナ、バンナ、コノヒノアカリデ、ハヤクコイコイ」シマイには、「ジンナ、バンナ、コノヒノアカリニ、ハヤクイットクレ」であり、他の集落と少し違っていたが、今は唱えなくなった。

福館の場合は古い墓は中央にあり、だんだん外に新しい墓が増えていった。供物はダンシと花などだが、花はカンコシバに付けたモチ米粉ダンゴで代用された。これを「花ダンゴ」という。現在も墓参りは三回行う。花ダンゴは墓参りをする彼岸のハジメとナカとシマイの朝に作られる。仏壇に一つ飾り、墓に一つ持っていく。花ダンゴを作る家も少なくなった。

⑩ おきたおもて 沖田面のマトビ

現在の戸数 三八〇戸

【昭和五年（一九三〇）〜二六年（一九五二）頃】

秋田県の祭・行事調査実施に伴い村が作成した報告書『感想文と思ひ出・まことび』平成八年（一九九六）の中に、北嶋種樹氏が執筆した「マト火のおもいで」によると、大正一〇年代（一九二一）生まれの先輩に聞いたところ、昭和五、六年の頃には友倉神社の下方、ウトヒラの地で焚いたこともあった。その頃はナガラ（ハザ棒）を立て、



沖田面のマトビ（三月二〇日）

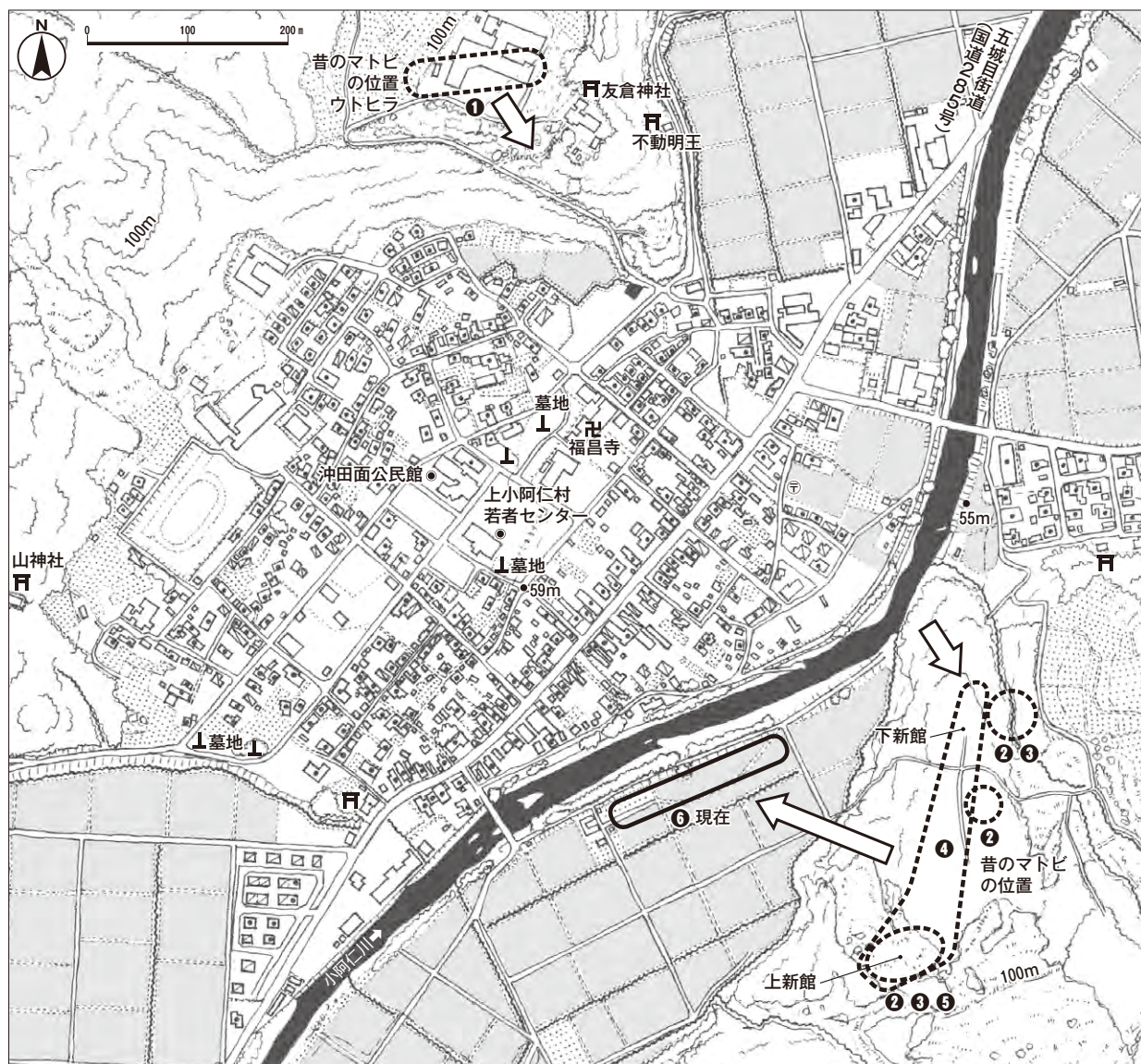
藁束を積上げて縛り、大きい火柱となるようなものを燃やした。ダンポはまだ無かったという。

昭和一六年(一九四一)～一七年(四二)頃には小学校高学年と高等科二年生でやった。年長者が五、六年生を指導した。沖田面は戸数が多いので、三グループに分かれた時もあったが、上部と下部に分かれてやるが多かった。この頃には、上部は「上新館」と呼ばれる川向の小高い山の平地(田、畑地)で、下部は「下新館」で焚き、互いに競い合った。準備が始まると、子供達が各家から藁束、米(茶碗に一杯)、ボロ布、金銭などの寄付を集めて回った。マトビの場所にはそれぞれ雪を掘り壁を作って、杉の葉で屋根を掛けて小屋を作り、そこに集まって準備をした。小屋では集めた協力金で菓子を買って食べた。

ここには営林署の機関庫があり、そこにボロ布や廃油があったので分けてもらいダンポを作り針金で縛った。仕掛けはナガラを井桁に組んで、油に浸したダンポを吊したり、ナガラを立て、針金を張って一間間隔で吊った。マトビが燃えている間に、火玉をグルグル回したりもした。廃油だけでなく、山に入り、松の木に傷を付け、松脂を採取し溶かして利用したこともある。

マトビが終わると宿の家にいき、慰労会をした。母親やばあさん達が作ってくれた料理を皆で食べた。ダマコモチ鍋、サイダー、甘酒などがあった。宿には集落を回って集めた米や食べ物などの材料を持ち寄った。

十二支あわせ、トランプ、歌などで楽しんだ。当時は、彼岸の中日といえ、遊山の日で、それぞれの年代の仲



〔図48〕 沖田面の新旧マトビの位置図

間で飲食を楽しんだ。

【昭和二十一年（一九四六）～昭和三五年（一九六〇）頃】

話し手 山田清治氏（昭和十一年生）

加賀谷磯治氏（昭和二〇生）・高地文夫氏（昭和一〇生）

戦後は何も無い時期でもあり、藁束を積上げる形に戻った。棒の長さは一・八メートル程で、二〇把の藁束を二段くらいに積んで縛った。これは一〇本くらいは作った。また、枝のある雑木を伐ってきて、藁束三把ほどを半分に折って縛ったものを作り、枝に引っ掛けた。これは三〇本くらいは作ったこともある。藁束は二～三分で燃えてしまうので、ダマシ（試しマトビ）を二本ほど燃やしてから本番を燃やした。上新館と下新館の台地に分かれてやるやり方は変わらなかった。点火時に使ったものは、藤の木の片方を叩き潰し、乾燥させて作った松明だった。

昭和二〇年代後半～三〇年代にかけては、機関庫の廃油の利用とダンポ作りに戻った。昭和三〇年代後半には文字の仕掛けも作った。ハザ木を利用して「中日」と作り、ダンポを吊した。三〇年代後半まで、高学年から中学生で行い、雪の中でのマトビ小屋作りや共同作業は社会勉強の場だった。運営費集めや慰労会なども昔と同じく行われていたが、昭和四〇年代（一九六五）に入ると、子供が少なくなり、子供は参加しなくなっていた。昭和四七年（一九七二）に、「万灯火保存会」が結成されて、伝統行事を守った時期もあった。

【現在のマトビ】

高校生～四五歳までの若勢団が主体で行っている。子

供は皆無である。若勢団は一三人。若勢団のOB会一人が手伝っている。ダンポは集落の全戸に二個以上作って貰っている。二月中には公民館に集め、若勢団とOB会が針金で縛る。全部で六〇〇個は集まる。

運営費については、村からの補助金一万八千円と灯油が若勢団に入り、また、集落を回り、五〇〇円ずつ協力費を集めている。

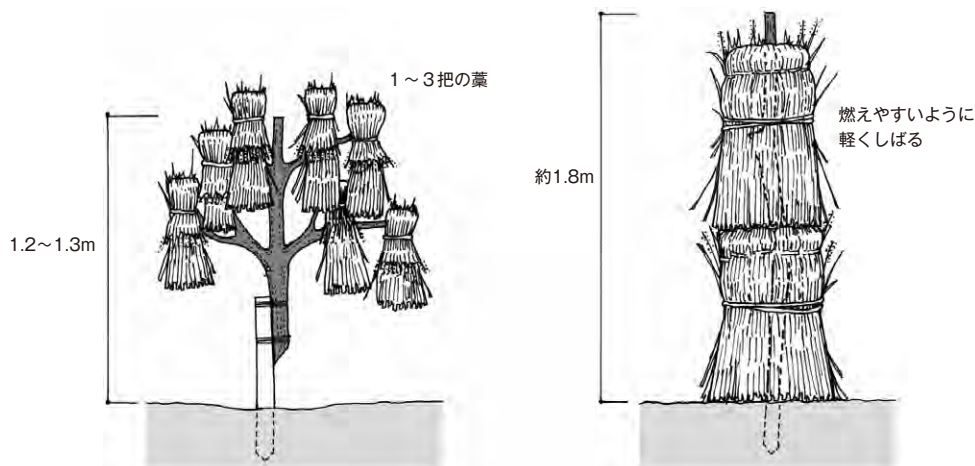
平成二四年まで、マトビの場所は従来通り「新館」の山の上や台地でやっていたが、材料を運び上げるのが大変であるのと、あまり大きな仕掛けができないので、平成二五年からは対岸の川沿いの平地で行うことにした。作業が楽になり、仕掛けも以前より大きくできた。

反省会も料理屋などを使うようになり公民館では行わなくなった。

【墓参り】

昔は彼岸の入り、中日、オクリの三回行って、三把くらいを元を下に末を上にして立て、下から火を付けて燃やした。藁を焚くことによる煤で墓が汚くなるという問題も起こり、最近はダンポを焚く人を少し見かける。

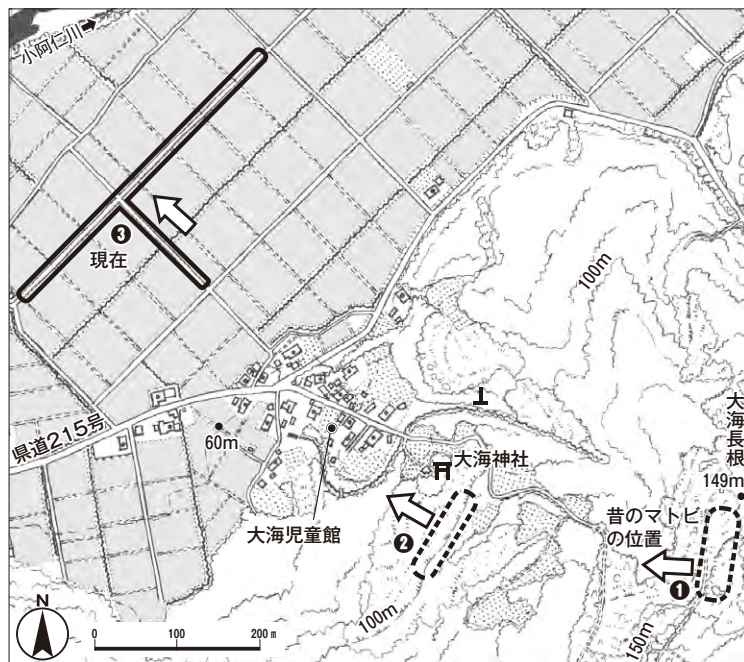
コンバインが入ってから長い藁束はなくなった。また墓地は石塔が密集していて焚けなくなった。供物は昔と同じくダンシを持っていくが、この集落では生花が手に入るのので花ダンゴを作る人はいない。無縁仏参りについては、それを先にやると決まっている訳ではないが、無縁仏に先に供物を上げないと、他の墓の供物を取ってしまうと言われている。無縁仏にも必ず供物を上げる。



昔【図-49】沖田面のかつてのマトビ



大海のマトビ (三月二〇日)



【図-50】大海の新旧マトビの位置図

① 大海のマトビ

現在の戸数 一八戸

【昭和三年(一九四八)～二九年(一九五四)頃】

話し手 清水俊一氏(昭和一七生)

戦後は子供の数も多く、二〇人ほどの小学生だけで行っていた。六年生が隊長で下級生に指図した。山から二・五メートル程の赤松を伐ってきて、三、四本を立て、松の枝を利用して直径六〇～七〇センチほど(二〇～三〇把)の藁束を下から縛り付け、積上げていった。二段～三段に積んで縛った。その間に藁のシベ(葉っぱ)だけ取ったものを積上げ、交互に置いた。

マトビを立てた場所は墓地が見える山の上で、大海長根と呼ばれていた。そこは傾斜地だったが畑で集落からもよく見えた。

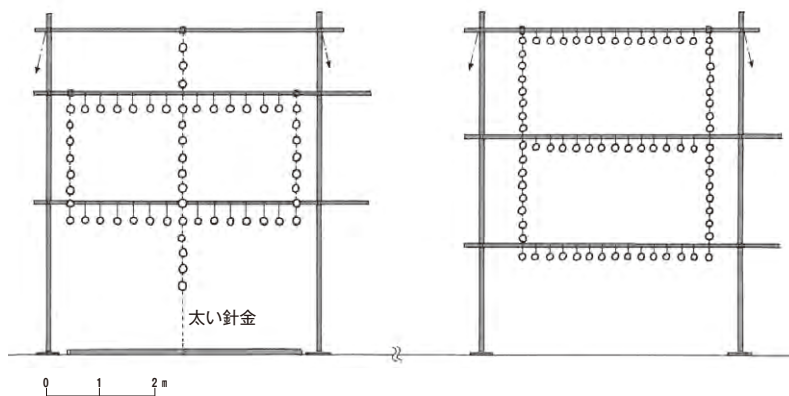
毎年二月頃から準備するので、傾斜地の雪を掘ってマトビ小屋を造り、そこに茅で屋根を掛けてストーブを持ち込み、皆で遊んだり松明作りをした。長さ五〇センチほどの藤の木を叩き潰し乾燥させたものを一人二本くらい作った。点火の合図は一升瓶の底を抜いて作ったホラガイ(瓶笛)だった。瓶の口には、長さ一〇センチほどの適当な太さのタラの木をはめ、焼火箸で中を焼き切り、空洞にして吹き口とした。

【昭和三五年(一九六〇)～五〇年代(一九七五)頃】

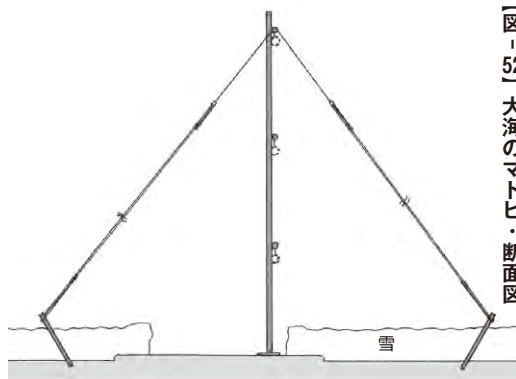
話し手 清水俊一氏(昭和一七生)

子供の数が少なくなると小学生から中学生の子供達で行ったこともあった。昭和四八年(一九七三)頃までは子供だけで頑張ったが、それ以後は大人中心の行事になり、子供の仕事がなくなった。

【図-51】大海のマトビ・正立面図



【図-52】大海のマトビ・断面図



マトビの仕掛けは、昭和三七年（一九六二）頃には藁積みからダンポと灯油に変わっていた。ボロ布は下着や木綿のシーツを使い、灯油と廃油を混ぜたものを使った。

マトビの場所は山の上であったが、「中日」という文字を工夫して作っていた。運営費はマトビ当日の朝、子供達が全戸を回り、米や協力を集めた。貰ったものは全て子供達が使った。隊長が菓子などを買い平等に配ってくれた。大人と共同で行うようになって、運営費の集め方は変わらなかった。中学生の隊長の家が宿になって、風呂に入ってマトビで汚れた体を洗い、カレーライスを食べて泊まったこともあった。昭和五三年（一九七八）以降、マトビの場所は山から田に移った。

【現在のマトビ】

一〇年位前から担い手がいなくなり集落で行っている。現在、一八戸で、各家から一人ずつ手伝いに出てもらってマトビを継続している。高齢者の家もあるが、一五人は出てくれる。男女を問わず出てもらっている。子供は中学生の女生徒が一人になった。ダンポ作りは一戸当り一〇個を作ってもらっている。公民館で時間を決めて作業をする時は、材料などを集落の役員が用意する。ダンポは三〇〇個以上作っている。組立だけ全員が休日の日に行い、後は当日にダンポを灯油に浸し、ナイロン袋に詰めて吊す作業をする。

昭和五三年頃から田の畦を利用してマトビを燃やしており、単管で「中日」という文字と文字の両脇に針金を張って水平にダンポを吊していたが、最近は作業を軽減させることを考え、雪の上に直置きした。製作マニユア

ルができていて、それに添って作業を進めている。

反省会は五年くらい前からなくなしたが、準備が終了し、夕方の点火を待つまでの間に、酒やおにぎり、つまみなどを用意して交流する。

運営費は集落の補助が一万五千円、村から一万八千円と灯油がくる。これでやり繰りしている。翌日の片付けは早朝五時三〇分から行う。

【墓参り】

東洋大学民俗研究会『上小阿仁の民俗』（昭和五四年（一九七九））によると、彼岸のハツと中日とオクリの三回、墓前で藁を燃やすが、ハツ彼岸は、「コノヒノアカリデ、キテタモレ」中日は「コノヒノアカリデ、ユックリヤスンデタモレ」オクリ彼岸は、「コノヒノアカリデ、イキタモレ」と唱えたというが現在は唱えない。

⑫上五反沢のマトビ

現在の戸数 九戸

【昭和二四年（一九四九）～五〇年（一九七五）頃】

話し手 田中秀雄氏（昭和一七年生）

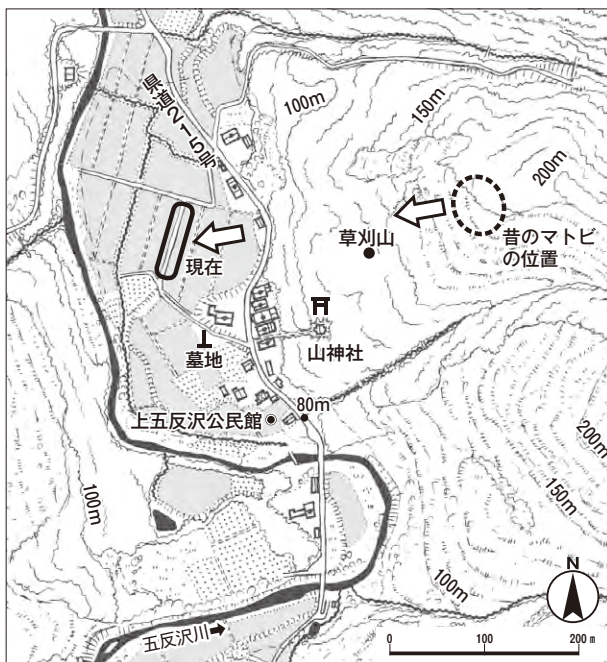
小学生から中学三年生までの子供だけで行っていた。

この頃の子供にとっては一番楽しみな行事だった。彼岸の中日に草刈り山で焚いていた。草刈り山は集落の共有地で、今は杉林になったが、昔は各家の屋根材である茅を刈ったり、馬の餌の草を採る山だった。マトビの一ヶ月前ぐらいから、草刈り山に雑木を組み、一坪～一・五坪の簡単な小屋を作った。小屋の周りは茅で囲った。鋸や鉋で手や足を切ったが、すべてが生きていく上で必要な体験だった。この小屋は、皆で集まって準備をしたり、



上五反沢のマトビ（三月二〇日）

【図-53】上五反沢の新旧マトビの位置図



話をしたりする場だった。

マトビを作るために藁束を背負って山を登るのは大変であった。藁束を積んでつくるマトビには、大と小があった。大マトビは高さ一・五〜二メートルで、藁束を一段ずつ縛りながら三段に積み、三〜四本作った。小マトビは、高さ一メートルで、藁束五〜六把を一段積んだものである。大マトビには二〇〜三〇把の藁束を使った。小マトビは、二〜三本作った。これはダマシと言って、大マトビを燃やす前に燃やし、周りの集落を騙すためのものであった。各集落の子供達は、点火時間をできるだけ遅くしようと競い合って楽しんだ。点火の時も、これ

といって合図はなかったが中学生が指示した。子供だけで火を焚いたが、雪が多いので危険なことはなかった。昭和三〇年（一九五五）代は、まだ草刈り山で焚いていた。

昭和五〇年（一九七五）頃には、田で行うようになっていた。それからは、親子会でマトビを行った。親子会の頃は、まだ子供達数は多くて十一〜十二人いた。カタカナや漢字の文字のマトビの作り方を子供といっしょに考えたり、ダンポを作ったりと、楽しみながら行った。特注で「蝶」や「花」の形を作ったこともあった。車マトビは危険なのですぐにやめた。

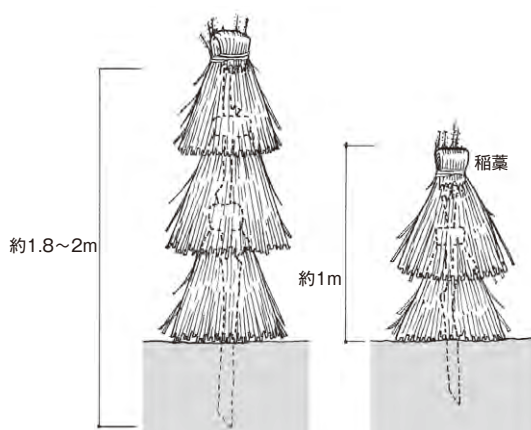
【現在のマトビ】

現在は子供もおらず大人だけで行っている。田の畔を利用し、「中日」という文字を作り、ハザ木を立てて針金を張ったところにダンポを二メートル間隔で吊している。マトビは川向いで焚くと火事が多くなると言われているので田の畔で行っている。ダンポ作りは、三月の初めから始める。木綿の軍手の安いのを買い、それを裏返しそこに化繊などのボロ布を入れて作っている。一戸当り、三〇個の製作をお願いしている。現在の戸数は九戸なので、二七〇個〜三〇〇個ほどになる。針金はきつく締めすぎても赤くなって落ちてしまうので加減が難しい。昔はマトビと言わず「ホトケサンノアカリヲツケル」と言ったというが、現在はマトビと言っているという。

【墓参り】

昔は、今のような石塔はなかった。石塔があったのは本家の他には四、五軒だった。分家は当代（当主）だった

昔【図-54】上五反沢のかつてのマトビ



平成一〇年頃の桜と蝶のマトビ（上五反沢）
（田中秀雄氏写真提供）



人がなくなった時に初めて石塔を立てるので、平成にな
ってから立った石塔も多い。墓参りは現在も、イリと中
日とシマイ彼岸の三回いくが、藁で火を焚くこともなく
なった。杭にダンポを吊して燃やしている人もいるが、
近年は少なくなった。墓で焚く火は「迎え火」や「送り
火」といった。

⑬ 中五反沢のマトビ

現在の戸数 一八戸

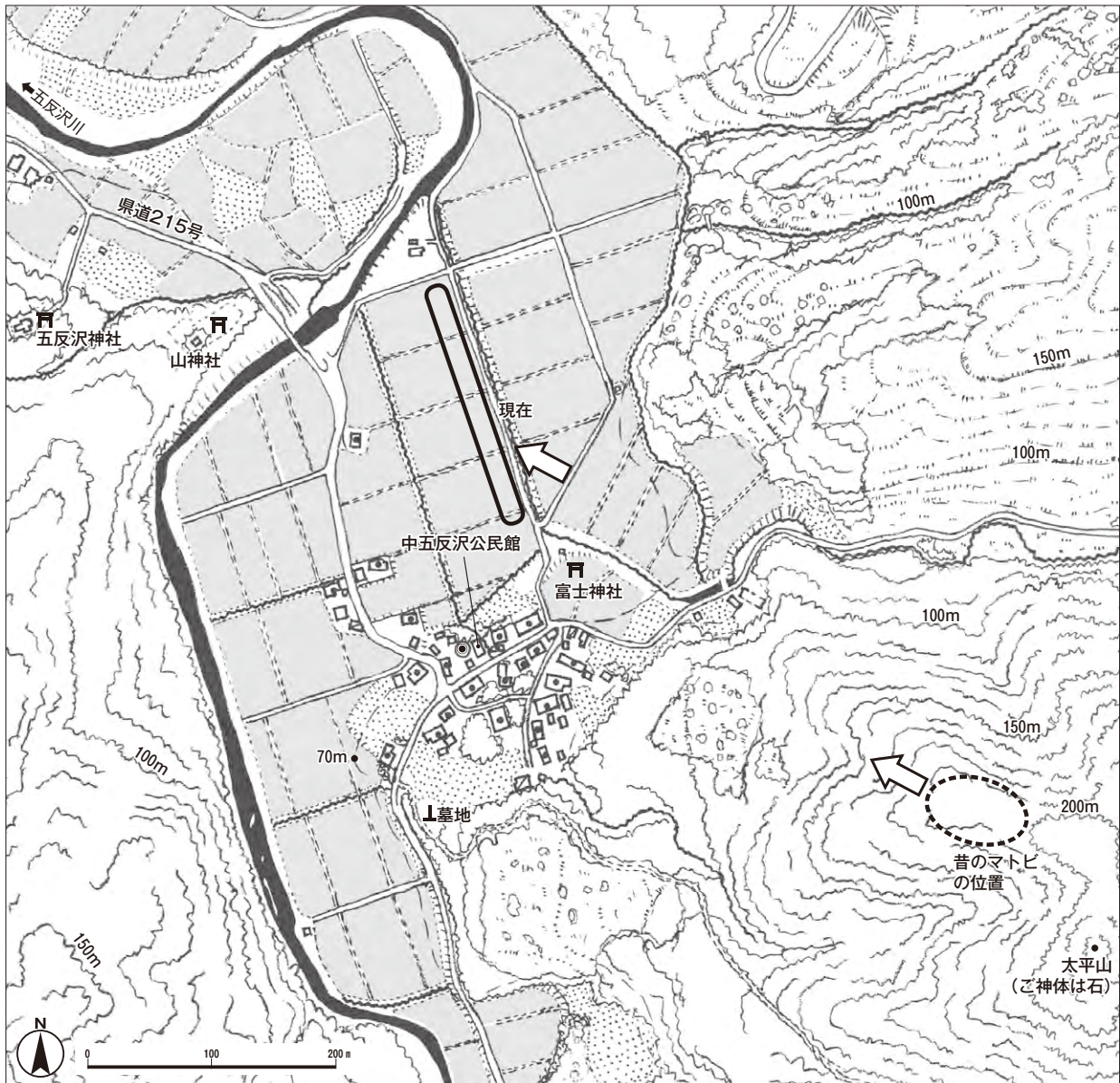
【昭和一八年（一九四三）～二二年（一九四七）頃】

話し手 山田善道氏（昭和七年生）

昭和一〇年代は小学校五年生から高等科二年生までの
一四～一五人で行っていた。マトビを焚く場所は、太平
山という山で、頂上には太平山と書かれた大きな石が立
っていた。子供だけで村中を回り、各家から藁束と協力
金・米一升などを貰って歩いた。集まった藁束を背負っ
て太平山に登った。藁束は、二〇～二五把をツナギ（数
本の藁を繋いで作り藁を縛るもの）で束ねて一マルとし
た。小学生は一マル、年長者は二マルを背負い、朝から
二、三回は往復した。登りは子供の足で一時間、帰りは
三〇分はかかった。芯棒になる直径一〇センチ、長さ三
メートル程の檜の木を山から伐ってきて、藁束を下から
縛り付けていく。藁は元と末を互い違いに交ぜ合せ一段
で二箇所ずつ縛り三段くらいに積んでいった。

子供なので木を寝かせておき、縛り終えてから立てて
雪に差した。五、六年生は一人一本、年長者は二、三本
作り、二〇本くらいは作った。マトビは五～六メートル
の間隔をあけて、山なりに二〇本を立てた。

【図155】中五反沢の新旧マトビの位置図



太平山はなだらかきれいな形の山だった。年長者の「時間だよ！」の合図で一斉に点火した。藁を燃やしたあとは顔も手も真っ黒になるので、すぐ下山して家で風呂に入る。その後宿に集合して馳走を食べ、サイダーを飲んだ。宿は毎年回りで決まっていた。この時の経費は子供達が集めた米や金銭を利用した。昭和三十三年（一九五八）頃はもう太平山では行わなくなった。

【現在のマトビ】

子供が一人しかいないので、若勢団が行っている。年齢は五〇〜六〇歳代の人達である。現在、戸数は一八戸あり、ダンポは各家で一五個ずつ作ってもらう。「中日・春」の文字や車マトビが四基と棒マトビが並んだ。この集落ではマトビを一度中断していたが、昭和五六年（一九八一）に村が補助金を出し、灯油を支給するようになってから再開し、田の畔でやるようになった。

【墓参り】

墓参りは、今も昔も、三回行く。昔は藁を小束で一〇把ほど持っていて、夕方暗くなりかけた頃、墓前で火を焚いた。供物はダンシと花ダンゴを持っていた。昔は生花は売っていなかったから、大きなカンコシバ（ミズキ）の枝に色の付いたダンゴを付けて持っていて、枝を切って他の墓にも分けて差した。

⑭下五反沢のマトビ

【昭和一〇年（一九三五）代頃】

現在の戸数 七〇戸

秋田県文化課の祭・行事調査実施に伴い村が作成した報告書『感想文と思ひ出・まといび』〔平成八年（一九九六）

の中に、小林健蔵氏が昭和初期頃のマトビについての思ひ出を執筆したものがあり、当時のマトビの様子を伝えている。

小学校高学年と高等科の子供達が四〇名くらいで行っていた。十数名が三班に分かれ、班ごとに山に行ってカマ（カマド）を作った。カマは子供達の遊び場であり寒さよけであった。雪を積んで厚み六〇センチ程の壁を作り、壁の高さは、一・八メートル程で、屋根には木々を渡してその上に杉の葉などを乗せて雪が入らぬようにした。中には「炉」をつくり、班の全員が入れる大きさにした。中では火を焚き暗くなるまで遊んだ（図一58参照）。

輪カンジキを履き、鉋と鋸を持って山に入り、手頃な松を伐ってきた。長さ二メートル以上、太さ九センチ程の枝付きの松を、山から下ろしてくるのは、重労働であった。本番の日には、高学年は藁束を一度に二〇把ほど背負って大海長根に運び上げ、縛って転がしておく、若勢団が松の木に藁束を落ちないように縛り付けてくれて山に立ててくれた。

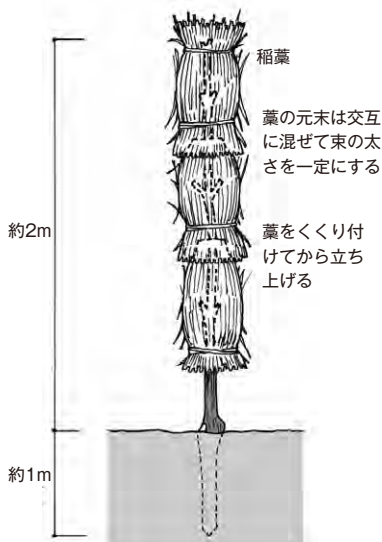
この時代には、藁を積上げたものを先に燃やし、その後ダンポを燃やし併用していたようだ。大海長根に立てたマトビは合川町の増沢からも見えたという。

マトビ前日は、集落を回って班ごとに米などを貰い集めた。米は金銭に替え、鯿を一人一匹ずつ買い、焼いて食べたこともある。また、必要なものは集めた協力金で買った。トウマエ（宿）になる家は、高等科の年長者の家で、そこに天ぷらやカマボコなどの巻料理などを各家から持ち寄り、腹一杯食べて楽しんだ。

中五反沢のマトビ（三月二〇日）



昔【図一56】中五反沢の藁松明型のマトビ



【昭和二四年（一九四九）～昭和三〇（一九五五）年頃】

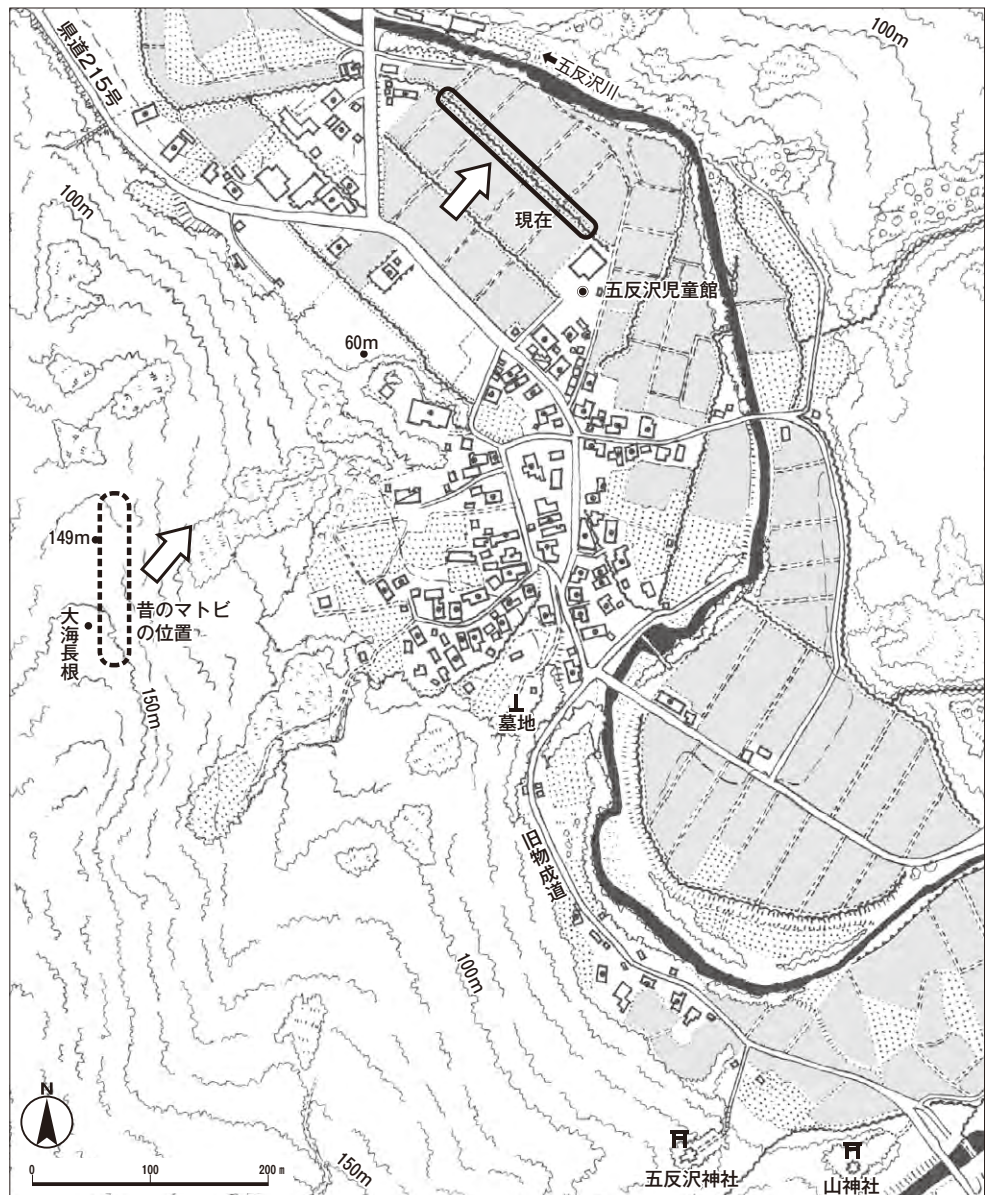
話し手 小林要一氏（昭和一四年生）

彼岸の中日に小学校四年生から中学三年生までの子供だけで行っていた。大人は手伝わない。冬休みに入った頃には、集って班をつくった。一班が一〇人くらいで、三班あり、三〇人はいいた。班ごとに分かれマトビ小屋を作った。

マトビをする山は「大海長根」といい大海のマトビの場所と隣合っていた。枝の付いた松を伐ってきて、芯棒にした。太さ九〇センチ、長さ二メートルほどのものを、マトビの場所まで運んだ。藁集めは、子供達の役目で、各家を回り、金銭や藁束、米、ミノなども貰った。集めた金銭で年長者達はドブコクなどを買ってマトビ小屋で飲んだりしたこともあった。

藁は、ひとにぎり（直径九センチ程）の束を一把という三〇把ほどを縛って、それを背負って五、六回山に登った。一人で一五〇把から一八〇把を運びあげた。松の木は芯棒に藁の束を縛りつけていく、元が上、末が下になる場合もあり、その逆になる場合もあるが、藁束を一段ずつ縛りながら、三段ぐらいに積み、一番上は広がるようにしてキノコ型になる。一人が一本か二本作り、五〇～六〇本は作った。縛り終わったら、適当な間隔をおいて立てた。中には小さいのもあり、それをココ（少々）マトビと呼び、それらを先に点火して、後に大きいのを燃やした。昭和二九年（一九五四）頃は、ダンポと灯油に変わった。ダンポをケン（又木の棒）に吊すようになってからも、藁積みものものと併用して山の上で行っていた。その後、山

【図157】下五反沢の新旧マトビの位置図



下五反沢
江戸期には集落を通る吉田街道は物成道と呼ばれ、阿仁銅山への物資供給路であった。五反沢川流域は山林が豊富であり阿仁銅山の銅山掛山（用材専用の山）であった。

の杉の木が伸びてマトビの火が集落から見えないので、昭和三〇年（一九五五）代には田に下りた。田の中に移ってから、棒を立て、そこに縄を張ってダンポを吊したが、その後針金を張るようになった。文字の仕掛けを作るようになったのはもっと後のことである。字は自然の木材を利用して、針金で縛るなどし、「中目」「下五反沢」と作って、そこにダンポを吊した。田に場所を移した時はまだ子供だけでマトビを行っていた。

マドビが終わると回り番で決まっていたトウマエに集まり、そこに各家から貰った米や味噌、金銭を渡しておく。と母親達が料理を作ってくれて皆で食べた。

【現在のマトビ】

一〇人位の若勢団が、マトビを行っている。人数が足りない年は役員が手伝いに入ったこともある。ダンポは、若勢団が仕事の後に公民館で作っている。前は各家に五個ずつ割り当てだった。七〇戸ほどあるので三〇〇〜四〇〇個は作っていた。文字は、単管で「中目・仏」などと作り、ダンポをその周りに吊している。

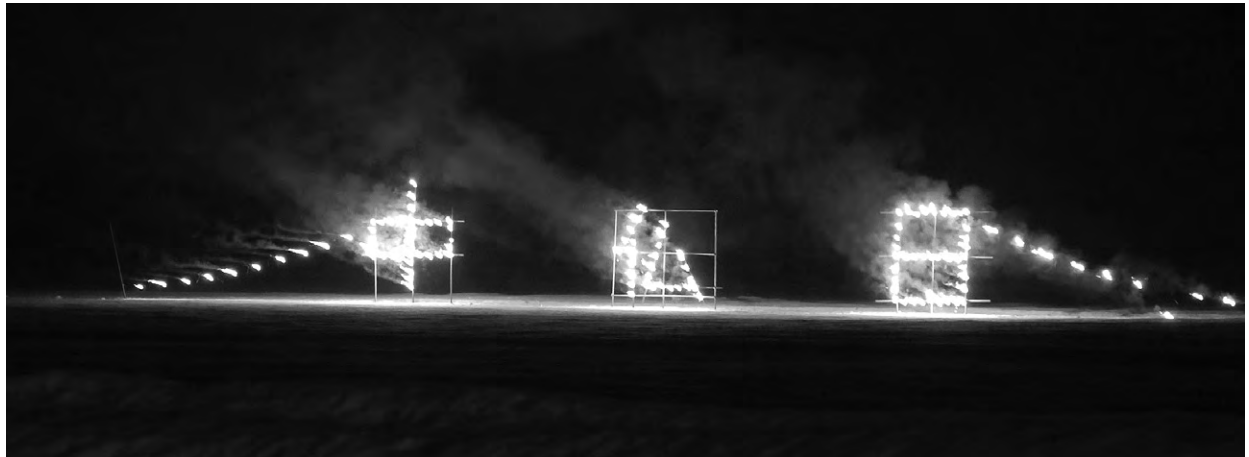
【墓参り】

昔と同様、今もイリと中目とオクリの三回いく。藁を焚いていたが、それがダンポにかわり、今は焚かなくなった。昔は石塔のない家が多かった。この辺りは先祖の墓と自分の家の墓があるので、藁束は三〇把ほど持つていて両方に分けて燃やした。藁束は立てて燃やした。

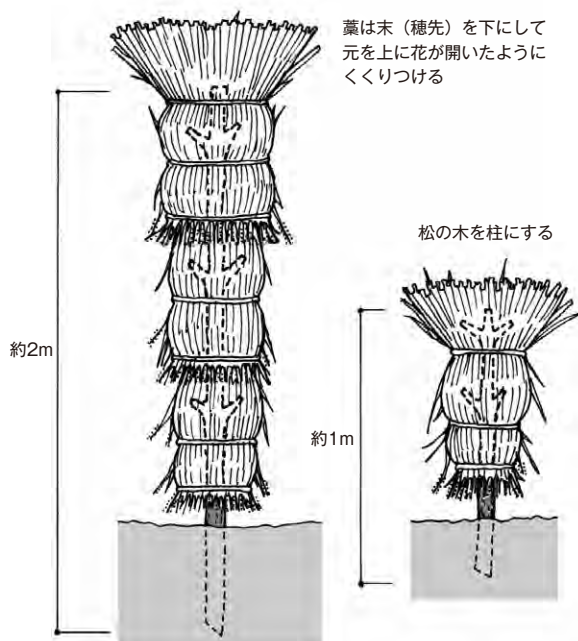
⑯大林のマトビ

現在の戸数 六九戸

【昭和一〇年（一九三五）代〜昭和二九年（一九五四）頃】

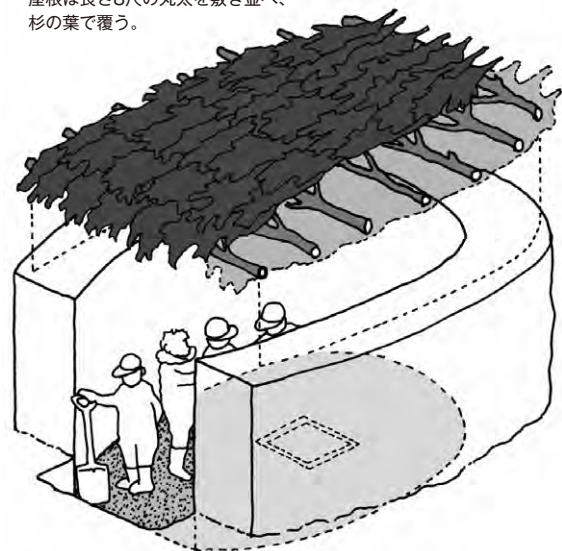


下五反沢のマトビ（三月二〇日）



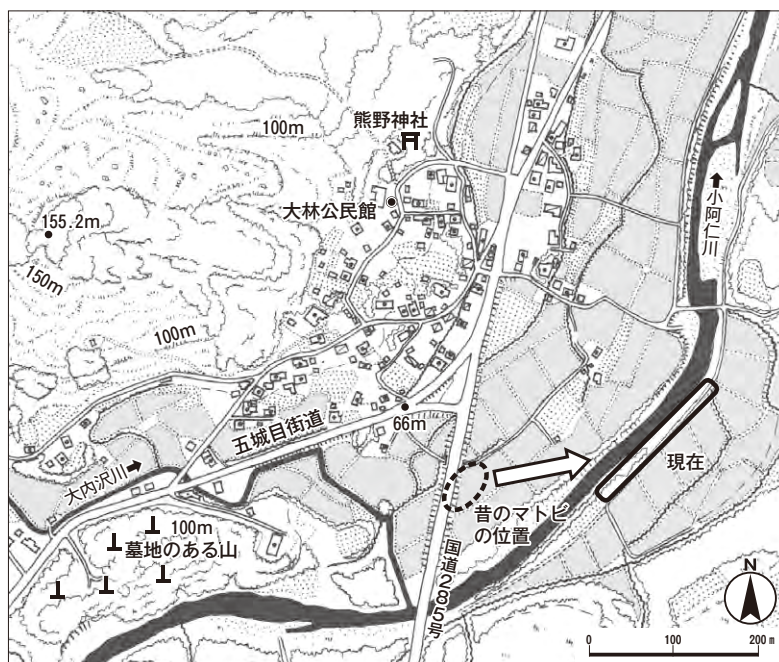
【図・59】下五反沢の藁松明型のマトビ

壁の高さは6尺（1.8m）ほど、壁厚は2尺（60cm）前後。屋根は長さ8尺の丸太を敷き並べ、杉の葉で覆う。

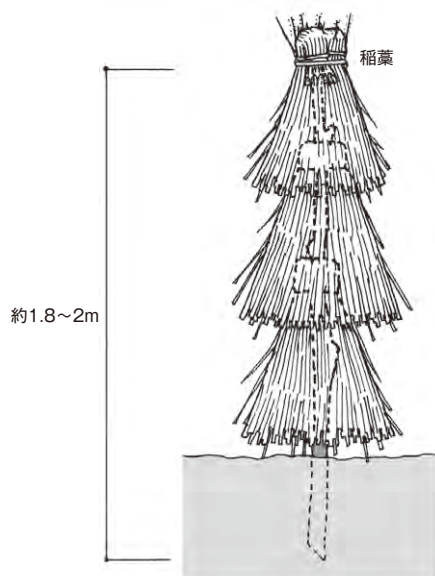


【図・58】子供たちのカマド（作業用の出小屋）（下五反沢）

【図-60】大林の新旧マトビの位置図



昔【図-61】大林のかつてのマトビ



話し手 小林重一郎氏(昭和一四生)

大林は小高い山全体が土葬の場所であり、現在そこに石塔が並んでいる。本当は墓前で火を焚くべきだが墓が増えて場所が無くなってしまい、田の中に柱(棒)を立て、藁を積上げたものを五、六本作り、それを集落単位で彼岸の中日に燃やした。

運営は役員と若勢団が行っていた。子供が行うというようなことはこの集落ではなかった。

東洋大学民俗研究会『上小阿仁村の民俗』(昭和五四年(一九七九))では、大林は墓の前で藁を丸く積んで焚いたものを「マトビ」と呼んだとあり、火は彼岸の入りと中日とシマイに焚かれ、「イリ」の日には「マトビ マトビ コノヒノアカリデ ハヤク キトシキトシ」と唱え、「中日」には「マトビ マトビ コノヒノアカリデ ハヤク ヤスサレヤ」、「シマイ」には「マトビ マトビ コノヒノアカリデ ハヤク イケイケ」と唱えたと言う。田の中で、柱を立てて、集落単位で藁を積上げて行うようになってからは、唱え言葉をいった記憶はないという。

【現在のマトビ】

集落の役員が八人と、若勢団などの三〇〜五〇歳代の人を四、五人頼んで、一、二〜一、三人行っている。五年ほど前から子供達も来なくなった。現在女子中学生が一人だけになった。一月頃、村役場からマトビに参加するかどうか打診がある。参加するとなると村から補助金と灯油がでる。村が補助を始めた昭和五六年(一九八一)頃よりは、補助金も灯油も減少している。二月には役員会

大林のマトビ(三月二〇日)



があり、その年のマトビ行事について話し合い、三月に入ると具体的な準備を開始する。ダンポは全戸にお願いし、各家に五個以上作ってもらう。三〇〇個は確保できる。布や使い古しの軍手などを役員が集め、各家に配布し協力してもらう。直径一〇センチほどに丸くしたダンポは紙ひもで縛ってもらう。役員が各家から回収し、その後公民館で針金で縛る作業をする。針金はしっかり縛らないとダンポが最後まで燃えないからである。マトビは彼岸の中日に行われ、川向の土手と水田の間のごとろに作られる。

当日、朝から単管を組む。「大林中日」とか「大林コブスギ」などという文字を書いた時もある。その両脇に針金を張ってダンポを吊す。午後からダンポに灯油を染み込ませ、夕方点火するまでに灯油が乾燥するのを防ぐため、最近はナイロンの袋に入れる。夕方までにはダンポを吊す。点火時間は役場によって決められていて、それに従って点火する。

村からの補助金は材料代と反省会に使う。集落からも補助金が出る。公民館で馬肉鍋、刺身、おにぎりなどを囲み反省会を行う。手伝いの婦人達には謝礼が出ることになっている。

片付けは翌日の早朝の五時から二時間くらいでやっってしまう。針金などのゴミは役場が回収する。

【墓参り】

この集落は神道の家が多いせいもあるのか、墓前で火を焚くのは彼岸だけである。神道は盆には焚かない。戦後は、春彼岸の中日だけに藁を一把か二把持って行って

火を焚いた。現在も中日にだけ墓前にダンポを持って行って、焚いている人がいる。

この集落ではシマイ彼岸には百万遍念仏を行う。昔は各家が順番に宿になり、そこで行っていた。今は公民館で行っている。現在はダンシは中日だけに作り、家の中では仏様と神棚（オヒサマ）、熊野神社の方角にあげる。墓にはダンシの外に果物や煮物、漬け物、菓子、酒など持って行く。神道は線香は持って行かないが、持って行く人もいる。

⑬^{おだせ}小田瀬のマトビ

現在の戸数 一五戸

【昭和三十七年（一九六二）～四五年（一九七〇）頃】

話し手 小林明信氏（昭和三〇生）

五城目街道が通る交通の要地であり、大林の支郷であった。大林と同じ小山を共同で墓地としている。小学校高学年から中学三年生が中心でマトビを行っていた。その頃は、一五～一六人はいた。昭和四〇年代（一九六五）に入ると小学校二、三生から中学生で行うようになった。昭和の三〇年代（一九五五）からダンポで文字を作ったマトビを行っており、車マトビもあった。

マトビの場所は、菊桜岱という山の斜面だったが、現在、国道になっている。菊桜岱の斜面に文字の仕掛けを作りダンポをそこに吊して燃やした。

子供だけでマトビ小屋を作った。雪を丸く掘って壁にし、そこに雑木で柱を立て、屋根にも木を渡して藁で囲った。これはマトビの仕掛けを作るために、子供達が行った作業用の小屋だが、中日のマトビの終わり際かシマ

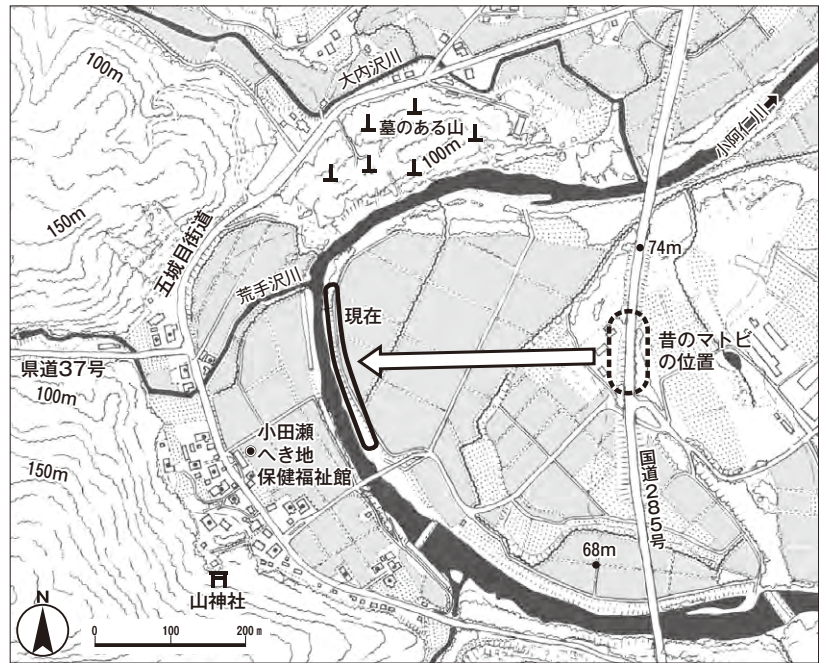


大林の百万遍念仏（三月三日）



大林と小田瀬の墓地（三月二〇日）

【図-62】小田瀬の新旧マトビの位置図



小田瀬
大林集落からの分村である。墓地は、大林集落と間にある小さな山にあり、大林と同じ場所である。かつては、五城目街道の通る要地であった。

イ彼岸に燃やしていた。

子供達が中心で行っていた頃は、戸数が二五戸あったので、各家から五〇〇円ずつ集めて灯油や針金を買った。灯油はたくさん買えないので、廃油を混ぜていた。子供だけでドブロクを買ってマトビ小屋で飲んだこともあった。マトビが終わってから、宿で食事をしたり菓子を食べた。また、シマイ彼岸には、数珠回し(百万遍念仏)を女性と子供達で行っていた。

昭和四五年頃(一九七〇)には、集落に子供がいなくなつて、マトビは一度中断した。

【現在のマトビ】

マトビを再開したのは昭和五二年(一九七七)頃である。それからまもなく、村が補助金を出し、灯油を支給してマトビを観光として行うようになった。

現在は、四六、六六歳ぐらいまでの若勢団の八人が主体となり、マトビの当日だけは、郷役で各家から一人ずつ出してもらうことになっているので、総勢二、三、五人ぐらいになる。ダンボ作りは各家に二〇個ずつ作ってもらうようにお願いしている。三〇〇個は集まる。灯油は村から支給されたものに廃油も混ぜている。廃油を入れると赤い色に燃えてきれいだ。

運営費は村からの補助金と集落から補助金がある。マトビの場所は河原になり、仕掛けが川面に映えて美しく見える。現在もシマイ彼岸に女性と子供達が公民館で数珠まわし(百万遍念仏)をしている。

【墓参り】

大林と同じ小山を共同で墓地としている。昔は、彼



ダンボを灯油に入れ準備する(平成一三年)



小田瀬のマトビ(三月二〇日)

岸のイリ、中日、シマイの三回とも墓参りに行き、墓前で藁を燃やしたが現在は様々である。

(二) マトビをやめた集落

⑦ 南沢のマトビ

現在の戸数 二二三

【昭和二年（一九四七）～昭和四〇年（一九六五）頃】

話し手 鈴木欣一郎氏（昭和一〇年生）

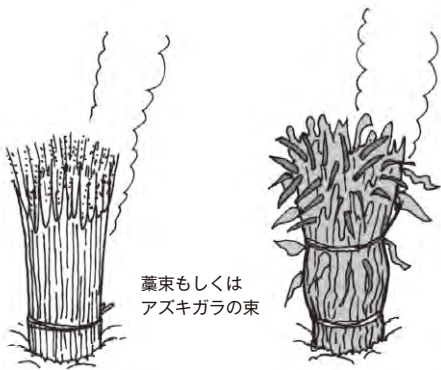
小学校四年生から二三歳ぐらいまでの大人とで、一坪ぐらいの小屋を作った。雑木を集め、合掌の形に屋根を掛け杉の葉などで覆った。これをカマクラといい、中で火を焚きダンシなどを焼いて食べた。この後、暗くなつてから、小屋の中に藁や豆がらを入れて、彼岸の中日に、この小屋を燃やした。また、墓の中央や畑で、藁束、豆がらなど盛りあげて火を焚いた。これは、彼岸のハジメとナカとシマイの三回行った。彼岸のハジメには仏を迎える言葉を唱え、ナカ（中日）には供養の言葉を、シマイには仏を送る言葉を唱えた。

東洋大学民俗研究会『上小阿仁の民俗』（昭和五四年（一九七九））には、この集落では、この火をカスビと言い、仏がカスビの匂いを頼りにやってくると言われていたと記されている。このやり方は昭和三〇年代も続いていた。昭和四六年頃（一九七二）にはダンポと灯油の形になっていて、廃油を使って一〇年ほど行った。

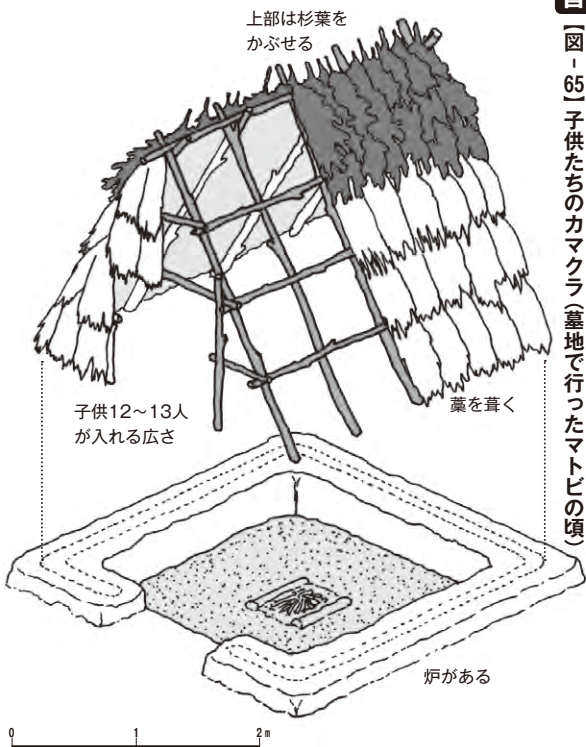
【現在のマトビ】

話し手 伊藤忠夫氏（昭和一九年生）

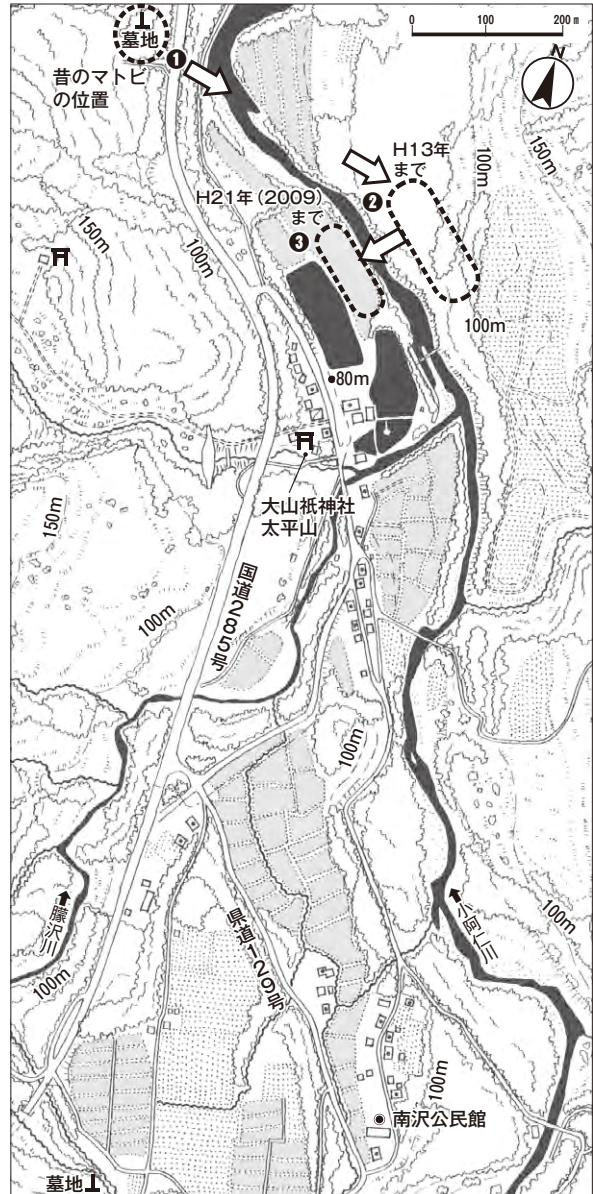
村から補助金が出て、灯油が支給されるようになってから、墓地の下の方の川向いの辺りでマトビをし、二〇数年



昔【図一64】墓地で行っていたマトビ

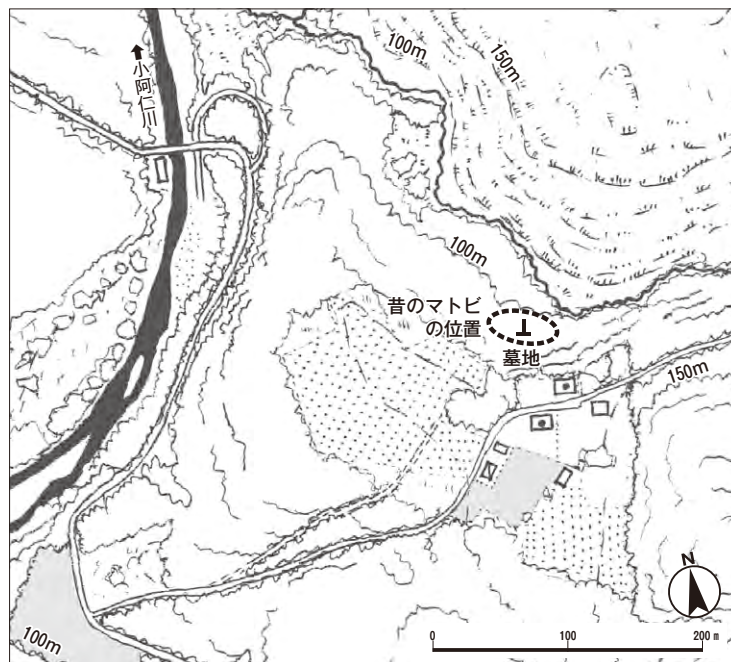


昔【図一65】子供たちのカマクラ（墓地で行ったマトビの頃）



【図一63】南沢の新旧マトビの位置図

【図-66】不動羅のマトビの位置図



昔【図-67】不動羅の墓参り

藁束を下方で回して
から燃やす



参加したが、平成二十二年（二〇〇九）で参加をやめた。戸

数は二二戸だが、空家が二戸あり、高齢者の一人暮らしも多く、実施できなくなった。最も人数が多い時で二〇人で運営していた。郷役といって、集落の行事には各家から一人ずつ出してもらうことになっていた。ダンポ作りも二〇人が一人二〇個を作り、二時間で四〇〇個を作っていた。木の棒から単管に変えて、文字の仕掛けや車マトビも特注で作って行っていたが、子供はいなくなり、若い人も四、五人になって、郷役にも参加できない状況の家が増えたため、集落として観光マトビに参加するのをやめた。

【墓参り】

戸数が減るにつれて墓も減った。墓参りは三回するが、墓で焚く藁も一束ほどに小さくなった。藁は雪の中に元を下にして立て火をつけた。最近はずの中にも灯油とポロ切れを入れる形に変化した。墓で大きく火を焚くこともしなくなった。

⑮不動羅のカスビ

現在の戸数 二戸

話し手 山田シゲ氏（昭和七年生）

小阿仁川が上流から流れてきて「く」の字に曲がるところに集落がある。東から西に伸びてきた舌状の台地で、南と北は深い谷で区画され、西には小阿仁川が流れている。新田開発でできた集落である。延宝五年（一六七七）に南沢から分立し支村となった。享保八年（一七三三）には戸数は四戸であった。耕地面積が少なく林業が主産業である。昭和五三年（一九七八）頃はキジ、ヤマドリ、の養

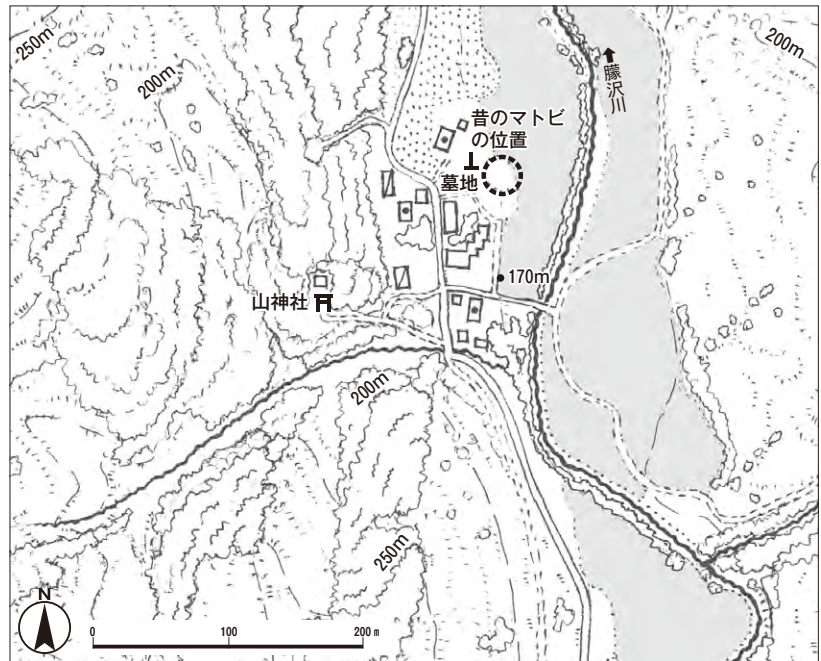
大山祇神社内部（南沢）



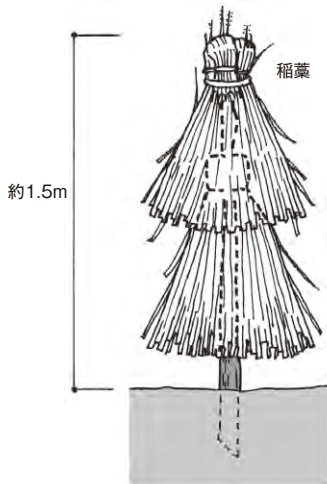
現在は、道をはさんで二軒の集落（不動羅）



【図-68】中茂の旧マトビの位置図



昔【図-69】中茂のかつてのマトビ



殖もしていた。狩猟を行う人もいた。

彼岸のイリ、中日、シマイの三回とも藁を墓地に持って行き、丸く積み上げて燃やした。この時、藁を長くして縛り、火を点けてまわしながら、墓に持って行って火を点けた。これをカスビといった。仏がカスビの煙と匂いを頼ってやってくるといわれた。

燃やした時、藁を回しながら、イリの日には「オジン、オバン、キトレキトレ」と唱えた。昭和三〇年代（一九五五）には唱え言葉があった。

供物は小豆やきな粉のダンシだったが、雪の上にそのまま置いてきた。現在は二戸になり、高齢化が進んだことから、墓までの除雪もままならず、カスビを持って墓参りはしていない。

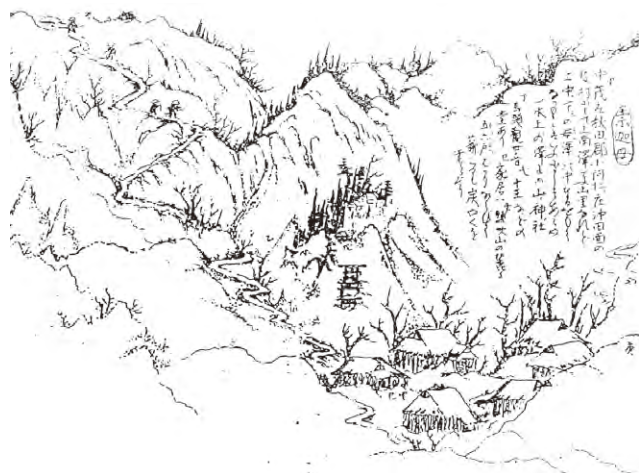
⑬中茂のマトビ

現在の戸数 三戸

【終戦後のマトビ】

話し手 伊藤修広氏（昭和九年生）
上小阿仁村の南西部に位置し、五城目町と隣接している。また中茂は菅江真澄の「雪のやまごえ」に記録されている。菅江真澄は、文政三年（一八二〇）の中茂の様子を、沖田面の支郷であり、水上の沢に山神社、馬頭観音、十王などの堂がある。家居は塩吹山の麓に五、六戸並び、薪を売り、炭を焼くのが業であると記している。

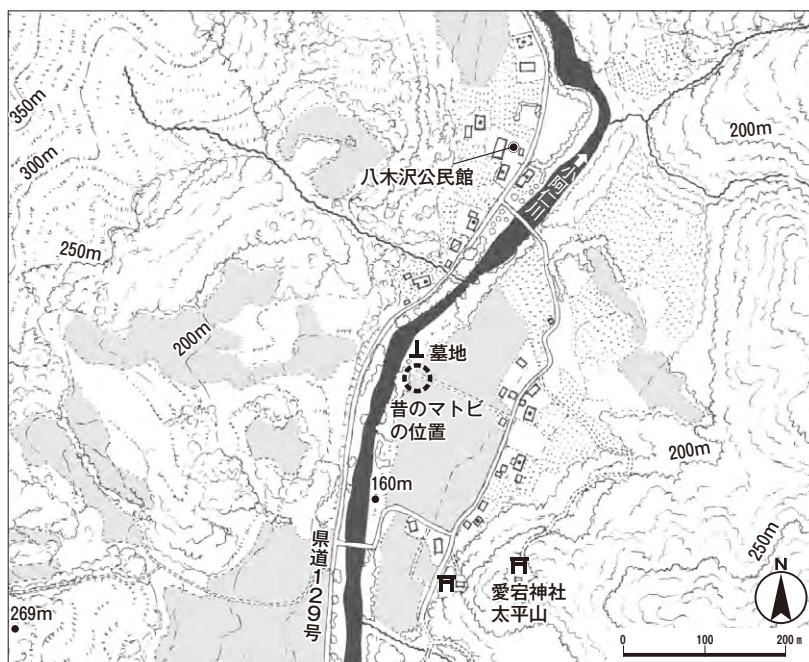
国道ができる以前は、集落内を通る道が五城目から阿仁銅山へ抜ける主要道であった。生業は林業、農業であった。昭和三十六年（一九六一）頃は十一戸あり、米を作っていた家もあった。昔は各戸では馬を飼っており、軍馬



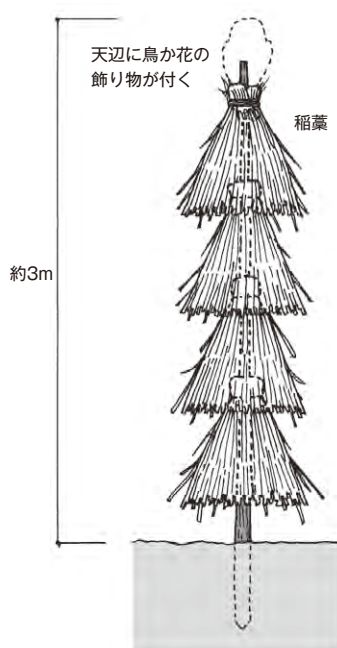
中茂の墓地



【図・70】八木沢の旧マトビの位置図



昔【図・71】八木沢のかつてのマトビ



としても出していた。

集落単位のマトビは、山で焚くようなマトビはなく、中日の三時頃に墓地に行つて焚いた。墓地に一・五メートルくらいの棒を立てて、藁束を二、三段くらいに積んで燃やした。個人では彼岸のイリ、中日とシマイの三回、夕方に墓に行き、墓前で藁を少量燃やした。燃やす間、唱え言葉があったが、現在は行わない。

供物としてダンシや花ダンゴを持って行つたので、墓は彩り豊かだった。供物は先に無縁墓から供えるものだったという。マトビは平成になって一回だけ行ったが、現在は行っていない。

②八木沢のマトビ

現在の戸数 八戸

【昭和初期頃からのマトビ】

話し手 佐藤良蔵氏(大正一三生)

この村は江戸後期に根子の松五郎が焼き畑を作り、その後、根子から七人とともに移り住んできたことから始まったと伝えられる。現在、上小阿仁村の最南端に位置し、集落の中央を小阿仁川が流れ川漁も盛んであった。マスやアユを、集落の全戸が協力して獲る「アメナガシ」⁽⁴³⁾という漁も行っていた。また、ゆるやかな傾斜を利用して水田を作り、焼畑も盛んな集落であった。昭和三〇年代半ば頃は三二戸あり、全戸が狩猟もやっていた。

この集落の若勢団は、高等科を卒業した人から、四二歳までの男性で構成されていたが、集落単位でやるマトビは、この若勢団が中心になって行っていた。

⁽⁴³⁾

八木沢で行われたアメナガシは、トコロイモを袋に入れ、川にもって行って叩いて粉にしたものを流す。すると魚が仮死状態になって浮かび上がり、それを獲る漁のこと。盆前に全戸が協力して行つた。

八木沢の墓地、墓石(右)の前で藁(左)を焚く



墓地の中央に高さ三メートルほどのハザ木を一本立て、藁束を段々に積上げて縛る。天辺には、鳥か花を形どったものを乗せた。墓地の広いところに一本作り燃やした。昭和四十六年（一九七二）には過疎が始まっており、昭和五〇年代（一九七五）まで続いていたがやめてしまった。マトビを焚くのは、彼岸のイリか、中日のどちらかであった。マトビを焚くと、子供や年寄りが見に来たが、燃えている間、手を合せると願い事が叶うといわれた。上小阿仁村の中でも八木沢の辺りは雪深く、冬場は毎日、雪掻きの日々で何もできないが、三月になると、固雪になり、薪割などをして運搬が可能になる。雪から開放され春が来ると思うと、皆がほっとして何かを始めようとする。そういう時期にマトビがあった。

【墓参り】

以前は土葬なので墓地には墓石はなかった。大きな石を数個置いた程度だったので、雪で埋めると墓所を掘り出すのが大変だったが、石と石の間に供物を置いてきた。ダンシや菓子、酒、水、線香などを持って昼に墓参りし、夕方には墓前で藁も燃やした。藁は立てずに横にして燃やした。



八木沢の墓地、墓所を掘り出すのに一苦労する

【第四章】

北秋田市

旧合川町のマトビ

一 旧合川町の概要

(一) 生業と歴史

南北に、阿仁川、小阿仁川が流れ、北部の米代川に合流している。北部の大野台一帯は、洪積台地で、草地森林として放置されていたが、昭和十二年(一九三七)に県営開墾が計画され、戦後の入植により、新しい開拓地として脚光を浴び新村も生まれた。西部は、平均三〇〇メートルの丘陵が南北に走り市郡界となる。付近一帯は杉樹林で覆われ、秋田杉の代表的産地であり国有林が多い。北部の羽州街道に通じる阿仁川沿いの阿仁街道、小阿仁川沿いの小阿仁街道に分布する集落は、中世からの歴史のある集落が多い。

見事な杉樹林は、江戸初期に御留山として藩に支配管理され、寛政以後(一七八九)にその範囲は拡大していった。⁽⁴⁴⁾御留山とは、藩が財政収入源、または、森林資源保護のため、杉、桧、松、栗、赤松などを保護し農民の自由な伐採を禁じた山である。雪田沢、孫七沢、下大内沢、羽根山沢、芹沢、増沢などがそれにあたり、小阿仁川下流の各集落は、御留山の麓村であった。麓村とは、藩から山の日常の保護を委託された村のことである。雪田沢の麓村は鎌沢村、孫七沢は三木田村、下大内沢は三里村、西根田村、羽根山沢は羽根山村、芹沢は木戸石村、増沢は増沢村という具合に、各集落が森林を保護しながら、雑木の払い下げ、肥草、茅の採取が許され、家作用材、炭焼木などが拝領できるという慣行があった。

近代の農業は、明治末期から大正期にかけての乾田化と馬耕で生産量が上がリ、養蚕は明治中期から増加し、大正八年(一九一九)に落合村に殺蛹乾燥所、李岱で生繭市場が開催されるなど、大正期には興隆期を迎えた。

各集落は、農業ばかりでなく、杣や川船大工、運搬業、漆の取立、樺細工等の山を利用した産業、豊かな川を利用し、鱒、鮭、鮎、背黒などを捕獲する川漁に従事するものなどがいた。木戸石、上杉、鎌沢、三里の馬産や、西根田の薬業などもあげられる。また、米代川、小阿仁川、阿仁川は、阿仁鉱山に関する物資を運搬する川船で賑わい、各街道もまた、大館、久保田方面に移動する人々で賑わい様々な業種が営まれた。

明治三十二年(一八八九)までには、村々の合併が進んだが三年後に大野村が上、下に分割した。上大野村(川井、上杉、下杉、道城)下大野村(増沢、木戸石、八幡岱新田)落合村(李岱、新田目、福田、羽根山)、下小阿仁村(根田、芹沢、三里、三木田、鎌沢)となった(表1参照)。

このとき三千町歩の森林は国有林のままで、地元民は、営林署労働者として稼働し、農業の兼業として収入補填源となった。大正一四年(一九二五)には、森林軌道の固定設備が計画され、旧下小阿仁村根田から上小阿仁村沖田面まで開通した。根田には貯木場ができ、昭和五年に落合営林署が七座に移転することが決まるまで地元を潤した。この後、軌道は七座まで延長され、貯木場は天神に移った。

昭和三〇年(一九五五)に、上大野村 下大野村 落合村 下小阿仁村が合併し合川町となり、人口は一万三千

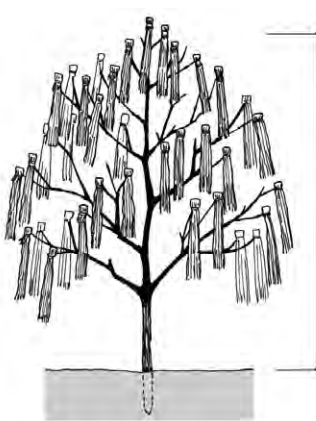
(44) 合川町役場『合川町史 郷土のあゆみ』秋田県北秋田郡合川町 昭和四十一年(一九六六)八六〜九〇頁

李岱集落の家並



昔(図172)上杉で数年に一度墓の広場で焚いたマトビ

約3m
~4m



山本郡藤里町根城で焚いた「ババガミ」と同形

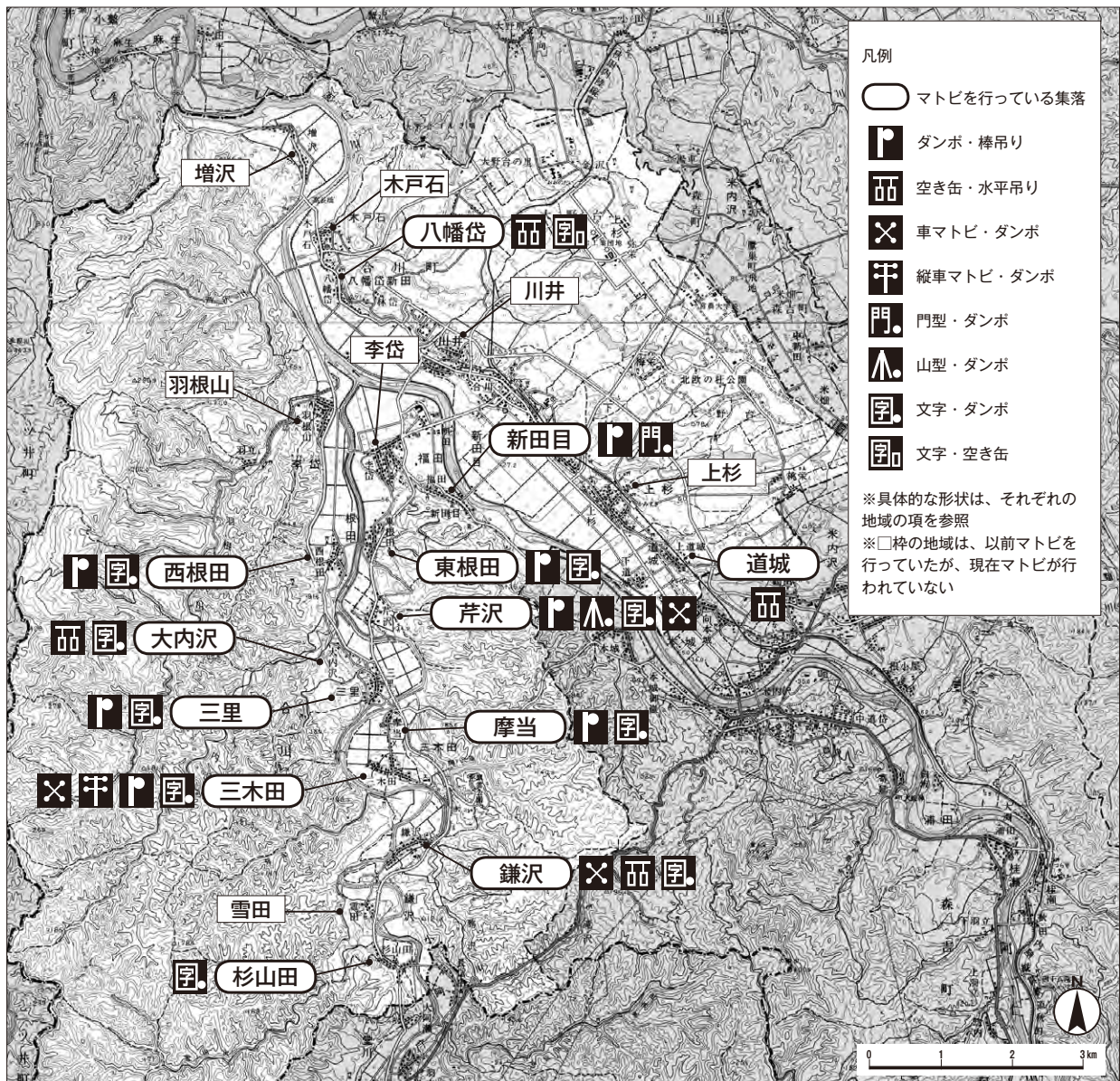
人となった。この時期、農業が基幹産業であったが、大野台を中心に、米代川中流域集約酪農地域となり、多角経営に移行していった。副業としては薬工品、葉タバコやトマト栽培、栗の植樹、また鯉の養殖や鮎の放流などにより川漁が伸びていった。平成一七年には、合川町、鷹巣町、森吉町、阿仁町が合併し北秋田市となった。

二 阿仁川と小阿仁川沿いのマトビの違い

小阿仁川下流の旧下小阿仁村では現在九集落で集落単位のマトビを継続している。しかし、阿仁川沿いの旧落合村で、集落単位のマトビを継続しているのは、新田目の一集落、旧上、下の大野村では、八幡岱新田と道城、二集落のみである。

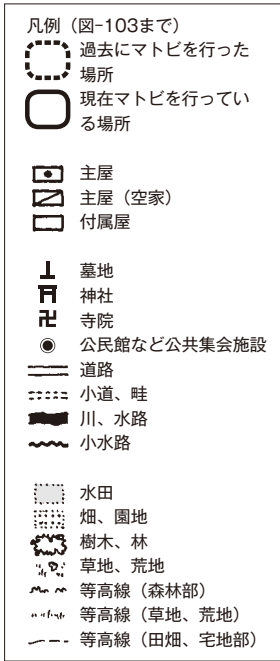
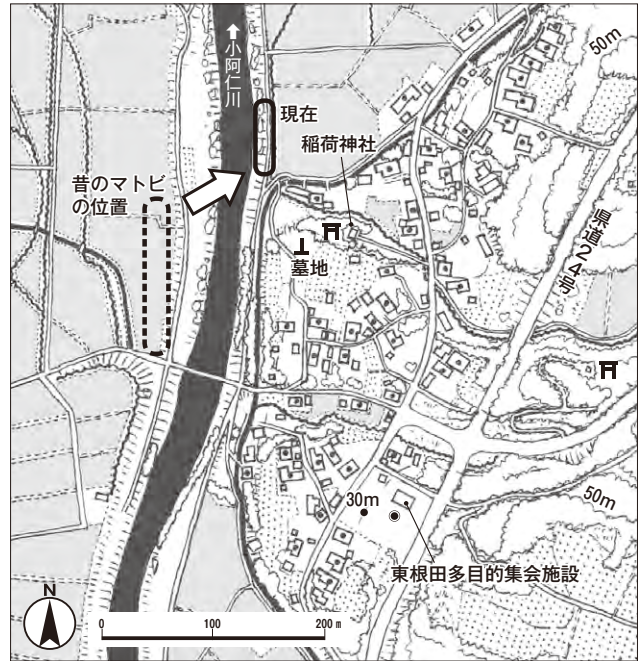
旧下小阿仁村の西根田、三里、三木田、鎌沢などの集落単位のマトビが昔は山の尾根沿いに松明を多数並べて焚くのに較べると、阿仁川沿いのマトビは、墓地や墓の見える田の畔、川沿いの土手などで焚かれた。

旧落合村の羽根山の場合は、集落単位でやるのではなく、それぞれの家が墓に行つて、一・八メートル程の棒を立て、その周りに藁を積んで、一五〇二〇把の藁を焚いた。朝は供物や花ダンゴなどを持って墓参りをし、晩になると「マトビを焚きに行こう」といって墓に行った。これは彼岸のイリと中日とシマイの三回やった。焚く藁の量もその家の藁の量により、二段にしたり、三段だったり、もっと高くしたり様々だった。季岱や木戸石、川



【図173】（北秋田市）旧合川町のマトビ、現状の形

【図-74】東根田の新旧マトビの位置図



井、下杉、上杉も同じやり方であった。

上杉では、何年かに一回はシマイ彼岸の日に集落単位で三メートル以上の枝のついた雑木を立て、二、三把の藁束の末を折って輪にし、「ツナギ」で縛り、枝に引っ掛けて焚いたという。(図-72参照)昭和二六年頃(一九五一)行っていたという。

李岱でも、昭和三〇年代には、各家が墓地に残っていた藁束を、シマイ彼岸に集め高く積上げて燃やした。藁の燃える臭いは独特のものであり、その臭いで供養をしていると感じられたという。コンバインが導入されて藁が無くなってから行わなくなった。

上杉の太平寺の前住職である亀谷健樹氏の話によると、各家が墓前でマトビを焚くのは、寒い冬が終わり春が来て、「寒かったでしょう、この火でぬく」とまって(温まって)「下さい」と先祖に語り掛け、先祖の霊を慰めるためである。しかし、集落単位で大きく作ったものを焚いたり、尾根づたいに多数のマトビを立てるのはまた違う意味があるような気がしているという。

三 各集落のマトビの詳細

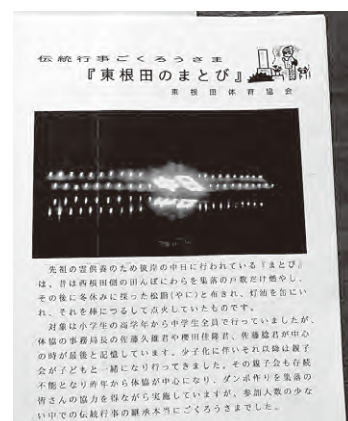
(一) 小阿仁川下流の集落のマトビ

① 東根田のマトビ 現在の戸数 四三戸

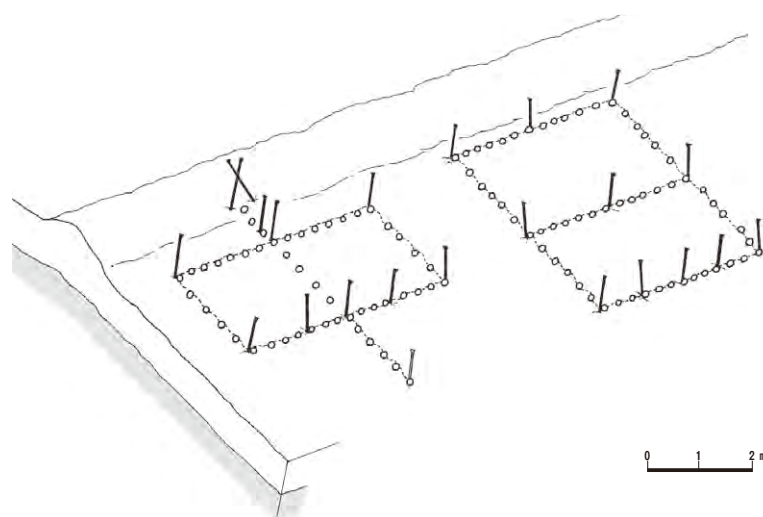
【昭和三年(一九四八)～二八年(一九五三)頃】

話し手 桜田日出雄氏(昭和一三年生)
当時は小学校三年生から中学三年生までの少年団の子

東根田体育協会のマトビの報告



今 【図-75】東根田の直置き文字マトビ



供達だけで行っていた。三〇人くらいはいた。冬休みから集落中を回って藁束を集めて歩いた。また、山に入り松脂を採って来た。雪を掘って、柱を建て、そこに合掌組の屋根を付けて簡単な小屋造った。神社の雪囲い用の菰を貰ったり、自分たちで編んだものを屋根に載せて覆った。

焚いた場所は川向いの西根田側にある東根田所有の田の中であつた。藁束を直径六〇〜七〇センチくらいに縛り、下を拡げて立てて、三〜五メートルほどの間隔を空け、それを二〇〜三〇カ所に並べた。また、缶の中に松脂と小さく切ったボロ切れを入れて灯油も少々加え、燃えている時間を長くした。直径二〜三センチ、長さは一・三〜一・五メートルくらいの木を山から伐って来る。缶に穴を開けて針金で釣り手を作り、又木の棒に掛けるようにし、三〜五メートルほど間隔を空け並べた。缶を吊した棒の一メートルほど手前に藁束を並べて二列にした。中学生の団長が戦時中使用したラッパを吹いて合図すると、上流の方から一斉に点火していった。点火する松明は棒切れに布を巻いて油か松脂を混ぜたものを使った。一回目は藁束の方に点火し、二回目は缶の方に点火した。運営費は、子供だけで行っていた時は各世帯が任意で協力を出していた。当時は五四戸あったので、灯油代の他に学用品や菓子なども買った。

【現在のマトビ】

昭和五〇年（一九七五）頃から親子会が代わって行いうようになった。現在の子供は小学生が五人と中学生二人だが、小学生の子供達が親と一緒に参加している。墓地近

くの小阿仁川の土手に針金を張って、「中日」の文字を書き、そこにダマを付けていく。昭和五〇年代に堤防を高くしたので、土手の向こう側の火が見えにくくなり場所を替えた。ダンポを灯油に浸し、ナイロンの袋に入れるのは子供達で、一生懸命手伝っている。棒マトビの方は直径二センチ、長さ一・二〜三メートルの鉄棒にダマを括り付けて差していく。

この集落には体育協会がある。これは、昭和五〇年代前半に若勢団や青年団に変わる組織としてできたものである。全世帯が加入しており、年会費などで千五百円を集金しているので、各世帯からマトビのための寄付金は募らない。マトビ運営費として集落が補助金を三万円出している。補助金で灯油代と慰労会の経費を賄う。

ダンポは各家に二〜三個ずつ作ってもらっている。現在四三戸あるが、五戸は空家である。協力してくれるのは二〇人弱である。不足分は役員が作っている。

【墓参り】

墓参りは、昔も現在もハツ、ナカ、シマイ彼岸（注①参照）の三回行く。朝、供物（ダンシ、菓子など）、酒、水、花を持って行く。現在、花は造花か生花になった。かつては墓参りの日にはいずれも夕方に藁束を焚いた。藁を五把束ねて元を上、穂の方を下にして立て、火は下から点けて燃やしたが、現在は粉ミルクの大きな缶に、灯油とボロ布を入れて燃やして墓に置いてくる。また、棒にダンポを付けたり、灯油とボロ布を入れた缶を付けて持っていく人もいる。



親達が土手に仕掛けをつくる



親子でマトビを吊す準備をする

②西根田のマトビ

現在の戸数 四二戸

【昭和八年（一九三三）頃から四〇年（一九六五）代】

話し手 金田正一郎氏（大正二二年生）

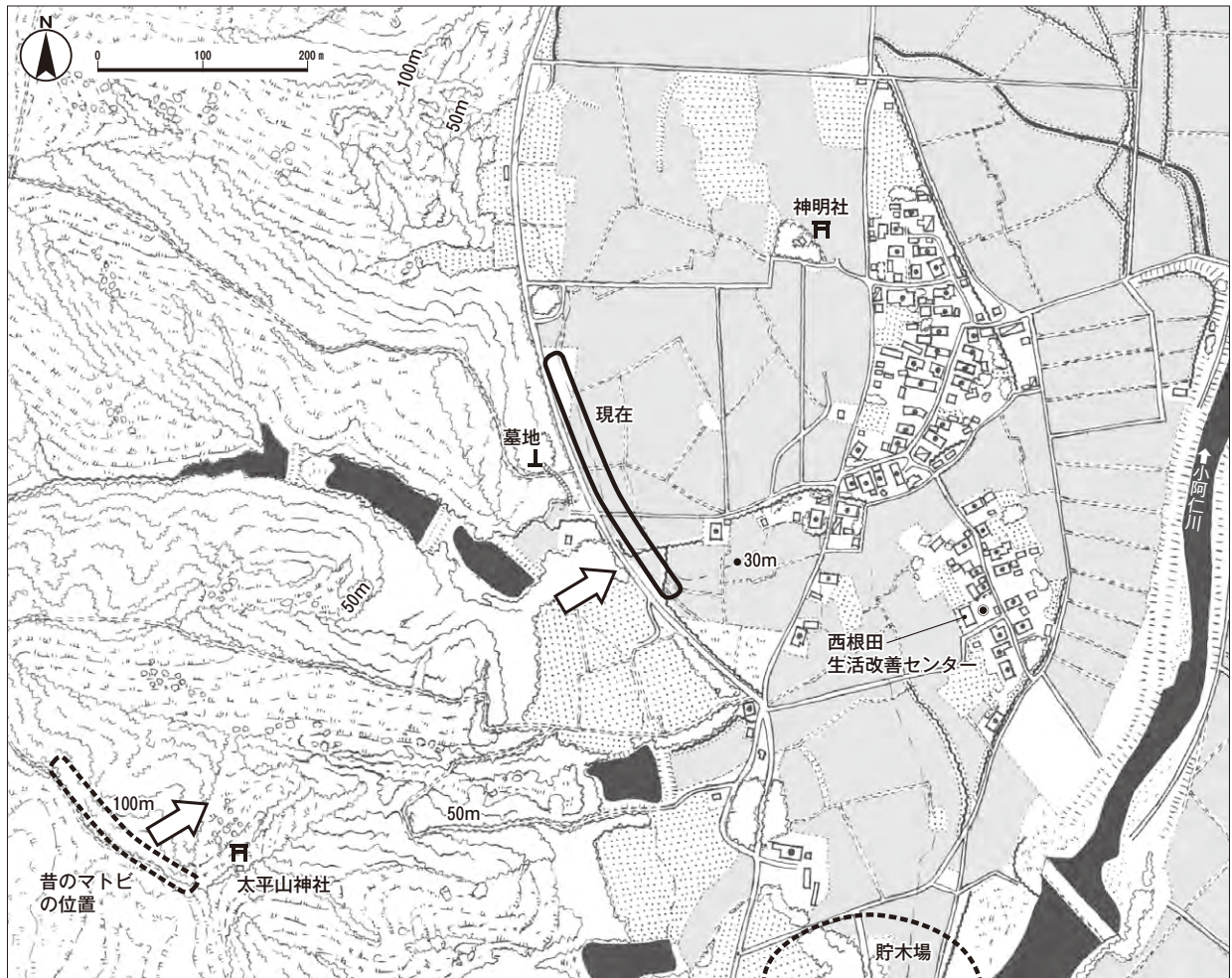
昭和初期には、小学校四年から高等科二年までの子供が行っていた。子供は五〇人ほどいた。西根田ではマトビ小屋は造らなかつた。マトビの場所は太平山神社の裏のあたりで山の稜線に焚いていた。

直径五、七センチ、長さ一・五メートルほどの木を、集落の山から採って来て、これに藁束を縛り付けたものと、布をダマにして針金で縛り棒に吊したものを、雪山に交互に立てていった。藁積みとダンポをそれぞれ一五〇本ずつ作り、一間ほどの間隔で並べ、一回目の点火では藁積み火を点け、二回目はダンポの方に火を点けた。太平山に点々と火が灯った。藁束の積上げ方は大正時代から変わらない。金田氏が、大正初期に生まれた人達に聞いた話では、この藁の焚き方は大正三、四年（一九一四、一五）頃から始まったという。

マトビを焚く日が近づくくと神明神社に藁束を集めておく。当日は小学生が一マル（二〇〜三〇把ほど）もある藁束を背負って午前中一回、午後一回山を登った。高等科の人達は三回山を登って藁束を運び上げた。山の上までは片道二キロほどあった。

夜の七時から二回点火して、山を下りてくるが、帰りは八時過ぎになった。夜道が暗くて不安なので、皆で軍歌を歌って帰った。当時は山に樹木が今のようになかった。ので火は鷹巣からも見えたという。

森林軌道がなくなった昭和四五年（一九七〇）以後、



【図-76】西根田の新旧マトビの位置図

西根田

昭和五年まで貯木場があり、以後、森林軌道が七座まで延長されると貯木場は天神に移った。



数年してから、山から田の方にマトビの場所を移した。下に降りてきてから、単管で文字を作るようになった。

運営費は、昭和初期頃は集落を回って、協力金や米などを貰ったが、一円を寄附してくれる人はなかなかいなかった。五銭とか一〇銭の協力金を集めた。全戸で六六戸ほどあり協力してくれた。集めた協力金で灯油と針金を買い、残った協力金で子供達のノートとか鉛筆等の学用品を買った。せんべいや菓子を買って食べるのも楽しみだった。昭和四七年（一九七二）頃はまだ子供だけでやっていて、各家に五〇〇円位は協力してもらった。

【現在のマトビ】

平成一八年（二〇〇六）には小学生五人、中学生三人、保育園児が一人で、親子会を中心に各団体が協力して実施した。文字は「中日」と書いている。車マトビ二基、材料は単管や鉄筋で一・五メートル程の長さの鉄の棒にダンポを吊したものを、一〇〇メートルほどの距離に差して、墓地下の農道沿道で焚いている。

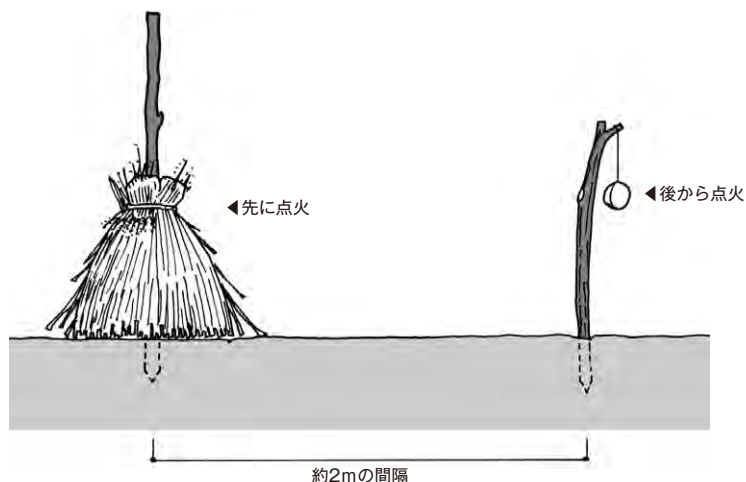
平成二五年には、子供の姿はなく、体育協会や寿クラブなどの団体のみになった。寿クラブがダンポを作り、灯油に浸けて袋詰め作業をした。運営費は各家の寄付である。

【墓参り】

墓参りは彼岸のイリ、中日、シマイの三回いく。現在、藁束は焚かなくなり、缶詰に灯油とボロ布を入れたものを焚いている。



昔【図-77】西根田のかつてのマトビ



③ 芹沢のマトビ

現在の戸数 四二戸

【昭和二九年（一九五四）～三〇年（一九五五）代】

話し手 土濃塚健一郎氏（昭和一九年生）

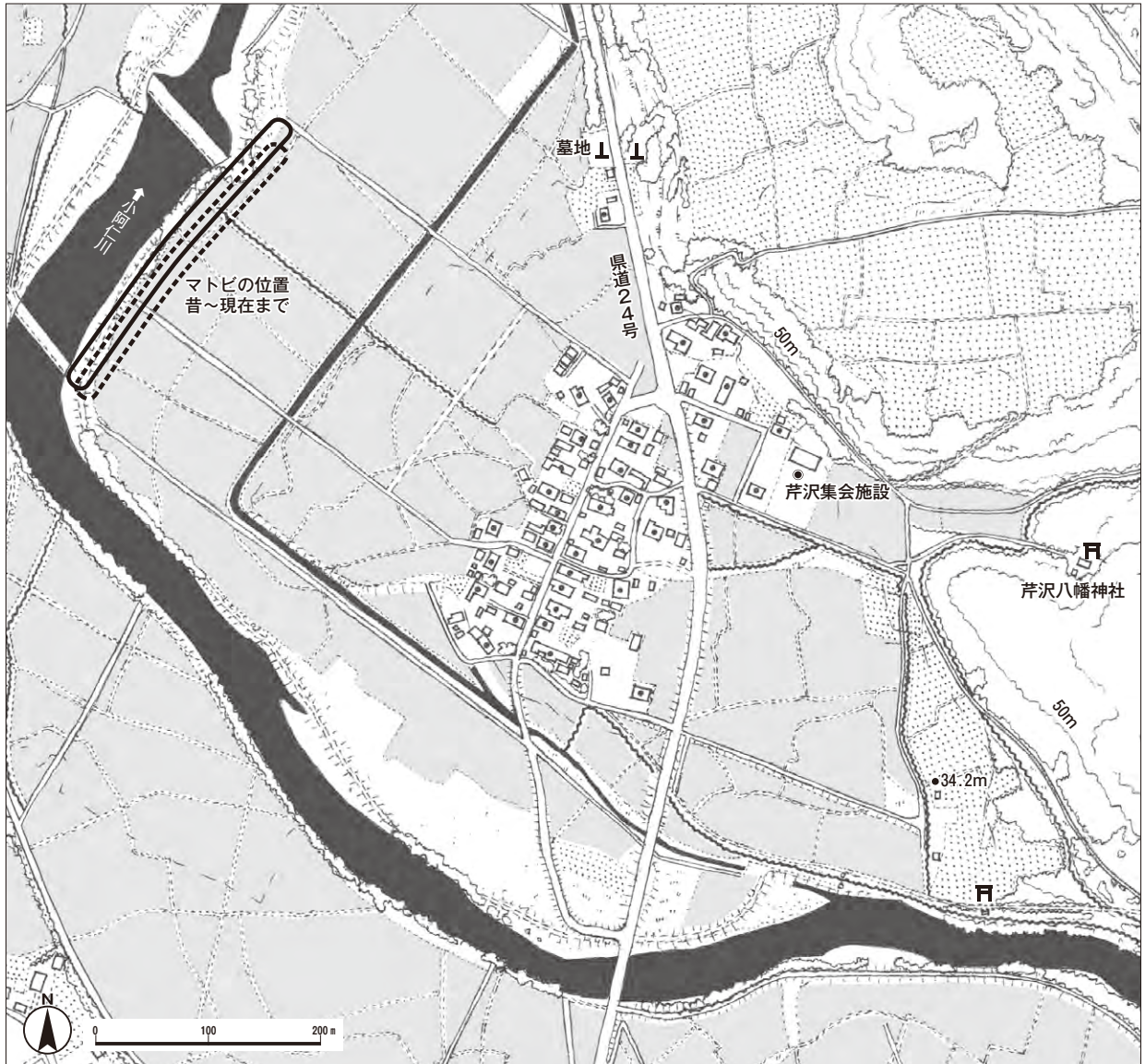
子供だけで行っていた。昭和三〇年代初めで、小学校三年生から中学三年生までが、二五～二六人はいた。ハザ木を利用して、マトビ小屋を作り、周りや屋根に菰を巻いて、中で火を焚いた。火の周りには、藁を敷いて座りみんな作業をした。ここで菰の編み方も習った。マトビ小屋は少年達の教育の場所でもあった。

学校が休みになると松脂を集めるのが子供達の楽しみだった。缶詰の缶を集めて、缶の中に松脂とボロ切れを入れて燃やした。ボロ切れは下着などの古着を叩いて柔らかくしたものを缶の中に詰め込んだ。松脂は、ある程度潰して布に混ぜれば燃えたが、燃え難い時もあった。両脇に高さ三間ほど（五・四メートルほど）の棒を立て、針金を二段に張って、そこに缶を吊して燃やした。

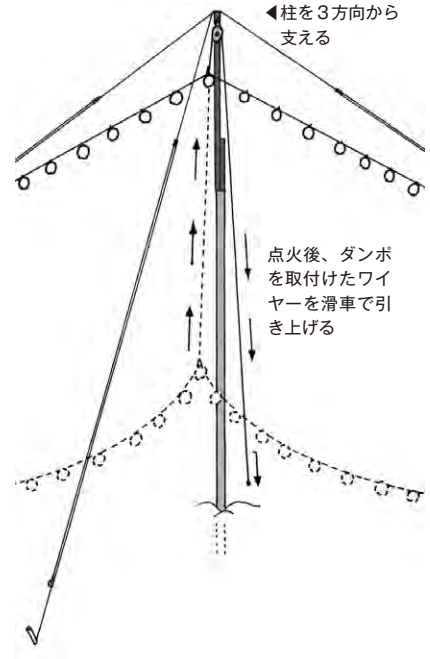
その頃、文字の仕掛けも作った。山から調達してきた適当な木で「セリザワ」と集落名をカタカナで形作り、そこに布を巻き、灯油を染み込ませて燃やしたり、ボロと松脂を混ぜたものを入れた缶を吊して文字を浮かび上がらせたりした。昭和四四年（一九六九）に田の区画整理があった頃は、布を玉にして油を染込ませたダンボを使った。車マトビも適当な木を探してきて自分達で作った。

マトビの場所は、墓の見える田で、現在の場所とほぼ変わらない。点火の合図は太鼓だった。唱え言葉は別がない。点火し終わると、集落の会長（ブラク長）の家に集まり、ラーメンやダンポ鍋などを食べた。親や女子達が

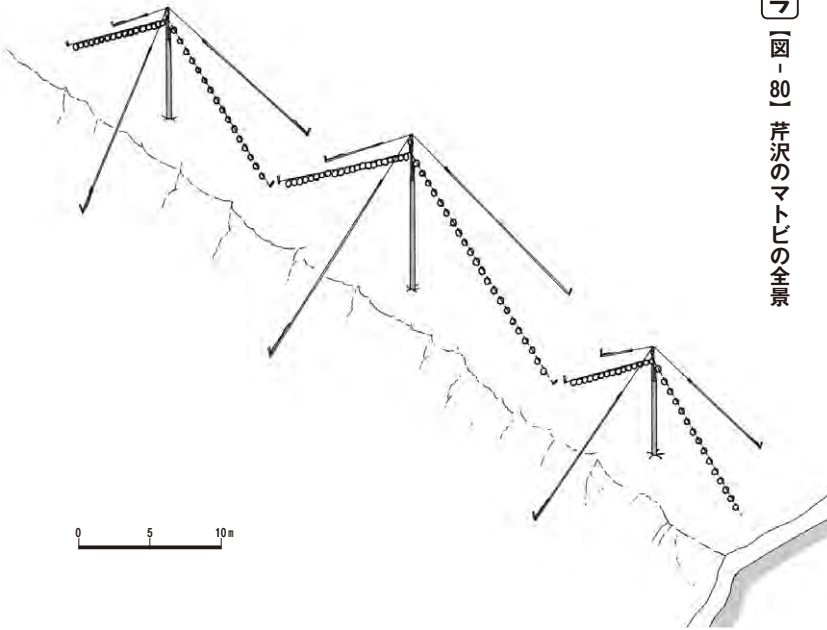
【図-78】 芹沢の新旧マトビの位置図



【図-79】芹沢のマトビの仕組み



【図-80】芹沢のマトビの全景



準備して待っていてくれた。

【現在のマトビ】

小学生が三人、中学生が二人になったので、体育協会に委託して組み立てなどをやらせてもらっている。体育協会は二五人ほどいる。

ハザ棒の代わりに単管を使うようになったのは、平成に入ってからである。仕掛けも山型に針金を張り、滑車を使って上げるなど工夫を凝らした。滑車で少し引き上げたところでダンボに点火し、点火したものを最も高い所まで引き上げる。

盛んな頃は、六〇〇個のダンボを全て子供達が作っていたが、現在は、三五〇個のダンボを老人クラブで作っている。老人クラブは二四人ほどいる。

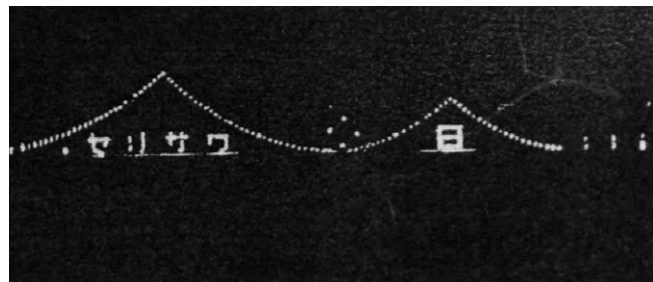
彼岸の中日は朝から組み立て、夕方までに終わらせる。点火の合図は無線で行う。すべて終わると集落会館で反省会を開き解散する。翌日は、早朝から片付けをする。勤めのない人が五、六人で片付けてしまう。

【墓参り】

かつては墓参りは、彼岸のイリ、中日、シマイと三回行う。それぞれ朝と夕の二回いく。朝は供物を持って出掛け、夕方は藁束を持ってもう一度墓に行き、火を焚いてくる。それぞれの家が数把ずつ藁束を持って行き、元を上にして立てて火をつける。藁束を多く持っていく家は、何段にも積上げて高さ三メートルほどもあった。高く積上げる時は下の方は株を多くして安定させ、上の方ほど少ない株にする。中に棒を差すといくらでも高くなるが、棒を差さないで高く積上げるのがルールだった。



雪で埋もれた芹沢の墓地、入口を示す木札



平成元年（一九八九）のマトビ
（北秋田市合川公民館提供）

現在も墓参りのやり方は変わらないが、藁束の代りに缶にボロ切れと灯油を入れたものや、灯油をしみ込ませたダンポを使用している。

④大内沢のマトビ

現在の戸数 一二戸

【昭和一八年（一九四三）～三八年（一九六三）頃】

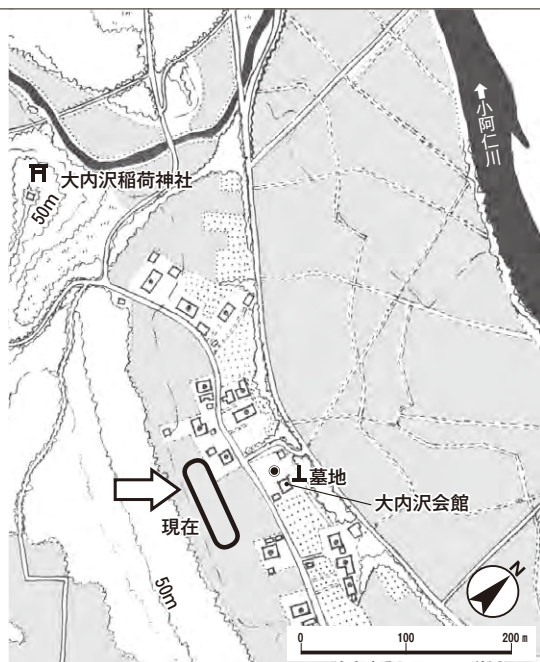
話し手 成田秀雄（昭和九年）

成田正一（昭和二年）・田中清（昭和三年）

戦前は小学校・中学校・高等科二年生まで、戦後は小学校三年生・中学生までの子供で行っていた。昔は現在の集落から二キロメートルくらい沢に入ったところに集落があり、集落近くの館長根ノ峰に多数のマトビを立てた。標高五〇メートルくらいの山の峰に数十カ所に渡ってマトビを立てて火を焚いた。

集落は昭和四五年に現在のところに移転してきた。学

【図・81】大内沢の新旧マトビの位置図



校に通う子供達にとっても不便だったのも移転の一因である。当時の戸数は二〇戸も無かった。

マトビの仕掛けは、戦前もすでに布でダンポを作り針金を巻いて使っていた。松脂を採ってきて鍋に入れて軟らかくし、ボロ切れに混ぜてからボロで布玉を作った。

戦後もダンポを使った。一〇メートルほどの間隔で棒を立て、その棒にダンポを吊した。山の頂上から沢まで一〇〇～一五〇個くらいは立てた。館長根ノ峰は、大内沢の持山なので、自由に木を伐ることができた。昭和二五、二六年（一九五〇、五一）には車マトビを作った。友達と相談して、雑木を集めてきて工夫して作った。

ボロ切れは準備しておいて、マトビ小屋の中で子供達だけでダンポを作った。子供は沢山いたので、マトビ小屋は八畳くらいの大きさはあった。小屋を作って、藁を苦編みしたものを巻いて寒さ除けにした。マトビは中日の夕刻に焚いた。マトビを開始する時の合図には太鼓を叩いた。この集落のマトビが坊沢の方から見えたという。運営費については昭和一七、一八年頃は子供会が各家を回り、協力金を集めた。その頃は一八戸くらいあった。そのお金で鶏肉を買って鍋料理に入れたり、果物や菓子なども買って、少年団の頭の家を集まって食べた。

【現在のマトビ】

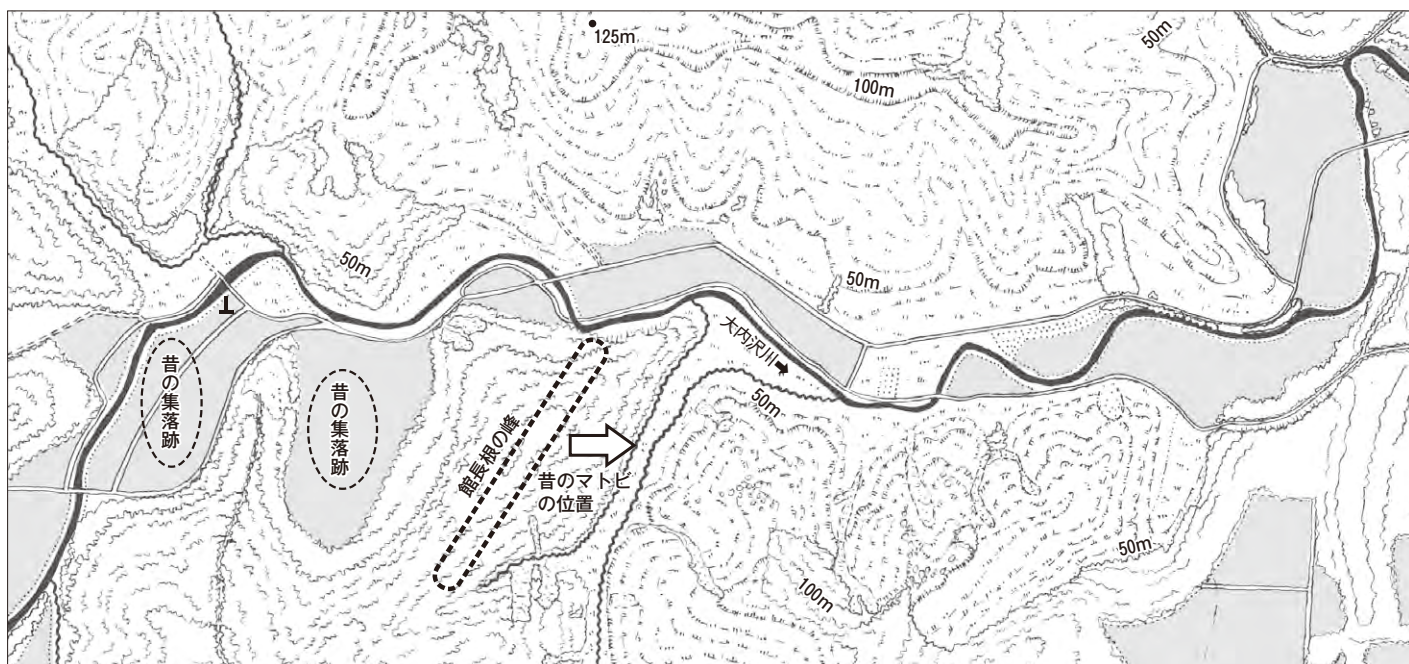
若い人が先頭になって伝承している。若勢団は現在七人ほどいる。中学生の男子が一人、小学生が四人と親子会で行っている。五〇メートルほどの距離に「中日」という文字とダンポを下げる。集落の中央児童館前に作る。点火は一回で夕方六時半頃つける。老人クラブがダンポ



大内沢の文字マトビ



雪に埋もれた大内沢の墓地



作りで協力している。運営費として集落からの補助金五千円と各家から二千円ずつ集めている。これらは灯油代と針金代と反省会代となる。

【墓参り】

かつては彼岸のイリと中日とシマイの三回は行った。朝に供物や酒を持っていき、夕方は火を焚きに行った。墓には各家が藁束を五、六把持って行って燃やした。供物は、菓子、酒、果物、水、ダンシをあげた。供える花は花ダンゴだったが、今は作らなくなった。

⑤ 三里のマトビ

現在の戸数 六三戸

【昭和三二年（一九五七）～三七年（一九六二頃）】

話し手 松橋田加生氏（昭和二年生）

昭和三〇年代初め、子供の数も多く、少年団で行っていた。当初は布切れで作ったダンボを燃やすのに松脂を使った。松脂は、松の木の幹に傷を付けておきしみ出したものを集めた。ダンボは刻んだ布を玉にして針金で縛った。ダンボを吊す木は、この辺の山から伐ってくる。

マトビの場所は小阿仁川の東側にある「男伐り山」は摩当の山である。集落側にある山で一、二年はやってたこともある。この山は茅山であった。

山の上にはマトビ小屋を作った。下から藁束と事前に苦編みにしておいたものを担いで上がった。摩当の山に登るのに片道二キロ以上あり、四〇〇五〇分はかかった。小屋の形は、雪を掘り窪め、雑木で合掌型に小屋掛けした簡単なものである。

山の稜線にダンボを吊した棒マトビを七〇〇八〇本は



移転前（昭和四五年以前）沢の奥にあった大内沢集落（四十歳です…合川町）より転載）

立てた。本番を行う前にはダマシ(試し焚き)を行った。中心に棒を立てて、藁束を二段くらいに積んで本番前に燃やした。これを一〇本くらい立てた。各家が雪囲いに藁を使っていたので藁は沢山あった。点火は一回で、点火の時は少年団の団長が山の頂上に居て、進軍ラッパのようにラッパを吹いた。

また、頂上から山の下まで針金を張り、藁に立てた杭に縛り付け、この針金を利用して、上からダンポを下に滑り落とした。これを電車マトビと言った。

車マトビは、大きいほど目立つので、直径三メートルもある車マトビを四〜五基作った。車マトビは山で伐ってきた木で工夫して作った。石油ストーブが出回り、灯油が容易に使えるようになって来ると、ダンポを様々なアイデアで活用して仕掛けを考えた。

【現在のマトビ】

子供は現在中学生が三人、小学生が二人しかおらず、点火だけ手伝っている。運営は、マトビ保存会や集落全体が協力してくれるが、高齢者が増えている。七〇歳以上は五〜六人おり、ダンポ作りをしてもらう。三〇歳代の人は三〜四人、四〇〜六〇歳代は一六〜一七人いる。組立は二〇人前後で行っている。

ダンポは三五〇個〜四〇〇個前後を作る。集落の人でダンポを作る人には五個の製作を頼む。マトビは単管で足場を組んで「三里中日」の文字を作っている。両脇の土手沿いには、高さ二メートルほどの鉄筋にダンポを吊したものを差している。若い人が居なくなったら、規模の縮小やダンポを缶に替えるなど簡単な方向にいく可



【図-82】三里の新旧マトビの位置図



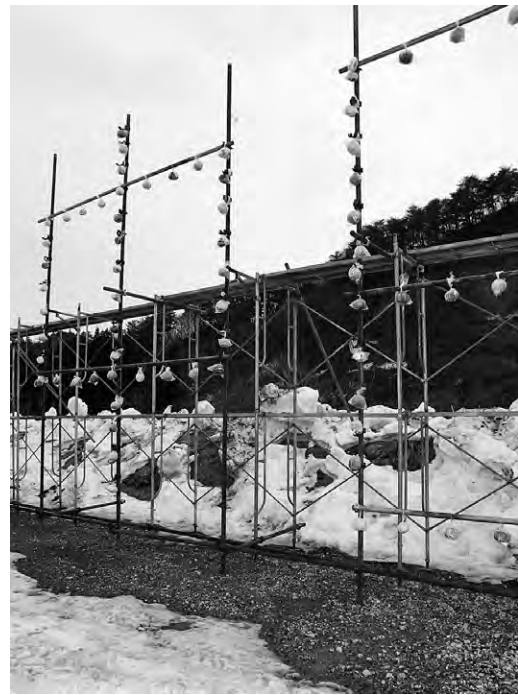
文字と棒マトビ



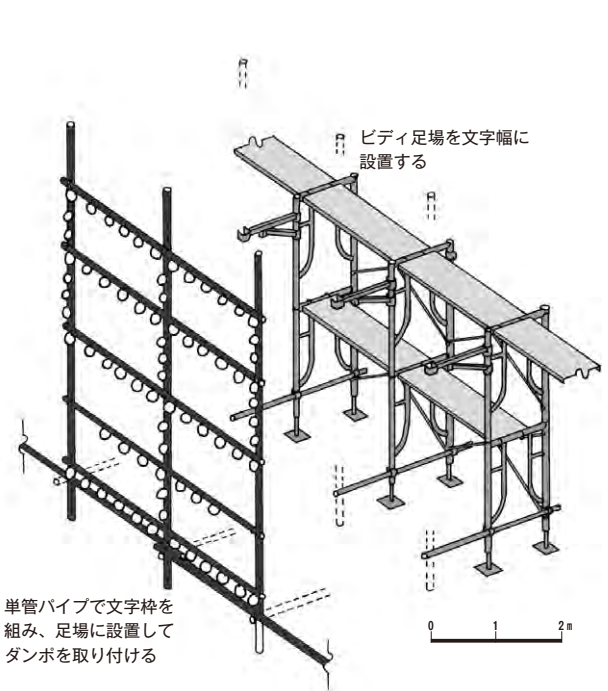
保存会の片付け作業



各家が作ったダンポ



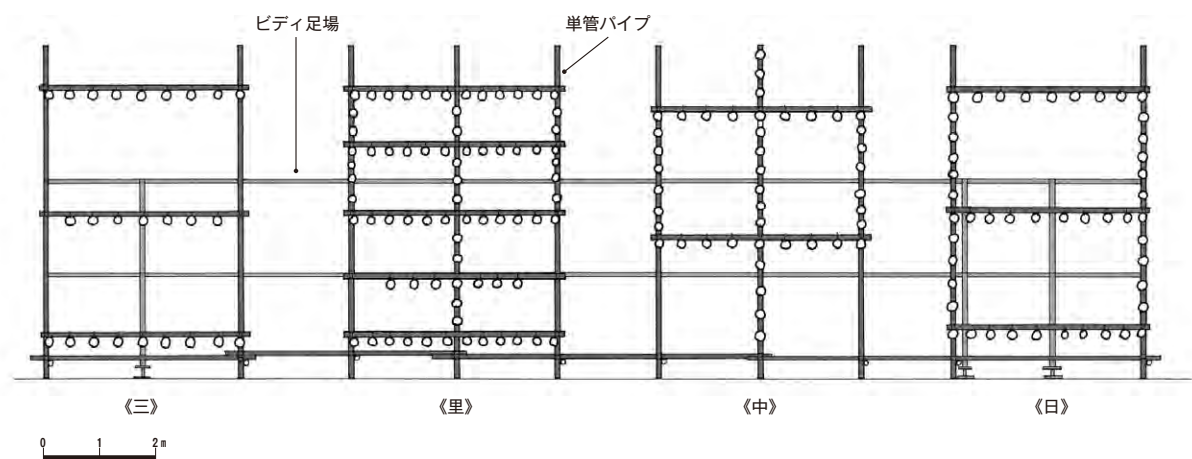
土手沿いに作られた文字マトビの装置



今
【図・83】三里のマトビの仕組み

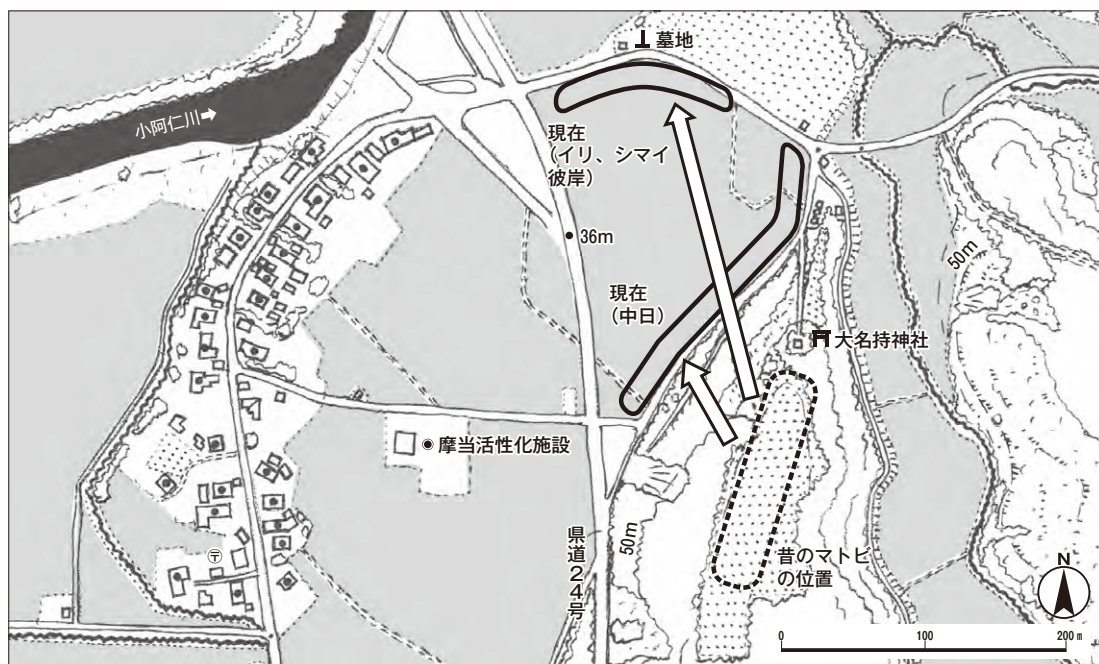


等間隔（四五センチほど）にダンポを付けていく



今
【図・84】三里の文字マトビ・正立面図

【図-85】摩当の新旧マトビの位置図



摩当
イリとシマイ彼岸には墓地前の道路沿いで焚き、中日には神社下の道路沿いで焚く。春彼岸に三回マトビを行うのは、阿仁地方でマトビを伝承している全集落の中で摩当だけである。

能性もある。

運営費は自治会の活動費からマトビ保存会に補助金五千円を出している。各家からも千円の協力を出してもらう。戸数は六三戸だが、空家もあるので六〇戸分は集まる。経費は針金、鉄筋の補充、灯油などにかかる。

【お墓参り】

この集落もイリ、中日、シマイ彼岸の夕方について三回とも火を焚いた。昔は藁束を焚いたが、藁束を焚いた後は黒くなって汚い。後片付けも大変なので、棒や鉄筋に缶やダンポを吊して持っていく。また、大きな缶に油と布か、木屑などを入れていくところもある。

⑥ 摩当のマトビ

現在の戸数 三〇戸

【昭和二〇年（一九四五）～二二年（一九四七）の頃】

話し手 成田勇助氏（昭和七年生）

小さい集落の場合は子供の人数も少ないので、小学校三年生から中学校三年生までの子供で行った。戦後の学制の変わり目で、高等科から中学に変わった時だった。大きな集落は、子供の人数も多いので、小学校高学年からであったり、また、中学生だけというところもあった。マトビ小屋は、山の傾斜を利用して、片流れの屋根を組み、苦編みの藁を周りに巻いた。小屋では火を焚き、子供だけが集まって作業をしていた。

戦後で何もなかったから、最初のマトビは藁だった。小学生高学年から中学生くらいになると藁束を背負って山に上がった。真ん中に直径五センチぐらいの棒を一本立て、周りに藁束を三、四段に積んだ。七、八メートル



中日の文字マトビと棒マトビ（摩当）



ダンポを付ける準備をする



六人掛かりで文字マトビを立てる



タ方の墓参りでダンポに点火する

間隔で四〇、五〇本立てた。立てた場所は、現在の大名持神社のある山の台地である。入会地の山の上で、彼岸のイリ、中日、シマイの三回焚いていた。そこは畑で芝があり、草刈り場だったので邪魔になる木々はなかった。藁束はすぐ燃えるから簡単だった。その後は、ボロ布と松脂を混ぜてダンポを作り針金で十字に縛ったものを、山から伐ってきた雑木に吊して燃やした。

灯油が容易に使えるようになると、彼岸のイリとシマイ彼岸はダンポを燃やした。ダンポを吊したもののだけだと七〇本位は立てた。中日だけは点火は二回だった。藁を積上げたものとダンポを両方燃やした。一回目は藁を、二回目はダンポと交互において燃やした。

昭和五〇年代には、子供も少なくなり、若勢団も協力して山の傾斜地に、「中日マトウ」などの文字も作った。

神社は、元々集落の入り口にあったが、道路改修のため、山の方に移転した。神社が移転した後は、マトビの場所を下の道際に移した。

【現在のマトビ】

子供は二人「マトビ保存会」が七人ほどで行っている。ダンポは、全戸が協力して作ってくれる。かつてのマトビの場所である台地の上は、杉の木が繁ってしまい現在はできなくなった。

現在は、墓地の前の道で一〇〇メートルほど、イリとシマイ彼岸にダンポを鉄筋に吊した棒マトビを燃やす。墓地の前の道沿いで、棒マトビを並べて燃やすようになったのは、一〇年前(平成一四年)くらいからである。

中日には、神社の下の道際に、文字マトビ、棒マトビ



各家がタ方墓前に火を灯し、墓参りをする



イリとシマイ彼岸には墓地の前で棒マトビを焚く(摩当)

を三〇〇メートル程の範囲に並べて燃やしている。この集落では、彼岸の間に現在も三回マトビを行う。運営費は、各家からの協力を千円ずつ集め、それに集落からの補助金で行っている。

【お墓参り】

昔は彼岸のイリと中日とシマイの三回墓に行き藁を燃やした。墓に五把ほどの藁を束ねて持って行き、元を下にして拡げて立て、その上に同様に五把の藁束を載せて下から火を付けた。燃え尽きる前に、またその上に五把を載せて燃やした。現在もこの集落は本当に丁寧に春彼岸の墓参りを行う。各家が明るいうちに花や供物を持って、彼岸のイリ、中日、シマイの三回墓参りに行く。夕方に二度目の墓参りに行き、火を焚いてくる。現在は金属パイプにダンボを付けたものや、缶の中に灯油やボロを入れて焚く人が多い。彼岸の間、三回とも全戸の墓に火が灯るのは、阿仁地方でマトビを伝承している集落の中でここだけであった。

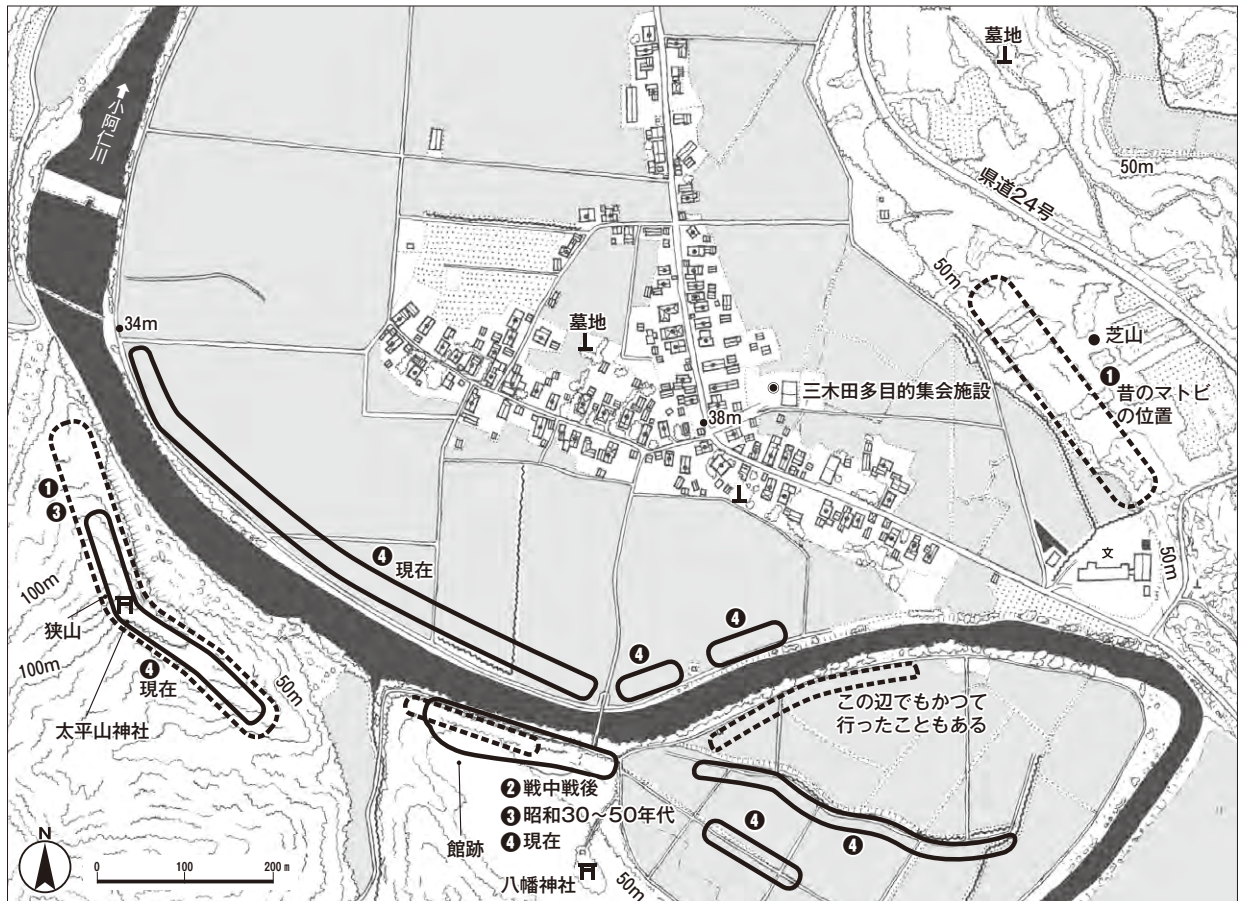
⑦三木田のマトビ

現在の戸数 六五戸

【大正末期から昭和初期】

話し手 三浦重治氏(大正八年生)

山の上で行うので高等科にならないと参加できなかった。狭山(ザヤマ)の一番高い所は青年団が立てた。昔は棒を真ん中に立てず、藁一〇把ほどを束ねて、積み上げただけである。藁束の量にもよるが二段位に積んだ。そんなに大掛かりなことはなかった。それを芝山に二〇カ所ほど作って燃やした。藁束は各家が冬囲いに使っ



【図-86】三木田の新旧マトビの位置図

三木田

狭山には、体育協会の若手が、ダンボと灯油を担いで登り、山の稜線にマトビを立て焚いている。狭山の太平山神社に登ると集落も墓地も一望できる。



縦型マトビをタイヤを利用して固定する



単管にダンボを吊す

たものを貰って来た。冬囲いはどの家でもやったので、藁は沢山あった。雪が少ない年に野山の草を焼いてしまつて消火するのが大変だったこともあった。

狭山のマトビは天気が良ければ、二ツ井の方から見えたという。良く見えれば豊作だと言われていた。

【昭和一四年（一九三九）〜戦後】

話し手 三浦栄三郎氏（昭和三年生）

三浦正美氏（昭和十一年生）

昭和一〇年代は子供の数も多く、若勢団は戦争にいたっていたので、子供だけで行つた。少年団とは小学校三年生から高等科二年生まで、高等科二年生が団長をし、三〇〜四〇人の子供がいた。少年団は村道の掃除や、冬には雪踏みをして道路をつくるなど集落の役に立っていた。戦前から冬休みを利用して雪山に入り、ホウの木などの木々を集め、一方ではボロ布を集めてダンボを作り、灯油の代りに松脂を使って、木に吊したダンボを燃やしたが、戦中戦後は灯油も無く、各家から藁束を集めた。

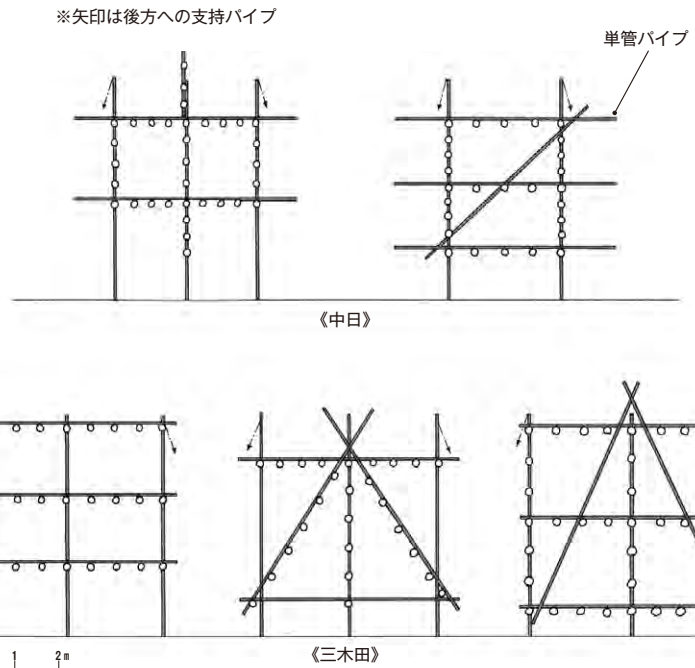
昭和一七年（一九三二）には、藁五把を一つに束ね、二段に重ねて八〇本から一〇〇本は立てた。半分ずつ二回に分けて燃やした。また、中心に棒を立て、その周りに藁束を交互に縛り付けていったこともあった。昭和一九年（一九四四）には中止になった。

戦時中は館跡だけで焚き、狭山はこの時期には焚かなかった。館跡の山に焚くマトビに参加できるのは中学生だけである。小学校卒業の年に、マトビが終った翌朝、五時起きして、片付けに参加した者だけが、翌年のマトビに参加する資格を得た。そういう約束事の中で子供の



狭山と館跡の稜線に火が灯る（三木田）

【図-87】三木田の文字マトビ・正立面図



マトビに対する意識は育っていった。

昭和二〇年代後半のものの不足が落ち着いて来たころ、ボロ布を集めてダンポを作りを再開した。皆、古着など捨てずに取っておくので、ボロ布は結構集まった。昭和三〇年頃からまた、再開された狭山のマトビは青年会が担当した。昭和四〇年頃には「中日」などの文字を書くようになった。

三木田には車マトビの縦型があった。長さ四〜五メートルほどの丸太を立てて、三段に縛った横木の両端にダマを縛り付け回したが、下で丸太を回す人に火の粉が落ちるので、昔は笠を被り蓑を着ていたという。

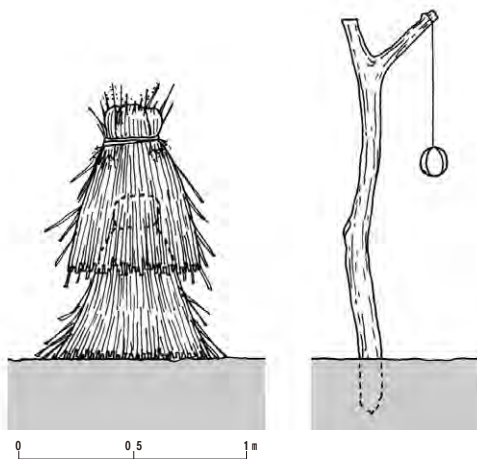
その頃の運営費は各戸から米一升ずつ貰って歩いた。その米を売って現金にして必要な材料を買った。マトビが終るとその年に決まっている宿に集まり、ダマコ鍋を食べた。様々な野菜と鶏肉入りの鍋は楽しみだったが、鶏の代りに鮭缶のときもあった。子供達は先祖を迎え送る大事な行事という意識より、皆で集まり話し合いながら食事をするのがなよりの楽しみだった。各自の家から重箱を持ち寄って食べる事もあり、これを遊山といった。

【現在のマトビ】

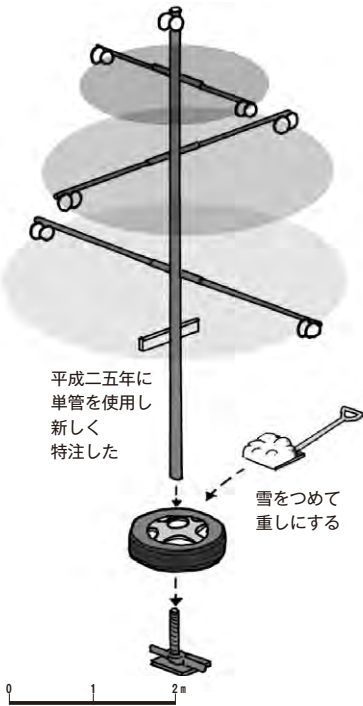
話し手 三浦欽一氏(昭和一九生)

現在、「三木田万灯火保存会」というのがあり、ここには小学生と親達の親子会が五〜六人、青年会(現在体育協会になっている)が一五人位、少年団(中学生)と親達などが入っている。体育協会の年齢は高校生から六〇歳以上と巾がある。

【図-89】三木田のかつてのマトビ



【図-88】三木田の縦型車マトビ





尾根道は険しい



太平山神社の前で御神酒を飲む



ダンボを背負い灯油を持って狭山を登る

三月初めに公民館に老人クラブが三〇人位集まってダンボを作る。五〇〇個、八〇〇個作る。農道は中学生二、三人と親の親子会五、六人で担当している。二〇年以前からこの体制で行っている。河原の柳などを伐ってそこにダンボをつけていたが、現在、平地は鉄の棒になった。館跡の山の稜線とその下の道の文字マトビ、畑の中の文字マトビは、四〇、六〇歳代の人達が担当し、文字マトビの組立とダンボ付けは彼岸の中一日で手分けして完了させる。狭山のマトビと車マトビは体育協会の若手が山に登って作業をする。体育協会の若手五、六人が、ダンボを入れたダンボールと灯油を背負って太平山神社まで登り、山の上で雑木を調達し、灯油を染み込ませたダンボを吊した棒マトビを作り、尾根伝いに差していく。また車マトビも山の木々を利用して作り、準備を整えて夜を待つ。太鼓の合図で六時三〇分に一回目の点火、七時に二回目を点火する。

運営費は、彼岸の中日の朝、全戸を回り、一戸当たり千円ずつ協力を金を集めて歩く。任意だが五万円程になる。集落からの補助金と合わせて、およそ一〇万以内で運営している。材料代、灯油代、慰労会費などに使う。慰労会は公民館で行われるが、料理はほとんど外注される。

【墓参り】

墓参りは、イリ、中日、シマイ彼岸の三回行った。午前中にはダンシや花ダンゴを持ってお参りに行った。夕方暗くなる頃、藁を一〇把ほど束にして、それを重ねて墓前で二〇把燃やした。藁は元を下にして、末を上にして縛り、一段目に火を付け、それが燃え切らぬうちに



公民館での反省会（三木田）



右が狭山、左が館跡と小阿仁川

う一つを重ねて燃やした。

現在は墓参りは三回行くが、墓が汚れると言って、藁を燃やさなくなった。ダンポなどを持っていき火を焚く家もあるが、焚かない家も増えている。現在の供物はダンシをはじめ、市販の菓子や果物、煮物など種類も豊富だが、花ダンゴを作り飾る家は数軒になった。

⑧ 鎌沢のマトビ

現在の戸数 七〇戸

【昭和二九年（一九五四）～三〇年代（一九五五）】

話し手 福田芳一氏（昭和一六生）

当時のマトビは、中学生の男だけが行う権利があつて山に入れた。それは社会勉強の場であり、子供だけの世界で親は手も口も出さない。小学校六年を卒業すると、マトビが終わった翌朝の片付をするのが、翌年のマトビの参加条件であつた。片付けは、新中学一年生と二年生のみで、早朝に行く決まりになっていた。参加希望の一年生には、もう一つ参加条件があつた。山に入り、一升枧に一杯、松脂を集めてくるというものだった。松の木にあらはじめ傷を付けておき、そこに溜まった松脂を集めた。山に入り、友達に負けないように頑張った。灯油というのが、当時はなかなか手に入らなかったのが松脂を利用した。そうすれば、経費はほとんどかからなかった。

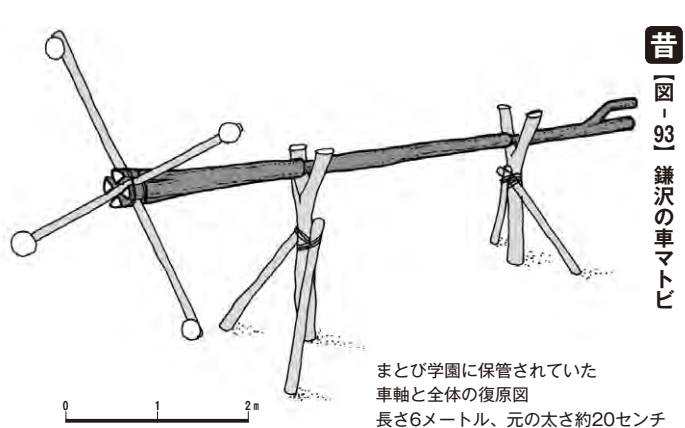
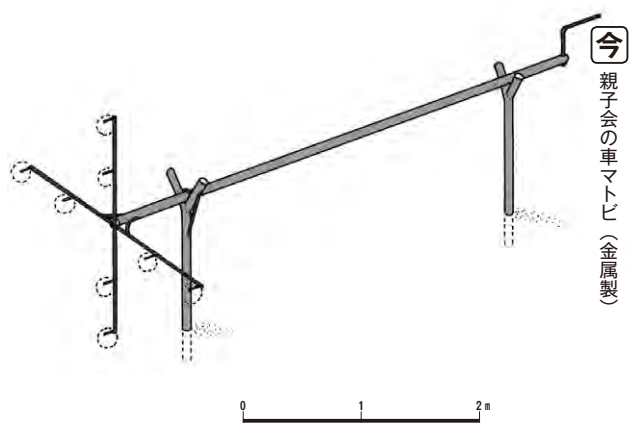
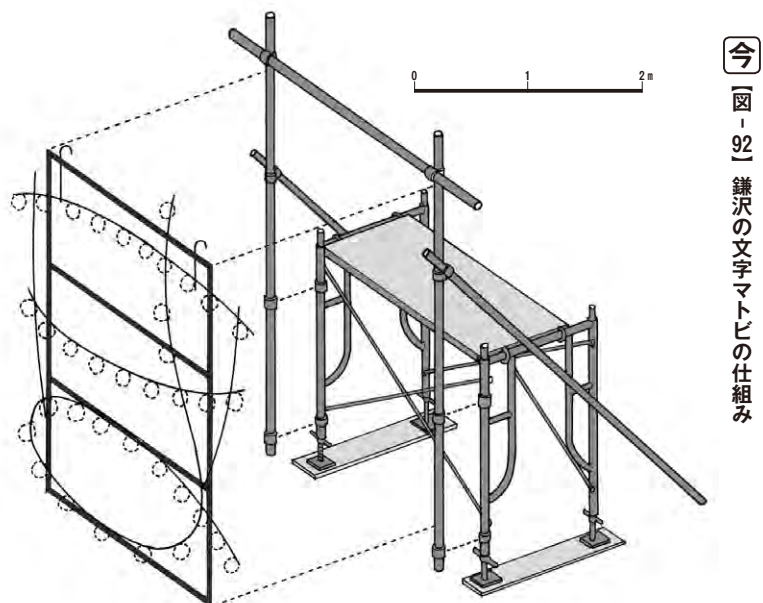
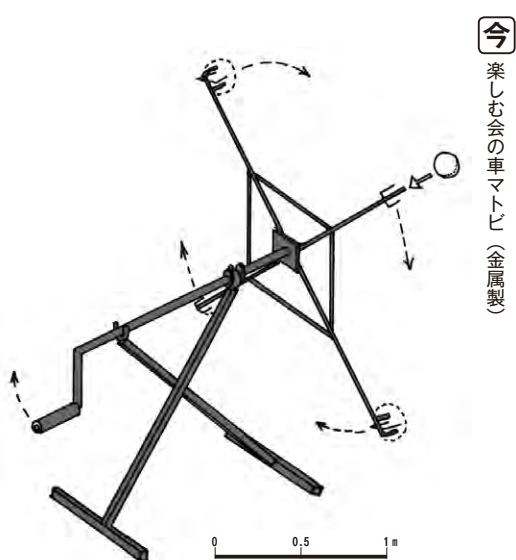
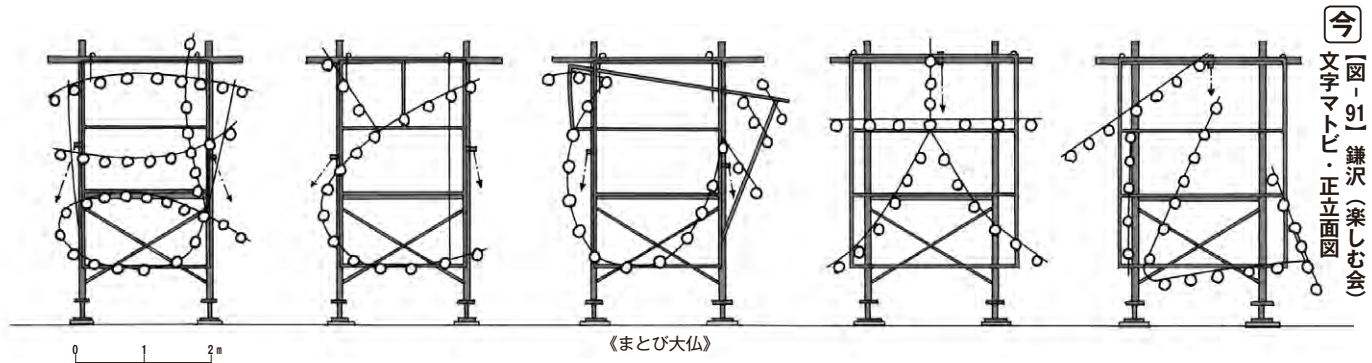
独立採算制で、自分たちが運営費も材料も調達し、それで灯油や様々な材料を買った。各戸を回ると米一升や藁束、又は金銭などを寄付してくれた。米や藁束の残ったものは、売って金銭に替えた。マトビが終わると年長者

【図-90】 鎌沢の新旧マトビの位置図



鎌沢

かつてのマトビの場所であった三角山と馬長屋の山からは、集落が見渡せ、それぞれの山の担当になった中学生達は競ってマトビを焚いた。鎌沢正法院の地蔵堂には一丈六尺の木彫座像、延命地蔵菩薩が安置されている。





ダンボ付けは高所の作業となる



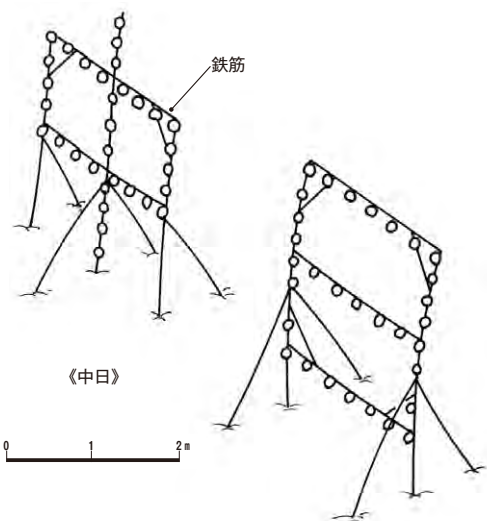
鉄筋の特注文字枠にダンボを付ける

の家を宿にして皆で食事をした。余った金銭は、自分たちが使うノートや鉛筆を買い、皆に配った。そういうやり方を長い間続けてきた。

かつて、マトビを焚いた場所は、二カ所に分かれていた。標高一〇〇メートルほどの山である。歩いて登ると二〇分くらいの山だった。三角山と馬長屋と呼んでいた。それぞれの山には、それぞれの組の作業場であるマトビ小屋があって、冬休みになると、子供達は集めた藁束を背負ってマトビ小屋まで上がり準備を始めた。小屋は付近の山から伐ってきた雑木を使って建て、小屋の周りには、藁を苦編にして下から囲った。何段にも藁束で囲むから雨は入らない。冬休みが終わって学校が始まって、放課後はみんなで小屋に集まった。一組の人数が一四〜一五人いたので六畳くらいの広さはあった。彼岸の中日まで準備は全部終わらせておく。

マトビ当日は、まずダマシ(試し焚き)をする。ダマシは一メートル程の棒を立て、一〇把ほどの藁を二段に積上げて火をつけた。数えきれないくらい作る。そのため藁はマトビ小屋に大量に運び上げておく。

昭和三〇年代(一九五五)からは、缶詰が手に入るようになり、その空き缶を夏の間に集めておいた。皆で三〇〇個は集めた。その缶の中に鉋で叩いて細かくした布に灯油か松脂を含ませたものを入れた。松脂を含ませると長く燃えた。松脂は、ストーブとかイロリで溶かして布に含ませ、灯油は高いので少し使った。缶には針金を付けて、自然の木の枝に引っ掛けた。間隔が悪い所だけ雪山に棒を差して、三〇〇個の缶を山頂に並べた。



今
【図-94】鎌沢(親子会)の文字マトビ



造花を供え、缶で火を焚く彼岸のイリの墓参り(鎌沢)



彼岸には正法院内の位牌堂にも参る



鎌沢正法院の丈六地藏尊

灯油を大量に使えるようになるとダンポが主流になった。自然木を繋ぎ合わせて、鎌沢の「カ」の字を作りそこにダンポを下げた。また、特大のダンポに火をつけて、ハザ棒の天辺から麓まで張った針金を利用して、七〇メートルも滑り落とす電車マトビや、シマイ彼岸にはマトビ小屋を燃やした。これを「オヤマトビ」といった。文字も「中日・大仏」と作ったり、車マトビも三基やるようになった。本番のマトビの時には、始めと終わりに「木貝」（桶の様に作られた笛）を吹いて合図した（第三章 長信田のマトビ参照）。

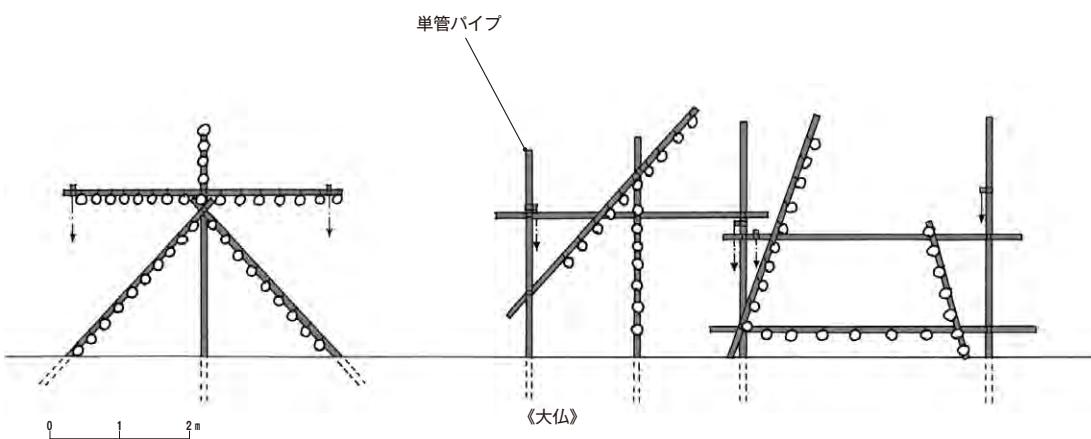
昭和六一年（一九八六）頃までは中学生だけでやってしたが、マトビ小屋は作らなくなった。しかし、協力金を募るやり方は、昔と変わらず集落を回った。

【現在のマトビ】

子供は中学生が三人で、男親が手伝いに入り、親子会でやっている。ダンポは児童館で一〇〇個ほど作っているようだ。運営費は彼岸の中日の朝、全戸を回って千円を集めている。これは灯油、針金、反省会代などに使い、残った金銭でノートなどを購入し配布する。

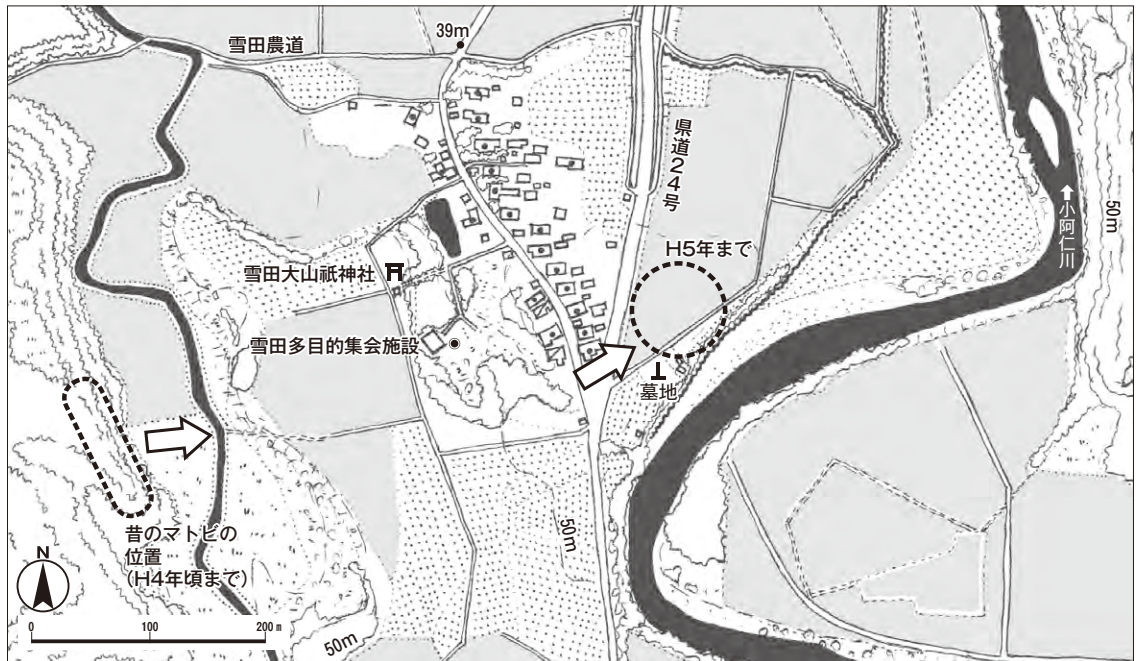
また鎌沢にはもう一つ「まるとび学園」という山村留学にきた子供達が行うマトビがあった。学園で行ったマトビは平成五年（一九九三）から平成二十一年まで続いていたが、学園の閉校後、「まるとび体験を楽しむ実行委員会」が引き継いだ。現在六十一人で活動している。会費は千五百円で誰でも参加可能である。

「まるとび体験を楽しむ会」の仕掛けは「大仏まるとび」の文字と、針金を張って、缶を水平に吊したものと車マト



【図-95】鎌沢（親子会）の文字マトビ

【図-96】雪田の新旧マトビの位置図



ビだが、ダンポと缶を併用している。缶の中には灯油と縄を切ったものを三本入れているが、三〇分以上は燃えていて好評である。

【墓参り】

墓参りは彼岸のイリと中日とシマイの三回行った。カバの木の片方を叩いてバラバラにし、乾燥させたものを墓前で燃やした。また、一〇把の藁を二段に積んで燃やしたり、二、三把を燃やしたりと様々であった。最近では、墓が汚れるので焚かなくなった。

現在も墓参りは三回いく。毎回三時頃いって缶の中で火を焚いてくる。供物のダンシはイリと中日とシマイ彼岸の当日に作り、仏壇と神棚、床の間、墓の四カ所にあげる。墓参りの時には、正法院の大仏や位牌堂にも参拝する。

⑨ 雪田のマトビ

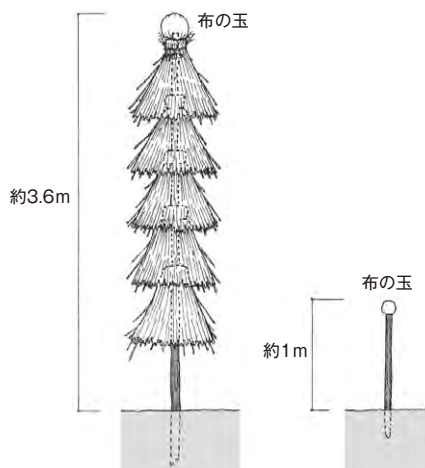
現在の戸数 一九戸

【昭和一五年（一九四〇）～昭和二〇年代（一九四五）】

話し手 山岡多郎右エ門氏（昭和五年生）

運営は戦中戦後、若勢団が戦争にいったいなかったから子供だけで行った。小学校四年以上と高等科までの子供中心であった。当時は高等科を終ると若勢団に入っていた。子供だけでも上級生のやる事を見習って覚えた。戦争中は昭和一六年と一九年にマトビをやめるように言われたことはあったが、それ以外は行っていた。

マトビの場所は集落やお墓の見渡せる台地である。たいていの集落はそういうところを選んでいる。マトビの仕掛けは親マトビ二本と子マトビを三〇～四〇本立てた。



親マトビ：2本 子マトビ：30～40本
戦時中の子マトビは藁を積上げた。

昔【図-97】雪田のかつてのマトビ



鎌沢の親子会のマトビ（三月二〇日）

雪田は小さい集落だったが、子マトビの数は多い。子マトビの数は集落によって違う。親マトビは真ん中に三、四メートル程の棒を立て、棒のてっぺんに直径一〇センチ以上のダンポを針金で縛り付ける。これを頭にして、下は着物を着ているように、棒の廻りに藁束を何段にも積んでいった。これを五メートルほど間隔で二本立てた。その両脇には子マトビが並んだ。戦時中は灯油も布も無く、子マトビは藁だけでやった。一メートルほどの棒の周りに藁束を縛り付けた。このやり方は大正頃も同じで、焚く場所も昔から変わらなかった。

戦後、灯油や布が使えるようになり、子マトビも野良着などのボロ切れを直径一〇センチほどのダンポにして、棒のてっぺんに針金で縛り付けるようになった。子マトビには藁の着物は着せない。

ボロ切れは各家から集めて来て作った。灯油が不足していた時期には、子供達が冬休みになると毎日山に入り松脂をとった。バケツ一杯集めてきた。ボロ切れを細かく切り、松脂と一緒に鍋で煮て、それを布に染込ませダンポにした。

車マトビも工夫して作った。直径一〇センチほど、一メートル以上の長さの木を山から伐ってきて、丸太の先を十字に割ってそこに、長さ二メートルほどの堅木の枝を十字に挟みしっかり縛る。又木を台にして、丸太をグルグル回すと十字に挟んだ木の先につけたダンポが回った。(第二章 図17参照)少年団の団長が墓を拝み、親マトビにまず火を付け、その火を貰って子マトビの方にも火をつけていった。

雪田はマトビを焚く時、法螺貝を吹いた。それが壊れたので、一升瓶の底を抜いて瓶の口に竹の口をはめて、ブーブー音がする瓶笛を作った。これもホラガイという。

【昭和四〇年代(一九六五)以降】

除々に若勢団が中心になり、子供達が集められて行っていた。この頃マトビの場所は山から下りて墓の近くに移り、文字の仕掛けが新たに加わっていた。子供もさらに少なくなり、平成五年(一九九三)を最後にマトビを止めた。

【墓参り】

昔は土葬だった。火葬にすると病氣の人や流行病の人かと疑われるので皆が火葬を嫌った。ここでは埋葬した上に石を置き、それが石塔だった。湿地など土質が悪いところでは土葬にできない。近年になり、ほとんどの家が、その土葬の上に石碑を立てた。かつては墓参りは彼岸のイリと中日とシマイの三回行き、各家が夕方には墓前で藁を燃やした。現在は墓参りの回数は様々になったが、墓前で藁を燃やし続ける家が一軒だけある。供物はダンシと生花の代りに花ダンゴを持っていった。花ダンゴは雪の上に差す。墓参りの度に持っていくのでシマイ彼岸には雪の上に花ダンゴが三本並ぶ。雪が降ると生花より数種類の食紅で着色された花ダンゴが目立って美しかった。

⑩ 杉山田のマトビ

すぎやまだ

現在の戸数 四七戸

【昭和三九年(一九六四)～四一年(一九六六)頃】

話し手 杉淵敬輝氏(昭和二六年生)



雪に差した花ダンゴと、藁を燃やした跡のあ
る墓前(雪田)



墓地の回りにはまだまだ残雪が多い(雪田)

中学一年生から三年生までの少年団だけで行っていた。一五人はいた。子供だけで藁小屋を作った。大きさは三畳分くらいで、小屋の中でストーブを焚いた。ボロ布も自分達で集めた。中学一年の時は松脂を集めに行ったが、あまり量は取れなかった記憶がある。ダンポと缶を併用して使ったが、缶には松脂と新聞紙を入れて燃やしたこともある。

昭和三九年には藁束を田の中に並べて藁だけでやった。何把かを縛って下の方を拡げて立てた。マトビの場所である山の上は段々の田になっていて、三段を使って藁束を並べた。上段には文字の仕掛けを置き、中段には車マトビを二基置いた。この場所は藁束を地面に立てて並べても集落や墓からよく見え、やり易い場所であった。

文字は山から木を伐って来て、大きい「杉」と「中旦」の形を作った。雪山で境界がわからず、隣の集落の山から木を伐って来た時もあるが怒る人もいなかった。

文字のところだけはダンポを使った。ダンポ作りは神社が集会所です。それをマトビ小屋に運び、当日に準備した。ダンポは針金で縛って吊した。

その後、長さ一メートルほどのハザ木を両脇に立て、太い針金を張り、ダンポを吊すやり方に変化した。杉山田では昭和六〇年（一九八五）頃から単管が入ってきた。それまでは毎年ハザ木を補充しながら行った。

点火の合図は、桶のような形に作られた木笛だった。これを「木貝」といった（五八頁参照）。その後は瓶の底を抜いて作った。瓶の底を縛っておいて熱で温めて、ポンと叩くときに割れた。これらはいずれも法螺貝の



【図-98】杉山田の新旧マトビの位置図

ような音がした。

運営費は、マトビが終わってから回って歩き、各家から米一升くらい貰った。協力金を出してくれる人からは三〇〇円、五〇〇円位ずつ貰った。金銭で協力してくれるところが四〇戸以上はあったので、灯油や針金代にした。米は慰労会をやる宿に渡したが、残ると少年団に現金で戻ってきた。これは子供達に均等に配った。一人五百円、千円ずつぐらいは貰って帰った。

【現在のマトビ】

子供は小学生五人、中学生四人になったが、参加できる子供と父親達でつくっている親子会が一人と、他に五、六人が手伝いにくる。ダンポは子供達と老人クラブの三〇人ほどで作る。仕掛けは「杉山田中日」という文字を単管でつくる。図面がすでにできていて、ダンポの数も図面上で決まっている。それに添って作業をすればいいように考えられている。マトビの場所は、平成二五年から川の手前の土手沿いに移った。

マトビを焚く彼岸の中日には、午前中に親達が単管で文字を組み立て、午後三時頃から、子供達がダンポをとりつけて、夕方に点火する。

運営費は集落の方から二万五千円出る。灯油は集落が負担する。この中から反省会代も出している。現在は各家からは協力金を集めたりはしない。

【墓参り】

彼岸のイリと中日、シマイの三回墓参りにいった。墓では藁を焚いた。藁は一束が小さいが、立てて燃やした。今はダンポを燃やす人がたまにいるようだ。

供物は、カンコシバダンゴ(花ダンゴ)、餡をつけたダンシを持っていく。カンコシバ(ミズキ)は前もって調達しておくが、ダンゴは当日に作り、枝に差して持っていた。現在は、墓参りは三回行くが、カンコシバダンゴは持っていかなかった。ダンシは今も持っていくが、菓子になってしまった人も多い。

(二) 阿仁川沿いのマトビ

⑪ 八幡岱のマトビ

現在の戸数 七〇戸

【昭和一〇年(一九三五)～一五年(一九四〇)頃】

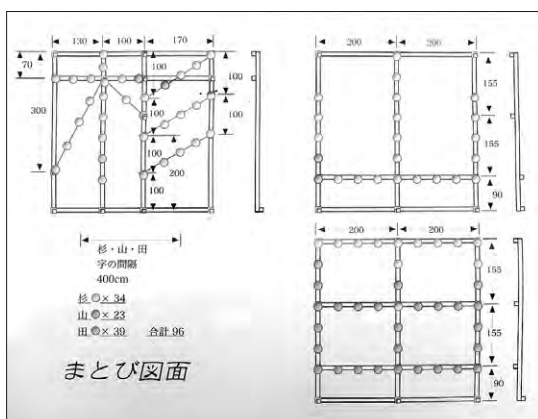
話し手 伊勢森市氏(大正一五年生)

高橋チヨ氏(昭和九年生)

八幡岱は七割が農業なので、藁束はたくさんあった。

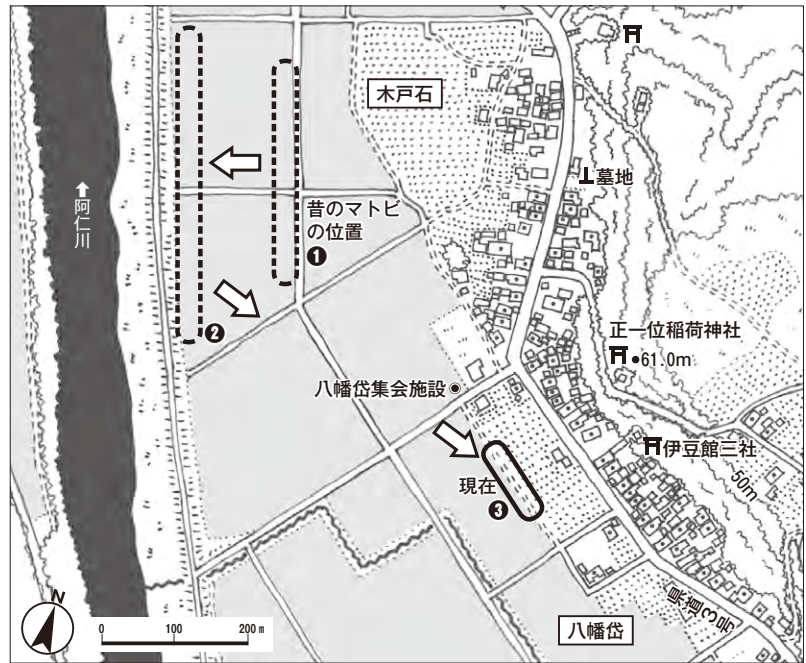
少年団が各家を回って一〇把ぐらいを束ねた物を貰い集めてきた。集落単位で行うマトビは、末の方を結んで元を下にし、高さ二メートル位の棒の下の方から縛り付け、三段から四段に積み重ねる。これを「親マトビ」といい二〇本は立てた。棒を使わず、二段位に重ねた物を「子マトビ」というがこれを、二、三個作る。場所はウロや田の中で行った。子供の多い時期は子供だけで行ったが、藁を高く積むのを若勢団も手伝った時期もあった。戦中には何年か行わない時もあったが、戦後は田に藁を積んで燃やすようになった。集落単位のマトビはシマイ彼岸に行っていた。終わってから慰労会をして、皆で会食をすることはなかった。

昭和四七年(一九七二)から、旧合川町で盆にもマトビを行うようになると、周辺の集落もダンポを使ってマト



父親達が文字マトビの組立て作業をする
(杉山田)

【図-99】八幡岱の新旧マトビの位置図



ビを行うところが出てきた。その頃までは藁束を使っていた。集落単位のマトビが途切れていた時期もあった。

【現在のマトビ】

マトビは彼岸の中日に行っている。二〇人位の若勢団が担い手である。場所は、集落の人が見易い田の畦道で焚いている。平成二十四年（二〇二二）までは、川の堤防の所に「八幡岱マトビ」と文字を作り、ダンポを使って長い距離に仕掛けを作っていたが、平成二五年から缶の中に灯油を入れ、その中に藁縄を布で巻いたものを入れる方法に替わった。ダンポ作りは大変なので方法を替えることにした。

仕掛けは、「中日」という文字と針金を山形に張って、そこに缶を吊す方法である。規模も以前より小さくなった。マトビの運営費は各家から集めている。任意なので戸数は七〇戸あるが、半数位の家が出している。一戸二千元ほどの寄付をして貰っている。それが運営費になって、反省会もそれで行っている。

【墓参り】

昔は、マトビといえば、墓で火を焚くだけのときもあった。墓参りは、イリと中日とシマイ彼岸の三回行き、火を焚いた。今は焚かなくなってしまった。供物といえ、ダンシだけだったが、菓子や果物を供えるようになった。

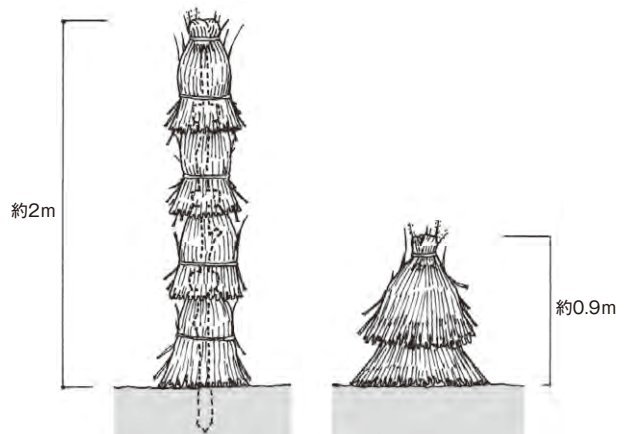
⑫道城のマトビ

現在の戸数 七〇戸

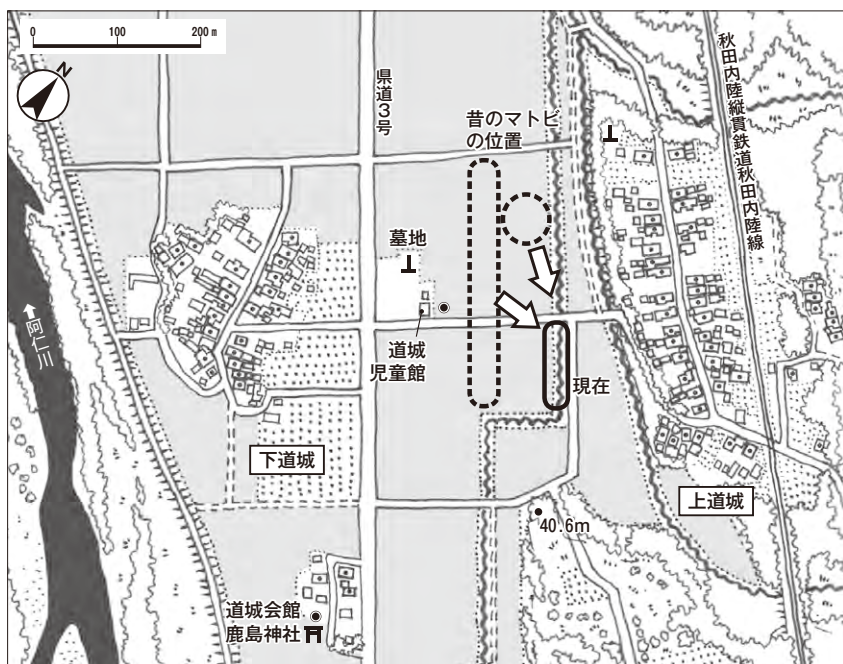
【昭和三五年（一九六〇）～四〇（一九六五）年頃】

話し手 森岡耕一郎氏（昭和二五年生）

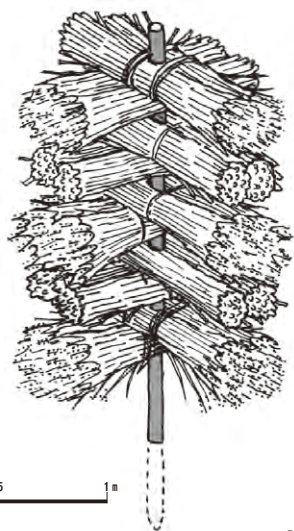
昔【図-100】八幡岱のかつてのマトビ



「中日」という文字マトビに缶を吊す（八幡岱）

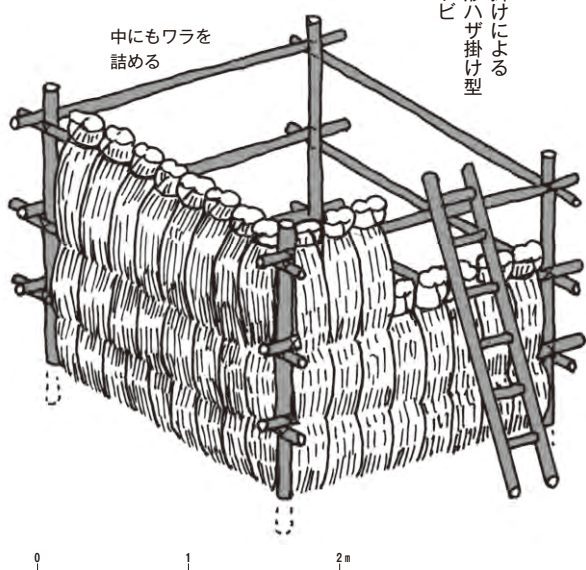


【図-101】道城の新旧マトビの位置図



昔
【図-102】道城のかつてのマトビ
杭形ハザ掛け型のマトビ

小学生から中学生までが行っていた。総勢五〇六〇人
はいたが、マトビを行う現場に出てくるのは男だけで、
二五〇三〇人ほどであった。各家を回り藁束を貰い歩い
た。木は集落の山林から伐ってきた。昔の子供は藁運び
などを手伝っていたので、何でも自分達でできた。藁束
を縛るのは、藁を繋いで作る「ツナギ」を使ったから経
費は一銭もいらなかった。
マトビを焚くのは彼岸の中日で、朝に作って夜の七時
には燃やしたが、終ってからは反省会もなかった。
マトビの仕掛は、一坪ほどの広さの小屋を作った。屋
根があつたか無かつたか憶えていないが、周りには横木
を三〇四段渡し、ハザ木に藁束を掛けるようにして藁で
囲った。中にも藁を入れて燃やした。また、稲を乾燥す
る時の杭掛け式のように杭を一本立て、そこに藁の元と
末を交互にして井桁に積んでいったものを燃やした。小



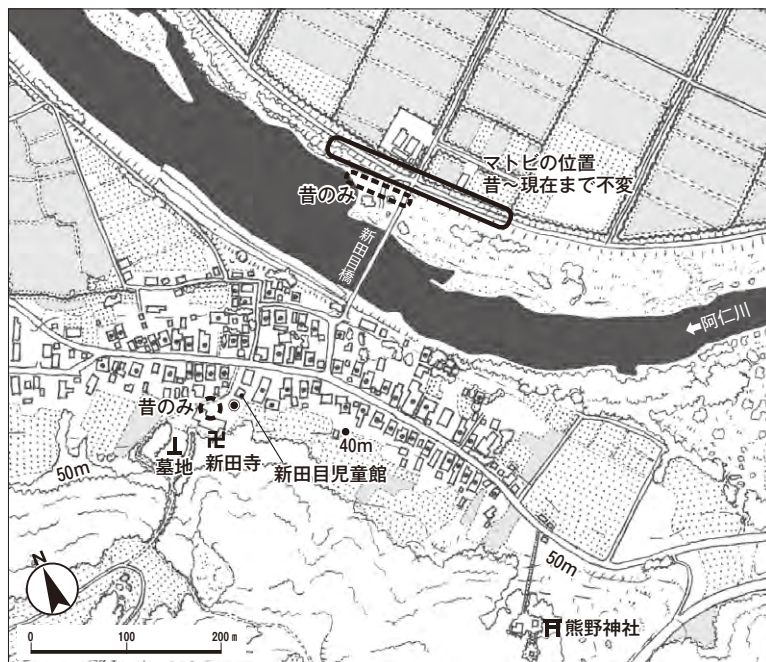
稲架掛けによる
小屋形ハザ掛け型
のマトビ

中にもワラを
詰める



水路沿いに缶を吊した水平マトビ（道城）

【図-103】新田目の新旧マトビの位置図



屋の両脇には杭形ハザ掛け型の藁積みと並べた。

【現在のマトビ】

昭和五一年頃（一九七六）には子供も少なくなり、若勢団が行っていた。ダンポを作って針金を張ったところに吊っていた。現在のように水路上の土手で行うようになったのは、平成一四年（二〇一三）頃からである。

現在は小学生が六人と中学生が一人とその親達で親子会として行っている。また集落の方からは役員七人と消防団二人、若勢団も一〇人が応援に出ている。

ダンポは各家で三個ずつ作ってもらっている。針金で縛ってもらったものを集めているが、二〇〇個ほどのダンポが集まる。婦人会もダンポ作りに協力している。針金は現在一年中張った状態にしている。

⑬ 新田目のマトビ

現在の戸数 五二戸

【昭和二九年（一九五四）から平成一五年（二〇一三）頃】

話し手 阿部久雄氏（昭和一九生）

他の集落は中日に行うが、この集落はシマイ彼岸の日にマトビを行う。阿仁川の対岸の土手に、集落の戸数だけモリを作り、新田目橋にはハザ木と藁束で門を作った。⁽⁴⁵⁾モリは、高さ二メートルほどのハザ木を芯にして雪に差し、藁束の元を下に、末を上にして下から縛り付けていく。藁束は四、五段積上げられる。マトビ当日は各家が対岸の土手に多くの藁束を運び、自分の家のモリの位置は門から何番目と決め、競って藁束を積上げてモリを作った（図-105）。新田目橋（門）を境に上流に上町、下流に下町のモリが立てられる。戸数の多い時期は六五戸あ

藁束を積上げたモリは勢いよくもえあがった（平成二五年）

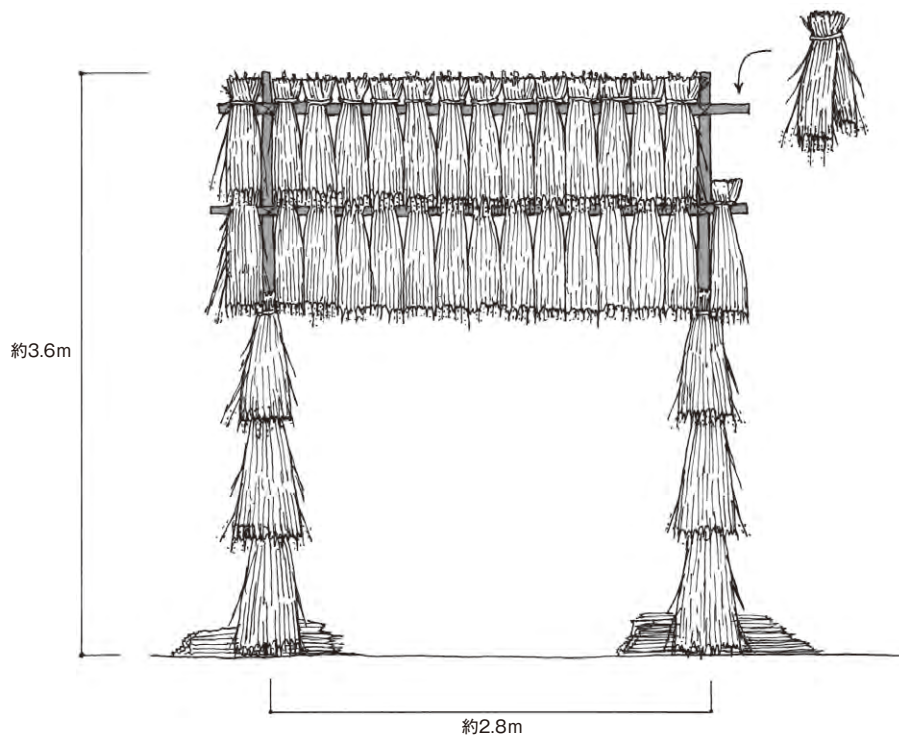


再現したモリの下部に点火（平成二五年）



⁽⁴⁵⁾ 芯棒の回りに、藁束を四、五段積上げたものを新田目では「モリ」と呼ぶ。「マトビ」や「タイマツ」などと呼ぶ集落もある。

昔【図-104】新田目、門構えハザ掛け型マトビ



り、下町側は土手の上と下にモリが二列に並んだ。
橋に作る門は、死後の世界の「彼岸」と私達の住む世界の「此岸」の境の門の意味があり、彼岸のイリに迎えた祖霊は、シマイ彼岸には川を渡り、門を通って此岸から彼岸に帰っていくという。門は高さ四メートルほどで、橋の中に合わせハザ木を立てた。稲をハザに掛けて干すような要領で藁束を門の横木に掛け柱には下から縛り付けていく(図-104)。

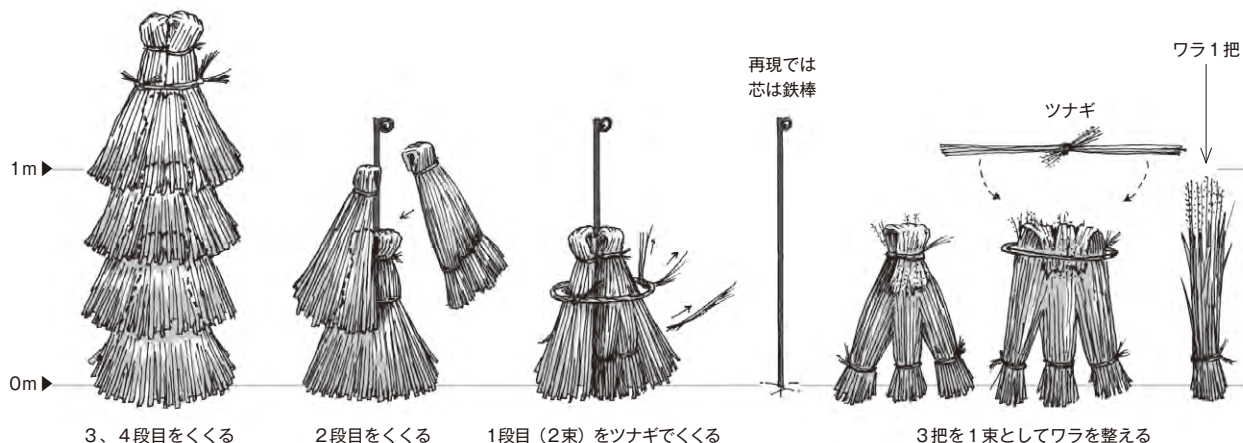
同じく新田寺の境内の地藏菩薩前に、集落の人達が墓参りで持ち寄った藁束をシマイ彼岸まで集めておき、高さ四メートルほどの大きなモリを作った。門と新田寺境内のモリは若勢団が作った。各家が夕方の墓参りを済ませた頃、集落中を触れ太鼓が回り点火を知らせる。太鼓の合図で夜七時に点火される。点火に使われたのは二、三把の藁を縦に重ね、長くしてしっかり縛り松明にしたものである。消えないように藁を振り回して歩き次々に点火した。

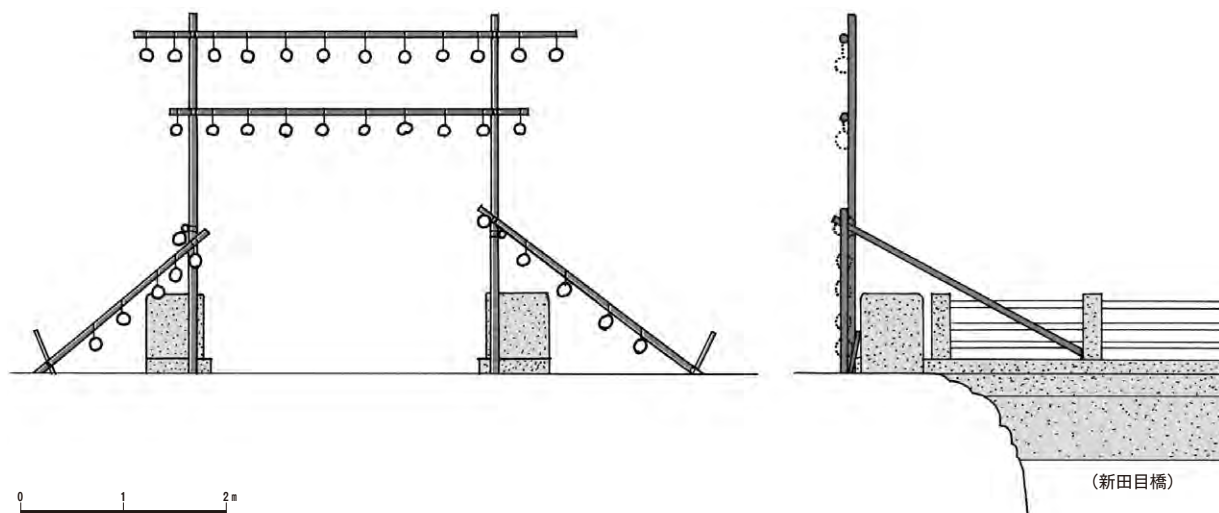
各家は自分で作ったモリが勢い良く燃えると、その年は火事など起らず無事過ごせると喜んだ。藁は一瞬で燃え尽きるが、藁を燃やした時の臭いと、一瞬にして燃え尽きる様は、祖霊を送る火として心に残り感無量であったという。稲藁を燃やした煙には害虫を追い出す力もある。この集落は、コンバインにかけずに稲藁を取っておき、平成一五年(二〇〇三)まで藁を使い続けた。

【現在のマトビ】

現在の運営は集落役員と若勢団の〇Bの五〇〜六〇歳代で作っている親和会が中心で行っている。人数は二〇

昔【図-105】新田目のモリ作りの再現





人くらいになる。子供は小学生が四人と中学生が二人になり、点火のみ手伝っている。地域協議会が一〇人ほどおり、布を集めてダマを作ってくれる。一〇〇個〜一五〇個のダンポを作る。

現在の仕掛けは、門を単管で作り、ダンポを吊すようになった。また各家のモリは長さ一・五メートルの鉄筋を雪に差して、針金の付いたダンポを吊している。現在戸数は五二戸で空家が二三戸あるが、現在も戸数分である六五本は立てるようにしている。平成二五年は、稲藁でモリ作りの再現をし、藁積上げ型のモリを二本作って燃やした。運営費は、集落からの補助金である。各家からは協力金は集めていない。

七五歳以上の高齢者は四〇%ほどになっているが、今のところ行事は継続し続けている。五〇〜六〇歳代はまだ元気であるが、集落の高齢化率のことを考えると、先行が不安であるという。

【墓参り】

墓参りは、昔同様にイリ、中日、シマイ彼岸の三回いく。かつては墓前では夕方藁束を焚いた。藁は二〜三把持ってゆき、元を下にして、元の方を少し開いて立てた。一段目に火が付いたら燃え尽きる前に、その上に藁を重ねていった。藁を燃やした煙は「霞火」と書いて「カスビ」といい、その煙で祖霊をあの世に送ると言われた。また、木の瘤に松脂をつけて燃やし、松明として墓に持っていく墓に立てた。最近ではダンポを竹棒に吊して焚く人など多い。ミズキの花ダンゴは作って持っていたものだが現在はやらなくなった家が増えた。



戸数分のモリを燃やす (平成一五年)
(保坂春聴氏写真提供)



門構えハザ掛け型マトビを燃やす
(平成一五年) (保坂春聴氏写真提供)

北秋田市

【第五章】

旧鷹巣町・旧森吉町・
旧阿仁町のマトビ

一 旧鷹巣町マトビ

(一) 生業と歴史

近世初期、米代川沿いの鷹巣地域一帯は、米代川の氾濫原であり、アシ、マユモなどや湿原性灌木類の広がる荒地であった。それが、肥沃な水田地帯に変わったのは、この地方を支配していた大館佐竹侯の新田開発政策と草分け百姓達の労働の成果である。寛文年中(一六六一～七三)に堰作りが何度も行われ新田開発が進む中で、綴子や坊沢、太田新田などの多くが、江戸中期に集落として成立した。しかしこの辺りの水田は俗に「ヌカリ」と言われ、馬はもちろん人が入ると腰までぬかり、田下駄をはいて仕事をしなければならぬ不良田であった。明治三〇年代(一八九七)にはこれを乾田化し、古田を区画整理し、未利用の池沼、原野を開田する計画が生まれ、明治四〇年(一九〇七)に耕地管理を開始した。結果的に馬耕が普及し、車輪も利用でき、労力節約につながり、品種改良なども手掛けられ収量を上げていった。

鷹巣町北部を東西に流れる米代川は経済の大動脈であった。本流筋には江戸時代から二ツ井、荷上場、鷹巣、根下戸、扇田、十二所などの主要な船着場があり、水運の中心地であった。⁽⁴⁶⁾河口から二ツ井までは、長船という大型の商荷積船で運び、それより上流は、ジアイ船という小型で頑丈な小回りのきく船が荷物を運んでいた。登り荷は、塩、水産物、水産加工品、古手木綿、綿、日用雑貨などであり、下り荷は、米、大豆、藍、それに

長木沢を中心とし、糖沢山、黒沢山、今泉山などの御直山から伐り出される杉材や尾去沢銅山(南部藩)産出の荒銅であった。⁽⁴⁷⁾一七世紀半ばから一八世紀半ばまで、尾去沢銅山から他領への銅の輸出に米代川が使われ、能代港から海運を利用して上方に廻漕された。この銅の運搬は、鷹巣をはじめ米代川沿いの船付場や周辺の集落を潤し、発展していくことになった。

この米代川と平行して走っていたのは、羽州街道である、坊沢村深閑から綴子をぬけて大館、そして南部領とも通じていた。綴子には本陣が置かれ、小繋、今泉、坊沢、川口、大館、釈迦内には駅馬役所が置かれていた。また、鷹巣から摩当、小森、小猿部を経て、米内沢にぬけると阿仁街道そして阿仁銅山に通じていた。いずれにしても鷹巣は交通の要所であった。

小猿部沢山には、銅山掛山があった。江戸中期以降藩の最も重要な財源になっていた阿仁銅山の無理な稼行の結果、周辺山地の緑は蚕食され、藩は元文五年(一七四〇)、大阿仁大又沢や小又沢数十カ所の山々を銅山掛山とし、銅山専用の焼木、炭材、坑木など以外の採取を禁じた。七日市支郷の三渡、深沢、揚ノ下など、炭焼き運搬や物運び人足などで現金収入を得る集落が増加した。

また、養蚕は七日市とその支郷の横淵などに広がり、明治期半ばには、桑園の造成や蚕種製造をするところも増えていった。大正期になると養蚕業の質の向上をはかり、有数の養蚕地帯となり繭糸場も開設されるなど、好調が続いた。一方で川船や街道により繁栄してきた米穀商や酒造業、木材を利用した製材や下駄、海産物や荒物、



永安寺の墓地と広場

⁽⁴⁶⁾ 鷹巣町市編纂委員会『鷹巣町史 第三巻』鷹巣町 平成元年(一九八九) 一九四～一九五頁

⁽⁴⁷⁾

田口勝一郎他『図説 秋田県の歴史』図説日本の歴史5 河出書房新社 昭和六二年(一九八七) 一四九頁 一六五頁
元禄年間(一六八八～一七〇四)から宝永初年(一七〇五)頃は、鹿角地方の白根、尾去沢銅山は盛況であった。すでに延宝期(一六七三)から他領に輸出する銅は、米代川舟運の基点である扇田まで陸送され、ここで目を改めて米代川を下つての能代湊に送られ、そこから西廻り航路で大坂に廻漕されていたが、南部藩は、宝暦期(一七五一)ごろから尾去沢銅山からの荒銅は、米代川を使わず野辺地湊から大坂に廻漕するようになった。
荒銅は銀などの不純物を含んでいるが、大坂の銅吹屋で、南蛮絞という方法で灰吹銀を取り出し精錬される。

⁽⁴⁸⁾

⁽⁴⁹⁾ 鷹巣町市編纂委員会『鷹巣町史 第一巻』鷹巣町 昭和六三年(一九八八) 三九五頁

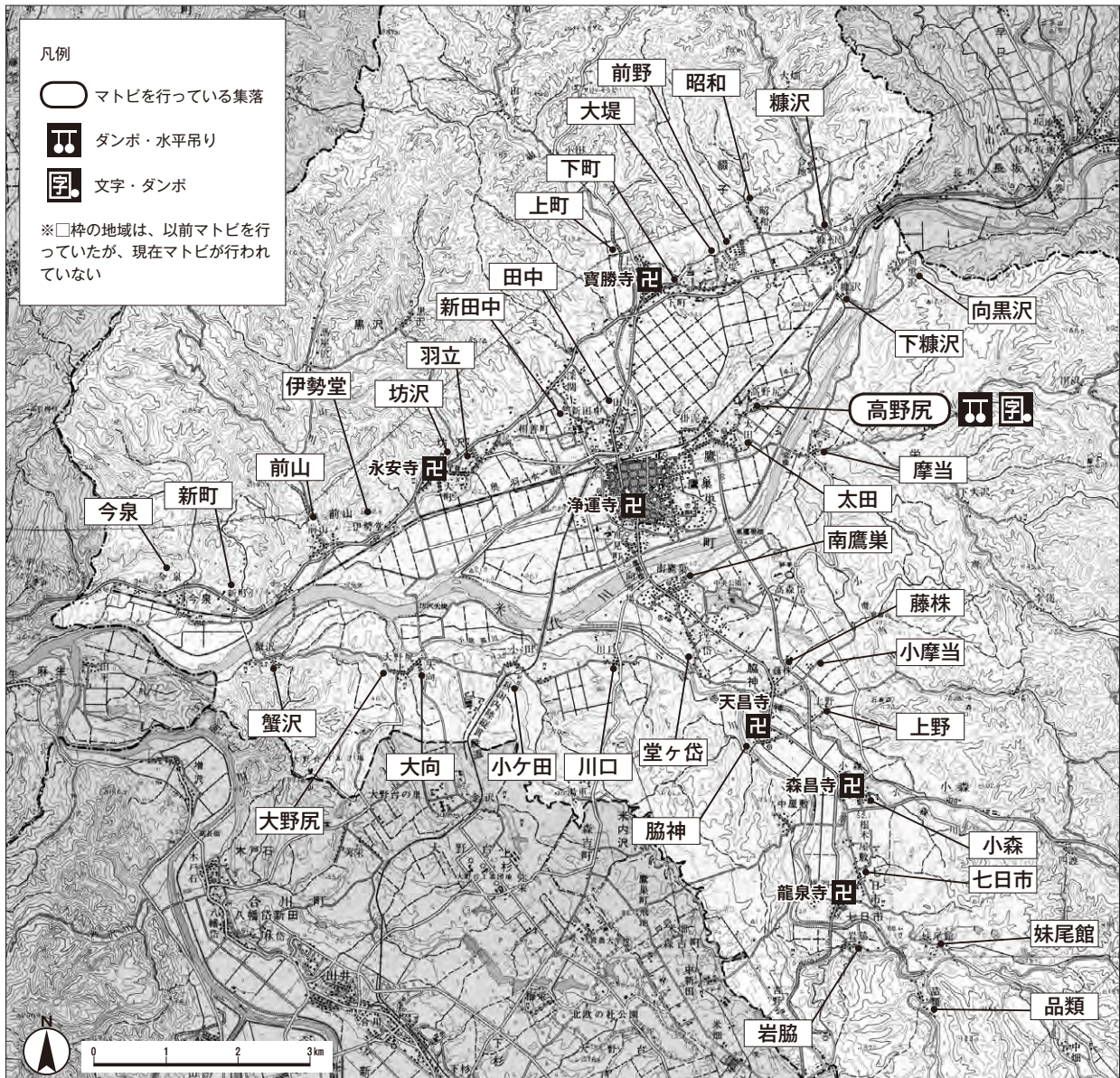
呉服商などの工業や商業が発達した。

(二) 檀那寺で行うマトビ

寺ごとに集まり 『鷹巣町史第三卷』⁽⁴⁸⁾によると、「春彼岸マトビをした は二月の中頃から末頃にかけてが多かったから雪の多い年もあり雪のない年もあった。墓参りと寺参りが主な行事だがお寺に遠い農村部は休みではなかった(中略)」とある。そして「夕方になってからお供え物(団子や餅、造花)を持って墓参りする。子供達は菓束を抱えて、墓地の中央に積み重ね、四方から点火して燃やし、おーじな おばな、ダンゴくうに、きとーりや、きとーりや」と唱えて、お供えした団子を串に差してわら火で焼いて食べた。(全町)。これは彼岸のイリと中日とシマイの三回行が、中日は、鷹巣、綴子^(つづし)など、寺のある集落では百万遍念仏がある。また、シマイ彼岸は、マトビを焚いた後、さだら(棧俵)に供物を乗せ、ローソクを点して川に流し、おーじな おばな あかりにダンゴしよって えとーりや えーとりやと唱える。このような彼岸も昭和二〇年(一九四五)頃まででなくなり、今では花と菓子を買ひ、墓参りだけで済ます人が多い。」

町史の記述からみると旧鷹巣町は、集落単位で高い山に多数のマトビを焚くという形ではないことが分かる。鷹巣在住の成田節治氏(大正十一年生)によると成田氏が小学生だった昭和七年、九年頃で、鷹巣で七〇〇八〇人の子供がいたという。子供達が集落を回って菓を貰い集めて、それを寺の墓地で重ねて焚いた。その後皆で集まって食べる餅などが楽しかったという。

今(図107)(北秋田市)旧鷹巣町のマトビ・現状の形



坊沢^{ぼくざわ}、綴子^{つづこ}、鷹巢^{たかす}、沢口^{さわぐち}、摩当^{まどう}、七日市^{なぬかいち}などでは、その地域の寺が中心になって墓地でマトビをやっていたようである。彼岸の中日にそれぞれの自分の檀那寺に集まり、子供達が中心になってマトビを焚いた。坊沢地区は永安寺、綴子地区は宝勝寺、鷹巢地区は浄運寺、沢口地区は天昌寺、栄地区森昌寺、七日市地区は龍泉寺である。いずれも現在は曹洞宗寺院である。

(三) 高野尻^{たかのしり}のマトビ

高野尻地区は「掛泥野」と呼ばれた農耕に適さない土地であったが、昭和二年（一九四六）掛泥地区の六世帯が入植して開拓した集落である。マトビは開拓五〇周年を迎えた平成八年（一九九六）に行うようになり、一七年間続いている。

地区の礎を築いた人々への感謝の気持ちを表し、祖霊を供養するとともに、住民が協力し合うことにより地区が益々発展する事を願って、高野尻自治会と市営住宅自治会が共催して「マトビ」を始めた。

開催時期は、三月第一日曜日である。春彼岸の頃は、雪が消えてしまうことも多いので、雪がある時期に開催することにした。

開催場所は、墓地前の道端である。マトビの材料は、使い古しの軍手を使用し、一つの手袋に三〜四個の手袋を丸めて入れて針金で縛りダンポを作っておく。事前にダンポは灯油につけてナイロンの袋に入れておく。仕掛けは、単管を組んで枠を造り、文字を作成していく。平成二二年の場合の文字は「二〇一〇トラ高野尻万灯火

炎立つ供ようの両自治会」となり、さらに「熊」や「内陸線」、「市章」などが移動する仕掛けも作っている。これらの作業は当日も入れて三〜四日で終わらせ、反省会を開いて次回に生かしてしていく。平成一八年からは、七月の「たかのす米代川花火大会」にも参加し、同様のマトビを焚いて協力している。マトビは、地域の活性化や地区民の団結にも繋がり継続されている。

二 旧森吉町のマトビ

(一) 生業と歴史

旧米内沢町^{よないざわ}と旧前田町が合併して、昭和三二年（一九五六）に旧森吉町が誕生した（表一）。阿仁川沿いの集落である本城は、江戸時代中期には大郷であり、舟稼業を営む者が多かった⁽⁴⁹⁾。およそ半数の家が夫は舟乗りを生業として阿仁川を舞台とした舟運に携わっており、田畑の耕作をするのは妻や子であった。本城は蔵宿の手先舟を二二〜二三艘借り受けていて、阿仁銅を運ぶのが主であったが、蔵宿の荷のない日は、この舟を使い、商荷や集落から委託される物成米などを運び稼ぐことができた。

米内沢の船場には阿仁銅山から運ばれてくる荒銅を一時保管する浜庫が建ち並んでいた。米内沢は物産の中継地として重要な所であり、米、醤油、味噌、塩、菓子などや日用雑貨などはここで一旦荷揚げされ、阿仁銅山方面に運ばれたので、銅山役所が置かれていた。

一方でこの町の全面積の五六%余を国有林が占めてい

(49) 阿仁町史編纂委員会『阿仁町史』阿仁町平成四年（一九九二）三七七〜三七八頁
本城の肝煎が、「本城集落の半数である四四〜四五軒が舟稼業に携わり、男手が変わって農業をやるのは女房や子供であるため、農作業は遅れ集落は立ち行かなくなる。蔵宿に手先舟を返して農業に戻ってもらいたい」と嘆願している文書が残っている。



平成二二年（二〇〇九）の高野尻のマトビ。写真は「高野尻万灯火の記録」平成二二年三月より（照内捷二氏より借用）

る。米内沢営林署は、昭和一三年に阿仁合営林署から分割されたもので、その歴史は新しいように思われるが、藩政時代から極めて重要な森林地帯であった。

それは、阿仁銅山の精錬用薪炭材の大部分が伐採供給されたからである。秋田藩ではこの地域を最も重要視し、銅山掛山として、三〇年周期の輪伐制などの伐採方法を行うなどして、伐採量の平均化と保護を計った。阿仁銅山に要する精錬用の薪炭材は莫大であり、森吉山を中心に、小又川沿いはその供給源となった。ブナを主体とする広葉樹はほとんど伐採されていた。

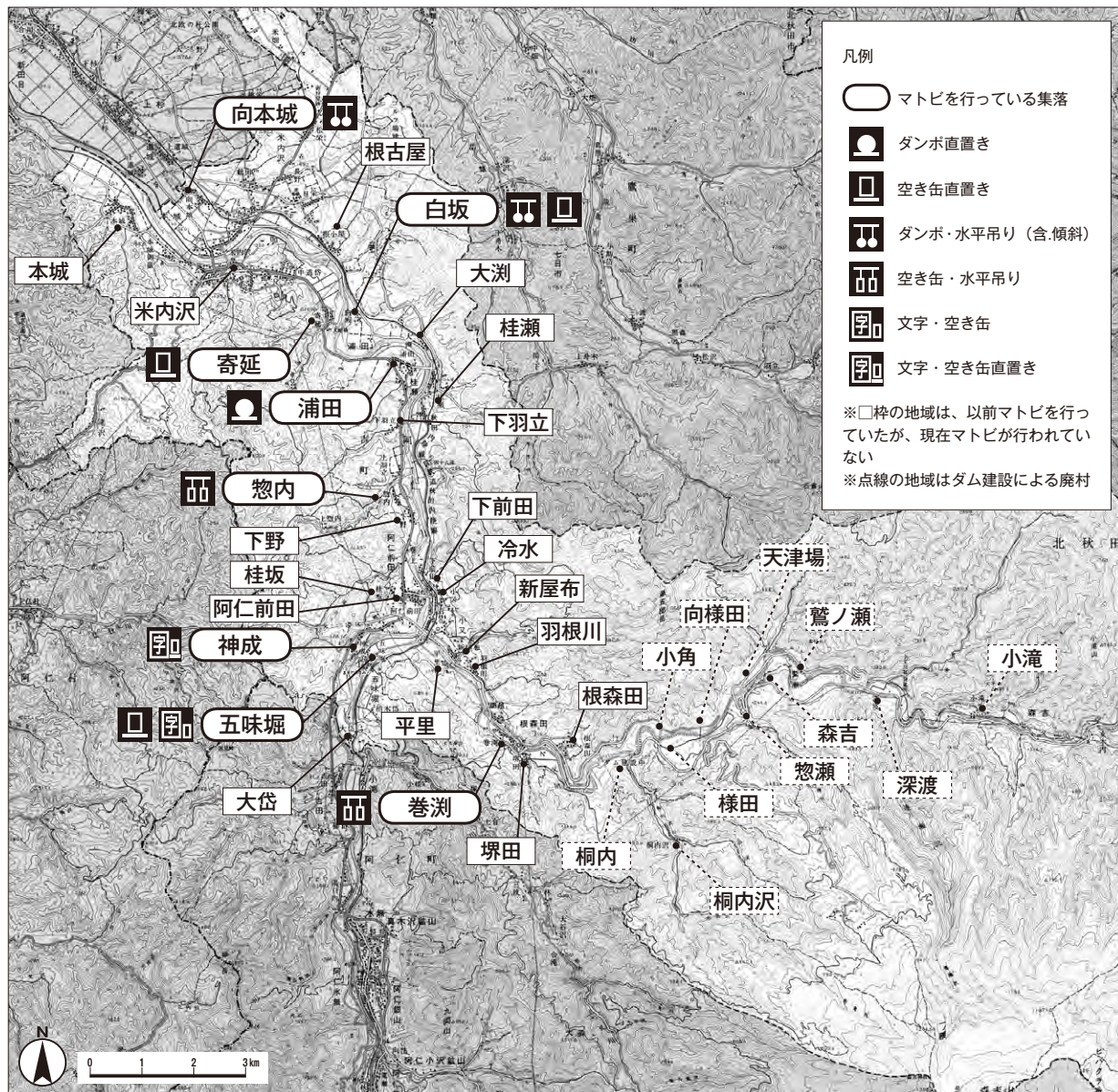
明治に入り、官民有区分によって官林となり、明治一九年には阿仁合小林区署が水無に創設されて、小又川などの流域の国有林を管理するようになった。しかし明治になっても鉾山は営業を続けており、薪炭材の供給は続いた。薪の供給量は広葉樹林を毎年四〇〇ヘクタールずつ伐採しなければならなかった。また木炭は立木資材一立方メートルからおよそ三〇貫匁生産するもので、鉾山で必要とした木炭の供給には森林が七万二千立方メートル必要であった。

阿仁銅山からの影響は伐採や製炭ばかりでなく、水運にも及び、銅山の物資運搬に携わる集落も多く、その代表的集落は米内沢、巻洲、桐内沢などであった。

米内沢は運搬用の舟をおよそ五〇艘、その他寄延、大淵、浦田、前田、神成、五味堀などで約五〇六艘ずつ所有していた。また阿仁川沿いの寄延、浦田では、珪藻土を利用した七輪作りが明治時代末期まで盛んであった。

終戦後になると紙不足は深刻で、紙パルプ資材の供給

今【図100】（北秋田市）旧森吉町のマトビ・現状の形



のほか、昭和二五年（一九五〇）からは住宅供給用に、床板や合板等の建築資材としてブナが利用された。昭和四〇年代に至るまでの約二〇年間はブナ林伐採が盛んに行われ、前田貯木場にブナ丸太が山積みされていた。この好景気が昭和五〇年代も続いていた。

昭和二八年（一九五三）には森吉ダムが完成した。小又川の奥地にある第一発電所や湯ノ岱の東北無煙炭坑・奥羽無煙炭鉱も稼働しており、その現場で働く人たちで、昭和三〇～四〇年代まで小又川の奥地は賑わった。その後の昭和四七年の米代川の大洪水により森吉山ダムの計画が浮上し、小又川沿い村々はダムに沈むことになった。

また、米内沢営林署の国有林内には、秋田県内で数少ない広大な面積のノロ川牧場がある。町管理の肉用牛夏季預託牧場で、農家の所得増大を目的として始められたが、その利用者は森吉町全域と、阿仁町、鷹巣町の一部も含まれた。また、小又川沿いは古くから馬産地として有名であり、向様田には放牧場があった。

（二）小又川沿いのマトビ

マトビの様子と焚いた場所

小又川に森吉山ダムの計画が起ったのは、昭和四八年

（一九七三）のことであり、ダム貯水池予定地になった桐内・桐内沢・様田・小角・向様田・惣瀬・天津湯・森吉・鷺ノ瀬・深渡・小滝などが、平成八年（一九九五）頃までに順次移転した。かつて小又川沿いの各集落は、春彼岸に集落単位でマトビを行っていた。図109は、各集落のマトビ場所のプロット図である。中でも桐内沢や森

吉などは比較的高い山の上で焚いていたことがわかる。

森吉山ダム工事事務所「聞き書き 森吉地区の思い出」〔平成十七年度（二〇〇五）〕によると、森吉集落の吉田豊氏（昭和一〇年生）が子供の頃であった昭和二〇年代（一九四五）のマトビは、シマイ彼岸に春休みの行事として小学生と中学生で行っていた。前日までに各家を回って乾燥した藁束と寄付金を集めた。藁は当日、自分達で背負って山に運び高学年がマトビの仕掛けの準備をする。場所は太平山で頂上には祠があり、ヘアピンカーブのような道を登っていった。朝食後の朝八時頃から、何度も山と里を往復して藁束を運んだ。長さ二メートルぐらいの棒の先の周囲に藁束を縛りつけ、八〇メートルぐらいの間に一二～一三本のマトビを立てた。立てる本数は藁の量にもよるが多くても一本本ほどだった。

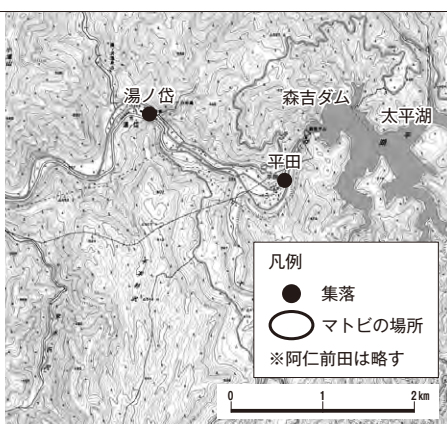
火をつけるのは中学生で、雪の壁を高くして風よけにし、山で暗くなるまで待った。子供にとってはマトビは楽しみであり、点火の係を早くやりたかった。準備や仕掛けづくりはすべて子供でやったが、大人が三～四人当番でついていた。

点火係は、ボロキレに油をしみこませ、棒に巻き、松明をつくり、「いいぞー」という合図で一斉に点けた。初めはダマシといって「ホーイ」「ホーイ」と呼び、集落の人が家の外に出るように合図する。皆が外に出たところで、マトビに火を点けた。太平山は下から見ると鍋の弦のような丸い形をしていて、火が灯ると奇麗で別世界のように幻想的だった。

火を付け終ったら松明をかざしてすぐに山道をおりて



昭和五五年（一九八〇）の桐内沢のマトビ（土佐恵美子氏撮影）



（図109）小又川流域でかつてマトビを行っていた集落とマトビの場所

(50)

森吉山ダム工事事務所「聞き書き 森吉地区の思い出」森吉山ダム歴史資料調査 聞き取り調査概要版 平成一七年（二〇〇五）

(51)

本城屋勝「わたべつた研究ノート」無朋舎出版 昭和六一年（一九八二）二五二～二五三頁

くる。マトビが終ると集会所に集まり飲食を楽しんだ。準備係りは女子でダマコ餅という米粉で作ったダンゴや菓子、飲物が用意されていた。飲食代は寄付金で賄った。

昭和四〇年代（一九六五）になると蕨束が集まらなくなり、タイヤを燃やしてマトビをやったこともあった。仏を慰める行事にタイヤを使うのは良くないが仕方なかった。マトビの場所は、子供の数が減って蕨束を大量に運び上げられなくなり下の八坂神社に変わった。

マトビは、子供が減少したことから、近年、大人が中心で行うように変化した。子供にとっては自分達が主導権を握っていた頃の面白みが消えてしまった。マトビは子供だけの世界で、遊びながら上下関係や我慢することも覚えるよい経験だったという。

驚ノ瀬の昭和二〇年代（一九四五）のマトビは、男女関係なく参加し、集落の戸数である八本を山の上に立てて焚いたという。桐内沢も昭和五〇年代（一九七五）まで、男女関係なく参加し、男マトビと女マトビを作り、唱え言葉を叫び、競い合って楽しんだ。男組は「男のマトビ、べえらべら 女のマトビ、おうすぶす」女組は「女のマトビ、べえらべら 男のマトビ、おうすぶす」と唱えた。小滝では車マトビもあった。また、本城屋勝の『わらべ歌研究ノート』によると、小又川下流の根森田、堺田、羽根川、新屋布、平里には、マトビの唱え歌があり、マトビが行われていたことがわかる。これらの集落の唱え歌は、「まどびちいだな しなぎ（舟木）のさつさ（沢さ）ついだかな だれあつた ひかりまちけた大（おお）でんがら でんがらよ」である。シマイ彼岸に

は、阿仁川沿いはもちろんのこと、小又川沿いのあちこちの山に灯が揺れて奇麗だったという。

墓参りと百万遍念仏

森吉集落を例に、この地域の墓参りを見て行くと、彼岸の間に三回

行く。明治から大正の中頃までの春彼岸には、祖母は、米の粉で作ったダンゴとジンダ汁（大根の千切り、ワラビ、油豆腐、人参、つぶした青豆と一緒に煮込んだ汁）か青豆を入れない「けの汁」を持って行く。ドブロクを沸した小釜、コチコチ（ネコヤナギ）などを持っていった。汁は石塔前に撒いた。子供は蕨の小束を五〜六把と一ヶ月前から準備しておいたタタキを二本かついでいった（第二章図19）。祖母は持ってきた重箱の中身を石塔前に供え、線香をつけて拝む。

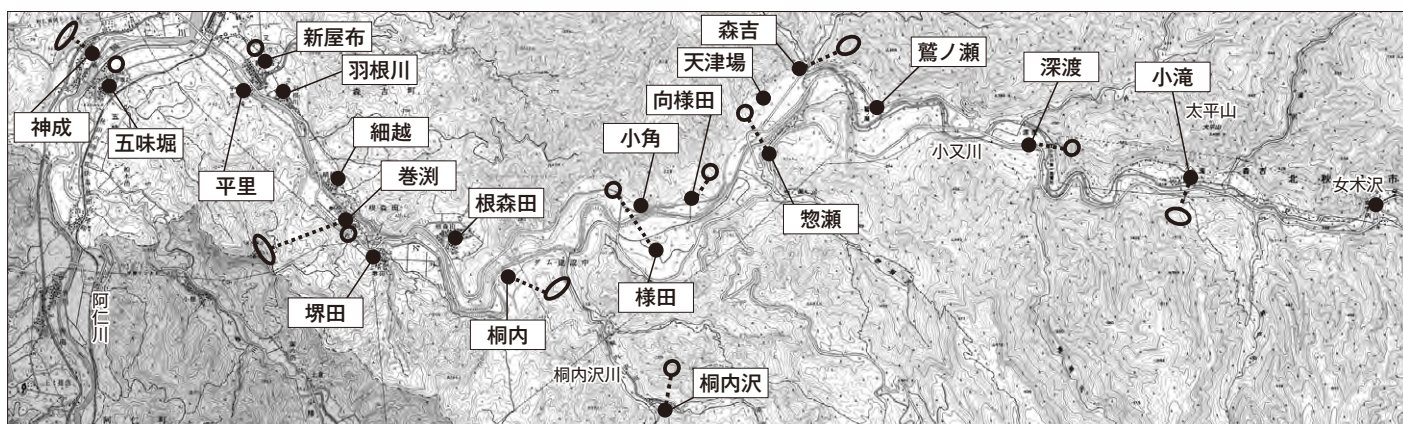
蕨束は立ててタタキとともに火を点け、火の点いたタタキを振り回して、石塔の前で「じいな、ばあな、この火のあかりで団子背負いに来とらえ」と二、三回大声で呼ぶ。中日も墓参りを同様にするが、彼岸の終りには、「じいな、ばあな、この火のあかりで団子背負っていとらへ、いとらえ」と叫んで墓参りをした。その後、集落はずれの地蔵様の前でお参りした人達が、部落の中に悪病や災難が入らぬように輪になって大きな数珠を百回廻しながら唱えた。三ヶ所の地蔵様の前で、それぞれに念仏を唱えているうちに夜になってしまった。

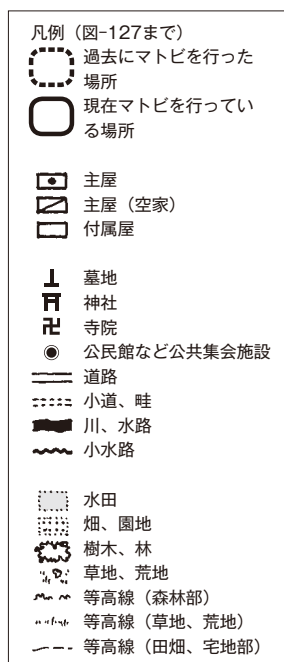
③ マトビが現存する集落

① 本城のマトビ

現在の戸数 一五〇戸

【昭和二十一年（一九四六）〜二十六年（一九五一）頃】





【図-110】本城の新旧マトビの位置図

話し手 金福治郎氏（昭和十一年生）

小学校三年生、六年生の子供だけで彼岸の中日に燃やした。子供は四〇、五〇人はいたが、準備は大人も一緒に行った。その当時は一五〇戸ほどだったので、各家の雪囲いの藁を持ってきた。一人三〇把を一マルにし、それを背負って、夕方山に上がる。山の上まで子供の足で二〇分くらいある。その束を積上げて、二、二・五メートルほどの高さにして縛る。これを「ヤグラ」といい、一本立てて暗くなったら焚いた。燃やしたら皆で山を下りてきた。徐々に墓の方に下りてきて焚くようになった。七日市の奥の舟木方面にマトビが見えたら豊作だと言われる。

【現在のマトビ】

昭和四〇年代には途切れていたが、昭和五六年（一九八一）に復活し、平成六年（一九九四）まで行っていた。金氏が公民館館長になった時から、公民館活動の一環として復活させた。ダンポは各家一個作ってもらった。ダンポを針金に吊し、「本城中日」などの文字の仕掛けを作った。マトビの仕掛けは、墓地側の道端に三〇〇メートルほどにわたり作った。子供会の男子と父母会の人達が手伝う形であった。子供が一〇人位とその親達である。全戸から三〇〇円ずつ集めて、針金や灯油を買い、慰労会代にした。皆でたこ焼きを食べ、飲み物を飲んで楽しんだ。現在は高齢者が増え、子供も五、六人になったので行わなくなった。

【お墓参り】

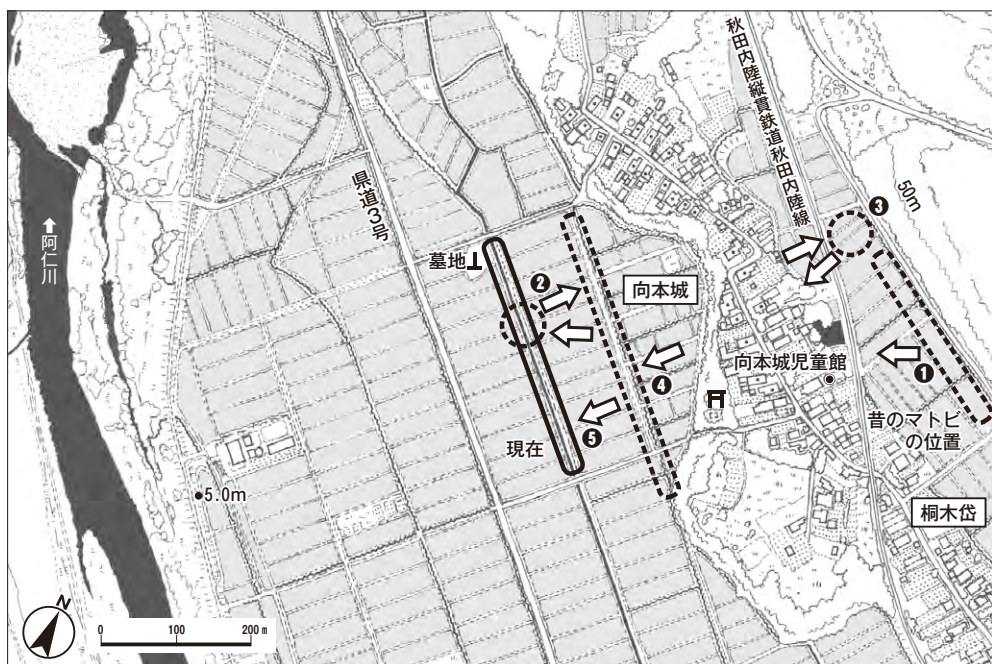
彼岸のイリ、中日、シマイの三回行き、その都度火を



木肌を削って作った花を供えた墓（本城）



昔のマトビを行った山（本城）



【図・111】向本城の新旧マトビの位置図

焚いたが今は焚かなくなった。墓には花ダンゴも供えたが、現在は一軒か二軒持つて行く人がいるくらいである。

② 向本城のマトビ

現在の戸数 六三戸

【昭和一〇年代（一九三五）】

話し手 金作次郎氏（大正一四年生）

当時は子供の数が多く、一〇〇人以上いた。直径二〇センチほどに束ねた藁を芯棒なしで二段くらいに積んで五〇〇メートルくらいにわたつてたくさん並べた。マトビの場所は集落東側の山側の線路の方の田だった。二メートル程の間隔で置いても二〇〇個以上になった。

中央に二メートルほどの高さの芯棒を一本だけ立て、藁束を四段に積んで縛つたものを作った。藁束は全戸（六〇戸）を回つて集めてきた。

マトビを焚いたのは彼岸の中日だけであった。

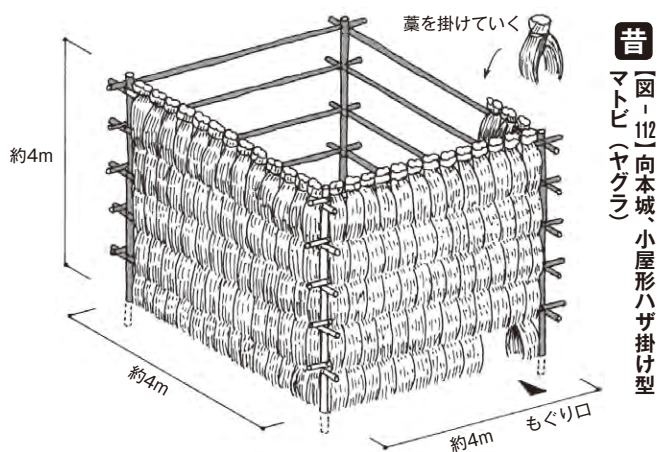
【昭和三六年（一九六一）頃～四三年（一九六八）頃】

話し手 金祥昌氏（昭和二八年生）

子供の多い時代で六〇人以上はいた。子供が各家を回つて藁束を二五把ずつ貰い、櫓に載せて集めてきた。藁を出せない家は一〇〇円～三〇〇円くらいの協力金として払った。それが運営費になった。

ハザ木を四メートル四方の小屋のように組んで、横木を四、五段に渡し、藁束を干すような形で四方に掛けていった。これを「ヤグラ」といった。点火時には一人が藁を掻き分け中に入り、中から火を点け、すぐに脱出した。消防団が待機していた。

マトビの場所は集落の西側の田の中であった。昭和四



向本城のマトビの場（墓地の脇から四〇〇メートル）

○年（一九六五）頃まで墓地の方の田の中で行っていたが、区画整理の工事が始まり、集落の山側の田に、二年程移ったが、工事後また墓地の方の田に戻った。

【現在のマトビ】

少し前までは子供が三〇人はいたが、現在は数人になったので、男子だけでなく女子もいっしょにやる。集落役員七人、消防団の人や六〇代の仲間も集まって二四〜二十五人になる。マトビの伝承は担い手に掛かっているので、集落全体に声を掛け、出られる人には協力してもらう。

昭和四八年（一九七三）頃から布で作ったダンポと灯油でやるようになった。現在もダンポと灯油で行っている。現在、全戸に一〇個から一五個ずつダンポを作ってもらい、六〇〇個以上は集まる。

シメイ彼岸（注①参照）にやるか中日にやるかは、その年の天候によって決める。マトビの場所は水路の堤防の上である。灯油は稲作に影響を与えるので田の中ではできなくなった。最も盛んな時は神社の辺りまで仕掛けを作り、ハザ棒で「中日、ヒガン」などの文字を作り、針金を張ってダンポを吊した。婦人達に炊き出しをしてもらったこともあった。現在は墓地側の堤防の上に、仕掛けをあまり大きくせず行っている。平成二五年は、文字は作らず水平マトビのみであった。

その年に亡くなった人がいると、墓に柱を立て、布に名前を書いて火を点けて供養することもある。県道三号線沿いにある防風フェンスで、他集落からマトビが見えないので、その時だけフェンスを上げてもらい見えるようにしている。

【墓参り】

墓参りは、イリと中日とシメイ彼岸の三回はいった。雪が多いときは三メートルも積もるので、墓参りは除雪が必要である。墓では藁を二把ほど燃やした。藁には口ウソクで火を点けた。ダンシ、花ダンゴも持っていた。

③ 白坂のマトビ

現在の戸数 一六戸

【昭和二五年（一九五〇）〜三〇年（一九五五）頃】

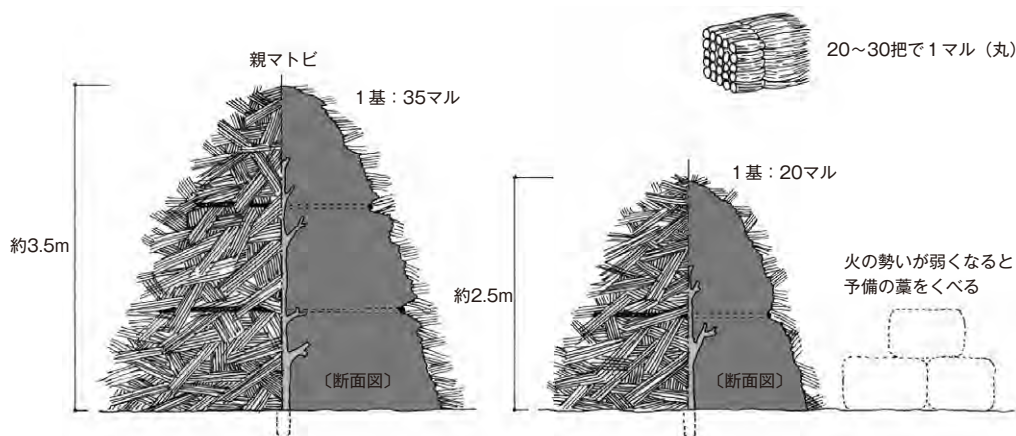
話し手 田崎久氏（昭和一七年生）

小学校の子供だけで行っていた。当時は一八戸の家から藁束を集めて歩いた。一軒から二〇〜三〇把を束ねたものを六〜七マル（二二〇把〜二二〇把）貰ってきた。

水田が沢山ある家からは二〇〜三〇マルも貰ってきた。貰った藁束は木の櫓に載せて運び、二〇〇マル（四千把）以上になった藁を稲荷神社の角に集めた。高さ二・五メートルほどの雑木を一本立て、周りに藁を置いてゆき、円錐形に縛った。それを七〜八本作った。戦前の人達は二五〜二六本を立てて、焚いたという。

真ん中のは親マトビといって、高さ三・五メートルほどの大きいのを作った。それが一番良く燃えなければならぬ。藁束は予備を取っておいて親マトビの燃え方が弱くなったら追加していった。マトビはオクリ彼岸に焚いた。焚いた場所は稲荷神社の入口の角から畑の畦沿いに長く並べた。

マトビが終ると、集落の会館に集まる。ダンシは子供達が各家で作ったものを持ち寄るが、ばあさん達が料理してくれたものを皆で食べて、甘酒など飲んだりして楽



昔【図-113】白坂のかつてのマトビ

しんだ。しかし昭和四〇年代（一九六五）に藁がなくなつたため一度止めた。

【現在のマトビ】

昭和四八年（一九七三）頃に再開した。仏の供養は続けた方が良かった。最近では子供がいないので、若勢会六名ほどが中心になって行っている。藁がないのでダンポに変わったが、シマイ彼岸に焚いている。

ダンポは各家にお願いして五個ずつ作ってもらっている。現在、戸数は一六戸なので九〇個は集まる。ダンポは針金を張って吊し、その他にジュース缶に灯油を入れて、中に布を巻いたもの入れ、雪の中に直置きしている。

【墓参り】

墓参りは三回いく。一ヶ月ほど乾燥させた木を叩いて、先をボサボサにしたものを「タタキ」というが、それに火を点けて持っていく、墓に立ててくる。タタキは人により違うが、三〇〜四〇センチで藤や檜を使った。無縁仏、六地藏、自分の墓に一本ずつ立てるので三本持っていた。三回ともタタキを持っていくので九本は用意した。昔は午後の二〜三時に墓参りをしたが、今は様々で、火を焚く人もいないが、供物にダンシだけは作って持っていく。また、花ダンゴを作ったものだった。ミズキに米粉で作った色付きのダンゴを付ける。一回の墓参りに一本は持っていた。

④ 寄延のマトビ

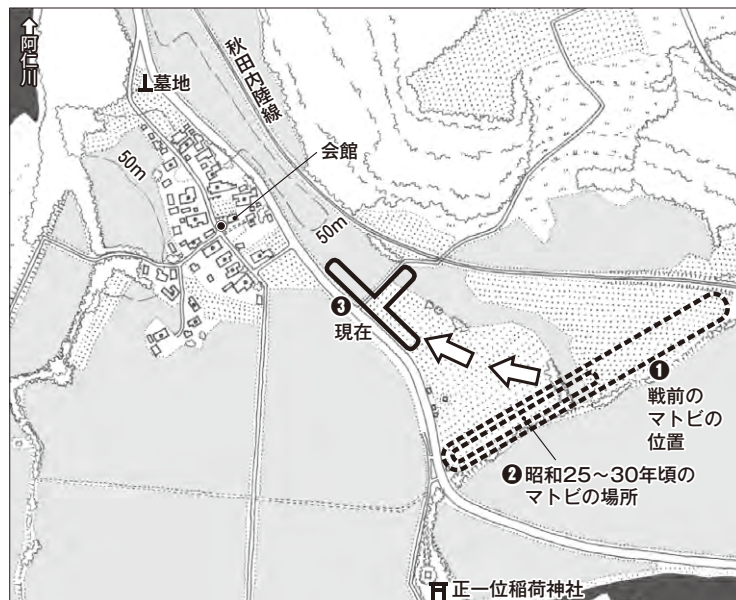
現在の戸数 二七戸

【昭和二九年（一九五四）〜三四年（一九五九）頃】

話し手 石崎稔氏（昭和一九年生）



【図-115】
寄延の新旧マトビ



【図-114】白坂の新旧マトビ位置図

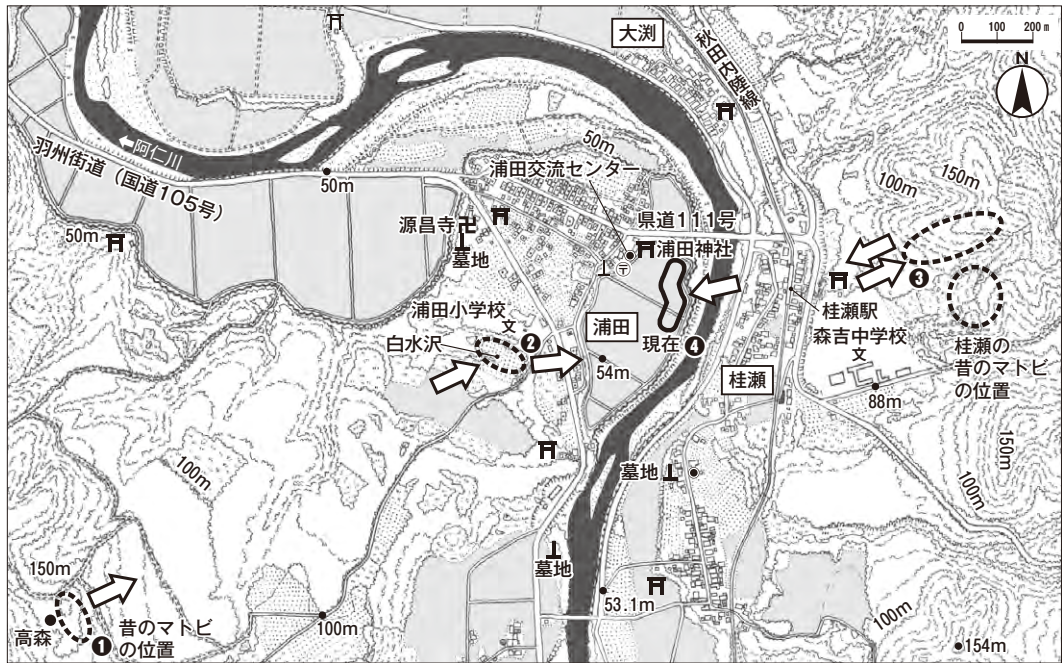


かつてのマトビの場所は杉の植林で覆われている



集落のはずれにある墓地（白坂）

【図-116】 浦田の新旧マトビの位置図



小学校三年生から中学校三年生までの子供達でマトビを作った。若勢団は夜だけ手伝いに入った。

当時は、二九戸あり、集落を回って藁束を貰い歩いた。藁は豊富でいくらでも集まった。

マトビの場所は、集落の西側の山の尾根であり、マトビの前日は藁束を背負って、一日掛かりで運び上げた。作業する小屋は作らない。長さ二メートルほどの芯棒を山から伐り出して立て、藁束をその周りに積上げて、円錐形に縛り上げた。これを尾根に一月から二月までの一二本立てた。閏年には一三本立てた。マトビは、シマイ彼岸に行われたが、年占をした事はない。点火にはタキを利用し、松明としても利用した。

マトビが終わった翌日は、集落中を回って協力を集めた。各家から五〇〜一〇〇円くらい集めた。これで「遊山」をした。宿は、毎年当番制にして菓子を買ひ、甘酒などを持ち寄り、トランプなどをして遊んだ。

【現在のマトビ】

子供は小学生が二人、中学生が一人になった。初めは、子供達が行っていたが、子供が少なくなり若勢団で行うようになった。現在四五歳以上の若勢団が五〜六人で行っている。

昭和四〇年代（一九六五）半ばからコンバインが入り、藁が使えなくなり、マトビの場所は農道に下りてきた。仕掛けも藁からダンボに変化した。ダンボは、全戸分の二七個作りそれを燃やしている。

運営費は、自治会から一万円出る。各家から協力は集めない。灯油代、針金代、反省会代などに使われる。

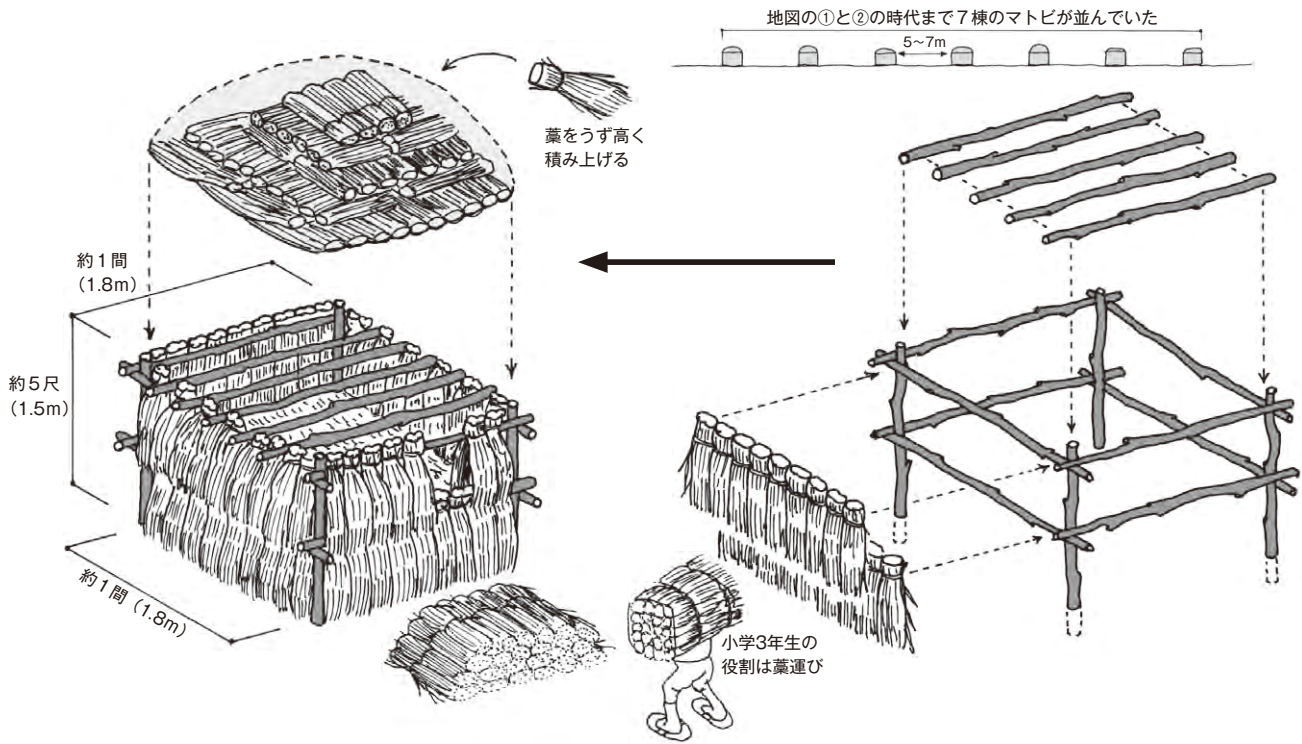


マトビの点火に集まった大人と子供たち（五味堀）



缶を直置きして文字を形づくる（神成）

昔【図-117】浦田の小屋形ハザ掛け型のマトビ



【墓参り】

墓参りは、昔も今も三回行くが、現在は、ダンシを作って持っていくのは中日だけになり、あとは市販の菓子で済ませる。この集落では墓前でタタキ(第二章図-19)を焚かない。藁を二、三把持って行って、元を下にして立てて燃やした。これを「カスビ」といって、イリと中日とオクリ彼岸に三回焚いた。現在は焚かなくなった。

また、オクリ彼岸には、各家から女性が一人出て、生活改善センターに集まり百万遍念仏を行っている。昔は、持ち回りで宿を決めて行っていた。

⑤ 浦田のマトビ

現在の戸数 一〇一戸

【昭和三〇年(一九五五)～三五年(一九六〇)頃】

話し手 柳山敏幸氏(昭和二〇年生)

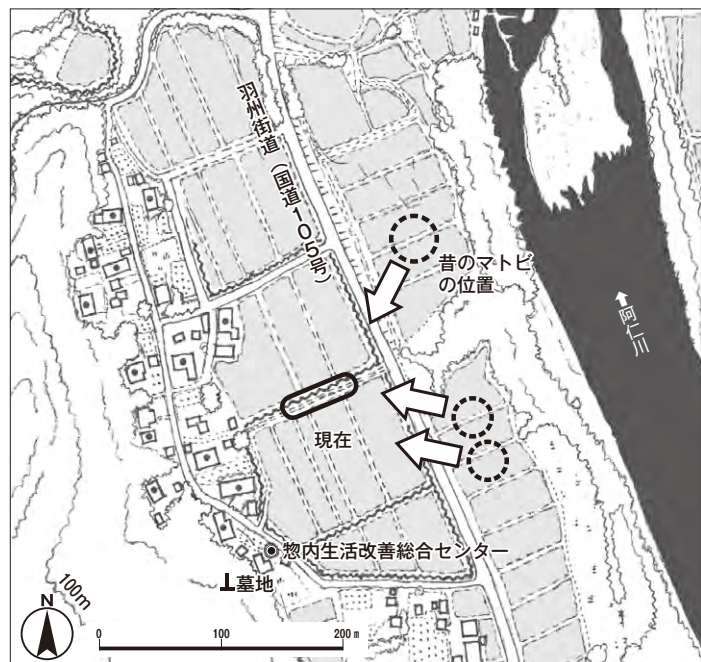
シメ彼岸(注①参照)にマトビを焚く。運営は少年団という組織で行った。少年団は小学校三年生から中学校三年生までの男子だけで構成されていた。少年団には集落の中を「火の用心」と唱えて回る役目もあった。火の用心の班は月、日曜日まで七班あり、一班で一〇人くらいはいた。マトビの前になると、少年団は各家を回って藁束を貰って歩いた。藁束が無い家からは金銭を貰った。昔は一三〇戸はあった。稲を直径八、九センチ程に束ねたものを一把というが、小学校三年生でもそれを四〇把ほどに束ねたものを背負って山に登った。マトビの場所の高森山までは、浦田神社の辺りから登り始めて二時間はかかった。カンジキを履き雪の中を歩いて行くのは大変だった。



かつてマトビを焚いた山、片道二時間かかる(浦田)



布を巻いた藁縄の芯を缶に入れ、灯油を注いで燃やす



【図-118】惣内の新旧マトビの位置図

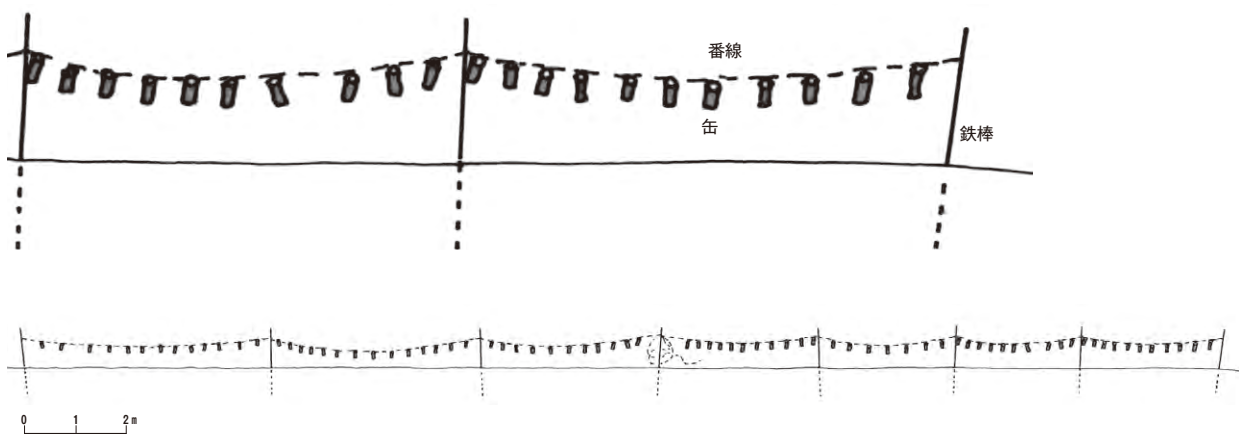
マトビの仕掛けは、集落の持山である高森山から、檜などを伐って、四角い建物のように組み、藁束を括り付けた。一坪ほどの広さで高さは一・五メートルほどだった。屋根は木を四、五本並べた上に藁束を積んだ(図-117)。小屋は五、七メートル間隔に一列に並べて、火の用心の班ごとに七棟建てた。月曜の班から日曜の班まで、各班が競って建て、燃やしても最後まで倒れないものを作るのが腕の見せ所であった。点火には、藤の片方を叩いて、ボロボロにしてから乾燥させた物を使ったが、この集落では「タイマツ」といった。

昭和三十一年(一九五六)頃には高森山の杉が育ち、集落からは見えにくくなり、また遠すぎるということで、浦田小学校の裏に場所を変えた。ここも集落の林で白水沢といった。

昭和四五、四六年頃(一九七〇、七二)になるとスキー場の方の斜面に移動した。この頃はまだ藁束を貫って歩いてきたが、コンバインの時代になり、藁束は調達しにくくなった。そこで縫製工場から布を貰ってきて藁束とダンポの二本立てで行った。ダンポは二〇〇個を一晚で作り上げるのを目標にしていた。この時代は藁束束ねて文字を作った。その年の干支や「浦田」などを書いた。その周りに針金を張ってダンポを吊したり、雪の上に置いて並べた。ほどなくダンポだけになっていった。

【現在のマトビ】

現在もマトビはシメ彼岸に焚く。平成二一年頃から堤防で行うようになった。スキー場の脇に杉林があり、集落から見えにくくなり、杉林周辺の茅に火が燃え移るの



【図-119】惣内の缶マトビの立面図

が心配だったからである。

運営しているのは小学校三年生から中学三年までの子供で二〇人ほどである。若勢団が四五人手伝いに入っている。ダンポは一〇〇〜一五〇個を一晩で作り上げてしまう。針金で縛るのを大人が手伝う。ダンポは針金を張って吊すものと雪の上に直に置くものがある。点火は中学生のみが行う。点火用の松明は、一・五メートルほどの柳の先にボロを巻いて、針金できちんと止める。

運営費は子供達が各家を回って集める。一軒当たり一〇〇円だったが、現在は五〇〇円になった。

【墓参り】

昔は彼岸のイリ、中日、シメの三回は行き、墓を持って行って焚いた。藤で作った「タイマツ」は、シメ彼岸の時だけ持っていて、墓に立てて来る。藤は秋になると採りにいって準備しておいた。

墓の前で焚く藁は六把ほどで、焚き方は立てたり、横にしたりと様々だった。供物は米粉でダンシ(ゴマ、きなど、小豆などをまぶす)を作って持っていた。花ダンゴはこの辺では作らない。

⑥惣内のマトビ

現在の戸数 二〇戸

【昭和二十九年(一九五四)〜三十四年(一九五九)頃】

話し手 庄司与一氏(昭和一八年生)

藁束と豆がらなどを各家から貰って歩いた。芯になる棒を一本立て、その周りに藁と豆ガラ、杉の葉などをギユウギユウ押し付けてから縛り、杉の葉を差し、円錐形に形づくる。杉の葉は山に入り集めてくる。集落で二本

は立てた。大人は上と下にグループがあり、各グループが一本ずつ作った。また子供は子供だけで、少し小さいが同じ作り方のものを一本立てた。マトビを立てる場所は川沿いの田の中であつた。墓地は高台にあるので、田で燃やせばよく見えた。

集落単位でやるマトビは彼岸のイリと、オクリの二回やり、霊を迎え、送るということである。集落単位のマトビは一度途絶えたが、現在復活している。

【現在のマトビ】

子供は女子の小学生が一人になり、若勢団は七人で行っている。年齢は四二〜六〇歳くらいの人達である。現在のマトビの場所は集落に近い田の畔になった。マトビを焚く日も中日だけになった。仕掛けは「ソウナイ」、「中日」、「マトビ」などの文字を作った年もあったが、平成二五年は鉄棒を立て針金を張って缶を水平に吊した。ダンポで行っていた時期もあったが、現在は缶に変わった。ダンポだった頃は、三月に入ると週末を利用し、七人〜八人で一〇〇個は作った。現在はコーヒー又はジュースの缶に、ボロ布を丸めてギユウギユウに入れ、そこに灯油を入れる。古いタオルや軍手などでもよい。ダンポを作るより楽になった。缶には穴を開け、針金を通して吊せるようにする。仕掛けは当日の朝、仕事に出掛ける前に作ってしまう。点火は夕方六時三〇分頃である。

⑦巻測のマトビ

現在の戸数 二五戸

【大人のマトビ】—あたご様(大久保山)—

話し手 三浦米蔵氏(昭和二四生)

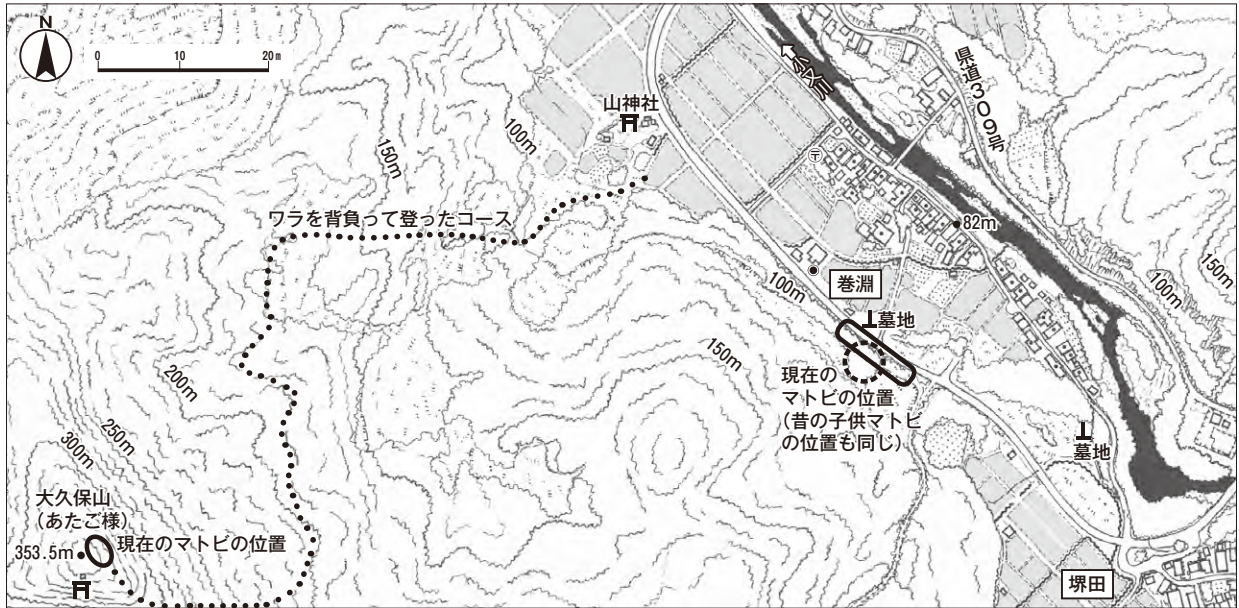


墓地の入口の六地藏と点火された缶マトビ
(巻測)



十数名で墓地裏の台地で準備を行う(巻測)

【図-120】巻洲の新旧マトビの位置図



佐藤一二三氏(昭和二八生)ほか

あたご様と言われる山の上で行った。⁽⁵²⁾ 標高三五〇メートルほどの山であるが、頂上には、愛宕様(山神)があり、山の上のマトビは、昔から大人だけで行った。若勢団が中心になって登っていたが、昭和四〇年(一九六五)以降は、自治会が行っていた。頂上まで二時間はかかる。山の頂上で焚くのは、彼岸の日だけである。初めは一人が藁束二〇把ほどを一マルに束ねる。それを二、三マル背負っていた。一〇人で背負うので、三〇マル(六〇〇把)ほどを山に上げた。直径一メートルほどの太鼓も背負っていく。カンジキを履いて五キロほどの藪道を登る。

山で適当な雑木を切って芯棒を立て、その周りを藁束で囲って円錐形に積みあげていく、縛ったりせずギューギュー押しつけて積み、杉の枝葉を差した。高さは三、四メートル程になる。それを二、三本作った、大きいものを一本、小さいものを二本作った。これをヤグラといった。マトビに点火するのはタタキと言って、七〇センチぐらいの檜か藤の片方を叩いて、繊維を細かくし乾燥させたものである。

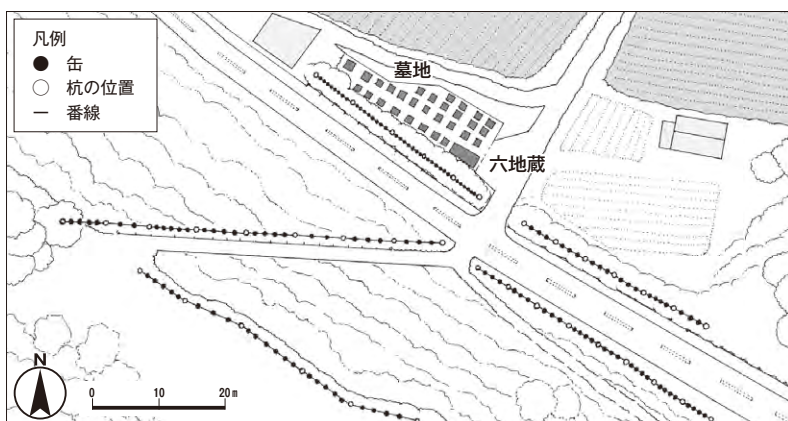
点火の合図は太鼓であった。山の上と下と両方で太鼓を叩いた。太鼓がなると集落の人達が外に出てきてあたご様を見あげた。天気が良いければ、巻洲のマトビは、能代の端からもよく見え、よく見えた年は豊作になり、漁師は魚が獲れると喜んだ。

藁束と杉の枝葉は、昭和五〇年代(一九七五)初めまで燃やしていたが、後半からは、タイヤを燃やすようになった。軽トラの小さいタイヤにボロ布をつめて、灯油

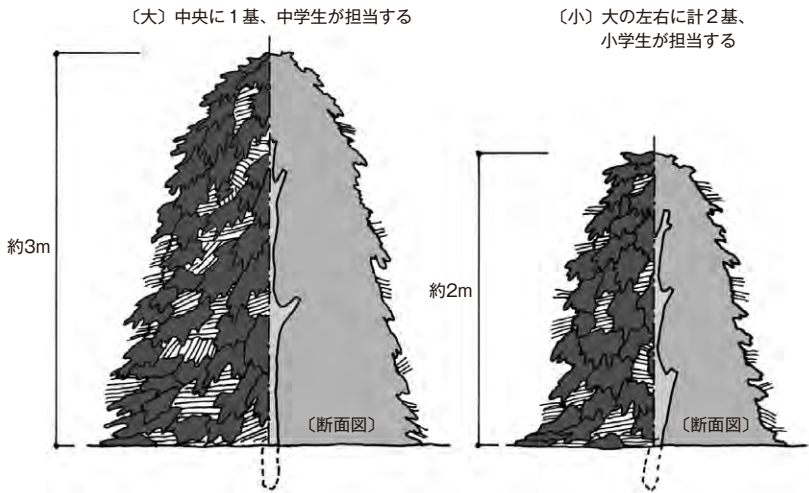
(52)

マトビを行う山は「あたご様」と呼ばれる地元では天ヶ岱とも言ふ。地図上では、大久保山(三三三・五メートル)であり、北秋田市の文化財指定書では「厄館」と記される。

【図-121】巻洲の墓地の裏の台地(現在)のマトビの配置図



※子供マトビは彼岸の3日間ともに焚く



昭和30年代は秋田杉の全盛期で、山には、冬場に出荷した杉の枝がふんだんにあった。

昔 【図-122】巻淵・墓地裏台地、かつての子供マトビ

をふくませ、二〜三段に重ねて燃やした。昭和六〇年代（一九八五〜）に入ると、山の上にダンポと灯油をもって、山の上に針金を張って、五〇〜六〇個吊して燃やした。

平成に入ってから、山の上で空缶に灯油とボロ布で縄を巻いて縛ったものを入れて燃やした（第二章図-14）。山で事故があつて七〜八年前から火を焚くのをやめてい

たが、平成二五年に再開した。今年は、五〇〜六五歳のマタギが三人で、缶を三〇個と灯油をハリットル担いで登り、缶に灯油と縄を入れて燃やし、久しぶりに山に火が灯った。反省会は婦人達が自治会館で料理を準備して待っていて、山に登った人が帰ってきたらすぐに開始した。マトビの運営費は、自治会の予算から出費している。市から補助はないが、なんらかの協力をして欲しいと考えている。

【子供のマトビ——墓地裏の台地上】

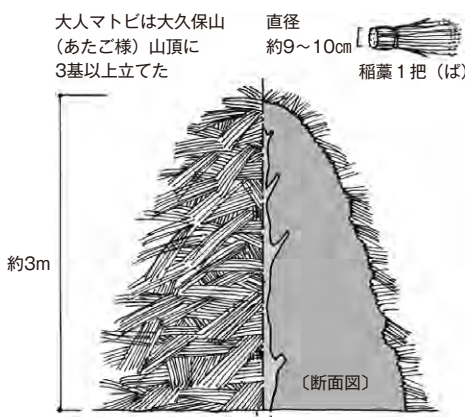
話し手 佐藤かず子（昭和七生）

昭和一七年〜二三年頃（一九四二〜四八）はあたご様でのマトビとは別に子供達だけで、墓地の裏の台地上の畑地でマトビを行っていた。二〜三メートルの芯棒を立て杉の枝と豆ガラなどと藁束を混ぜて、円錐形に積んで燃やした。これは、彼岸のイリ、中日とシマイと三回行った。

戦中戦後は、男子も女子もでて、オナゴ用とオドコ用の二つのマトビを作った。その頃、子供は三〇〜四〇人もいた。男女が競い合つて、掛け声を掛け合い、周りでは、檜や藤でつくったタタキに火を付けて、振り回しながら、囃し立てて楽しんだ。

「まどびたつた、たつたよ、誰ちけた、光松ちけた、光松頭でんがくだ でんがくだ」と繰返した。

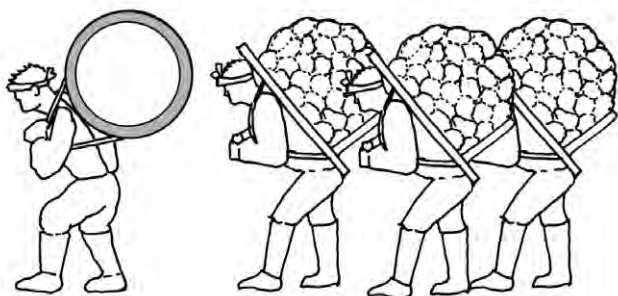
昭和四〇年代（一九六五〜）は続けていたが、昭和五〇年代（一九七五〜）には、子供の数も減少し、藁もなくなり途絶えた。その後、平成の初期頃から再開した。しかし、現在は子供はいないので、全戸から大人が一人ずつ



昔 【図-124】かつての大人マトビ

マトビ1基に藁を約200把、3基で600把以上必要になる。

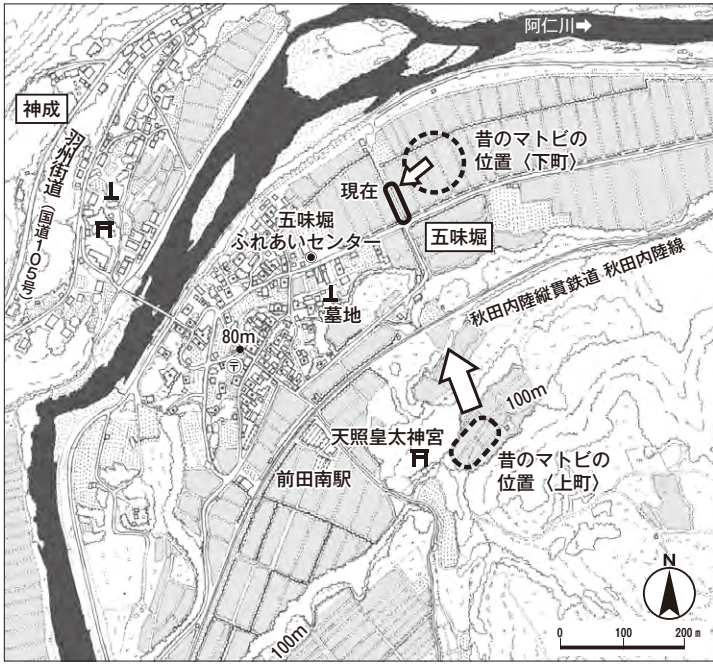
1名で約30把以上の藁を背負う



点火を知らせる締太鼓（3尺）も山頂に負い上げる

昔 【図-123】大人マトビの材料を山に運ぶ

【図-125】五味堀の新旧マトビの位置図



出て作業している。場所は墓地の裏道沿いと台地を利用している。約六〇人程で、針金を張るなどの仕掛けを作る。開催日も彼岸の中日だけにした。缶の中に縄を芯にして布を巻いて縛ったものと灯油を入れ、吊して燃やしている。

【墓参り】

彼岸のイリと中日とシマイの三回墓参りをする。最後の日は、自治会館で婦人部の人々が「数珠廻し」をする。昔は、集落の端々で行った。一方は「八坂様」、一方は「鎮守様」で、悪病が集落に入らぬようにという願いがあった。墓参りの時間は、昔は午後三時頃だったが、現在は動

めがあるので早朝六時の人もいて様々である。昔、この辺りで供物と言え、ダンシと、け(き)の汁だった。けの汁とは大根や人参、ごぼう、ワラビ、油あげ、豆腐など沢山の具が入った汁を墓に持っていた。また、タキを二本、火をつけて持っていき、墓参りしたあと墓の両脇に立てて帰ってきた。

⑧五味堀のマトビ

現在の戸数 三八戸

【昭和二十一年(一九四六)～二十六年(一九五二)頃】

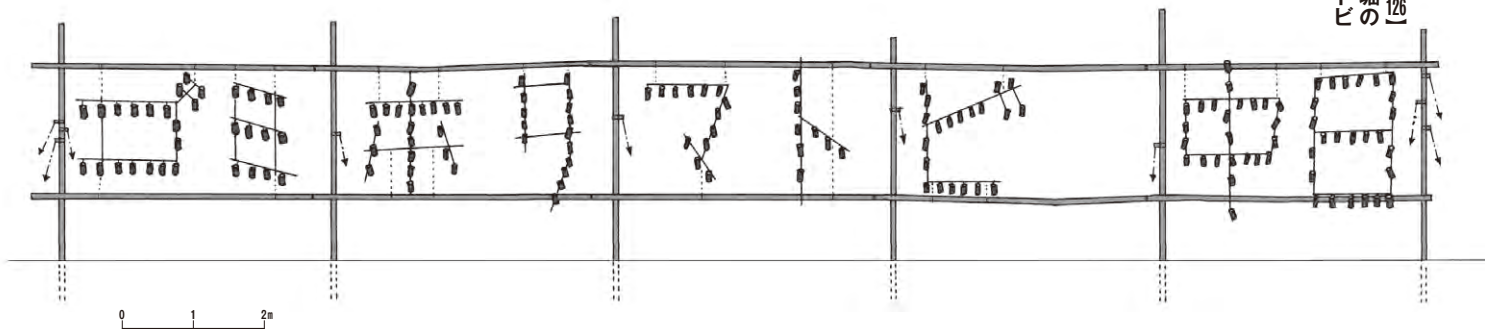
話し手 春日正一氏(昭和十一年生)

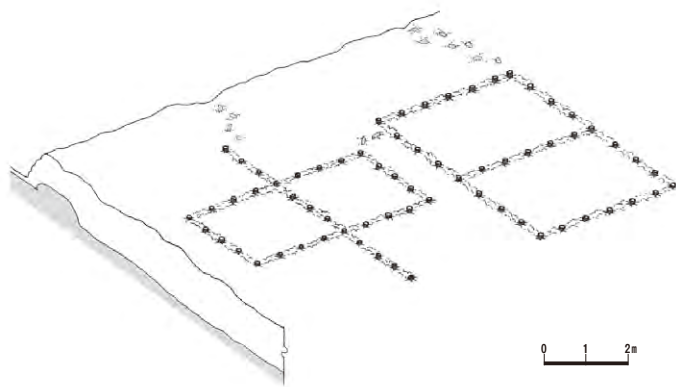
当時は子供の数も多く、小学校の高学年から中学生までで五〇～六〇人はいた。青年団も何人かは手伝った。藁束は子供達と青年団が各家を回り、櫓を引いて集めて歩いた。当時四〇戸はあったが、一軒の家から稲藁二

〇把ほどを束ねたものを二マルといい、二マル(四〇把ほど)ずつ貰ってくる。藁束だけではすぐに燃えてしまうので、杉の木の下の方の枝を伐ってきて、藁と混ぜて燃やした。

芯になる棒は川の中州などについて、三～四メートルの長さの柳の立木を伐ってくる。枝が付いていても良い。それを雪の中に立てて固定させ、下から藁束を積んでいき、二割は杉の枝葉を混ぜた。底辺の直径が二メートルほど、高さが四メートルほどの円錐形になるように積んでいった。上の方は縛った藁束を鉤のついた棒で枝に引っ掛けていった。芯棒の高さは二・二・五メートル程の低いものもあり、いろいろだったが三～四本はつくった。焚いた場所は、現在のマトビの場所の東側の田の中で

【図-126】今五味堀のマトビ





【図-128】 神成の直置き缶マトビ



【図-127】 神成の新旧マトビの位置図

あった。藁束と杉の枝葉を燃やしたのは昭和四〇年（一九六五）頃まで行っていた。五味堀は町が大きかったので、町を上と下に分けて、上の方は神社の辺で焚いた時もあった。この頃の松明は太さ四〇五センチ、長さ六〇センチ程の藤、ミズナラ、オニグルミなどの木を取ってきて、火に焙ってから叩いて、バラバラにしてから先を縛って乾燥させる。これをタタキといった。

マトビが終わると柳の木は全て燃え尽きる訳ではないから片付けが大変だった。灰は田畑の肥料になるが、燃えかすは川に捨てた。工藤正『郷土童話集』「昭和七年（一九三二）」によると、この集落にマトビの唱え歌があった。これは小又川、阿仁川沿いの他集落とは違っている。唱え歌は左記の通りである。

「まどびちだかな だあれあちけだ あがめあ（赤目ア）ちけだ このひのあかりに だごしょってきとれあ きとれあ」。

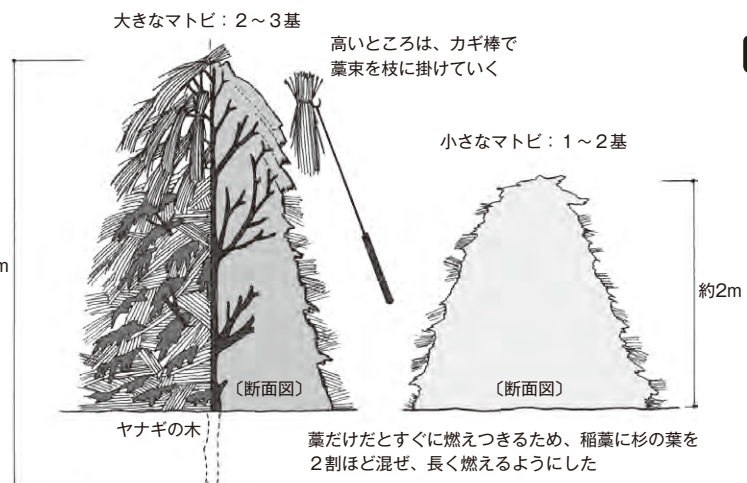
【現在のマトビ】

彼岸の中日にふれあいセンターの辺りで行っている。五味堀青年団が二〇人はいる。四二〜五〇歳の人達も入っている。子供達は小学生、幼稚園児、保育園児も入れて皆で楽しみながら行う。

五〇〜六〇メートルほどの長さに針金を張って、そこにジュース缶に灯油と、縄に布を巻き縛ったものを入れて吊して燃やしている。「ゴミホリ、マトビ、中日」という文字も作る。点火に使う松明は金属棒にボロを針金で縛りつけ、灯油を含ませて使う。缶の数は二〇〇個はある。点火は子供達が行う。



神成の墓地、川向こうは五味堀の集落



【図-129】 五味堀のかつてのマトビ

【墓参り】

墓参りは三回行き、墓前では藁束を燃やした。藁は二〇〇四〇把持っていった。平成に入っても一〇年ほど前までは焚いていた人がいた。藁束は末(穂の方)を上にして燃やした。タタキは必ず持っていき、墓の両脇に差して帰ってきた。供物は重箱に入れたダンシで、親戚の墓にも供えた。

三 旧阿仁町のマトビ

(一) 生業と歴史

阿仁町は阿仁銅山とマタギ(狩猟を生業とする人々)が多く住むことで知られる。阿仁地方は鉱山資源が豊富であるが、その中でも阿仁銅山は近世以前から金鉱山として開発されていたようである。

小沢銅山が発見されたのは寛文一〇年(一六七〇)頃という説があり、以後七〇年余の間に真木沢、三枚、一ノ又、二ノ又、萱草などが次々に発見され開発された。これらを六銅山といい、阿仁は大鉱山となった。

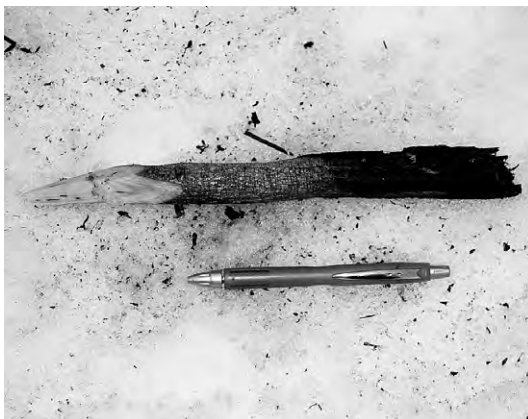
当初の銅山は、大坂商人達の請山(請負経営)であり、藩は運上金を取っていたが、利益の多くは関西資本の手に委ねられていた。多くの不純物を含んだ荒銅は、阿仁川を下り、米代川に出て、能代港から北前船を使って、大坂の銅吹屋(精錬または鑄造する家)に送られていた。元禄一五年(一七〇二)以降、阿仁地方の銅山は次々と秋田藩の直営となった。銀山および六銅山は銅山奉行支配

となり、各山の台所(役所)には吟味役も置かれた。水無には木山方役所が置かれ、銅山用材の植林及び民林の事務を司った。

阿仁六銅山は正徳年間(一七一一～一五)には、日本一の産高となっていた⁽⁵³⁾。江戸幕府は享保元年(一七二六)に秋田藩に対し、海外貿易の決済のための「長崎廻銅」の割当額として一七〇万斤という膨大な量を求めてきた。これは全国から集めた御用銅全体の四割程を占めており、阿仁銅山は当時の日本経済を支えていたといえる。長崎廻銅にも水運が使われ、阿仁川、米代川沿岸の村々は盛況であった。明和二年(一七六五)以降銅山も衰えを見せ、様々な再生の努力がなされた。

銅山の経営が藩に移っても、大坂屋や北国屋という代表的な大坂商人達は銅山経営や銅山の生活必需品の供給などに関係し、阿仁町に住みながら財を蓄えていった。鉱山の近隣の農村もまた銅山へ労働力を提供するほか、銅山必需品、銅山内居住者の生活必需品、銅生産のための必需品の供給地にもなっていた。

水無、銀山の両鉱山町は藩営になると、山師、金名子、稼人という坑内労働者まで住み、それに対する商業も生まれたが、水無には美に一四軒の酒屋があったという。幕末まで米、塩は、能代から領内商人の請負いによって舟運され、米蔵宿、荒物蔵宿に納められた。銅山と結びつき、酒屋株を持ち、蔵宿を務めた農民の中には、小農達に田畑を質に金を貸し大地主へと成長した者もいた。炭は小猿部沢の村々や七日市などで請負っていたが、根子、笑内、大淵、比立内、鳥坂などには炭役所が置かれ、



タタキの燃えかす (荒瀬)



墓石の両側に立てられたタタキの跡 (荒瀬)

⁽⁵³⁾ 阿仁町史編纂委員会『阿仁町史』阿仁町
平成四年(一九九二) 六七九～六八〇頁

そこで査定を受け代金を受け取っていた。

周辺の農村は明治二〇年代（一八八七）になっても、生活の状態はあまり良くならず、男は杣として出稼ぎに行き、年寄りや炭焼きをし、現金収入を得るような有様だった。

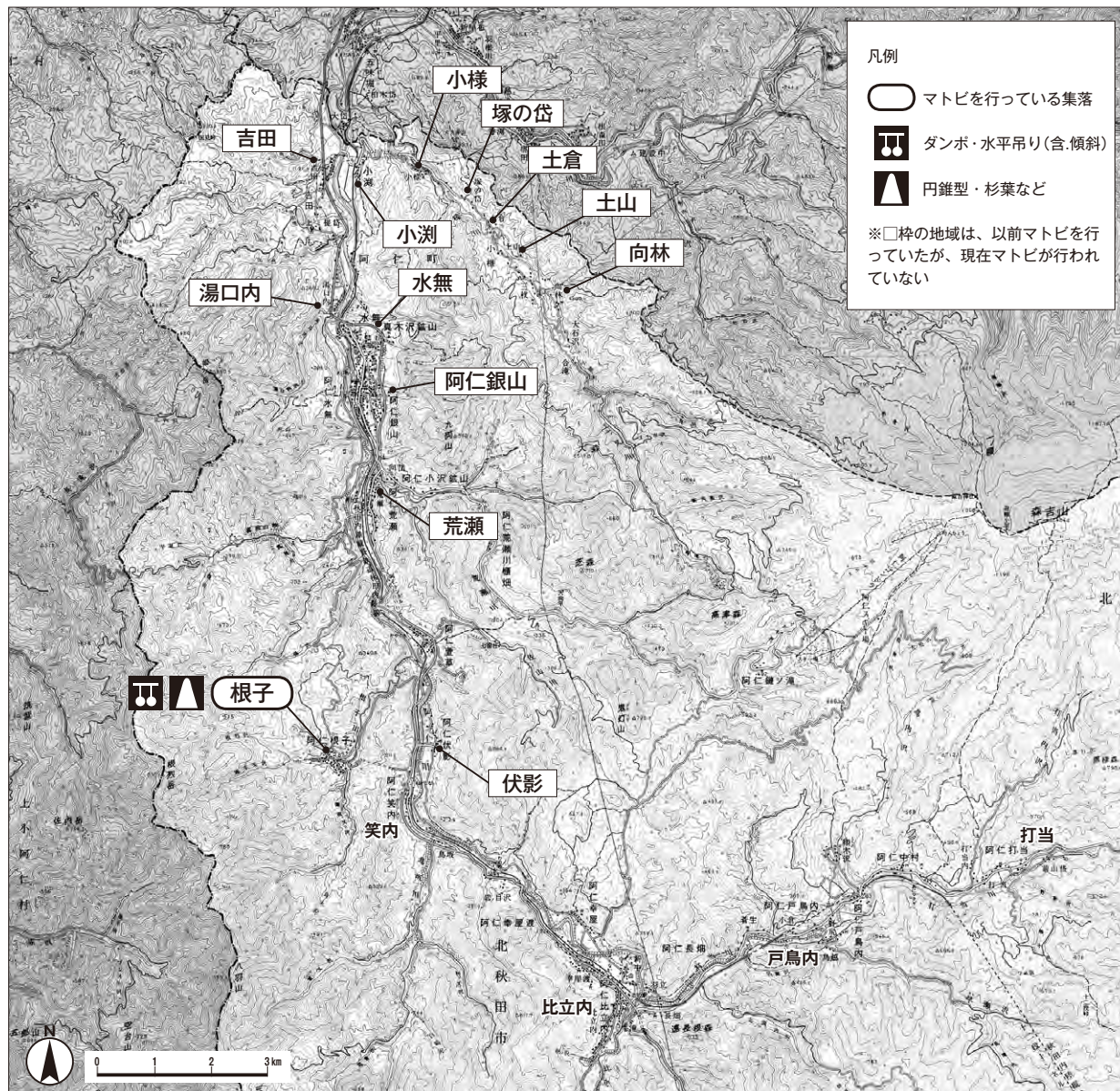
マタギは比立内マタギ、根子マタギ、打当マタギとあり、それぞれが猟場の縄張りを持っていたので、それらの集落は八キロずつ離れている。それぞれのマタギはどれも日光派に属している。彼らはクマ狩りなどの集団猟を得意とし、シカリと呼ばれるリーダーを中心に数人から数十人からなる組を作って猟をする。晩秋から春にかけての猟期に山に入り、クマ、カモシカ、シカなどの大型獣を捕り、また単独で、ウサギ、タヌキ、キツネ、テン、ムササビ、キジ、ヤマドリなどを捕って生計を立てていた。

明治元年（一八六八）の「戊辰の役」では萱草、伏影、笑内、菅生、野尻、戸島内、羽木沢、打当内、打当、根子などの各集落から、銃が使えるマタギが八〇余人召集されて、戦いに参加したという記録があり、マタギを業とする人が多かったことがわかる。現在はその数も減少してしまった。

（二）阿仁町と荒瀬以南のマトビ

阿仁町のマトビは、吉田、小淵、湯口内、水無、銀山など、阿仁六銅山が盛んであった頃の鉱山に関係する集落は、集落単位でマトビを焚いていた。仕掛けは、一本、または数本組んだ芯棒の周りに藁束や豆ガラ、杉の枝葉を積み、円錐形を作り、山の上で燃やした集落が多かつ

【図130】（北秋田市）旧阿仁町のマトビ・現状の形



たが、現在継続している集落は根子だけである。阿仁町在住の戸島喬氏によると、荒瀬から南側の集落は、マトビという言葉さえ知らないという方がいるという。

荒瀬は鉱山が可動していた頃は、鉱山関係と農業に携わる人の多い集落だった。荒瀬在住の湊一彦氏(昭和一八年生)記憶では、昭和二八年(一九五三)～昭和三六、三七年(一九六一、六二)頃には、墓の広場で藁束を集めて、芯には雑木を組み、藁束や杉の枝葉を差して、高さ三・六メートルほどはある円錐形のものを作り燃やしたという。その頃の子供の数は一〇人以上いたので、子供だけで作った。

阿仁町は春彼岸の頃になっても、雪が深く墓はほとんど見えないので、皆でシマイ彼岸の日に火を焚いたという。荒瀬では、藁を乾燥させ、叩き潰して作った松明をタタキと言い、藁束とタタキ棒を振り回しながら持つて墓参りに行き、藁束を墓前で燃やしたあとは、墓の両脇にタタキを立てて帰ってきたと話してくれた。現在でも三〇センチほどの長さのタタキを墓前で焚く人がいる。

また伏影では八〇歳の男性の昭和一七年(一九四二)～一九九年(一九四四)の戦時中の記憶だが、墓前で、高さ三メートルほどの棒を立て、藁束と杉の枝葉で円錐形を作り、シマイ彼岸にマトビを焚いていたという。伏影は当時一三戸だったが、小学生から高等科二年生くらいまでの子供達が四〇人以上はいて、子供達だけで戦後もやっていた。これらの集落は昭和四〇年代(一九六五)には行わなくなってしまうようだが、集落単位でマトビを行っていた集落はあった。

しかし萱草、鳥坂、笑内、比立内、打当などで、七〇～八〇歳代の人を訪ねて話を聞いてみたが、集落単位で大きな仕掛を作って焚いたというようなことは、子供の頃から見たことがないということだった。いずれの集落でも春彼岸には墓参りに行き、墓の前で三～一〇把くらいの藁束を燃やしたが、一〇年前くらいから三回墓参りに行く人も少なくなったという。高齢化が進んでいることと、墓が傾斜地などの不便な所にあり、雪も多いので、高齢者だけでは墓を全部掘り出せない事や、足場が悪いなどが理由だという。

笑内の八六歳の女性は荒瀬から嫁に来了たので、小さい時はタタキを墓参りに持つて行った記憶があるというが、笑内に嫁に来てからは松明も見なかったという。

比立内の七五歳の男性は、戦後の昭和二〇年代(一九四五)には墓参りに中日だけ家族で藁束を一〇把ほど持つて行って、それぞれの家ごとに燃したが、やはり昭和四〇年代後半にはやめてしまったという。

打当は、墓参りには行くが、やはり集落単位でやるような春彼岸の行事はないという。七五歳の女性は小学校の頃(昭和二〇年代)、墓参りは彼岸の入りと、中日とシマイ彼岸の三回行き、五～一〇把ほどの藁束を持つて行って、各家が墓の前で藁束を燃やしたという。阿仁地方の中でも、特に雪が深いせいか、最近は墓参りも行かない人が多いということだった。

(三) マトビが現存する集落

根子のマトビ

現在の戸数 六〇戸

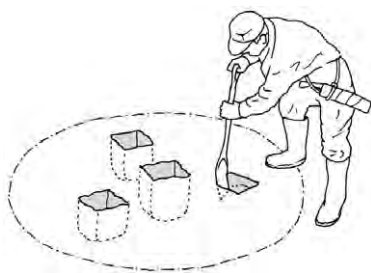
トンネル前の高台でマトビ作り(根子)



今(図132) 根子のマトビの作り方

工程1
設置場所の中央
および3方向に
60cmほどの穴を
掘る。

3m前後で、葉
が茂った太い枝
を20本以上集め
てくる。



【マトビの中断と復活】

話し手 佐藤哲也氏（昭和一六生）

今回の調査では根子のマトビが何時から行われたものなのかは明らかにはならなかったが、戦前戦後に行っていたのを記憶しているという人がいた。その後昭和三〇年代に一度途絶えたが、古老などからの指導もあり、昭和五五年（一九八〇）頃に復活した。

当時は四二歳までの男性で若勢団を作っていたが、根子以外の土地から来た人も多く、マトビをやるということになった。小学生や中学生も手伝いに行くが、中心は若勢団であった。

昔から根子で行っていたマトビは、高さ四〜五メートルほどの芯になる棒を三本立て、円錐形の形になるように藁束や豆ガラをギユギユおしつけて、そこに枝打ちして落ちた杉の枝葉を差した。それを一本だけ作って燃やした。藁束は子供達が各戸を回り貰って歩く。藁束が無い家は豆ガラなどを出す。家によって一〇把とか二〇把が一マルになっているから、それを三マル出すとか四マル出すとか決まっていた。

マトビの場所は、墓地の中の野辺送りをする広い場所であって、そこにマトビを作って燃やしていた。彼岸のイリとオクリ彼岸（注①参照）に二度焚いた時もあったという。また、点火時間は三時頃と早かった。

【現在のマトビ】

開催期日は、彼岸の中日である。運営の主体は友和会であり、三〇歳〜五〇歳が一〇人ほどでマトビを続けている。子供達四人と親達も手伝っている。子供達は、雪

【図一〇三】根子の新旧マトビの位置図



工程2
大振りな木を4本選び、穴に立てしぼり、雪を埋め戻す。

工程3
さらに7本ほど立てかけて、針金でしぼる。

工程4
下部の空間にオガクズ（かつては藁）を詰め込み、さらに8本の枝を立てかけしぼる。

工程5
選んでおいた枝ぶりの良いものを頂上に差す。

工程6
周囲に小枝を刺して、全体の形を整える。

底面の直径：約2m
高さ：約4m
枝を準備してから4名で2時間半ほどの作業



マトビの点火、あつという間に炎に包まれる（根子）
（写真撮影・船橋陽馬氏）



を掘ったり、雪で型抜きをしたりして、中に蝋燭を置き、灯籠を作るなど、様々な参加の仕方をしている。

マトビは高さ三メートルほどになり、芯棒は檜材を三本立てる。藁束は一〇年ほど前（平成一五年頃）から手に入りにくくなったので、他の材料に切り替えた。藁束の代りに製材所で貰ってきた木屑や板切れなどを中に入れて、外は杉の枝葉を差して円錐形にしていた。マトビの場所は墓地の所が杉林で遮られたので、集落の入口のトンネルの前に変わった。

平成に入ってから、新しい材料であるダンポや缶を使ったマトビを始めた。毎年工夫した文字を作り、木の柱を立て針金を渡したところにダンポを吊して、トンネルの上の山で燃やしている。ダンポは老人クラブの人達が作っていて、布は縫製工場から貰ってきている。

根子以外の比立内や打当などのマタギ集落では、自分の墓前で藁を燃やすことはあっても、集落単位でやるマトビはない。

【墓参り】

イリと中日とオクリ彼岸の三回墓参りに行く。中日は「ダンゴ較べ」を行う。イリとオクリ彼岸は、各家が競って中にアンコを入れた大きなダンゴを作って墓に供える。それを子供達が待ち構えていて取って食べた。中日に子供達は午前中に墓参りし、大きなダンゴを食べて、夜はマトビを楽しみにしていた。

藁束は小さく束ねたのを二つほど持って行って、立てたり横にしたりして燃やした。現在は墓で火を焚く人もほとんどいない。

トンネル上の斜面にダンポのマトビを設置（根子）



唄や踊りで盛り上がる反省会（根子）



【第六章】

阿仁地方の
マトビの存続

一 観光になった上小阿仁村の マトビ

(一) 集落から村全体のマトビへ

沖田面では、マトビを運営する子供達が不足し、昭和四七年（一九七二）に「万灯火保存会」が作られた。メンバーは公務員、工員、大工、左官、農業など様々な職業の人達であった。地域の伝統行事を守るべく、各集落では、こうした動きが始まっていた。このままでは少子高齢化でマトビを維持するのが難しくなると判断し、村全体の活性化のためにも、伝統行事に観光的要素を取り入れようということになった。村のやり方に協力すれば、補助金と灯油が支給されるため、反対する集落はなかった。

村には開始年度の記録がないが、小林大二郎村長時代の昭和五六年（一九八一）には、各集落の点火時間をずらして観光の体制をつくり、春彼岸の中日（当時三月二二日）に全集落のマトビが見学できるよう観光用マイクロバスを運行し始めたことが、当時の「広報かみこあに」に記されている。昭和六〇年（一九八五）四月発行の「広報かみこあに」によると、参加集落は一七集落で、中日に無料の「万灯火観光バス」を運行してる。この年のマトビの点火は下流の長信田、大阿瀬集落から開始した。「全集落の万灯火が見られるとあって、村外からの家用車も加わって、道路は灯の数珠つなぎとなり、都会のハイウェーを思わせるものでした。」と記している。

昭和六三年（一九八八）になると観光協会は、観光面で

も内外に宣伝し、広く鑑賞して欲しいという思いで、バスを三台から六台に増やした。二年間ほど「じゃらん」とタイアップして、都会からの観光客も多かった。

平成三年（一九九一）の「広報かみこあに」には各集落の文字マトビを紹介している。沖田面の「北国の春」、大林の「彼岸供養」、上仏社の「仏心」などの力作を取り上げており、全長五〇メートルにもおよぶものもあるなど、年々仕掛けが大掛りになっていることがわかる。

平成四年（一九九二）の「広報かみこあに」には、地元商業の活性化を図り観光ムードを高めるため、商工会が特産品を販売し、「みそつけダンボや乾しいたけ」などが高評だった様子が取り上げられていて、平成元年（一九八九）十二月に完成した物産センター前は出店で賑わっていた。この時の観光客は五千人と記されている。福祉館の婦人会や青年会なども出店していたが、徐々に衛生面が厳しくなり、各集落からの出店はなくなった。

平成十一年（一九九九）に生涯学習センターが竣工し、小沢田のマトビの場所も小阿仁橋上流の土手になった。

こうして、平成二年まで、商工会が出店などのイベントを担当し、抽選会や花火などで盛り上げ、村の産業課は各集落の参加、不参加を確認し、補助金出資、灯油の現物支給、点火時間の告知、無料観光バスの手配、運行経路図作成、案内パンフレットの作成などの役目を担ってきたが、マトビそのものの運営は各集落に一任する形をとってきた。

平成二三年（二〇一一）からは、観光物産（株）が出店などのイベントを担当し、花火を担当する商工会と村が協賛

小沢田のマトビの場所近くの屋台とちんどん屋



小沢田の物産センター前に露店が並ぶ





平成二五年のパンフレット「万灯火観賞バス運行経路図」



小沢田の文字マトビと花火

する立場になっている。この年、東日本大震災がありイベントは中止したが、翌年から再開された。平成二五年は、南沢が平成二二年から不参加のため一六集落が参加した。六台のマイクロバスが生瀬学習センター前を出発し、下流の堂川、大阿瀬から点火された。最後は小沢田のマトビがあり、周辺は出店や花火などで賑わった。

(二) 今後のマトビの存続

昭和五六年から始まった上小阿仁村のマトビは、長い間一七集落が参加してきたが、南沢が高齢者世帯と空家の増加、子供の減少で継続不可能になった。小沢田や福館などまだまだ元気な集落もあるが、運営者も高齢化して、厳しい集落も増えている。村が運営費の補助と灯油の現物支給で協賛してくれるが、協力者も子供も少なくなっているため、集落だけの運営が負担になっている。最近「この観光マトビのおかげで、マトビ本来の意味が薄れてきたのではないかと感じる」とある。村の活性化のためには良いことだと思うが、何かが違っていると感じる」という人も出てきた。南沢に限らず、高齢者の一人暮らしや空家なども増え、六五歳以上の高齢者が四〇%になる限界集落もあり、深刻な問題になっている。現在も、観光用マイクロバスは六台用意され、外部からの観光客や村内の見学者を乗せて、マトビの点火順にコースを運行している。

マトビは先祖供養でもあるので、今後もやれるうちは続けていかなければならないと多くの人が思っているが、一時期より仕掛けも小さくなり、無理しないようになって



小沢田の反省会で記念撮影



小沢田の文字マトビに点火

と き 8・14 午後 8 時
と ころ 合 川 橋 附 近



主 催 後 援 協 賛

合 川 ま と び 保 存 会
合 川 町 教 育 委 員 会
合 川 町 商 工 会
合 川 町 文 化 財 協 会

合川町民歌

「みちのく」の山ふところ
にいだかれ わが故里よ
杉の櫓は 天をさしや
四季の花 色あざやかに
合川の 町はうるわし

「阿仁川」の流はうたい
飛び跳ねる 若船の群れ
あかあかと 万灯うつし
田圃の うるさしやまね
合川の 町はうるわし

「あしあわせ」の 未来をひらく
大野の 広がるところ
吹雪ふも 春待つうち
雪をふみ 春風よちから
合川の 町はすこやか

（昭和五十年九月）

合川音頭

かつみにけふる
 しゅにけふつ
 取り取る草の
 「ドンイヤ
 ドントコイ
 おらが合川よといこら」
 二匹ん葉こも
 野も山川も
 帖もきのこも
 腹のこまで
 「ドンイヤ
 ドントコイ
 おらが合川よといこら」
 武蔵吉も 太平の水も
 合川うざいに
 わらし遊ぶ
 笑って暮せば
 「ドンイヤ
 ドントコイ
 おらが合川よといこら」

—あなたもわたしも

集会時間を守りましょう。

合川町公民館

盆のマトビのパンフレット（旧合川町）



最初の親松明に点火する（旧合川町）（北秋田市合川公民館提供）

たという。しかし、外部の人に見せる以上は、質は維持しなければいけない。マトビをする集落を減らし、仕掛けを充実させようという意見も出ている。また、仕掛けもダンポより手間が掛からない空缶の利用などに移行してくる可能性もあるだろう。

こうした中で、今後のマトビについて尋ねると、地元では様々なアイディアが出され、議論も始まろうとしている。県外に出て行つた人達にも、彼岸の中日には帰省して墓参りをしてもらえるようにする。また、マトビという伝統行事を見に來たいという人達には、民宿などを利用して、いっしょにマトビを体験してもらう。体験者を募集してダンポに針金を巻いて製作に参加してもらい体験者を増やす。外部からの体験希望者には、担い手不足の集落に入つてマトビを楽しんでもらいながら、それを地元の助けにするなどである。

また、小沢田集落だけは、平成元年（一九八八）から行われている夏の「ふるさとフェスティバル」にも参加し、八月一四日の盆にマトビを焚いて帰省してきた人達に見せている。当初の会場は、「村民グランド」で、中学校との間の斜面を利用してマトビを焚き花火を行っていた。最近のフェスティバル会場は、「ふるさと公園」に移り、盆にはダンポではなく、布を巻いた縄と灯油を入れた缶を吊して燃やしている。

二 盆に行く旧合川町のマトビ



阿仁川の土手に文字の仕掛けをする（旧合川町）



マトビの準備は中学生達で（旧合川町）（左の写真計四点は、北秋田市合川公民館提供）



（一）継続される春彼岸のマトビ

旧合川町（表一参照）では、春彼岸に現在でも集落単位のマトビを行っている集落が多いことは前述した（第一章・第四章）。旧合川町では一二の集落が行っており、中でも旧下小阿仁村の九つの集落はそれぞれ独自のやり方を工夫し、彼岸の中日に行っている。旧下大野村の八幡岱や、旧上大野村の道城も、中日に集落単位のマトビを継続しており、旧落合村の新田目は、シマイ彼岸に行っている。各集落とも少子高齢化が進んでおり、小中学生は数人しかいない。六五歳以上の高齢者が三〇%を越えてる集落も多く、五〇〜六〇歳代の男達が支えているのが現状である。

上小阿仁村のように各集落の点火時間をずらし、見てまわれるようにしようという話もでるが、祖霊を供養するために焚くマトビの意味を各集落で大切に行うべきだという意見が多く、午後六時〜六時半には多数の集落が点火している。三木田のように二度点火する所もあり、七時過ぎまでは、集落のマトビが見れる。

（二）郷土愛を培う盆のマトビ

旧合川町で春彼岸のマトビを盆の八月一四日にやろうということになったのは昭和四七年（一九七二）のことである。当時の町長畠山義郎氏が春彼岸だけの行事にしておくのはもったいないので、盆の行事としても町全体で行い、帰省する多くの人に見せ、詩情を味わってもらおうと提案した。教育委員会からは、春彼岸に祖霊を供養

僧侶が読経をする（旧合川町）



中学生だけで水平マトビに点火（旧合川町）



する行事を、夏に行うのはおかしいと反対意見も出たが、川面に映るマトビの美しさを、旧合川町全体で次世代に伝えていくことになった。ここには次のようなねらいがあった。

- 1、祖先の供養を兼ね、消えゆく文化を保護し、郷土愛を培いたい。
- 2、町内の児童生徒がマトビに対する理解を深めるためマトビの製作から操作までを伝授したい。
- 3、伝授され、それを引き継ぐことにより児童生徒間の人間性を深め、情操教育の一環としたい。
- 4、地域チームワークによる生活への工夫を期待してみたい。

盆に行うマトビであっても祖霊供養であるから、全集落の全戸が参加し、各家庭がダンポを一個ずつ作って、それを燃やすことにした。現在でも旧合川町の各集落は戸数分のダンポを毎年出して協力している。マトビの場所が人が集まりやすい合川駅前前の川原ということになった。全集落のダンポを使った仕掛けは全長およそ一・五キロメートルに渡った。開催当初は、合川文化財協会などが主催していたが、昭和五年（一九七六）から「合川万灯火保存会」が発足し、事務局は公民館に置かれるようになった。実施主体は、合川中学校の二、三年生であるが、段取りや装置の組み立ては、保存会や役場職員が協力し、ダンポを灯油に浸して吊す作業と点火を中学生が担当した。初めは文字のマトビもなく、ハサゴ（ハザ棒）を立てて、そこに針金を二段に張り、旧合川町の各集落から集めた二千二百個以上のダンポを二段に吊しただけ

のもだった。文字のマトビをするようになったのは一〇周年などの区切りの時からだという。

車マトビは、木材を使って作っていた昭和四七年当時から使用しており、現在は金属パイプになっている。車マトビは旧合川町に集落が二八あったので三五メートルおきに二八基置いた。

点火前には僧侶四人が来て読経し、それが終わってから点火を開始した。開催当初は、中学二、三年の男子が一〇〇名ほどであった。まず中学生の一人が僧侶から灯火を貰い、それを次々に分けていき、各担当場所に立ち、点火の合図で一斉につけていくという演出であった。

現在は、高齢化のため、合川万灯火保存会の会員を各集落から推薦してもらう形になっている。鉄骨を組むのは、三〇万円ほどで業者に委託している。また、少子化のため、マトビの仕掛けも全長一・二キロメートルに縮小した。中学生も一、三年生まで総出となり、女子は「ふるさとまつり」の流し踊りに参加している。「ふるさとまつり」は平成三年（一九九二）に始まり、盆のマトビといっしょに行われるようになった。

平成一九年（二〇〇七）は中学生の男女生徒（一八〇名）と合川万灯火保存会（二五名）、市職員が（四五名）の計二五〇人が協力して開催した。運営費は、当初は旧合川町が補助していたが、合併後は、北秋田市が補助金を出している。河川の草刈りを代行することによる収入や協賛金なども含めて運営費としている。伝統文化を受け継ぐ中学生が減少しているが、合川地区が協力し継続を図っている。



二〇数基の車マトビが並ぶ（旧合川町）
（北秋田市合川公民館提供）

【第七章】

他地域の
マトビ系行事の現状

一 (能代市) 旧二ツ井町

(一) 旧二ツ井町の昔のマトビ

旧二ツ井町のマトビの最も古い記録は、文久三年(一八六三)の石井忠行による『伊頭園茶話』⁽⁵⁴⁾である。ここには「山本郡の奥なる在々いかなる習にや、彼岸の入日に山へ登り明俵に火を付けて振る。其時、爺モサ(申也)婆モサ団子クニ(喰ニ也)御座れ御座れといふ果の日ハ、爺モサ婆モサ団子シヨテ(背負て也)行きやれ行きやれとさけぶ、荷上場専ら也。」という記述があり、これによると江戸末期に荷上場では、彼岸のイリとシマイに山上でマトビを行った。明俵に火を付けて振り廻していたことがわかる。

さらに、旧二ツ井町の田代川や濁川沿いの集落のマトビを昭和三〇年代に調査した関口修克氏は「秋田県山本郡二ツ井町の民俗」⁽⁵⁵⁾の中で「彼岸の入り・中・しめいの三回、夕方にマトビを焚く。大人一人、子供とで行って、墓の前で藁で焚く。団子も三度つくり、イタヤの木の下に団子を差して仏壇の前にあげる。神棚には上からつるす。彼岸のダンシという」と記し、彼岸の間に三回墓参りをして墓前で藁を焚いていることがわかる。また、『二ツ井町史』⁽⁵⁶⁾には、旧種梅村地区のマトビについて「春には入彼岸、彼岸中日、送り彼岸の三度、どこの家でも団子やいろいろ珍しい物を仏壇にお供えた。おばあさん達は孫の手をひいてお寺詣りをし、念仏をした。(中略)送り彼岸には、子供達は墓地の近くに野火をした。この

日子供達は朝から集まって相談し、山から丈余の立木を伐って運び、これを立てると、めいめい家から集めてきたワラを結んで枝にかける。こんなのを大小幾本も作って夕暮れを待つ。落日と共に子供達は鉦を叩きながら、口々に「野火の火もついたかヨ、まどの火もついたかヨ、あかんによく行つとりヤ、ぢいナ、ばばナことまた団子背負に来とりヤ」と節まわし面白く合唱を繰返し、鉦の音に合わせて合唱は静かな谷間にこだまし、人々の心を一種神秘的な雰囲気浸らせる。ほどなくいよいよ野火がつく。現場はこれを見物する総出の老若男女で大賑いだ。暗夜に炎々と燃えさかる野火を取りまき、鉦とる子供達の合唱は一段と氣勢をあげる。隣村からも又その隣り、遠く、近く交響する様は、まるで夢の世界にいるような気がした(略)」と記されている。

種梅川流域で集落単位の春彼岸の行事が行われていたことがわかる。また「一旦火が鎮むと子供達は、三々五々隊を組んで、部落を廻りに出かける。口々に「団子くれないバンバに角生える」と連呼しながら鉦を叩いて一軒一軒まわるのもおかしいことである。野火を済ませてもらったお礼におばあさん達は特別大きく作った団子を用意して待っていた」という。ここではマトビと言わず「野火」と言っている。この辺りの集落では、これらの行事が大正末期には火災予防のために禁じられてしまったという。同じ旧二ツ井町でも、田代川、濁川沿いと種梅川流域では、マトビのやり方、呼び名も違っていた。また、江戸時代末期から比べるとやり方も少しずつ変化してきていると思われる。



「万灯火」と「中旦」という文字を焚く(麻生(左の写真計三点は、藤内久氏提供)

(54)

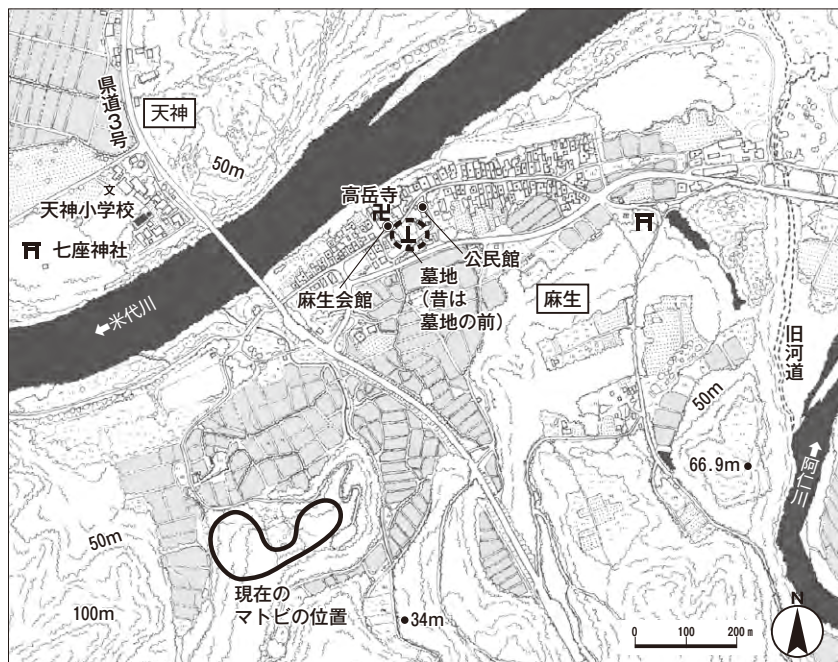
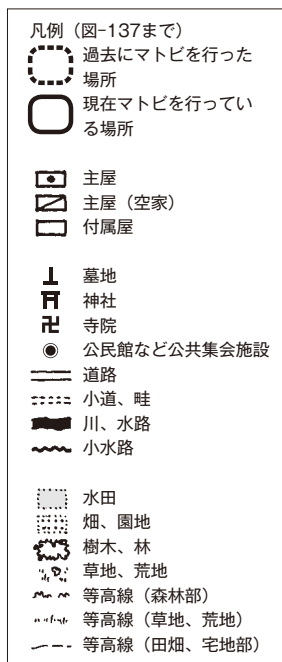
石井忠行「伊頭園茶話」新秋田叢書」一期七巻 歴史図書社 昭和四十六年(一九七二)六四頁

(55)

関口修克「秋田県山本郡二ツ井町の民俗」『日本民俗学会報 第三五号』日本民俗学会 昭和三十九年(一九六四) 四三頁

(56)

二ツ井町史編纂委員会『二ツ井町史』秋田県山本郡二ツ井町 昭和五十二年(一九七七)五二七頁



(二) 現存するマトビ

麻生の春彼岸行事

現在の戸数 七六戸

【昭和三二年(一九五七)～三七年(一九六二)頃】

話し手 簾内久(昭和二生)

昔は山の上でマトビを焚くようなことは無かった。この辺は墓の前で稲藁を燃やした。家族で墓参りにいき、手刈りした稲を一把ほど持って行って、立てて火をつけ、火がついたら横にして燃した。春彼岸のイリ、中日、シマイの三回行ったが、同じ二ツ井町でも、シマイ彼岸だけに火を焚くところもある。藁を燃すのは二〇年以上前から無くなった。この地域ではこれを「マトビ」と呼んだかどうかはわからない。「迎え火」「中火」「送り火」などといった。

墓参りには、供物は米粉で作った直径四〇五センチほどのダンゴで、中にアンコが入ったものであり、造花、水線香、ロウソクなどを持参した。彼岸の造花は、その時期になると行商が売りにきていた。唱え言葉を言ったことはなかった。

【現在のマトビ】

「桜ランド山の会」という会のメンバー、一七～一八人でやっている。四五～六六歳くらいの人達である。子供は少なくなり、危ない仕事はさせられなくなった。平成の初め頃から開始し、二〇余年続いている。運営費は天神地区から補助として一万円ほどがでるが、材料代、灯油代、慰労会の経費としては足りないため、手伝いに来てくれた会員から一人あたり千円ずつ集める。



空缶は一本ずつ点火して歩く(麻生)



空缶を並べて文字マトビにする(麻生)

マトビは中日に行う。材料と仕掛けは三五〇ミリリツトルのビール缶の蓋を取り、缶の上方の縁に穴を開け、針金の吊り手を付ける。これを千三百個ほど用意した時もあったが、現在は八〇〇個用意する。中には灯油を入れて、縫製工場から貰ってきた布を巻いて中に入れる。最近是不燃布があるので注意が必要である。

マトビの場所は小学校のスキー場だった場所であり、集落の人々や墓地からも見やすい山の斜面である。準備は十一月中頃の下草刈りから始まる。三月に入ると、道の除雪は役場が行い、土日を利用して雪が一・三メートルほどある山の斜面で作業をする。雪の斜面には「万灯火、中日」などの文字をカラスプレーで書き、そこに三センチ角、長さ一・八メートルの角材を、三メートル間隔で差していく、針金を張っていく。マトビ当日は三メートル間隔に張った針金に缶を三個ずつ等間隔で吊していく。山での作業は大人だけで行う。夕方六時三〇分頃点火するが、人数不足の時は高校生、中学生に手伝ってもらい、十数人で点火する。

当日は、会員の奥さん達が公民館に集まり、昼は豚汁とおにぎり、夜はモツ煮込みなどを作り、マトビが終わってから慰労会をする。

片付けは翌日行うが、平日だと勤務のある人は出られないので、三、四人で行う。マトビを二〇余年続けているが、若い会員は増えていない。五〇、六〇歳代の人が多く、いつまで続けられるかはわからない。この行事を続けるために、行政に、もう少し援助をお願いできたらと考えている。

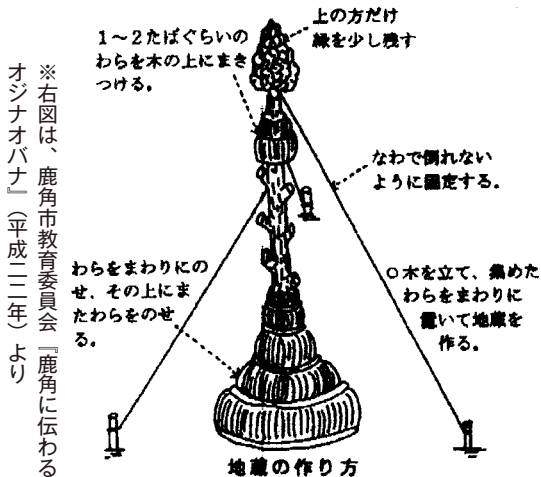
二 能代市のマトビ

(一) 旧山本郡鶴形村の「地蔵(じんじょ)焼き」

『近畿民俗』二七「昭和三六年(一九六二)」所収の「秋田県山本郡鶴形村谷地年中行事」⁽⁵⁷⁾には、沢田四郎作氏が昭和一九年(一九四四)に小林忠之助氏に聞き取りをした内容が収録されている。それによると鶴形では、「中日に村中を男子が廻って藁を集める。(中略)もらい集めた藁は、子供達が大館山に背負い上げる。国民学校の二年生から高等科の子供を持つ家では、松の小丸太を二マル(二マルは径二尺くらいの束)出す。これは大人が山に担ぎ上げて置く。(中略)団子は必ず昼と晩の二回あげる。送り彼岸は最後の日であって、大館山に藁と松の枝で大きな人形を五つ作り、村より向って右から父、母、兄、嫁、娘の意である。村中の人が団子を藁苞に入れて供える。(中略)村全部の団子が揃ってから、五時頃より右から順次に火を付けてやく。(ヒガンバナといって、紙の造花を供える。)(中略)仏様はこの光に照らされて帰るのである。村の子供達は供えられた団子を食べ、鉦と太鼓を囃しながら「ヂイナ、バンバナ、ヤネマダキトリ、アシモトノアカリニ エトゥリ エトゥリ」と唱えた。

この報告書によると、この時代の藁人形は、中央に杭を立て、その周りを藁で巻き、藁の周りに松の小丸太を置いて縛った円筒形のものであった。直径約九〇センチ、高さ約三メートルであるという。

また、『鹿角に伝わるオジナオバナ』⁽⁵⁸⁾(平成二二年)の中



【図134】「地蔵」のつくり方

※右図は、鹿角市教育委員会「鹿角に伝わるオジナオバナ」(平成二二年)より

⁽⁵⁷⁾ 沢田四郎作「秋田県山本郡鶴形村谷地年中行事」『復刻版近畿民俗』第三冊 名著出版 昭和五八年(一九八三) 九五一〜九五二頁

⁽⁵⁸⁾ 鹿角市教育委員会「鹿角に伝わるオジナオバナ」『小豆沢のオジナオバナ』宮野平のオジナオバナ——無形民俗文化財記録作成調査報告書六——鹿角市教育委員会 平成二二年(二〇一〇) 五五頁

⁽⁵⁹⁾ 内田武志「年中行事 秋田県鹿角郡宮川村地方」『復刻版民俗学』第二巻上 岩崎美術社 昭和五年(一九三〇)六月 二〇四頁

に収録されている鶴形小中学校研究グループ編著「私たちの鶴形・郷土の学び方と観察の仕方」〔平成元年（一九八九）〕には「地蔵（じんじょ）焼き」について次のように記されている。

「地蔵焼きは、春彼岸に行われる行事の一つで、（中略）毎年、たちこべ山と上ノ山の小高い所で行われています。彼岸には、死者の霊がこの世におりてくると言われ、このために彼岸に入ると、上の二カ所で死者を送るための地蔵を作ります。中央に地蔵の胴体となる木を立て、倒れないようになわで固定します。その周りにわらを積み重ねます（図134）。（中略）彼岸の終わりの送り彼岸には地蔵に火を付け、ごまをたいて死者の霊を供養します。死者の霊はこの光で帰っていくと言われています。この行事は鶴形の子供の手で行われ、彼岸に先祖が仏になってくるのを、孫や子、兄弟が送る形となっています。地蔵焼きの行事には、病気や不幸などの災いを追い払い、作物の豊作を祈る願いもこめられているといわれます」とある。

現在もこの「地蔵焼き」は続いており、平成二五年も彼岸の終りの日に河川敷で行われた。地元の北羽新報（二〇一三・三・二四）には、「稲藁を積み上げて地蔵に見立て団子などと一緒に焼いて送り火とするもので、地区の子供たちが燃える炎に手を合わせ、祖先の霊を送りながら無病息災を願った。地蔵焼きは故人の霊を慰めるとともに地域の安全を祈願するために行う春彼岸行事の一つで（中略）中止した年に地区で火災が発生したことがあり、住民の間では、ジンジョ（地蔵）やらねば火事起き

る」と言われているという」とあった。場所や人形の数、形に変化が見られるが供養と防災祈願の思いは変わらず伝承されている。これは、米代川最下流域のマトビ系行事である。

三 鹿角市のオジナオバナ

（一）小豆沢のオジナオバナ

〔昭和五年（一九三〇）の春彼岸行事〕

内田武志「年中行事 秋田県鹿角郡宮川村地方」〔復刻版民俗学』第二巻上〕には、昭和五年（一九三〇）の宮川村（現鹿角市八幡平）の春彼岸の墓参りと「まんど火」のことが書かれている。

「彼岸 入の日、中の日、終の日の三回、夕方、墓場に各戸から集めた藁や、芋稈⁽⁶⁰⁾を積んで焚く。此時子供達は手に手に火の付いた芋稈を振り回して、お爺ナ お婆ナ 明りの宵に 団子背負って 行とれア 来とれア」と唄いながらその周囲を跳り回る。

佛様にはコチコチ（猫柳）を立て、白粉団子を成るべく大きく拵へて供える。中日にはだんす（平たく丸い餡付き餅）をつくり寺に持って行く。」とある。

さらに、「まんど火」という項があり、「字小豆沢では彼岸の終の日に小若者（十二、三歳、十五、六歳）達が各戸から茅や芋稈を集めて、ごし^(ママ)カンヂキを穿き雪を踏んで薬師嶽に登り、平年は十二、閏年は十三の堆積を薬師の峯に並べて火をつける。麓では大人達が拍手を打って

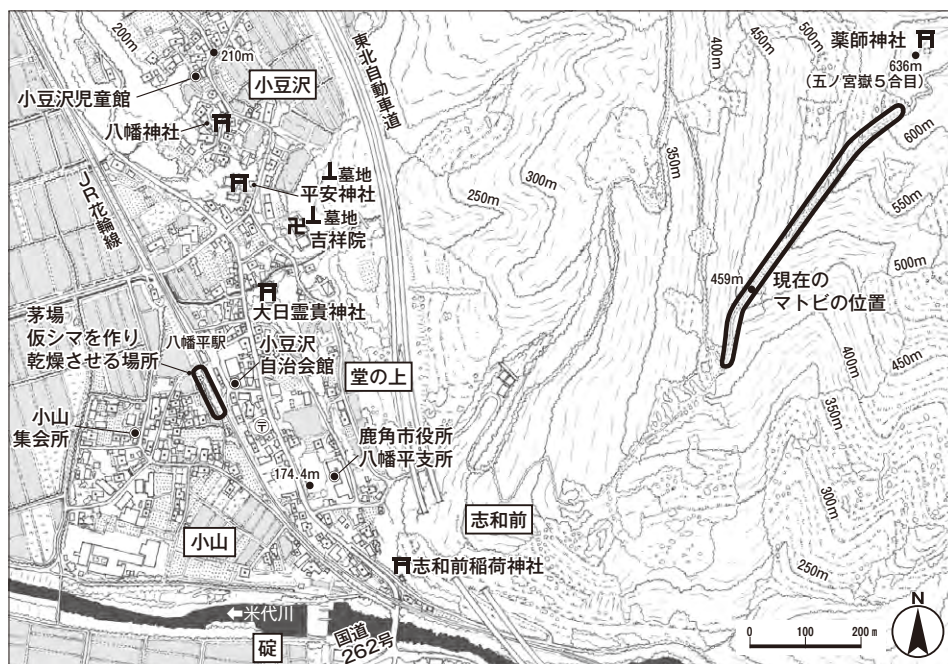
茅をそれぞれの「シマ」の場所まで背負っていく



芝の骨組みに茅を巻いて仕上げた「シマ」



⁽⁶⁰⁾ 芋稈（ちよかん）…麻などの草の茎を乾燥したもの



【図-135】小豆沢のオシナオバナの位置図

それを拝む。」とあり、山に登り、堆積を作り、点火したのは、小若者であり、この頃は、この行事を「オシナオバナ」と言っていないこともわかる。

【昭和三五・四〇年頃（一九六〇・六五）】

話し手 安部良行（昭和二五年生）

五ノ宮嶽の五合目には薬師神社があり、昔はその神社から三〇〇メートルほど下った所からシマを作った。シマとシマの間隔も現在は三〇メートルほどの間隔で作られているが、かつてはその倍の六〇メートルほどの間隔があった。シマを作る材料も雑木などの小径木三、四本を組み合せて骨格を作り、骨組に藁束か豆ガラを縛り付けた。藁束も豆ガラも現在の茅より短く、小さいので、月数（十二基）のシマを作るには茅よりも量が必要であり、マトビ当日には何度も山を往復して運搬しなければいけなかった。

その頃、中心になってオシナオバナの行事を支えていたのは青年会であった。年齢は一八・四〇歳前後くらいの人達で、人数も多く、若かったから、五合目まで藁を背負って登るのも苦にならなかった。シマを二二基（閏年は二三基）作り終えると、山に合掌組のように雑木を組んで、周りを茅で囲ったカマクラを作り、点火時間までその中に入り、風除けして夜になるのを待った。

点火の合図は、当時走っていた花輪線の蒸気機関車が、駅に入る時刻が決まっていたので、その汽笛を合図にしたり、近くに住むマタギに空砲を撃って教えてもらった。その合図で一斉に点火する。山ブドウの皮または杉皮などに火をつけて、点火するときの松明にした。



五ノ宮嶽の昼間の風景（三月三日）

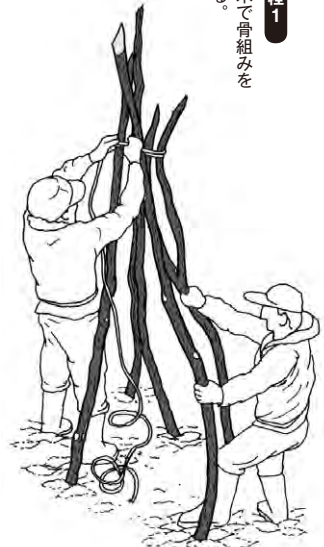
(61) シマとは、雑木で作った骨組みの周りに藁、豆から（現在は茅）などを積上げた円錐形のもの



吹雪の中でオシナオバナ（三月三日）

今「図-136」オジナオバナのシマづくり

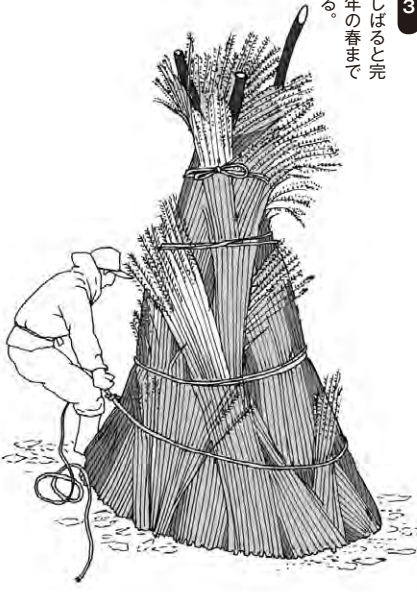
工程1
山の木で骨組みをつくる。



工程2
山に負い上げた茅で骨組みを覆う。1基につき5名で20把の茅を運ぶ。



工程3
藁縄でしばると完成。翌年の春まで放置する。



風除けに使っていた小屋も最後には燃やした。火は能代からも見えたという。

春彼岸のオジナオバナは、宮野平、花輪など各地で行われていたが、山の上に一二基のシマを立てるのはこの小豆沢のオジナオバナだけである。薬師神社のあるこの山は、昔から信仰の山として近隣の人々に崇められていた。シマの燃え方は、農作の豊凶を占う役目があったが、燃え方の「勢いの良さ」が大事な要素であった。六月の田植や十月の収穫時期が最も重要視され、それらのシマが勢いよく燃えると今年は豊作だと喜んだ。

この当時の子供達は五ノ宮嶽には登らなかった。子供達は河原や田の高台にシマを同様に作り、子供達で燃やした。一二基作ったという資料もある。五ノ宮嶽の方はシマイ彼岸だけオジナオバナをしたが、川原や田で行った子供達の方は、彼岸のイリと中日とシマイの三回やった。火をつけた人達が唱え言葉を繰返し言う。彼岸のイリと中日には「オジナオバナ 明かりの宵に団子背負いに来とれあー来とれあー」、シマイ彼岸には「オジナオバナ 明かりの宵に団子背負って行つとれあー行つとれあー」と唱える。

また、松明と言って、山ブドウの蔓や杉の皮を丸めて縄でしばり、火をつけて振り回したり、松脂を缶に詰めて、それを振り回したりする。

子供達が入って炉の周りで暖をとるカマクラは、雪を積んで壁をつくり、そこに雑木を渡して藁で覆い屋根にしたもので、その中で遊び、シマイ彼岸に燃やした。この様に山以外の田や広場では、あちこちでオジナオバ



十月、十一月とシマは一斉に燃えた



降雪の中、九月のシマに点火する

ナが行われた。小豆沢では藁の積上げたものや小屋掛けしたものや燃やし、振り回しも行って先祖を供養していた。子供達だけのオジナオバナは、平成の初め頃まで行われていたが、現在はなくなった。

【現在のオジナオバナ】

現在のオジナオバナを運営しているのは自治会である。人手不足と高齢化で、五合目の薬師神社から一〇〇メートルほど下ったあたりから、シマを立てるようになった。昔の四月の場所が現在の一月になっている。しかしこれは杉の木が大きくなり、シマが集落から見えにくくなったからでもある。藁は昭和四〇年代後半、昭和五〇年代にかけてなくなり、シマ作りに必要な量を運ぶ手間も大変なことから茅に切り替えた。茅の準備は雪が降る前に行う。一〇月初めにはJR八幡平駅の構内の茅場で茅刈りを行う。茅一把とは一メートルほどの藁紐のツナギで縛った大きさとし、それを二〇〇把ほどを、十数基の仮シマにして、十一月初旬まで一ヶ月乾燥させる。湿った茅は背負い上げるのに重いからである。

平成二五年は十一月十一日曜日に茅を運び上げシマを作った。三合目までは軽トラで運べる。三合目には、ロープや山鉈を持った人達が一人ほど集まった。ここからは道が狭く、各自が茅束を四把ずつ背負って運び上げる。一八歳の高校生はダルマストロープを背負って薬師神社まで登った。一基のシマには二〇把ほどの茅を利用するため、人数が少ないと一二基のシマを作るために何回も往復しなければならない。シマを作る場所には、あらかじめ印がしてあり、その場所に着くと、その場で雑

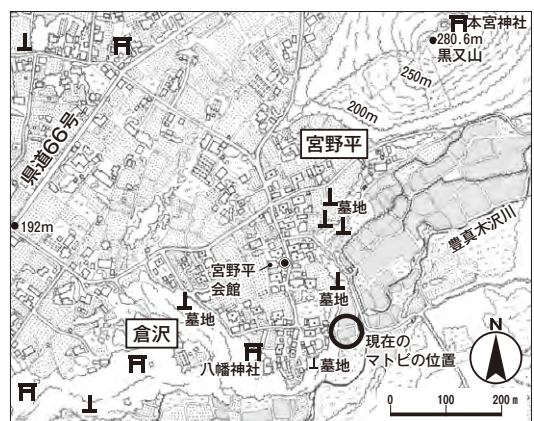
木を伐って調達し、利用できる自然木は利用して骨組をつくる。そこに二〇、二五把ほどの茅を立てかけ、縄でしっかり縛っていく。オジナオバナの当日まで風に飛ばされぬよう縛る。縄がない時はサルナシや山ブドウの蔓などを利用して縛ったという。一基に三、四人が掛り、一月から順に、三〇、五〇メートル間隔で完成させる(図136)。一二基作り終えたと山を下りた。

点火するのは、シマイ彼岸であるが、数日前にシマの周りを除雪し乾燥させておく。点火時刻は夜七時だが、二、三時間前には薬師神社に集合し参拝するのが慣わしである。子供達も午後三時頃から三々五々薬師堂に登る。到着次第、順次社殿に入り、賽銭やお神酒で拝礼し、その後車座になって持ち寄った料理で酒宴をする。時刻が六時を過ぎる頃、一基につき二人ずつ自分の担当のシマに向って出発し、棒に布を巻きつけ、灯油をしみこませたタイマツで点火時刻に一齐に点火する。ペットボトルに入れた灯油が各シマに置いてあり、点火時になるとシマの周りに灯油を振りまくので点火しやすい。シマの火が燃え尽きると、次々下山していく。

薬師神社宮司、自治会長、消防団などと火の始末担当者が消火を確認して下山する。下山した会員は、婦人会の作ったカレーライス、とん汁、つまみなどとジュースや酒で、慰労会をして、反省点、改善点を話し合い解散した。

(二) 宮野平のオジナオバナ

古代信仰にかかわると言われる黒又山の麓にある宮野



【図137】宮野平のオジナオバナの位置図

藁小屋の中で、おでんや彼岸だんごを食べる子供たち ※左の写真計三点は、鹿角市教育委員会「鹿角に伝わるオジナオバナ」(平成二二年)より

平は、黒又山の山頂にある薬師を祀る本宮神社の門前の性格からきた村名だと考えられている。この辺りの村人達は、山を「クロマンタ」と呼び古くから信仰してきたという。中通に広がる台地のいくつかの集落でも、オジナオバナは行われてきたが、火が危ないという消防団の指導などで中止になっていった。一本木は昭和二〇年頃、風張は昭和二五、二六年、倉沢は昭和二七年頃、そして宮野平も昭和三五年を最後に中断した。

中止になる前の宮野平のオジナオバナは、運営者が小中学生で構成する子供会で、彼岸のイリ、中日、オワリの三回、二カ所に小屋掛けして行っていた。それぞれ、墓地がよく見える田や川の側が適地として選ばれた。

彼岸のイリには小学生が一戸当り十数把から三〇把（二マル）の藁を貰って会場に運ぶ。運び終わると森に行つて炬で焚く杉の葉を集めてきた。中学生は山林に入り直径七、八センチ、長さ四・五、五メートルほどのアカシアの木を二〇本ほど伐つて運んでくる。この材料で小屋掛けに取りかかった。小屋の大きさは三、一〇畳ほどで、雑木を合掌組に組んだ。これに藁束をはずし、稲先の方を上に向け、均等に当て、藁を結んで作ったツナギで小屋に縛った。余った藁は小屋に敷き詰め、まんに炬を切つて暖をとった。昔は夕食時に一度家に帰り、ダンゴを持って再度集まった。点火時刻は九時である。全員が退去したのを確認し、外に積んでおいた杉の葉の中にに入れて、四方から一斉に火をつけた。

小屋を囲んだ子供達は「オジノバナァー明りの宵にダンゴしょいに来とらえー来とらえー」と唱え、火が消え

るまで繰返す。火が消えると骨組だけ取り出して立てておき、中日とオワリと三回同じ木材で骨組をつくり、藁で囲んで燃した。中日の唱え言葉は前半は同じだが、「ダンゴしょって見とらえー見とらえー」と唱え、オワリには「ダンゴしょって行つとらえー行つとらえー」と唱えて祖霊を送った。

このオジナオバナが宮野平で昭和五八年（一九八三）に復活した。復活後は彼岸の中日だけ行っている。藁はコンバインの導入で手に入りにくくなったが、コンバインに仕掛けをして藁を残し、ハザ掛けして乾燥し、保存しておいたものを使っている。藁の保存には手間がかかることから、今後はこの藁の調達が将来の課題になるだろうと自治会長は語っている。

骨組となる木は当日、ヤマハンノキ林に入り、十数本伐り出し、竹材なども混ぜて骨組を作る。藁の当て方、縛り方も昔同様に行う。

運営の中心は宮野平自治会の大人達である。婦人会は当日子供達や見物人に振舞う彼岸だんご、おでん、甘酒を作る。小屋の中の炬の周りや小屋の周りで料理の振舞をしてから、午後七時に点火し、昔と同じく火が消えるまで唱える。その後子供達も含め慰労会を行う。運営費は各戸当たり月千円徴収する自治会費から出費し、その他に寄付金二万円ほどで賄っている。集落戸数は五〇戸である。この他に各戸から小屋掛け用に藁六〇把、九〇把（二、三マル）、また各戸から米一合（おにぎり用）や大根、人参などの野菜を持ち寄る。

勢いよく燃え上がる藁小屋（平成二年（二〇〇九））



谷内地区のオジナオバナ（平成二年（二〇〇九））



【宮野平の墓参り】

中通地区は寺から遠いので、各集落内に墓地がある。宮野平の墓地は四カ所に分かれており、彼岸のイリ、中日とオワリの三回、家族で墓参りをし、墓前で火を焚いて先祖を供養する慣わしが続いている。墓参りをするのは女性、子供が主である。

三々五々、それぞれの家が自分の墓で火を焚いて拝んでいたが、大きな墓地では一斉に集まって、広場で藁を焚いて、全員で「オージノバナァー」と大声で唱えた。

（鹿角市文化財調査資料九七集『鹿角市指定無形文化財 鹿角に伝わるオジナオバナ』平成二二年（二〇一〇）より）

（三）その他のオジナオバナ

谷内地区ではオワリ（シメ）彼岸の日にオジナオバナが行われている。運営の中心になっているのは小中学生の親子である。場所は谷内地区館前の広場で、小中学生やその家族一〇〇人ほどが集まり、火のついた缶をグルグル回す。以前は藁などを積み上げて焚いていたというところだが、振り回しだけになったのはいつ頃からかはわからない。昔は、開催日もイリと中日とシメの三回だったようである。

永田地区では中日のみ行う。以前は田で行われ、谷内地区と同様に火の入った缶を振り回していたが、場所を広場にしてからは振り回しはしなくなった。現在は広場で、高さ一・八メートルほどの棒を立て、それに藁を積上げたものを二本作り焚いている。

下川原地区では、米代川の川原で、木で家の形の骨組を作り、それに藁を縛り付けて、イリと中日、シマイ彼岸の三回焚いている。石鳥谷地区でも、中日のみ、小屋掛けして、中日だけ燃やしていたが平成一〇年（一九九八）にやめた。

狐平地区では、以前は田で、下川原地区と同様に木の櫓を組んでいたが、現在は地区内三カ所の墓地で、それぞれの墓の前で藁を焚いている。イリと中日とオワリの三回行う。狐平地区以外のオジナオバナでは「オジナオバナ、明りの宵に……」を唱えているが、谷内地区はシメ彼岸だけ、「オジナオバナ暗りやーやわりや明かりの宵に団子背負つていーりや、いとりや」と唱える。

（鹿角市文化財調査資料九七集『鹿角市指定無形文化財 鹿角に伝わるオジナオバナ』平成二二年（二〇一〇）より）

四 新潟県魚沼地方のマトビ系行事

（一）十日町市のホッケタチ

『十日町市史』資料編8民俗「平成七年（一九九五）⁶²の春彼岸の項には次のように記されている。「彼岸の入り、中日、送り日に、子供たちは雪の上に稲藁で、ジジ・ババと呼ぶ塔を二つ作り、これに火をつけながら、入りの日には、ホッケタチ ホッケタチ この火についてゴザレ、ゴザレ、中日は仏がいったん寺に帰る日だとして、ホッケタチ ホッケタチ この中ん立ち メシヤレ

⁶² 十日町市史編さん委員会『十日町市史』資料編8民俗 十日町市役所 平成七年（一九九五）六四頁、六六八頁、八八〇～八八一頁

メシヤレ、最終の送り日には、ホッケタチ ホッケタチ この明かりについて イガツシヤレ イガツシヤレと唱えた。毎日、彼岸団子をつくりかえてあげた家もある。送り日のものを土産団子、足洗い団子などといった。また、仏から土産を背負って帰ってもらうようにと、荷縄そうめんを送り火に供えた。

この頃は積雪がまだ多かったので、(埋まった)墓の上に雪の墓と供物台、ろうそくや線香台をつくり、期間中お参りした。田麦では小雪のときには墓を掘り出し、鉢では花のない季節なので、紙にツバキやアヤメの絵をかいて供えた。」という。

ホッケタチを行う場所は、関根を例にみると集落境の川端と墓地や火葬場のある広場の二カ所で行われた。昭和二〇年代(一九四五)は、子供たちが、積上げた藁を囲み「ホッケタチ」と唱えながら行っていた。四日町新田では、平成五年(一九九三)まで行っていた写真が残っている。

(二) (南魚沼市)旧南魚沼郡六日町の ヒャクワット

昭和五三年(一九七八)に刊行された宇都宮貞子『たんたん滝水』⁽⁶³⁾に六日町の春彼岸の記述がある。

「春の彼岸入りの夕方、庭先の雪の上で藁火を焚きながら、ジイジゴたち、バアバゴたち、ジサ川越えて、バサ船に乗って、この明るいにござーれござれ」と子供等が叫ぶ。中日の夕方火を焚き、明けの日も同様にして、ジイジゴたち、バアバゴたち、この明るいに行きな―

れ」と叫んで、春の彼岸を終わりとする。各戸で家の近くで焚くのがノビ。青少年が集団する村の行事の大規模なのがヒャクワットで、昔は中日に村中の子供が各戸を廻って藁を貰い集め、雑木を柱に立てて藁を巻きつけ、周囲一丈、高さも一丈くらいの塔を作り、これを親火といた。外に道端に数十の小さい藁の塔を作り、夜一齋に点火する。山裾の村では大人も出て藁の塔を沢山作って山の中腹や峰にしょい上げると、松明を持った大勢の若者は夕方現場に待機して一齋に点火し、松明を振り振り下ってくる。旧城内村のみでなく、五十沢、大巻などの村の火も見え、雄大な眺めであったが、戦争中からだんだんとやめになった。

この藁火のあとは炭や灰が散らばってみにくい処へ、彼岸の終わった二三日というとき必ず降雪があつて焼屑を埋めしてしまうので、それを、彼岸のあとがくし」と呼んだ。」とある。この地域では、春彼岸に集落単位で焚く火を「ヒャクワット」と呼んでいる。

(63) 宇都宮貞子『たんたん滝水』 創文社 昭和五三年(一九七八) 二七〇頁

マトビ小屋の 有無・材料・(呼び名)	燃したものの(仕掛けの形)		囃え言葉		墓参り				備考
	昔(大正末から昭和30年代)	現在(平成25年)	昔	現在	回数		燃やすもの		
					昔	現在	昔	現在	
○	ダンボ(棒吊し)→ダンボ(水平)・車マトビ	ダンボ(文字・水平→直置き)	×	×	3回	3回	ワラ	×	水平とは、両脇に丸太()を立て、針金を張り、ダンボを吊す
○雪・ハザ木・コモ (マトビ小屋)	丸木を割りボロ布を挟む・藁束直置・乾燥した藤蔓→ダンボ(水平)	ダンボ(文字・車・水平)	×	×	3回	1～3回	ワラ	ダンボ等	車とは、火を円形に回すマトビ
○木・ワラ束(マトビ小屋)	ダンボ(棒吊し)・車マトビ→水平	ダンボ(文字・水平・車マトビ)	×	×	3回	3回	ワラ・杉葉	ダンボ等	
○円形の雪壁・屋根なし (カマクラ)→屋根付き小屋	ワラ積上3段(芯棒あり)=タイマツ→ダンボ(棒吊し、文字)	ダンボ(文字・水平・棒吊し)	×	×	3回	3回	ワラ	〃	棒吊しは、ダンボを吊したもので棒マトビとも言う
○雪壁のみ(雪城・カマクラ)	ワラ束を多数立てる→ダンボ(文字・車)	ダンボ(文字・水平)	×	×	3回	1～3回	ワラ	ダンボ等	
○雪・木ワラ(マトビ小屋)	ワラ積上5段(芯棒あり)・車・ダンボ(水平)	ダンボ(文字・直置き・水平・車)	×	×	3回	3回	ワラ	〃	
○雪積(カマクラ)	ワラ、藤皮を棒に吊す→ワラ積上(芯棒あり)	ダンボ(文字・水平)	×	×	3回	3回	ワラ	〃	シマイ彼岸にワラを川に流した
○雪(カマクラ)や小屋作る	ワラ束を棒に差す・ダンボ(棒吊し)・車・文字	ダンボ(文字・車・棒吊し)	○	×	3回	3回	ワラ	〃	
○雪・屋根なし(カマ、ホド・火床)→雪(カマクラ)	ワラ積上(芯棒あり ダンボ型)・ダンボ型藤の皮(棒吊し)	ダンボ(文字・棒吊し)	○	×	3回	3回	ワラ	〃	ダンボ振り回し
○雪・木・杉葉(城壁)	ワラ積上(芯棒あり)・木に引掛け・ダンボ(水平)・文字	ダンボ(文字・水平・直置き)	×	×	3回	1～3回	ワラ	ダンボ等	ダンボを振り回し
○雪・屋根カヤ(マトビ小屋)	ワラ積上2～3段(芯棒あり)・しへ積み	ダンボ(文字・直置き)	○	×	3回	1～3回	ワラ	ダンボ等	
○木・ワラ・(小屋)	ワラ積上(芯棒あり)大・小	ダンボ(文字・水平)	×	×	3回	3回	ワラ	ダンボ等	
○	ワラ積上(芯棒あり・タイマツ型)	ダンボ(文字・棒吊し・車)	×	×	3回	3回	ワラ	×	
○雪(カマ・カマド・小屋)	ワラ積上(芯棒あり・タイマツ型)→ダンボ棒吊し	ダンボ(文字・水平)	×	×	3回	3回	ワラ	×	
○	ワラ積上(芯棒あり)・墓で藁束を丸くして焚く	ダンボ(文字・水平)	○	×	3回	1～3回	ワラ	ダンボ等	ワラ燃やすのは中日だけ
○雪と木・ワラ(マトビ小屋)	マトビ小屋・ダンボ・車マトビ	ダンボ(文字・水平→直置き)	×	×	3回	様々	ワラ	×	ダンボの振り回し
○木・杉葉(カマクラ)	ワラ積(芯棒なし)カスピ・カマクラ(マトビ小屋)	ダンボ(文字・車)(平成21年まで)	○	×	3回	3回	ワラ	缶	
×	ワラの束を長く振り回す(カスピ)	×	○	×	3回	1～3回	ワラ	×	
×	ワラ積上(芯棒あり) 2段	×	○	×	2回	1～3回	ワラ	×	
×	ワラ積上(芯棒あり)	×	×	×	3回	1～3回	ワラ	×	
×	ワラ積上(芯棒なし→あり 2・3段)	×	×	×	3回	3回	ワラ	缶	各家が墓の前で
×	ワラ積上(芯棒なし→あり)	×	×	×	3回	3回	ワラ	缶等	〃
○雪・木・菰(小屋)	ワラ束1マル直置き・缶の中にボロ布(棒吊し)	ダンボ(文字・棒吊し)	×	×	3回	3回	ワラ	缶・ダンボ	墓の前でワラを高く積んだ
○	ワラ積上1段(芯棒あり)・ダンボ(棒吊し)	ダンボ(文字・棒吊し)	×	×	3回	3回	ワラ	缶・ダンボ	
○木・苦編み(マトビ小屋)	缶中にボロ布(棒吊し)・文字・車マトビ	ダンボ(文字・山形・滑車・車・棒吊し)	×	×	3回	3回	ワラ	缶・ダンボ	墓前ではワラの高さを競った
○木・苦編み(マトビ小屋)	ダンボの棒吊し・車マトビ	ダンボ(文字・水平)	×	×	3回	1～3回	ワラ	缶・ダンボ	
○雪壁・雑木(マトビ小屋)	ワラ積上2段(芯棒あり)・ダンボ(棒吊し・車)・電車マトビ	ダンボ(文字・棒吊し)	×	×	3回	1～3回	ワラ	缶布・木屑	電車は火玉を上から下に落とす。墓前でワラを焚く人が現在もいる
○木・苦編み(マトビ小屋)	ワラ積上3・4段(芯棒あり)・ダンボ	ダンボ(文字・棒吊し)	×	×	3回	3回	ワラ	ダンボ・缶	
○	ワラ積上(芯棒なし→あり)・ダンボ棒・車マトビ(縦)横)	ダンボ(文字・棒吊し・車(縦・横))	×	×	3回	3回	ワラ	ダンボ・缶	
○木・苦編み(マトビ小屋)	ワラ積上(芯棒あり)・缶・文字・マトビ小屋・電車マトビ	ダンボ・缶(文字・水平・車)	×	×	3回	3回	ワラ	ダンボ・缶	棒の木を叩いて乾かしたものを燃やす
不明	ワラ積上(芯棒あり)・ダンボ(棒の頭に括る)	×	×	×	3回	1～3回	ワラ	ワラ・ダンボ	墓前にワラを焚いた跡あり
○木・ワラ(ワラ小屋)	ワラ積上(芯棒なし)・ダンボ(缶)棒・文字(S40年)	ダンボ(文字)	×	×	3回	1～3回	ワラ	ダンボ	たまにダンボを燃やす
×	ワラ積上(芯棒なし→あり)	×	×	×	3回	3回	ワラ	缶等	〃
×	ワラ積上(芯棒なし→あり)	×	×	×	3回	3回	ワラ	缶等	〃
×	ワラ積上(芯棒なし→あり)大・小	ダンボから缶へ(水平・文字)	×	×	3回	1～3回	ワラ	×	
×	ワラ積上(芯棒なし)・ダンボ(缶)棒吊し	×	×	×	3回	3回	ワラ	缶	たまにダンボを燃やす
×	ワラ積上(芯棒あり)・木に引掛け	×	×	×	3回	3回	ワラ	缶	各家が墓の前、何年かに1度村単位で
○	小屋形ハザ掛式・杭形ハザ掛式	缶(水平)	×	×	3回	様々	ワラ	×	
×	ワラ積上(芯棒あり)・門形ハザ掛式	ダンボ(門型・棒吊し)	○	×	3回	3回	ワラ	缶・ダンボ	平成15年までワラ積上だった
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	3回	様々	ワラ	×	各檀那寺に集まる(シマイにサンダワラに供物を乗せ蠟燭を灯し流す)
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	×	〃
×	ワラ積上(芯棒なし)								

【表－2】マトビに関わる集落とそのやり方一覧①

地区		集落名	開催状況	開催日		担い手		場所	
現・市町村	旧・市町村			昔	現在	戦前・戦中・戦後・昭和30年代	現在(平成25年)	昔	現在
上小阿仁村		大阿瀬	○	中日	中日	小学4年～中学生	若勢団(50・60才) (婦人会) (ダンボ)小学生1人	山	田
		長信田	○	中日	中日	小学2年～中学3年までの子供のみ	子供(小1中1)と親・青年会(～50才まで)・OB・集落役員	墓	田
		羽立	○	中日	中日	小学校高学年～中学3年	若衆会・子供	山	傾面
		堂川	○	中日	中日	小学3年～高等科(高学年～中学生)(昭和55年まで)	青年団・愛宕会	台地	傾面
		杉花	○	中日	中日	小学生～中学生	若勢団・子供3人	山	墓地
		上仏社	○	中日	中日	小学3年～中学生→中学生～高校生	若勢団(5・6人)	台地	台地
		下仏社	○	中日	中日	小学3年～6年→若勢団・子供	有志(10人程)	山	墓地
		小沢田	○	中日	中日	小学校高学年～高等科・(中学生)→若勢団・子供	子供・若勢団・仕和会・老人クラブ	山・田	河原
		福館	○	中日	中日	小学3年～高等科2年→小学4年～小学6年(のちに中学生)	若勢団(23～50代)・子供(3人)	墓地	田の畔
		沖田面	○	中日	中日	小学校高学年～高等科→小学校高学年～中学生	若勢団(高校生～45才)・OB会	山	川そば
		大海	○	中日	中日	小学生のみ→小学3年～中学生(S48年頃まで)	役員・郷役	山	田の畔
		上五反沢	○	中日	中日	小学生～中学生→親子会(昭和50年頃から)	大人だけ	山	田の畔
		中五反沢	○(昭和56年に再開)	中日	中日	小学5年～高等科2年	若勢団(50～60代)	山	田の畔
		下五反沢	○	中日	中日	小学4年～高等科・若勢団手伝う→小学4年生～中学3年生のみ	若勢団と役員	山	田の畔
		大林	○	中日	中日	若勢団・役員	役員・若勢団(30～50才代)	墓地・田畔	川そば
		小田瀬	○(昭和52年に再開)	中日・小屋は中日かシマイ彼岸に燃やす	中日	子供達(小学生～中学生)	若勢団(46～66才)8人・郷役	台地斜面	川そば
		南沢	×(平成21年まで行う)	×	×	小学生～中学生・若勢団	郷役で大人のみ(平成21年まで行う)	墓地畑	×
		不動羅	×	イリ・中田・シマイ	×	子供も大人も	×	墓地	×
		中茂	×	中日	×	子供も大人も皆で	×	墓地	×
		八木沢	×	イリか中日	×	若勢団中心	×	墓地	×
北秋田市	旧合川町 (小阿仁川沿い)	羽根山	×(昭和30年まで行う)	イリ・中田・シマイ	×	それぞれの家・家族で	×	墓	×
		李岱	×	イリ・中田・シマイ	×	それぞれの家・家族で	×	(広場)	×
		東根田	○	中日	中日	少年団(小学3年～中学3年)	小学生・親子会	川の土手	土手
		西根田	○	中日	中日	小学4年～高等科	体育協会や寿クラブなど 中心	山	田の畔
		芹沢	○	中日	中日	小学3年～中学3年	体育協会が主体・子供(小学3人中学2人)	田の畔	土手
		大内沢	○	中日	中日	小学3年～中学生	若勢団・親子会	山	広場
		三里	○	中日	中日	少年団(小学3年～中学3年)	マトビ保存会(高齢者)・村中の協力	山	土手下道
		摩当	○	イリ・中田・シマイ	イリ・中田・シマイ	小学3年～中学3年	マトビ保存会・親子会(子供と親)	山	田の畔
		三木田	○	中日	中日	中学1年～中学3年	マトビ保存会(親子会・体育協会・少年団・老人クラブ)	山	山・田畑
		鎌沢	○	中日とシマイ(小屋のみ)	中日	中学1年～中学3年(昭和61年ぐらゐまで)	有志・親子会(中学生と親)	山	台地・広場
		雪田	×(平成5年まで行う)	中日	中日	小学4年～高等科	×	山	×
		杉山田	○	中日	中日	少年団(中学1年～3年)	親子会・老人クラブ	山	土手沿い
	(阿仁川沿い)	増沢	×	イリ・中田・シマイ	×	それぞれの家・家族で	×	墓前・田	×
		木戸石	×	イリ・中田・シマイ	×	それぞれの家・家族で	×	〃	×
		八幡岱	○	中日	中日	子供と若勢団手伝い	若勢団(20人程)	川土手下	畔道
		川井	×	イリ・中田・シマイ	×	子供と大人で	×	寺墓・土手	×
		上杉	×	イリ・中田・シマイ	×	子供と大人で	×	寺墓地広場	×
		道城	○	中日	中日	子供のみ	若勢団・親子会・消防団・役員	田の畔	畔道
		新田目	○	シマイ	シマイ	若勢団・各家の大人・子供	集落役員・若勢OB・子供・地域協議会	橋・土手	橋土手
		今泉	×(戦後早い時期に中止)	イリ・シマイ	×	子供たち(男子)中心・大人	×	寺墓地広場	×
		新町	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		前山	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
北秋田市	旧鷹巣町	伊勢堂	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		坊沢	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		羽立	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		田中	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		新田中	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		前野	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		大堤	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		下町	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		上町	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		昭和	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		糠沢	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		向黒沢	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		下糠沢	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		高野尻	○(平成8年に開始)	3月第1日曜日	3月第1日曜日	×	高野尻自治会・市営住宅自治会	寺墓地広場	墓地前道
		太田	×(戦後早い時期に中止)	イリ・シマイ	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		摩当	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		南鷹巣	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		堂々岱	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		小摩当	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		藤株	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		上野	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		小森	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		脳神	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		蟹沢	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		大野尻	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		大向	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		小ヶ田	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		川口	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		七日市	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	墓前	×
		妹尾館	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		岩脇	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×
		品類	×	〃	×	子供たち(男子)中心・大人	×	〃	×

マトビ小屋の 有無・材料・(呼び名)	燃したものの(仕掛けの形)		囃え言葉		墓参り				備考
	昔(大正末から昭和30年代)	現在(平成25年)			回数		燃やすもの		
			昔	現在	昔	現在			
東屋を借りた	ワラ積上(芯棒あり)3段	×	○	×	3回	3回	ワラ	×	花ダンゴを作るのは1軒か2軒
×	ワラ積上(芯棒なし多数・芯棒あり4段1本) →小屋形ハザ掛(ヤグラ)→文字・ダンボ(水平)	ダンボ(水平)	○	×	3回	様々	ワラ	×	芯棒なし2段は多数・芯棒あり4段は2本作る(昭和30年代以前)
×	ワラ・豆ガラ積上(芯棒あり)(3~4段)	×	○	×	3回	様々	ワラ	様々	
不明	ワラ積上(芯棒あり)	×	○	×	3回	様々	ワラ	様々	
×	ワラ積上(芯棒有)・25~26本→7~8本・タタキ	缶直置き・ダンボ(水平)	○	×	3回	様々	ワラ・タタキ	タタキ	ミズキダンゴ
×	ワラ積上(芯棒あり)12本(間年13本)　タタキ	ダンボ(水平)全戸分	○	×	3回	3回	ワラ	×	ミズキダンゴあり　墓前の火はカスビ
不明	ワラ積上(芯棒あり)多数　タタキ	不明	○	×	3回	様々	ワラ	様々	
×	小屋形ハザ掛け式(七機)・タイマツ(タタキ)	ダンボの直置き・ダンボ(水平)	○	×	3回	1~3回	ワラ・タイマツ	タイマツ	タイマツ(ミニタタキ)タイマツはシメ彼岸のみ焚く
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ	タタキ	
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ	様々	
×	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	缶(水平)	○	×	3回	3回	ワラ	紙など	シマイに百万遍念仏
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ	様々	大人は2本、子供は1本焚く
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ	様々	
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ	様々	
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ	様々	
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ	様々	
×	ワラ・杉葉積上(芯棒は柳)3~4本　タタキ	文字(缶)	○	×	3回	3回	ワラ・タタキ	×	昭和50年代には、ボロ布もやった
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)3~4本　タタキ	缶直置き・文字	○	×	3回	3回	ワラ・タタキ	様々	
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ・タタキ	様々	
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ・タタキ	様々	タタキを振り回す
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ・タタキ	様々	〃
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ・タタキ	様々	〃
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ・タタキ	様々	
×	ワラ積上・杉の葉・ダンボ・(タイヤ)・タタキ	缶(布)の水平マトビ	○	×	3回	3回	ワラ・タタキ	缶	缶の中にボロと灯油
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ・タタキ	様々	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ・タタキ	様々	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)3~5m・　タタキ	×	○	×	3回	×	ワラ・タタキ	×	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)・ダンボ・タイヤ吊す・タタキ	×	○	×	3回	×	ワラ・タタキ	×	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	×	ワラ・タタキ	×	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	×	ワラ・タタキ	×	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	×	ワラ・タタキ	×	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	×	ワラ・タタキ	×	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)・ダンボ(タイヤ吊す)　タタキ	×	○	×	3回	×	ワラ・タタキ	×	森吉と一緒にやる
○(雪積んで風よけ)	ワラ積上(芯棒あり)・(タイヤ吊す)・タタキ	×	○	×	3回	×	ワラ・タタキ	×	昭和40年以後は平地の神社
〃	ワラ積上(芯棒あり)・戸数と同じ本数・タタキ	×	○	×	3回	×	ワラ・タタキ	×	
〃	ワラ積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	×	ワラ・タタキ	×	
〃	ワラ積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	×	ワラ・タタキ	×	
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	様々	ワラ・タタキ	様々	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	〃	ワラ・タタキ	〃	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　8~10m・タタキ	×	○	×	3回	〃	ワラ・タタキ	〃	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	〃	ワラ・タタキ	〃	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	〃	ワラ・タタキ	〃	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)・ダンボ・缶・タタキ	×	○	×	3回	〃	ワラ・タタキ	〃	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)多数・タタキ	×	○	×	3回	〃	ワラ・タタキ	〃	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	〃	ワラ・タタキ	〃	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	〃	ワラ・タタキ	〃	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)多数・タタキ	×	○	×	3回	〃	ワラ・タタキ	〃	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)　タタキ	×	○	×	3回	〃	ワラ・タタキ	タタキなど	
不明	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)(高い)	×	×	×	3回	1回	ワラ	×	
×	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)(高い)車マトビ・文字	木くず・杉葉積み(芯棒あり)・ダンボ(文字・水平・車マトビ)	×	×	3回	3回	ワラ	×	中日ダンゴ比べ・ダンボ作りは老人クラブ・再開時は公民館行事だった
不明	松の小丸太・ワラ積上(中央に杭)	木・ワラ積上	○	○	3回	様々	ワラ	×	墓でワラは20年以上前から燃やぬ
〃	火を付けた明俵を回す	×	○	×	3回	〃	ワラ	不明	明俵振りまわし
×	ワラ積上(小)(芯棒なし)	缶に布をいれる。(文字)	×	×	3回	〃	〃	×	
×	ワラ	×	×	×	3回	〃	〃	不明	イタヤの枝のウラに団子をさす
×	ワラ	×	×	×	3回	〃	〃	不明	〃
×	ワラ	×	×	×	3回	〃	〃	不明	〃
×	ワラ	×	×	×	3回	〃	〃	不明	〃
×	ワラ	×	×	×	3回	〃	〃	不明	〃
不明	樹木に藁束を引掛け	×	○	×	3回	〃	ワラ	〃	
不明	ワラ積上(芯棒あり)(高い)	×	○	×	3回	様々	ワラ	不明	4~5mの松の木が芯棒
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)(高い)・樹木引掛け	×	○	×	〃	〃	〃	〃	
〃	ワラ・杉葉積上(芯棒あり)(高い)・樹木引掛け	×	○	×	〃	〃	〃	〃	
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	3回	様々	ワラ	不明	サンダクラに燭台をこしらえ流す。
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	ワラ	〃	サンダクラに燭台をこしらえ流す。
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	〃	〃	
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	〃	〃	サンダクラに燭台をこしらえ流す。
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	〃	〃	
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	〃	〃	
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	〃	〃	ワラを振る
×	ワラ積上(芯棒なし)2箇所(子供の火、仏の火)	×	○	×	〃	〃	〃	〃	
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	〃	〃	
×	ワラ積上(芯棒なし)	×	○	×	〃	〃	〃	〃	
○木とワラ(カマクラ)	ワラ積上(芯棒あり)・茅・小屋掛け	茅積上げ(芯棒3本あり)	○	×	3回	様々	ワラ	不明	芋稈・空缶・松根を振り回す
×	ワラ積上(芯棒あり)・缶を振り回す(松根)	缶を振り回す(松根)	○	○	3回	様々	ワラ	不明	
×	ワラ積上(芯棒あり)缶を振り回す	ワラ積上げ(芯棒あり)2本	○	○	3回	様々	ワラ	不明	
○木とワラ(小屋)	小屋掛け	小屋掛け	○	○	中日	中日	ワラ	不明	
○木とワラ(小屋)	小屋掛け	小屋掛け	○	○	3回	3回	ワラ	不明	
×	小屋掛け	ワラ	○	○	3回	3回	ワラ	ワラ	

【表-2】マトビに関わる集落とそのやり方一覧②

現・市町村	地区		集落名	開催状況	開催日		担い手		場所	
	旧・市町村				昔	現在	戦前・戦中・戦後・昭和30年代	現在(平成25年)	昔	現在
北秋田市	旧森吉町	本城	×(平成6年まで行う)	中日	×	×	子供(小学3年から6年生まで)大人は手伝い	子供会(男子)・父母会(平成6年まで)	山	道沿い
		(阿仁川沿い)	向本城	○	中日かシマイ	中日かシメイ	子供だけ	子供(男女)・役員・消防の人	台地の田園	畔道
		米内沢	×	シマイ	×	×	小学生～中学生	×	台地・河原	×
		根小屋	×	シマイ→中日	×	×	不明	×	山	×
		白坂	○(昭和48年に再開)	オクリ	オクリ	オクリ	子供だけ(小学生のみ)	若勢会六人が中心	田の畔	田・道
		寄延	○	オクリ	オクリ	オクリ	子供(小学校3年～中学生)若勢団夜のみ	若勢団(45才以上)5、6人	山	田の畔
		大測	×	シメ彼岸	×	×	子供中心	不明	山	×
		浦田	○	シメ彼岸	シメ彼岸	シメ彼岸	少年団(小学3年～中学生)	小学3年～中学・若勢団20人	山	堤防
		桂瀬	×	シメイ→中日	×	×	大きい子供達	×	山	×
		下羽立	×	シメ彼岸	×	×	子供中心	×	山	×
		惣内	○	イリ・オクリ	中日	中日	子供・大人(別々)	若勢団のみ 7、8人	川沿い	田の畔
		下野	×	オクリ	×	×	子供中心	×	山	×
		下前田	×	オクリ	×	×	子供中心	×	田	×
		冷水	×	オクリ	×	×	子供中心	×	山	×
		阿仁前田	×	シメイ→中日	×	×	子供中心	×	山	×
		桂坂	×	シメイ→中日	×	×	子供中心	×	山	×
		五味堀	○	オワリ→中日	中日	中日	小学校高学年～中学生・青年団(16～42才)	子供たち・青年団・若勢団	河原・台地	平地
		神成	○	シメイ→中日	中日	中日	青年会(50才まで)	大人3人	山	平地
		大岱	×	シメイ	×	×	不明	×	山	×
	旧森吉町	新屋布	×	シメイ→中日	×	×	大人	×	寺の田んぼ	×
	(小又川沿い)	平里	×	シメイ→中日	×	×	子供中心	×	道路脇	×
		羽根川	×	シメイ→中日	×	×	子供中心	×	山	×
		細越	×	シメイ→中日	×	×	子供中心	×	台地	×
		巻測	○(山は平成25年再開・台地は平成初期に再開)	イリ・中日・シマイ	中日	中日	子供(男子のみ→男女とも)山は大人だけ(中日のみ)	大人だけ	山・台地	山・台地
		堺田	×	シマイ	×	×	子供中心	×	山	×
		根森田	×	〃	×	×	子供中心	×	山	×
		桐内	×	〃(森吉山ダム建設のため)	〃	×	子供中心	×	山	×
		桐内沢	×	〃	×	×	子供(男女とも)・大人数人	×	山	×
		様田	×	〃	×	×	子供中心	×	山	×
		小角	×	〃	×	×	子供中心	×	山	×
		向様田	×	シマイ	×	×	子供中心	×	山	×
		惣瀬	×	〃	×	×	子供中心	×	山	×
		天津場	×	〃	×	×	子供中心	×	山	×
		森吉	×	〃	×	×	小中学生・3、4人の大人	×	山・平地	×
		鷺ノ瀬	×	〃	×	×	子供中心	×	山	×
		深度	×	〃	×	×	子供中心	×	山	×
		小滝	×	〃	×	×	子供中心	×	山	×
北秋田市	旧阿仁町	小様	×	シマイ	×	×	子供中心	×	山	×
		(小様川沿い)	塚の岱	×	〃	×	子供中心	×	台地	×
		土倉	×	〃	×	×	青年達	×	墓の広場	×
		上山	×	〃	×	×	子供中心	×	山	×
		向林	×	〃	×	×	子供中心	×	山	×
	(阿仁川沿い)	吉田	×	シマイ	×	×	子供中心	×	山	×
		小測	×	〃	×	×	子供中心	×	台地	×
		湯内	×	〃	×	×	子供中心	×	山	×
		水無	×	〃	×	×	子供中心	×	山	×
		阿仁銀山	×	〃(平成初期頃まで行う)	〃	×	青年達	×	山	×
		荒瀬	×	〃(昭和40年代に中止)	〃	×	子供達だけ	×	墓地広場	×
		伏影	×	シマイ	×	×	子供達だけ(小学生～高等科2年(中学)まで)	×	墓地広場	×
		根子	○(昭和55年に再開)	中日	中日	中日	青年団・若勢団中心・子供手伝い	友和会(10人程)・子供4人と親・ボランティア	墓地広場	台地・広場
能代市	旧山本郡	鶴形	○	イリ・中日・シマイ	シマイ	シマイ	子供(小学校2年～高等科2年)・大人	大人・子供	山	河原
	旧二ツ井町	荷上場	×	イリ・シマイ	×	×	(小学生～中学2年)	×	山	×
	旧二ツ井町(米代川)	麻生	○(平成の初めから開始)	イリ・中日・シマイ	中日	中日	各家族	ボランティア(桜ランド山の会)	墓地	山
	旧二ツ井町(田代川)	田代	×	イリ・中日・シマイ	×	×	大人一人と子供で	×	墓前	×
		七村	×	イリ・中日・シマイ	×	×	大人一人と子供で	×	墓前	×
		八兵衛	×	イリ・中日・シマイ	×	×	大人一人と子供で	×	墓前	×
	旧二ツ井町(濁川)	釜谷	×	イリ・中日・シマイ	×	×	大人一人と子供で	×	墓前	×
		濁川	×	イリ・中日・シマイ	×	×	大人一人と子供で	×	墓前	×
	旧二ツ井町(種梅川沿い)	(各集落)	×	オクリ	×	×	子供たち	×	墓前	×
山本郡 藤里町		藤琴	×	イリとオクリ	×	×	子供たち	×	墓地	×
		根城	×	イリとオクリ→中日	×	×	(小学生～中学2年)	×	墓地	×
		粕毛	×	イリとオクリ	×	×	(小学生～中学2年)	×	墓地	×
大館市	旧大館市	長走	×	イリとオワリ	×	×	大人	×	墓地	×
		花岡町	×	ハツとオワリ	×	×	子供たち	×	墓地	×
		大森	×	ハジメとシマイ	×	×	子供たち(男女)・大人	×	墓地	×
		川原(水門)	×	シマイ	×	×	子供たち	×	空地	×
		田町	×	シマイ	×	×	子供たち・大人	×	空地	×
		樺崎	×	ハジメとシマイ	×	×	子供たち・大人	×	墓地	×
		十二所	×	イリ・シマイ	×	×	子供たち	×	墓地	×
		旧比内町	扇田	×	イリ・シマイ	×	子供たち	×	田	×
		比内	×	イリ・シマイ	×	×	子供たち	×	墓地	×
		大葛	×	イリ・シマイ	×	×	子供たち	×	墓地	×
角館市	八幡平	小豆沢	○	イリ・中日・シマイ	シマイ	シマイ	(田は小学校の子供)・(山は小若者・大人)	自治会・青年会・(中学生)	田・川原・山	山
	八幡平	谷内	○	イリ・中日・シメ	シメ	シメ	子供たち・大人	小中学生と親子	田・空地	広場
	八幡平	永田	○	中日	中日	中日	子供たち	子供会	田	広場
	十和田大湯	宮野平	○(昭和58年に復活)	イリ・中日・シマイ	中日	中日	子供会(小中学生)	自治会	田・川原	広場
	花輪	下川原	○	イリ・中日・シマイ	中日	中日	子供たち・大人	青年会	空地	川原
	花輪	狐平	○	イリ・中日・シマイ	イリ・中日・シマイ	イリ・中日・シマイ	子供たち・大人	子供たち・大人	田	墓

【参考文献】

人物・著者名	内容・本の題名（○○町史）	発行元	発行年度
合川町役場	『合川町史 郷土のあゆみ』	秋田県北秋田郡合川町	昭和四一年（一九六六）三月
合川町役場	『合川町の三〇年史』	秋田県北秋田郡合川町	昭和六〇年（一九八五）九月
合川町役場	『四十歳です：合川町』町制施行40周年	秋田県北秋田郡合川町	平成八年（一九九六）
秋田県	『秋田県史 民俗・工芸編』	秋田県	昭和三七（一九六二）三月三十一日
秋田さきがけ新聞			平成二〇年（二〇〇八）三月一九日～二〇日
秋田魁新報社編	『ダムに沈む「むら」森吉町森吉』（モリトピア選書一）	建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所	平成四年（一九九二）七月
阿仁町史編纂委員会	『阿仁町史』	阿仁町	平成四年（一九九二）〇月三〇日
荒木はじめ	『壮大な照明のドラマ』『わらび五 NO.184』	わらび座	昭和五一年（一九七六）五月
石井忠行	『伊頭園茶話』『新秋田叢書』一期七巻	歴史図書社	昭和四六年（一九七二）二月
板橋源	『秋田県北秋田郡前田村の小報告』『復刻版民俗学』第一巻（1―6）	岩崎美術社	昭和六一年（一九八六）五月
伊藤孝博	『菅江真澄と秋田』	無明舎出版	平成一六年（二〇〇四）十一月二〇日
稲 雄次編著	『秋田民俗語彙事典』	無明舎出版	平成二年（一九九〇）
今井晋・明石貞吉	『米代川中流扇田町付近の土俗』『復刻版民俗学』第四巻（上）	岩崎美術社	昭和六一年（一九八六）五月
内田武志	『年中行事 秋田県鹿角郡宮川村地方』『復刻版民俗学』第二巻上	岩崎美術社	昭和五年（一九三〇）六月
内田武志・宮本常一編	『菅江真澄全集 別巻一』	（株）未来社	昭和五二年（一九七七）〇月二五日
内田武志・宮本常一編	『菅江真澄全集 第三巻』	（株）未来社	昭和四七年（一九七二）七月一〇日
内田武志・宮本常一編	『菅江真澄全集 第十一巻』	（株）未来社	昭和五五年（一九八〇）二月二〇日
内田武志・宮本常一編	『菅江真澄全集 第八巻』	（株）未来社	昭和五五年（一九八〇）二月二〇日
宇都宮貞子	『たんたん滝水』	創文社	昭和五三年（一九七八）
大里武八郎	『鹿角方言考』	鹿角方言考刊行会	昭和二八年（一九五三）六月
大館市史編纂委員会	『大館市史 第三巻 上』	大館市	昭和五八年（一九八三）二月二二日
大館市史編纂委員会	『大館市史 第四巻』	大館市	昭和五六年（一九八一）三月三十一日
大館市史編纂委員会	『大館市史 第五巻』	大館市	平成二年（一九九〇）三月三十一日
鹿角市	『鹿角市史 第四巻』	鹿角市	平成八年（一九九六）三月三十一日
鹿角市教育委員会	『鹿角に伝わるオジナオバナ「小豆沢のオジナオバナ」「宮野平のオジナオバナ」——無形民俗文化財記録作成調査報告書六——』	鹿角市教育委員会	平成二二年（二〇一〇）一月
上小阿仁村史編纂委員会	『上小阿仁村史 資料編』	上小阿仁村	平成五年（一九九三）
上小阿仁村史編纂委員会	『上小阿仁村史 通史編』	上小阿仁村	平成六年（一九九四）十一月三〇日
上小阿仁村史編纂委員会	『上小阿仁村百年誌』	上小阿仁村	平成三年（一九八九）二月二十日
北秋田市教育委員会	『北秋田市歴史文化基本構想』		平成二三年（二〇一一）三月
企画村民室編集	『広報かみこあに』 NO.一九、一三一、一六六、二一五、二二七、二四二、二九一、 三〇五、三六七、三七二、三八六	秋田県上小阿仁村役場	昭和四一年～平成四年（一九六六～一九九二）
郷土資料部会	『感想文と思い出 まとび』祭り・行事実施調査		平成八年（一九九六）三月
工藤正編	『郷土童謡集』		昭和七年（一九三二）
工藤由四郎	『阿仁合町郷土誌』	秋田県北秋田郡阿仁町	昭和三七（一九六二）一〇月

小林實編著	『小沢田郷土誌』	小沢田部落委員会	平成一〇年（一九九八）二月
桜田俊編	『鷹巣地方史研究 第六七号』	鷹巣地方研究会	平成二三年（二〇一一）一月二五日
沢田四郎作	『秋田県山本郡鶴形村谷地年中行事』『復刻版近畿民俗』第三冊	名著出版	昭和五八年（一九八三）一〇月
関口修克	『秋田県山本郡二ツ井町の民俗』『日本民俗学会報 第三五号』	日本民俗学会	昭和三九年（一九六四）八月三一日
鷹巣町市編纂委員会	『鷹巣町史 第一巻』	鷹巣町	昭和六三年（一九八八）三月
鷹巣町市編纂委員会	『鷹巣町史 第三巻』	鷹巣町	平成元年（一九八九）三月三一日
田口勝一郎他	『図説 秋田県の歴史』図説日本の歴史5	河出書房新社	昭和六二年（一九八七）七月一〇日
田口昌樹	『菅江真澄』民俗選書VOL. 一七	秋田文化出版社	昭和六三年（一九八八）七月
十日町市編纂委員会	『十日町市史』資料編八の「民俗」	十日町市	平成四年（一九九二）三月
東洋大学民俗研究会	『上小阿仁の民俗』	秋田県北秋田郡上小阿仁村	昭和五四年（一九七九）三月
戸島チエ	『鉾山と生活——伝承と出会い』	戸島チエ	平成七年（一九九五）
富木隆蔵	『5日本の民俗 秋田』	第一法規出版(株)	昭和四八年（一九七三）一〇月一〇日
西角井正慶編	『年中行事辞典』	東京堂	昭和三三年（一九五八）五月三〇日
『日本の食生活全集 秋田』編集委員会	『聞き書き秋田の食事』『日本の食生活全集⑤』	社団法人 農山漁村文化協会	昭和六一年（一九八六）二月
福岡龍太郎	『まどび』『史友』第二八号	合川地方史研究会	平成一八年（二〇〇六）十一月
福岡龍太郎	『春彼岸のまどび』『史友』第三〇号記念号	合川地方史研究会	平成一九年（二〇〇七）十一月
二ツ井町史編纂委員会	『二ツ井町史』	秋田県山本郡二ツ井町	昭和五二年（一九七七）三月三一日
藤里町誌編纂委員会編	『藤里町誌』	藤里町教育委員会	昭和五〇年（一九七五）八月
坊沢郷土誌編纂委員会	『坊沢郷土誌』	坊沢郷土誌編纂委員会	昭和三六年（一九六一）二月
北羽新聞			平成二五年（二〇一三）三月二一〜二五日
藤原優太郎編著	『森吉山麓風土記 ブナとモロビの里』（モリトピア選書三）	建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所	平成五年（一九九三）三月
文化庁文化財保護部	『正月の行事』——岩手県・秋田県・埼玉県・新潟県—— 無形の民俗資料記録 第一四集	平凡社	昭和四六年（一九七一）三月
本城屋勝	『わらべうた研究ノート』	無明舎出版	昭和六一年（一九八二）六月
松浦長右衛門	『まどび』『地域文化誌 みちのく』創刊号	上小阿仁村公民館	昭和五三年（一九七八）三月
郷土資料部会	『万灯火ご案内』『菜』(三)	上小阿仁村公民館	平成一三年（二〇〇一）六月
三浦貞栄治 他五名	『東北の葬送・墓制』	(株)明玄書房	昭和五三年（一九七八）一〇月三〇日
宮本常一編	『日本祭礼風土記』	慶友社	昭和三八年（一九六三）二月
民俗学研究所編	『柳田国男監修 民俗学辞典』	東京堂出版	昭和二六年（一九五一）一月三一日
無名舎出版編	『写真記録 森吉山麓の生活誌』（モリトピア選書四）	建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所	平成六年（一九九四）一月
森吉町生涯教育推進本部	『みんなで綴る郷土誌 森吉町史資料編第五集』	森吉町生涯教育推進本部	昭和五四年（一九七九）二月二〇日
森吉町史編纂委員会	『みんなで綴る郷土誌Ⅲ 森吉町史資料編第十一集』	森吉町史編纂会	昭和五八年（一九八三）六月一日
森吉町史編纂委員会	『森吉町三十年史』	森吉町	昭和六一年（一九八六）九月三〇日
森吉山ダム工事事務所	『聞き書き 森吉地区の思い出』森吉山ダム歴史資料調査 聞き取り調査概要版		平成一六年度（二〇〇四）
森吉山ダム工事事務所	『森吉山ダム歴史資料現況調査』		平成一六年度（二〇〇四）
柳田国男監修	『総合日本民俗語彙』（第一巻〜第四巻）	平凡社	昭和五二年（一九七七）
柳田国男編	『歳時習俗語彙』	国書刊行会	昭和五〇年（一九七五）一〇月
渡辺行一	『越後のわらべ唄歳時記』	野島出版	昭和五〇年（一九七五）

【協力者一覧（敬称略、順不同）】

秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室 文化財保護班 丸谷仁美
 上小阿仁村教育委員会 生涯学習班 上杉大志
 上小阿仁村 産業課 加藤浩二
 北秋田市教育委員会 合川公民館館長・関源一、主査・片岡喜輝
 北秋田市教育委員会 小松武志 館山操
 北秋田市教育委員会生涯学習課文化班 三浦仁作
 鹿角市教育委員会 生涯学習課 藤井安正
 能代市教育委員会 山崎和夫

【上小阿仁村・マトビの話し手の皆様】

萩野雅徳 萩野謙一 萩野邦助 武石敬逸 武石辰夫
 武石節治 武石新太郎 斉藤昭作 大沢栄作 斉藤進
 大沢喜三郎 大沢祐昭 田中良一 高地文夫
 斎藤貢・みよ子・香織 山田清治 加賀谷磯治 長井直人
 清水俊一 田中秀雄 中田義夫 山田善道 小林要一
 小林明信 小林重一郎 鈴木欣一郎 伊藤忠夫 山田シゲ
 伊藤修廣 佐藤良蔵

【（北秋田市）旧鷹巣町・マトビの話し手の皆様】

照内捷二 成田節治 永安寺住職・藤原興道

【（北秋田市）旧合川町・マトビの話し手の皆様】

三浦欽一・ハナ 坂上隆蔵 福田芳一・喜代子 土濃塚謙一郎
 阿部久雄 新田寺住職・保坂春聡 桜田日出雄 金田正一郎
 山岡多郎右エ門 三浦重治 三浦栄三郎 三浦正美 成田正一
 田中清 成田秀雄 松橋田加生 成田勇助 杉淵敬輝
 伊勢森市 高橋チヨ 森岡耕一郎 疋田久人
 大平寺前住職・亀谷健樹

【（北秋田市）旧森吉町・マトビの話し手の皆様及び写真借用】

木村正彦 金福治郎 金祥晶 金作次郎 田崎久
 石崎 稔 柳山敏幸 庄司与一 三浦米蔵 佐藤一二三
 佐藤かず子 春日正一

【（北秋田市）旧阿仁町・マトビの話し手の皆様及び写真借用】

戸島喬 佐藤哲也 佐藤敏文 船橋陽馬 湊一彦 伊藤喜代美
 中島フキ 鈴木秀雄 三浦安雄 松橋光哉 鈴木ミチ子
 佐藤正明

【鹿角市・マトビの話し手の皆様】

大日靈貴神社宮司・安倍良行 千田俊夫

【（能代市）旧二ツ井町麻生・マトビの話し手】

篠内 久

【事業概要】

一 本調査報告書は、平成一七年度に記録作成等の措置を講ずべきものとして選択された「阿仁地方の万灯火」について「平成二四年度 変容の危機にある無形文化財の記録作成の推進事業」により刊行したものである。

一 本報告書作成業務は、文化庁文化財部伝統文化課の指導、助言のもとにTEM研究所が行った。

主任文化財調査官 菊池 健策氏

文化財調査官 前田俊一郎氏

文化財調査官 石垣 悟氏

一 執筆分担

主たる助言者 田村善次郎（武蔵野美術大学名誉教授）

総括 真島俊一

本文執筆

第一章～第七章 真島麗子

資料編 表 真島麗子

キャプション 宮坂卓也 真島麗子

作図 紺野重孝 宮坂卓也 真島俊一

写真 真島麗子 川村翔

編集・レイアウト 真島俊一 宮坂卓也、真島麗子

資料整理 川村翔 清水恵美 笛英子 松浦康子

あとがき

秋田県北部で、マトビという春彼岸行事が存続しているのは、上小阿仁村の一七集落と旧合川町の数集落であろうと考え調査に臨んだ。しかし、本調査では、マトビを存続している集落が阿仁地方だけでも三八集落、周辺の市町村を入れると四六集落確認できた。

マトビは先祖供養であり、集落全体の無病息災や五穀豊穡を願ってきた行事なのだが、特に小阿仁川流域の各集落では、そのやり方を様々に変化させ今日まで継続してきた。仕掛けの形や、材料は、その時代、時代の状況を反映させており、興味深いものがある。

発祥諸説では、地元でも語られている様々な考え方をとり上げたが、だから秋田県北部にこの行事が伝承し、継続しているのだと語るのは難しい。しかし、雪の深い時期に調査で度々訪れている間に、身近な山や田とそこに宿る祖霊に祈りを込め、雪に覆われていた季節から、固雪になって春が来る季節に火を焚く気持ちだが、どんなものだったか理解できる気がした。

いずれの集落も、子供は一〇人前後になり、マトビの担い手は、親達や、五〇歳〜六〇歳代の男性が中心であった。さらに七〇歳前後の老人クラブの会員や集落全戸がダンポの製作を手伝い継続している集落も多かった。

現在マトビを支えている人達は、戦後から昭和三〇年代のマトビを経験した人達が多く、子供だけで様々に工夫しながら行ったマトビが、懐かしく、楽しかった思い

出として残っており、それが現在のマトビを支えるエネルギーになっていく人も多かった。また、マトビを通じて同じ目的を持つことで、人と人が繋がり、さらには集落が団結でき、それが地域の活性化にも繋がる事を過去の体験から分かっているが、それが後世の若者達に伝わらない時代の流れと進む少子高齢化を懸念していた。

今回の調査では、各地域が、それぞれにマトビを伝承していく方法をすでに考え、春彼岸の行事が、盆行事になり、また、観光になるなど、本来のマトビの意味合いが変化した部分もある。しかし、根底には、祖霊供養や無病息災の思いは変わらず、地域の活性化という新たな願いを感じた。今後益々、少子高齢化は大きな問題として立ちほだかり、継続困難の声もあがっていたが、伝承方法が見つかることを願っている。

秋田県教育庁をはじめとし、各市町村の担当の皆様には、お忙しい中ご協力頂きまして感謝申し上げます。

三木田の三浦欽一氏、合川公民館館長関源一氏、米内沢の木村正彦氏、阿仁水無の戸島喬氏には、様々な情報や資料を頂き助けて頂きました。深く感謝申し上げます。また、各集落では沢山の方々にマトビの体験談を話して頂きました。三浦ハナ氏、斉藤みよ子氏には、花ダンゴを、福田喜代子氏にはダンシの作り方を教えていただきました。お時間を割いて頂きました皆様に心から感謝を申し上げます。

(TEM研究所)

平成二四年度・変容の危機にある
無形の民俗文化財の記録作成の推進事業
阿仁地方の万灯火

平成二五年(二〇一三)三月三十一日発行

発行 文化庁文化財部伝統文化課
〒一〇〇・八九五九

東京都千代田区霞が関三・二・二

調査・作成 株式会社TEM研究所
〒一九一・〇〇二四

東京都日野市万願寺五・七・二

☎〇四二・五八七・七八〇〇
<http://www.tem-jp.net>

DTP ヒロ工房

印刷・製本 株式会社東京印書館

